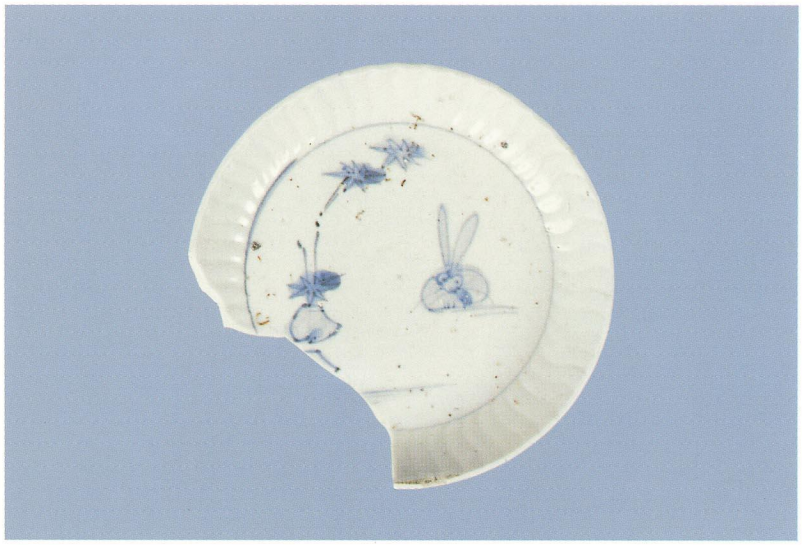
岡山城三之曲輪跡

－表町一丁目地区再開発ビル建設に伴う発掘調査－

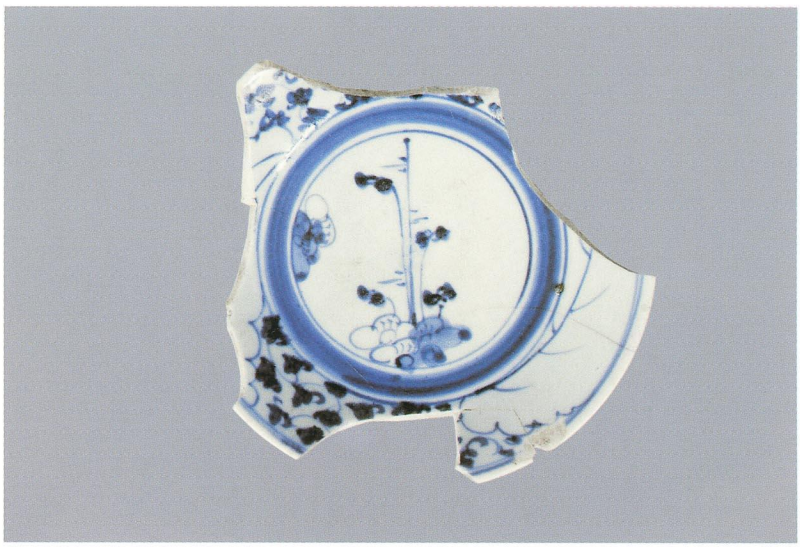
2002年3月

岡山市教育委員会

備前・三足鉢（531）の底部



初期伊万里・型押し皿（649）



初期伊万里・皿（502）

肥前磁器・染付碗（639）

肥前磁器・染付鉢（784）

福岡系陶器・大皿（773）

序

岡山市は、63万の人口を有する東瀬戸内圏の中核都市として、着実な発展を続けていますが、この都市繁栄の歴史的な礎となったのが岡山城です。岡山城は遠く室町時代の丘上の小城に端を発し、戦国乱世が未だ収まらない天正18年(1590)から慶長２年(1597)にかけて、豊臣秀吉による政権下での重職を担った宇喜多秀家が、巨大な近世城郭としての姿に造りあげました。その後の城主は、小早川秀秋を経て池田氏へと移り、幾多の改修が行われましたが、宇喜多秀家が造った構造の基本は幕末・明治まで受け継がれました。岡山城は近世を通じて当地方の政治・経済・文化の中枢であり続け、特に関ケ原合戦以前の段階では全国屈指の城郭として、歴史研究者から広く注目を集めています。

本丸や後楽園の一帯は、国の史跡に指定され、市民の安らぎと憩いの場となり、また内外の観光客が多数訪れる観光資源であり、岡山市民の歴史的アイデンティティのシンボルとなっています。岡山市教育委員会では昭和62年の史跡指定を受け、平成４年度に「史跡岡山城跡保存管理計画」を策定して、岡山城跡の歴史的景観の復原整備をめざした事業をスタートさせました。これまでに本丸中の段・下の段での発掘調査や、中の段南西石垣の解体修理などを実施してきましたが、引き続き史跡整備の具体化に鋭意取り組んでいく所存であります。

いっぽう、本来の岡山城は近世の岡山の街そのものであったことにも関連して、城跡の範囲は史跡指定地の枠を越えて、現在の市街地と重複しています。一帯では、官民・大小さまざまな土木事業が計画され、埋蔵文化財としての城郭遺構の保存と開発との調整は重大な行政課題となっています。

いま岡山シンフォニービルが建つ場所も例外ではなく、地中に三之曲輪の東辺をなす内堀石垣が残っていましたが、建設工事と競合することになり、やむなく記録を残すための発掘調査を実施しました。岡山市教育委員会が岡山市表町一丁目地区市街地再開発組合などと組織した岡山市表町再開発埋蔵文化財調査委員会が、平成元年に行ったもので、岡山城を対象とした本格的な発掘調査として初めてのものでした。この発掘では、内堀の石垣を検出しただけでなく、三之曲輪の屋敷に関連した遺構が確認されたり、膨大な量の陶磁器が出土するなど、予想外の成果をあげることができました。

発掘調査が終了してから13年もの歳月が流れましたが、ようやくにして報告書を刊行することができました。本書にまとめました内容が、岡山城跡の保護・保存、歴史研究や教育に少しでも寄与できますれば幸いです。

こうした成果をあげることができましたのは、表町一丁目地区市街地再開発組合(当時)はもとより、文化庁や岡山県教育委員会、それに発掘調査対策委員の諸先生をはじめとした研究者や作業の実務に当たられた方々など、関係者各位のご尽力・ご助勢の賜物と存じ、深く感謝申し上げます。

平成14年３月31日

岡山市教育委員会
教育長　玉　光　源　爾

例　　言

1．本書は、岡山市教育委員会が主宰する岡山市表町再開発埋蔵文化財調査委員会が、岡山市表町一丁目地区市街地再開発ビルＡ棟(現称　岡山シンフォニービル)建設に伴って平成１年に実施した発掘調査の報告書で、平成13年度事業として刊行した。

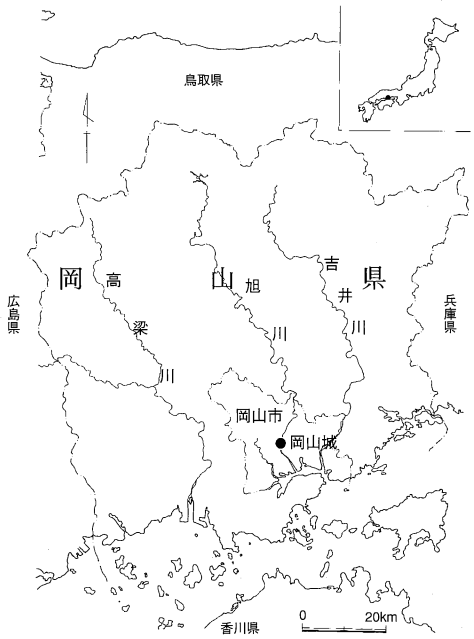
2．発掘調査の対象地は岡山市表町一丁目４番183号で、岡山城三之曲輪跡から内堀跡に相当する。

3．報告書の作成は、岡山市教育委員会生涯学習部文化財課が行い、編集と執筆は乗岡実が担当した。

4．遺構の実測・写真撮影は、調査員の乗岡実・武田恭彰・扇崎由を中心に行った。遺物の実測・拓本等は谷口光子・八木留利子・仲井光代・大西(片井)千鶴・岡本東美を中心に、加藤美穂・山元尚子・信江清美・乗岡が分担した。また、各図面の浄書は、乗岡のほか岡本・加藤が行った。

5．この報告書で用いた高度値は標準海抜高度、方位は磁北である。

6．この報告書にかかわる出土遺物、実測図・写真などは、岡山市埋蔵文化財センター（岡山市網浜834－１）で保管している。



目　　次

第Ⅰ章　岡山城の歴史と調査位置

第１節　岡山城の歴史 …… 1
第２節　発掘調査の位置 …… 5

第Ⅱ章　調査の経緯と経過

第１節　調査に至る経緯 …… 8
第２節　調査の体制 …… 9
第３節　発掘調査の経過 …… 12
第４節　発掘調査後の経過 …… 14

第Ⅲ章　遺　　構

第１節　概要と基本層序 …… 15
第２節　内堀関連の遺構 …… 18
第３節　三之曲輪内の上層～下層の遺構
　１．上層遺構 …… 26
　２．中層遺構 …… 33
　３．下層遺構 …… 35
第４節　三之曲輪内最下層の遺構 …… 38
第５節　城郭以前 …… 46

第Ⅳ章　遺　　物

第１節　城郭以前の遺物 …… 51
第２節　曲輪内最下層の遺物 …… 56
第３節　曲輪内下層～上層遺構の遺物 …… 62
第４節　曲輪内包含層の遺物 …… 102
第５節　内堀出土の遺物 …… 118

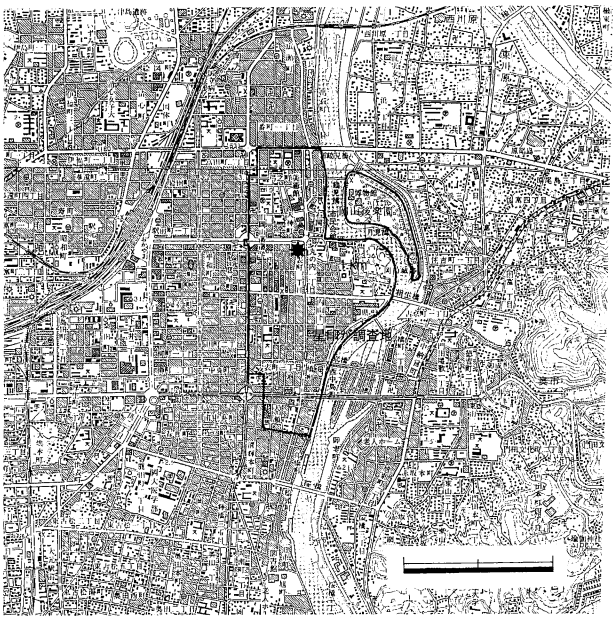
第Ⅴ章　調査成果の整理と展望

第１節　遺構の変遷 …… 163
第２節　出土遺物について …… 172
第３節　近世備前焼擂鉢の編年案 …… 190

第Ⅰ章　岡山城の歴史と調査位置

第１節　岡山城の歴史

岡山城は旭川下流の沖積平野部に位置する広大な城郭で、城跡はいまの岡山市中心部の市街地と重複している。これは岡山城が近世を通じて備前一国ないしはそれ以上にわたる政治・経済・文化の中枢であり続けた結果でもある。



第１図　岡山城跡の位置（1／50000）

岡山城主要部には、もとから自然の小丘が点在し、南北朝期から城があったとの伝承がある。旭川下流域の生産力の高い穀倉地帯を直接に掌握できる絶好の位置にあり、瀬戸内海に通じる旭川を用いた水運の利便性にも恵まれていたのである。大永年間(1521～1527)以降では、城主として金光(かなみつ)備前の名がみえ、その跡目を金光与次郎宗高が継いだとされる。金光氏は在地領主で、もとは松田氏に従っていた。松田氏は旭川中流の要所を占める金川(かながわ)城(御津町金川)を本拠に、備前西部を支配していた準戦国大名で、この段階の岡山城はその支城であった。

宇喜多直家は吉井川東岸の肥沃な沖積平野を基盤とする在地領主から、戦国大名にのし上がった人物である。その本城は砥石(といし)城(邑久町豊原)を起点に、乙子(おとこ)城(岡山市乙子)、新庄山城(岡山市竹原)、さらに義父の中山備中守信正を殺して永禄２年(1559)に手に入れた亀山(沼)城(岡山市沼)と着実に西方に進出を果していた。永禄11年(1568)には金川城を攻めて松田氏を亡ぼして西備前の覇権を握り、岡山城の西北約４kmにあった富山(とみやま)城[1]（岡山市矢坂)に弟の浮田忠家を配して、備中方面に対する前線の城とした。そして元亀１年(1570)、謀略で金光宗高を切腹に追い込み、ついに岡山城を奪取し、天正１年(1573)には亀山城から移って自らの居城とした。この時点から、岡山城は戦国大名の居城となったのである。当時の大名の居城はまだ山城が主流であり、大河川下流の広大な平野の内にあって領国経営の拠点性を高めうる地への進出は、彼の先進性として評価される。

岡山城を本城とした直家は、天正５年(1577)に吉井川中流の天神山城(佐伯町)を攻めて、かつての主君で備前東部を支配した浦上宗景を殺して、備前全土を掌握した。さらに直家は西の巨大勢力であった毛利氏に反旗を翻し、天正７年(1579)に羽柴秀吉の仲介で織田方に付く事となった。宇喜多氏はこの時から体制側につき、直家の子である秀家の豊臣政権下での異例の出世に繋って行く。

岡山城の主要部は北西部の天神山(てんじんやま)、中部の石山(いしやま)、東部の岡山(おかやま)といった標高20m以下の独立丘を下地に展開する。金光氏の城は、石山東部の最高所に本丸を置き、西に向いた小さな城であったという。宇喜多直家は、その城を戦国大名が領国支配を行うための拠点城郭へと造りかえた。後の史料から窺

える普請の要点は、中心的郭群の拡大的整備、寺社の先行存在とその強制移転、計画都市としての城下町の建設、山陽道といった主街道の城下への取り込み、在地性をもった有力家臣を含めた武士や商工民の城下への集住化、政治・商工活動の城下＝城主への集約化、城主と富豪商人との私的な繋りなどで、近世城郭へと脱皮するための要件をかなり満たしていた。ただ、直家の城では土居、堀、櫓、塀がみえても、石垣、天守の語が無い事や、城下町の基本軸が十字に交差する二本の道路であって、道路が複数の交差点をもって街区を成すものとしては示されていない事は注目しておきたい。

宇喜多直家は天正９年(1581)に死去し、翌天正10年(1582)には嫡子で幼年の八郎による遺領相続が織田信長によって認められた。この年、宇喜多勢は織田方の最前線にあるものとして備中高松城(岡山市高松)の水攻めに臨んで毛利氏に勝利した。本能寺の変の後を受けて樹立された豊臣政権のもと、宇喜多八郎は天正13年(1585)に元服して秀吉の養子として秀家を名乗り、天正15年(1587)には従三位・参議、朝鮮出兵を経た文禄３年(1594)には中納言、そして慶長１年(1596)には大老と異例の出世を遂げる。こうした秀家の岡山城は、豊臣政権を構成する有力大名の城のみならず、擬制的な豊臣一族の居城として、備前・美作の二国をはじめ備中の高梁川以東や播磨西部の一部を含む領域支配のための拠点城郭として位置づけられる。

秀家は直家の城郭を大規模に改造し、江戸時代へと繋る近世岡山城の構造の骨格を造ったといってよい。その普請は天正の18年(1590)着手、慶長２年(1597)完成が通説となっているが、具体的に進行したのは遅れて文禄年間であった。本丸は、秀吉の意見を聞いて、それまでより東方のいまの位置に移し、石垣をつきあげ、はじめて天守をあげたほか、櫓に加え廣間や出任所を造営したという。これは中枢郭の拡大、軍備の増強や近代化、政治機能の拡大、視覚面での荘厳化として解釈できる。

史跡整備に伴う本丸の発掘[2]では、秀家の普請は、本格的な高石垣、金箔おしのものを含む大量の瓦とこれを掲げる城郭建物・御殿建物の登場として具体的に確認することができた。しかし、秀家期の本丸は、後に比べれば本段・中の段部が狭く、旧地形にも規制されて軍事的達成も不十分、下の段や内堀に至っては石垣化や郭としての整備が遅れており、江戸時代初期の構造と決して同一視できないことも判ってきたし、下層に埋め込まれた先行期の郭の状況から、この時に本丸の東遷があったとは単純に評価できないことも判ってきた。

また秀家は、岡山城の遥か東方を流れていた旭川を、本丸の北と東を鉤形に蛇行して巻き込むいまの形に付け替えたと伝えられる。その普請の初めは、流路が城の北西で二分され、西流を石山と天神山の間から南に延ばしたものの、洪水対策上から分岐部に石関を施して西流を内堀に整備し、さらに中堀を掘削して直家期以来の街である上(かみ)ノ町・中(なか)ノ町・下(しも)ノ町を郭内[三之曲輪]に取り込んだという。それは江戸時代に受け継がれる主要な郭のアウトラインが形成されたことを意味するが、旭川や堀の掘削の実状は、それが完全任意の構想に基づくのでなく、元からあった旭川の分流や後背湿地の位置に規定され、むしろそれを巧みに活用したという側面が強いものであった。この事は、本書に掲げた発掘成果のほか、本丸下の段、本丸西側内堀[3]、二の丸跡の県庁増築用地[4]などの発掘で先行する河道の存在が確認され、具体的に判ってきた。いずれにせよ、秀家の普請によって城地が広大な面として沖積地に拡大し、そこに本格的な近世城下町が形成されることになったのである。

慶長５年(1600)、関ケ原の戦いで西軍についた宇喜多秀家は敗走し、備前・美作は秀吉の妻おねの甥にあたる小早川秀秋に与えられた。翌年、秀秋は岡山城に入り、すぐさま岡山城の整備に着手している。最大の普請は外堀の掘削で、秀家の岡山城の北と西側を大きく取り巻くことで、三之外曲輪を

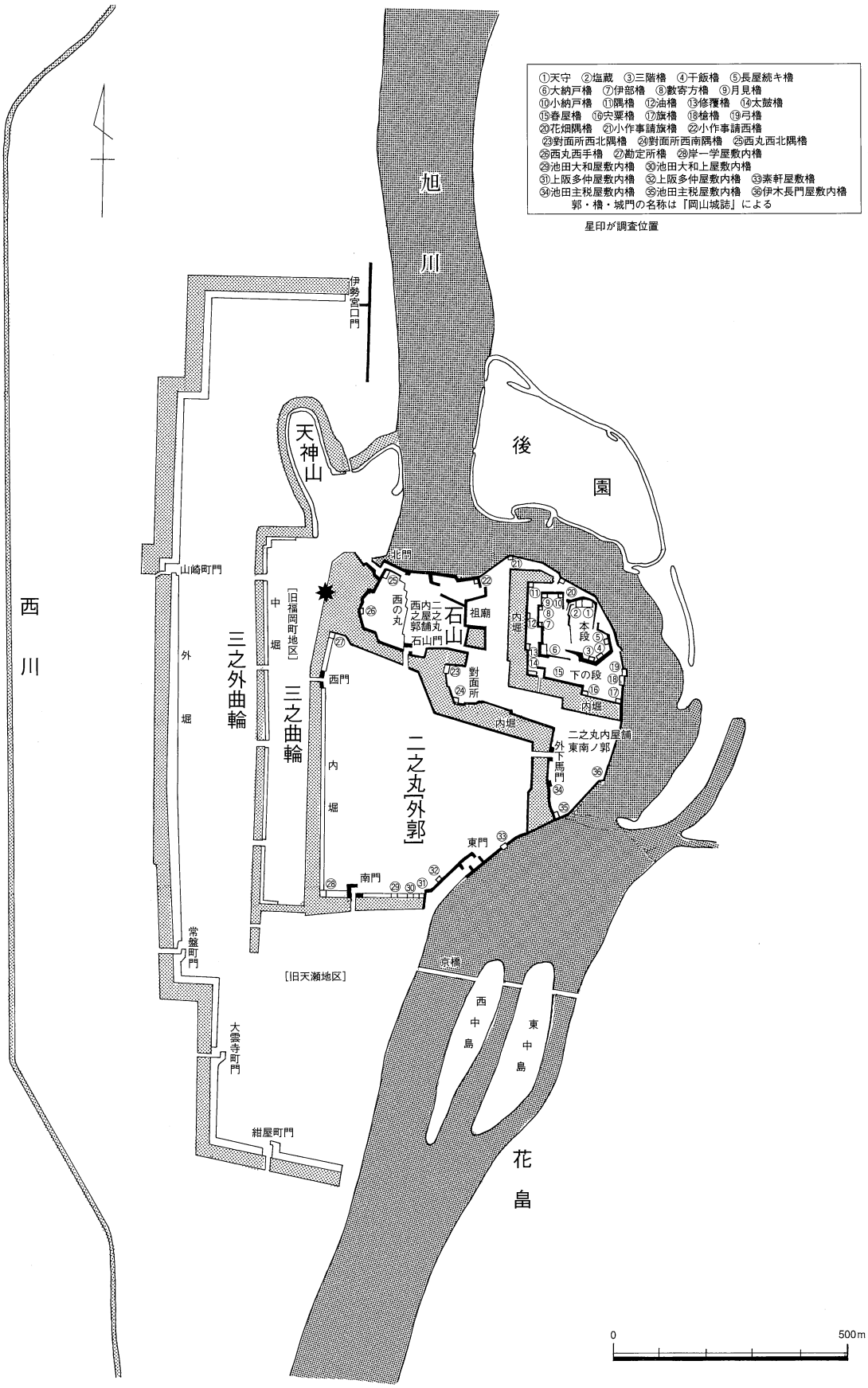
創設して城地面積を一挙に倍増させている。外堀は二十日間の突貫工事で完成させたとの伝承をもつが、本格的な石垣は伴っていないようで、幅の広い土塁を城内側に形成している。また中枢部での改修もおこなわれ、亀山城(岡山市沼)から本丸中の段の南西隅に櫓を移して大納戸櫓(呉服櫓)を建てたり、二の丸内郭の石山門を富山城(岡山市矢坂)から移転したという。秀秋が大がかりな改造を行ない、大納戸櫓に相当する位置に大きな櫓を建てた可能性は発掘で追認できたが、逆に幕末まであった大納戸櫓をそのまま秀秋の構造とするのは疑問が提示された。

慶長７年(1602)に秀秋は急死し、翌年に備前は姫路城にあった池田輝政と徳川家康の娘の富子の間に生まれた池田忠継(ただつぐ)に与えられた。しかし、忠継は幼少であったので、兄の池田利隆が岡山城に入って国政を代行した。彼は藩主ではなかったので本丸本段には住まず、石山の西端に西の丸を造成して、そこに住んだという。利隆の岡山城改造は西の丸が中心とされてきたが、発掘調査によって本丸下の段や本丸内堀の現況構造は利隆期の普請による部分が大きいことが判ってきた。利隆の在城期間である慶長半ばから末とは、他国では諸大名が競ってポスト関ケ原の最新鋭の近世城郭を築城している時であり、宇喜多秀家・小早川秀秋の構造を更新する工事の推進は、むしろ理に適っている。

慶長18年(1613)に池田輝政は死去し、利隆は家督を継ぐために姫路に帰り、替わって本来の藩主である忠継が岡山城に入ったが、忠継は元和１年(1615)に死去した。このため淡路の由良城にあった弟の忠雄(ただかつ)は加増して備前を与えられ、岡山城に移ってきた。この忠雄が後に続く岡山城の具体構造を完成させた城主である。本丸内では中の段の月見櫓や表書院のうちでも藩主公邸(政務空間)部の要である南座敷を建設したことが史料から窺え、発掘調査によって追認された。中の段を北に大規模に拡幅した事実が判明したのである。史料では、二之丸[外郭]の西門をやや南に動かす改造、南門を大幅に西に移して本格的枡形を造る改造、西川の掘削が伝えられる。西川は外堀のさらに西にあって、流路は狭いが城下を限る最も外側の堀としての意味ももつ。

寛永９年(1632)、忠雄は死去し、その子の光仲と姫路から鳥取へ移されていた池田光政の間で国替えが行われた。光政以降は、古くから隠し郭としても評価されている後園(後楽園)が、17世紀末から18世紀初頭にかけて本丸北東の搦手に造成されたのを別にして、城の縄張りや軍事的構造は幕末に至るまで現状維持が図られた。ただし、平地部に展開する岡山城の石垣は幾度も旭川の洪水に苛まれ、そのつど幕府の許可をとったうえで、各所で崩壊した石垣の原状復旧や防護工事、堀の浚渫が行われている。したがって、石垣線としての構築は古くても、場所によっては新しく積まれた部分が含まれる可能性がある。また櫓類の上屋の部分改造や補修、それに御殿建物の更新も随時に行われた。

寛永年間に完成した岡山城は、旭川に向かって突き出す東端部に三段構成の本丸を構え、その西側の石山には西の丸や池田家祖廟の郭(二之丸内屋舗)、本丸の南西には対面所の郭、石山のさらに北西には天神山の郭がある。これら岡山城主要部は旧丘地形を下地に立体的に展開するのに対し、その北西から南に広がる武家屋敷街や町家街は、堀で空間を分離された平坦地である。本丸や上級武家地を含む二之丸を区切る内堀は三重である。西側では、内堀外に山陽道が貫く商人町(三之曲輪)が広がり、その西は中堀で区切られる。中堀の外は再び武家屋敷(三之外曲輪)があって外堀に囲まれ、その外には寺町や再び町屋と武家屋敷が広がり、西川が城下の西限をなす。南側では町家の外に武家地を配す三之曲輪の南部が外堀に画され、その堀外は西川と旭川に挟まれて城下町が細長く延びる。岡山城独特の城下町の構成は武家地・町家地が再三にわたって反復することであるが、宇喜多秀家段階なりのマスタープランが既に完成を遂げていたため、これが固定化され、後の城主は不足する武家屋敷や町



第２図　完成した岡山城の構造（１／12500）

家の敷地を外方の郭に求めて、二次的市街が付加された結果であろう。

外堀と旭川によって画される範囲は南北1.8km、東西1.0km、外堀外を含む城下域の南北長は約3.5km、西川と旭川に挟まれた東西最大長は1.3kmある。南北に細長く延びているのは、大局として旭川の流路やその前身河道によって形成された微高地の分布に規定されたからとみられる。明治になって書かれた『岡山城誌』によれば、天守および付属する塩蔵を別として隅櫓の数は34基もの多数にのぼり、うち19基が本丸、残り総ては二の丸にあって、外側の内堀の外には無い。

城下町絵図は寛永九年(1632)を下限とする池田忠雄期に作成された『岡山古図』(岡山大学池田家文庫蔵)を最古のものとして、多数が残されている。『岡山古図』とその他の各絵図を比較すると忠雄が行った改造が裏付けられるが、光政期以後の絵図のうちでは後園の造営を除けば縄張り面での改変は殆ど浮かび上がって来ず、街路も概ね固定的であったことが判る。

明治に入ると、本丸の天守・月見櫓、西の丸の西手櫓、二之丸[内郭]の石山門を除いて、櫓や本段御殿・表書院など多くの郭内建物が破却され、本丸の内堀を除く各所の堀は次々と埋め立てられたが、江戸時代の街路の多くは現在の市街地街路に踏襲されている。

第２節　発掘調査の位置

発掘位置は岡山市表町一丁目４－183に所在し、現在は岡山シンフォニービル(岡山市表町一丁目地区市街地再開発ビルＡ棟)が建つ市街地である。敷地(岡山市表町一丁目５、および４の一部)の北は桃太郎大通りに、東は城下筋に、西は上之町(表町)商店街に臨む位置にある。

ここは、近世岡山城を区画する三重の内堀のうち、最も外側の内堀の北端付近とその西岸の三之曲輪に相当する。一帯の堀幅は他所に比べて広く80～100mほどあった。かつての内堀を挟んで東対岸は高石垣で画された西の丸があり、調査地東正面には西手櫓(国指定重文)が現存する。内堀北端は、調査地の北東で今は城下交差点となっている辺りで、その東寄りは土手によって旭川と画され、土手上は北門を経て西の丸や本丸方面へ向かう搦手筋となっていた。一帯の内堀は、先の節で述べたように、天正末から慶長初(1590～1597)に宇喜多秀家が掘削したものと江戸時代の編纂物に伝えられている。埋められたのは南側が明治39(1906)、北側が明治40年(1907)である。

当調査地と城下交差点を挟んで対角の民間ホテル建設用地[5]では、当調査に引き続く平成元年(1989)７月・８月に岡山市教育委員会が発掘調査を実施し、旭川から内堀に水を引くための木樋を検出した。土手の盛土とそれを覆う内堀石垣も残っていたが、遺存石垣の大部分は明らかに近代に入ってからの構造であった。また、当調査地の北に隣接する桃太郎大通りの地下駐車場建設用地[6]では、当調査に先立つ平成元年(1989)２月に岡山県教育委員会が発掘調査を実施し、内堀石垣を長さ約30mにわたって検出した。この石垣は、当調査で確認した下層石垣に連続するものである。

調査が部分的に及んだ内堀の西岸、すなわち三之曲輪内は、城下町絵図が残る池田忠雄期(1615～1632年)以降は、武家地を含まずに常に町家が広がっていたことが明らかである。三之曲輪のほぼ中軸を南北に山陽道が通り、この山陽道に狭い間口を開けて、東西に細長い敷地をもった商家がひしめき合っていたと判断できる。調査地西側の上之町(表町一丁目)商店街は、山陽道の道筋と商業地としての伝統を現在に踏襲したものである。また、山陽道とは別に、各城下町絵図とも内堀の西岸に沿っ

第３図　岡山城主要部と調査位置（1／8000）　　Ⓐが調査地

て道が示され、町家の敷地が堀間際までは及んでいなかったことが判る。

一方、宇喜多直家時代(1570～1581)に遡る伝承として、調査地から南南西350ｍほどに比定される「下の町東側北の角より二軒目」の「魚屋という町人」が「泉州堺の町人の子を養子」とし、その養子が後に大名の小西行長になったという(7)。直家期での三之曲輪としての整備の状況は検討を要するが、一帯は直家期から既に街の形成があり、それは町家を主体としたものであったことを示唆するものであろう。なお、山陽道に沿って南北に並ぶ商人町(岡山市表町一丁目・二丁目)であった上之町・中之町・下之町は、合わせて古名を福岡町といい、それは宇喜多氏のかつての本願地に近い吉井川畔の商業・流通拠点であった備前福岡(長船町福岡)に因むと伝えられている。

三之曲輪の西を画す堀は中堀と呼ばれ、北方で天神山の郭を取り巻くが、その後は南北に一直線に延びていた。この中堀跡が地下駐車場建設用地の西端付近にかかり、工事に伴って昭和63年に岡山県教育委員会が立会調査を行った(8)。石垣等の護岸施設は伴わずに素掘りで、本来の上幅15.5ｍ、深さ４ｍに復原されている。

中堀と内堀に挟まれた三之曲輪はおのずと南北に細長く、一帯での東西幅は90～140ｍであった。

注

(1)　岡山市教育委員会　1969『富山城第２次調査報告』
(2)　岡山市教育委員会　1997『史跡岡山城跡本丸中の段発掘調査報告』
　　岡山市教育委員会　2001『史跡岡山城跡本丸下の段発掘調査報告』
(3)　岡山市教育委員会　1998『岡山城内堀』
(4)　岡山県教育委員会　1991『岡山城二の丸跡　岡山県庁舎増築工事に伴う発掘調査』
(5)　前掲３と同じ。
(6)　岡山県教育委員会　1990「岡山城内堀」『岡山県埋蔵文化財報告』20
(7)　高木太亮編纂　宝永六年『和気絹』(吉備群書集成刊行會　1921『吉備群書集成』第壱輯に収録)
(8)　岡山県教育委員会　1989「岡山城中堀」『岡山県埋蔵文化財報告』19

参考文献

◎木畑道夫『岡山城誌』1891　◎『岡山県史蹟名勝天然記念物調査報告』第九冊　岡山縣　1932
◎『岡山市史』第三　岡山市役所　1937　◎巌津政右衛門『岡山城と城下町』別冊岡山文庫４　日本文教出版　1972
◎『岡山城史』岡山市編　山陽新聞社　1983　◎『岡山県史』近世１　岡山県 1984
◎加原耕作『岡山城』山陽新聞サンブックス　山陽新聞社　1994
◎三浦正幸ほか『岡山城』歴史群像名城シリーズ12　学習研究社　1996
◎片山新助『よみがえる岡山城下町』山陽新聞社　1996

発掘調査報告書類(第３図に示した地点名と対応)

Ａ：岡山市教育委員会　2002『岡山城三之曲輪－表町一丁目地区再開発ビル建設に伴う発掘調査－』(本報告書)
Ｂ：岡山市教育委員会　1997『史跡岡山城跡本丸中の段発掘調査報告』
Ｃ：岡山市教育委員会　2001『史跡岡山城跡本丸下の段発掘調査報告』
Ｄ：岡山市教育委員会　1998『岡山城内堀』
Ｅ：岡山県教育委員会　1991『岡山城二の丸跡　岡山県庁舎増築工事に伴う発掘調査』
Ｆ：岡山県古代吉備文化財センターが平成12年度に発掘調査を実施。報告書作製中。
Ｇ：岡山市教育委員会　2000「岡山城二の丸(榊原病院)石垣」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』平成10年度
Ｈ：岡山市教育委員会が主宰する中国銀行本店建設事業埋蔵文化財調査委員会が1990年に発掘調査を実施。報告書未刊。
Ｉ：中国電力内山下変電所建設事業埋蔵文化財調査委員会　1998『岡山城二の丸跡　中国電力内山下変電所建設に伴う調査』。２期調査分は報告書未刊。
Ｊ：岡山市教育委員会　1998『岡山城内堀』
Ｋ：岡山県教育委員会　1989「岡山城中堀」『岡山県埋蔵文化財報告』19
　　岡山県教育委員会　1990「岡山城内堀」『岡山県埋蔵文化財報告』20
Ｌ：岡山県古代吉備文化財センター　2001『天瀬遺跡・岡山城外堀跡』
Ｍ：岡山市教育委員会　1999「岡山城二の丸(宇野自動車)遺構」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』平成９年度

第Ⅱ章　調査の経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

岡山市表町は、岡山城下で中核の商人町であった。その伝統は明治以降も引き継がれて岡山市で最大の商店街を形成し、戦災を経ても、市内はもとより県内の商業や文化事業の最中枢として復興を遂げた。しかし、昭和46年を一定の到達点とする市域の拡大や昭和47年の新幹線岡山開業などを契機として県外大資本が流入し、駅前地区や郊外で新たな大規模商業地が形成されたこと、旧市街地ゆえの建物の老朽化や小規模性、商業形態の保守性などが複雑に絡み合って、当地区の商業・文化地域としての拠点性や人口は次第に低下し、その活性化が官民の課題として唱えられるようになってきた。

その状況のなか、城下交差点の南西一帯は、文化・商業機能の高度集積をめざす再開発事業の好適地であった。表町商店街の北の入口にあたるだけでなく、岡山城本丸や後楽園などの観光地、オリエント美術館・市民会館・岡山美術館(林原美術館)・県立博物館などの文化施設に近く、区域内での条件整備も相対的に諮り易かったのである。昭和55年にはこの区域の再開発に向けて準備組合が結成され、昭和58年の改組を経て、昭和61年９月には施工のための本組合である岡山市表町一丁目地区市街地再開発組合(権利者29人　後に31人)が設立・認可された。岡山では世紀の国家プロジェクトといわれた瀬戸大橋の開通を二年後にひかえ、また日本全土がバブル経済への道を一直線に歩んでいた時期である。最終的に決定された計画は二つのビルを建るもので、事業の根幹をなすＡ棟（シンフォニービル）は敷地面積4624㎡、地上12階（高62.4ｍ）、地下２階建てで、中層部には2001席の芸術音楽ホールを備え、低層部は商業施設、高層部は企業事務所とするものであった。また、新設街路を隔てて南西に建てるＢ棟(表町一丁目第二開発ビル)は敷地面積403㎡、地上７階で主に権利者住居とするものであった。こうした計画は、岡山市主導型(主管課　建設局都市再開発課)で、核施設となる芸術音楽ホールは岡山市による買取りと運営を予定し、「岡山市における瀬戸大橋架橋記念事業」として行政的に位置づけられたものであったが、建設事業の主体者はあくまで再開発組合で、国・県・市の補助金を得て行おうとするものであった。昭和63年６月には事業計画に対する県知事の認可がおりたが、北に隣接する県道岡山吉井線(桃太郎大通り)地下に県(岡山県道路公社)が計画していた駐車場建設との一体化が図られ、再開発組合はその一部についての事業主体としても位置づけられた。

こうした経緯のなか、市の都市再開発課を通じて用地の埋蔵文化財についての協議が始められたのは事業計画がほぼ確定した段階になってからであり、昭和63年６月２日付けで、岡山市表町一丁目地区市街地再開発組合　理事長　原田輝二　から岡山市教育委員会教育長あてに、埋蔵文化財等の存在状況確認調査についての依頼文が提出された。岡山市教育委員会(主管課　文化課)は６月11日付けで試掘調査が必要な旨を回答した。古絵図などと照合して、地下に内堀の三之曲輪側石垣を主体とした城郭遺構が所在している可能性が極めて高いと判断されたのである。試掘調査は、既存建物の解体や道路敷き掘削の条件整備を待って、11月７日に着手したが、既に北隣の地下駐車場用地でも内堀石垣の遺存が明らかとなっていた。しかし、この日の試掘では地中障害物、湧水、掘削深度の浅さなどに阻まれて、石垣を確認することができなかった。その後、位置や方法を変えて11月29日、12月１日にも試掘を行ったが確認には至らず、12月５日深夜の試掘でようやく内堀石垣の「付帯施設と判断できる石積遺構」が検出されて、Ａ棟ビルの用地の一部が埋蔵文化財所在地であることが確定した。

岡山市教育委員会文化課は、再開発組合およびその指導監督部局である岡山市建設局都市再開発課に、石垣の保存を要請するとともに、その取扱いについても協議を重ねた結果、当事業が岡山市の施策にもとづくもので、芸術音楽ホールを収容する建築の大規模性や石垣の記録保存を行った上で建設する地下駐車場との一体運用を含む事業計画、選地状況などの諸条件から現状保存を図ることが極めて困難で、発掘調査による記録保存措置を講ずる以外に方策がないとの結論に達した。発掘調査の実施について岡山市教育委員会は岡山市建設局から強い要請を受けたが、当再開発事業が岡山市が直接執行する事業ではないことを考慮し、岡山市教育委員会による直営方式ではなく、岡山市教育委員会、岡山市(建設局)、再開発組合で「岡山市表町再開発埋蔵文化財調査委員会」を組織し、これを発掘調査主体として実施することで合意をみた。委員長は岡山市教育委員会教育次長(文化課所管)を充て、発掘調査に要する全ての経費は再開発組合が負担して調査委員会が執行する形をとり、経理事務は再開発組合が事務局として担当し、発掘調査の実務にあたる専従調査員は岡山市教育委員会文化課から派遣するが、その直接経費は再開発組合への負担を免除とする事などが取り決められたほか、発掘調査の専門的学術的内容に鑑み、発掘調査対策委員をおいて指導、助言を得ることが確認された。

こうした協議と併行して、文化財保護法第57条２にもとづく土木工事に伴う発掘届けは昭和63年12月20日付けで、再開発組合　理事長　原田輝二から文化庁長官あてに提出され、昭和64年１月６日付けで岡山県教育委員会教育長から文化庁の指導により発掘調査が必要な旨の通知があった。調査委員会は平成元年２月10日に正式に発足し、同日付で委員長名の文化財保護法第57条１にもとづく調査のための発掘届けが提出された。３月11日には調査委員会と再開発組合との間で発掘調査に関する事業の委託契約が締結され、３月18日には調査委員会への専従調査員の派遣に関する岡山市教育委員会の承諾書が出されて、ようやく発掘調査の準備が整ったのである。

北に隣接する地下駐車場用地では、やや先行して工事が始まり、岡山県教育委員会が夜間の掘削工事と平行する劣悪な環境下で昭和63年８月～10月に西方の中堀部の立会調査を行い、同じく平成元年２月に内堀石垣を主眼とする発掘調査を行ったが、岡山城跡を対象として体制を整えて行われた本格的な発掘調査としては、当発掘調査が最初のケースとなった。岡山城跡の発掘調査は平成元年に、この一連の内堀石垣を対象として始まったといっても過言ではない。

第２節　調査の体制

◎発掘調査主体	岡山市表町再開発埋蔵文化財調査委員会	
◎発掘調査対策委員	稲田　孝司	岡山大学文学部助教授
	鎌木　義昌	岡山理科大学教授(平成５年逝去)
	近藤　義郎	岡山大学文学部教授
	西原禮之助	岡山市文化財保護審議会会長(平成６年逝去)
	西川　　宏	山陽学園教諭
	間壁　忠彦	倉敷考古館館長
	水内　昌康	岡山市文化財保護審議会委員

（五十音順　所属・役職は当時）

◎発掘調査担当者（岡山市表町再開発埋蔵文化財調査委員会）

委員長	（平成元年３月まで）	浅野　正宏	岡山市教育委員会教育次長
〃	（平成元年４月から）	玉光　源爾	岡山市教育委員会教育次長
副委員長		冨山　岩雄	岡山市建設局都市整備部長
〃		田中　泰彦	岡山市教育委員会社会教育部長
委員	（平成元年３月まで）	八木　正春	岡山市教育委員会社会教育部次長（兼文化課長）
〃	（平成元年４月から）	青山　　淳	〃　（　〃　）
〃		安藤喜一郎	岡山市建設局都市整備部次長
〃		高木　柳吉	岡山市表町一丁目地区市街地再開発組合監事
委員	（調査員）	出宮　徳尚	岡山市教育委員会文化課文化財係係長（平成元年４月から同課長補佐）
〃		根木　　修	岡山市教育委員会文化課文化財係主任（平成元年４月から同係長）
監事		角田　　誠	岡山市教育委員会総務課長
〃	（平成元年３月まで）	三宅　輝次	岡山市教育委員会文化課主幹
〃	（平成元年４月から）	武本　勘二	岡山市教育委員会財務課長
調査員	（平成元年３月まで）	武田　恭彰	岡山市教育委員会文化課文化財係文化財保護主事
〃	（平成元年３月まで）	草原　孝典	〃
〃	（平成元年４月から）	乗岡　　実	〃
〃	（平成元年４月から）	扇崎　　由	〃
事務局長		橋本　　章	岡山市表町一丁目地区市街地再開発組合事務局長
事務局次長		竹原　邦夫	〃　次長
事務局員	（経理）	本地　卓也	〃　事務局員
	（庶務）	相沢　順子	〃　事務局員

◎発掘調査現場作業員（調査委員会による雇用。含、遺構実測補助員）

青木敏夫　板野輝男　板谷茂樹　市川和正　王　永健　王　燕雲　大溝　神
尾高一郎　灰原あや子　河原広志　胡　以男　越宗尚子　小西　愿　白　神
田中京子　谷本厚子　長門卓正　中村和雄　難波俊一　西部てる子　西部ひとみ
蜂谷由太郎　藤田　博　山崎敏子　弓取克哉　李　建華　劉　新力

◎発掘調査現場事務員（調査委員会による雇用）

阿部桂子　小谷繁子　加志麗好

岡山市表町再開発埋蔵文化財調査委委員会会則

（設置）

第１条　岡山市表町一丁目地区４番183号地内の岡山市表町再開発埋蔵文化財調査委員会（以下「委員会」という）を設置する。

（目的）

第２条　委員会は、岡山市表町一丁目地区市街地再開発事業に伴う敷地内の埋蔵文化財の発掘調査を実施し、記録保存の措置等を行うことを目的とする。

（事業）

第３条　委員会は前条の目的を達成するためつぎの事業を行う。

(1)　岡山市表町一丁目地区市街地再開発事業施設建設地内の埋蔵文化財の発掘調査ならびに保存に関すること。

(2)　その他、目的を達成するために必要な事業。

２　前項の事業に必要な経費は、岡山市表町一丁目地区市街地再開発組合が負担する。

（組織）

第４条　委員会は、岡山市、岡山市教育委員会、岡山市表町一地区市街地再開発組合の三者をもって構成し、委員長は岡山市教育委員会教育次長(文化課所管)、副委員長は岡山市建設局都市整備部長、及び岡山市教育委員会社会教育部長をもって充てるものとし、委員は関係機関の職員の内から委員長が委嘱する。

２　委員会は、発掘調査を専門的に実施するために調査員をおき、調査員は委員長が委嘱する。

３　委員長は、委員会を代表し、会務を掌握する。

４　副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故あるときはその職務を代理する。

５　委員会は、発掘調査の専門的学術内容に鑑み、専門研究員の指導、助言等を得るために、発掘調査対策委員をおくことができる。発掘調査対策委員は委員長が委嘱する。

（任期）

第５条　委員長、副委員長及び委員の任期は、第２条に定める目的の達成されるまでとする。ただし、それぞれの機関の役職にある期間に限るものとする。

２　発掘調査対策委員の任期は、委員長の必要とする期間とする。

（会議）

第６条　委員会は、委員長が召集する。

２　委員会は、次の事項について審議する。

(1)　会則の制定及び改廃ならびに予算に関すること。

(2)　調査の基本方針に関すること。

(3)　その他重要なこと。

（事務局）

第７条　委員会の事務を処理するため、岡山市表町１丁目地区市街地再開発組合に事務局をおく。

２　事務局長は、岡山市表町１丁目地区市街地再開発組合事務局長をもって充て、その事務局職員は委員長が委嘱する。

（監査）

第８条　会計監査を実施するため、委員会に監事２名をおくものとする。

（補則）

第９条　この会則に定めるもののほか、委員会の運営に関して必要な事項は、委員会が別に定める。

附　則　この会則は平成元年２月10日から運用する。

第３節　発掘調査の経過

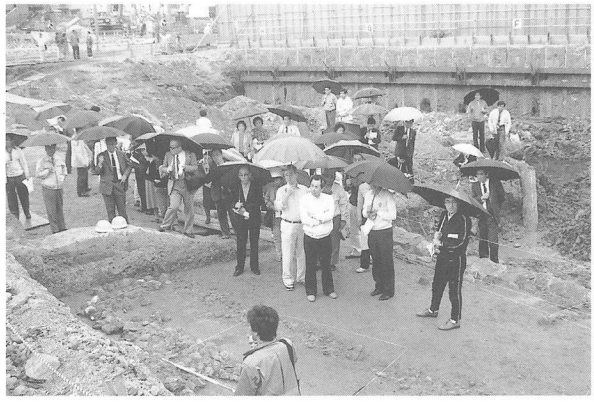
発掘調査の現場作業は平成元年３月23日に着手した。岡山市教育委員会文化課から派遣の専任調査員は二名が予定されていたが、他の発掘調査の日程との関係から、当分の間は武田恭彰の一名で対応することになった。Ａ棟ビルの敷地外縁には既に土留め用の連続壁がほぼ施工済みで、大型重機による土砂の掘削や搬出作業から一定の独立性は保てたが、並行しての発掘調査である。その工事工程との関係で、第一次の発掘区を工事用地南半の内堀石垣想定部に設定した。後に内堀南区・北区とした個所であるが、まもなく南北に延びる上層石組を検出した。旧内堀関連の護岸施設とみられたが、構造や深度から近代のものと判断され、その東側を探索した結果、ほぼ平行して延び三段積み程度が残る内堀(上層)石垣を検出した。また、三之曲輪の町家から内堀に排水を行ったとみられる瓦質土管なども発見されだした。３月末までに測量用ベンチマークの設定なども終え、上層石組の実測に着手したが、武田調査員が岡山市教育委員会を急きょ退職することとなったため、４月３日から専任調査員は乗岡実が引き継いだ。４月上旬は、主に内堀の上層石垣や三之曲輪上の遺構群の掘り下げ・精査・実測作業を行った。

４月17日からは専任調査員として扇崎由が着任して、二人体制となった。内堀上層石垣は確かに内堀の護岸施設と判断されるものであったが、北隣の地下駐車場用地で検出された内堀石垣と構造や基底高が必ずしも整合しないため、さらに東方を掘り下げたところ、４月21日に至って下層石垣の存在が明らかとなった。また、三之曲輪内の生活面は極めて重層的で、特に最下層は円礫を交えた特殊な造成を行い、しかも共伴の陶磁器から16世紀末の宇喜多直家期に遡る可能性が強く窺えた。４月22日には建設工事を一時休止のうえ、一般市民を対象に現地説明会を開催し、小雨にもかかわらず約100名の参加者があった。４月下旬は、主に三之曲輪上の最下層や土層観察壁の精査と実測に費やしたが、４月28日には実務関係者の会合をもち、工事日程との競合が限々のなかでの最大限の対応として、内堀下層石垣の発見による発掘工程の組み直し、それに事前には存在を予想し得なかったが内容が重大と思われる三之曲輪最下層面の構造を追求するために、発掘区の西への拡大が申し合わされた。

５月の連休明けからは、三之曲輪側に発掘区を拡大して西区を設定し、各遺構面で掘り下げ・精査・実測を繰り返しながら、５月末までに最下層に到達した。また並行して内堀南区・北区の下層石垣の掘り下げ・精査・実測を行い、５月20日に完了した。５月16日には発掘調査対策委員会を開催し、諸先生の視察と指導を仰いだ。岡山城以前の堆積土層については、４月中旬以降、弥生～平安時代の遺物を散発的に検出していたが、５月27日にはさらに古い層位で縄文海進期の波打ち際にあたるとみられるカキ殻堆積を確認した。

６月に入ると内堀の下層石垣の北への延長部である北Ⅱ区について、工事の掘削工程の関係で調査手順が整ったため着手し、８日まで精査と実測を完了させた。並行して、三之曲輪上の西区では最下層の精査を行い、円礫造成の広がりや掘立柱建物・井戸の検出に成功し、実測作業を含めて21日までに西区の調査を完了した。この時点では、工事による掘削が周囲に及び、発掘区は絶壁上の孤島のようなありさまとなっていた。６月25日ごろからは、内堀石垣についての調査区のうち最北部で、最後の発掘区となる北Ⅲ区に着手し、６月30日の内堀堆積土の断面実測図の完成をもって、発掘調査の総ての現場作業を完了した。

１．当初の発掘区全景



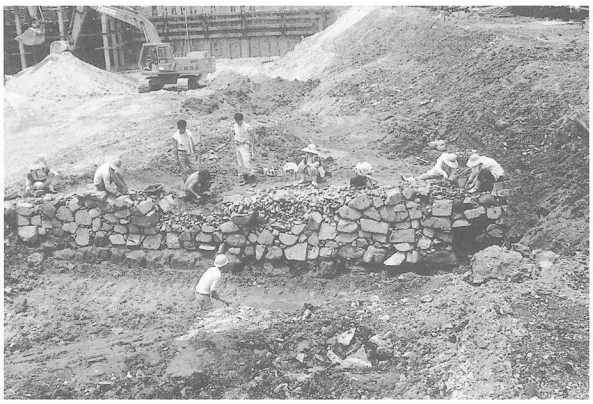
２．現地説明会の開催

３．下層石垣の精査

４．上層石垣解体後の遺構掘り下げ

５．曲輪内北区の最下層面調査

６．西拡張区での下層遺構面調査



７．内堀北Ⅱ区での下層石垣精査

８．調査完了間際の発掘区

第４図　発掘調査の進展

第４節　発掘調査後の経過

平成元年６月30日をもって発掘調査の現場作業が完了したが、その後は発掘調査に関わる事務処理が進められた。コンテナ総数90箱にのぼる出土遺物の発見届は、遺物の水洗と内容把握の作業完了をまって、平成元年10年７日付けで、岡山市表町再開発埋蔵文化財調査委員会　委員長名で岡山東警察署長あてに提出され、この遺物についての同日付けの保管書が岡山市教育委員会教育長名で、岡山県教育委員会教育長あてに提出された。埋蔵文化財としての鑑査は平成元年10月24日付けで岡山県教育委員会教育長から通知があり、出土遺物は岡山市教育委員会の負担において当分の間は保管することとなった。

年度末にあたる平成２年３月20日には調査委員会が開催され、発掘調査の終了と調査成果が報告・確認されたほか、調査委員会の予算に関わる決算と監査報告が行われて承認された。調査委員会が直接執行した発掘調査の経費は、11,000,000円の予算に対して支出総額7,005,993円であり、委託元である再開発組合との間で精算された。

平成３年９月に再開発ビルＡ棟は竣工し、地域のランドマークとして岡山シンフォニービルの愛称で呼ばれるようになって今日に至った。核施設であるシンフォニーホールはこの平成14年９月23日に開館十周年の節目を向える。

発掘報告書の作製については、平成元年３月11日に再開発組合と調査委員会の間で交した委託契約書で、現地発掘調査と出土文化財等の保管とは分離した形で、別途に契約を締結して実施する旨がうたわれたが、再開発組合はあくまで施工のための組織であったため平成４年３月をもって解散され、調査委員会としての実体や予算上の根拠は既に解消してしまった。このため、本報告書の作製は、調査委員会の主体者で発掘調査の実務を担当した岡山市教育委員会が、責任をもって直接に行う形をとるに至ったのである。出土遺物の整理や原稿作製等は、他の直営方式の発掘調査と同じく、岡山市教育委員会文化課(平成12年から文化財課)の日常業務のなかで断続的に行い、報告書刊行のための印刷費等をその平成13年度予算の内に組み込んだのである。

調査にあたっては、発掘調査対策委員の先生方には現地を視察いただき、多大なご指導、ご助言を賜ったほか、岡山市文化財保護審議会の先生方や岡山県教育委員会の職員をはじめとする、数多くの研究者や文化財関係者から、ご教示やご助成をいただいた。

また、発掘現場の作業員や事務員の皆さんには、建設工事と併行する劣悪な環境下での仕事に辛抱強く従事していただき、当時の表町一丁目地区市街地再開発組合、建設工事共同企業体やその下請け会社の方々には、日々の現場運営の中で工程調整などで多大なご協力をいただき、地元町内会や商店街の皆さんには温かいご支援をいただいた。

さらに、本報告書刊行に至る成果整理の過程でも、全国各地の研究者や埋蔵文化財行政担当者からの有益なご教示をいただき、共に作業に従事していただいた皆さんの苦心があった。

この調査と本書の刊行を支えていただいた数多くの方々に、あらためて厚く御礼申し上げます。

第Ⅲ章　遺　　構

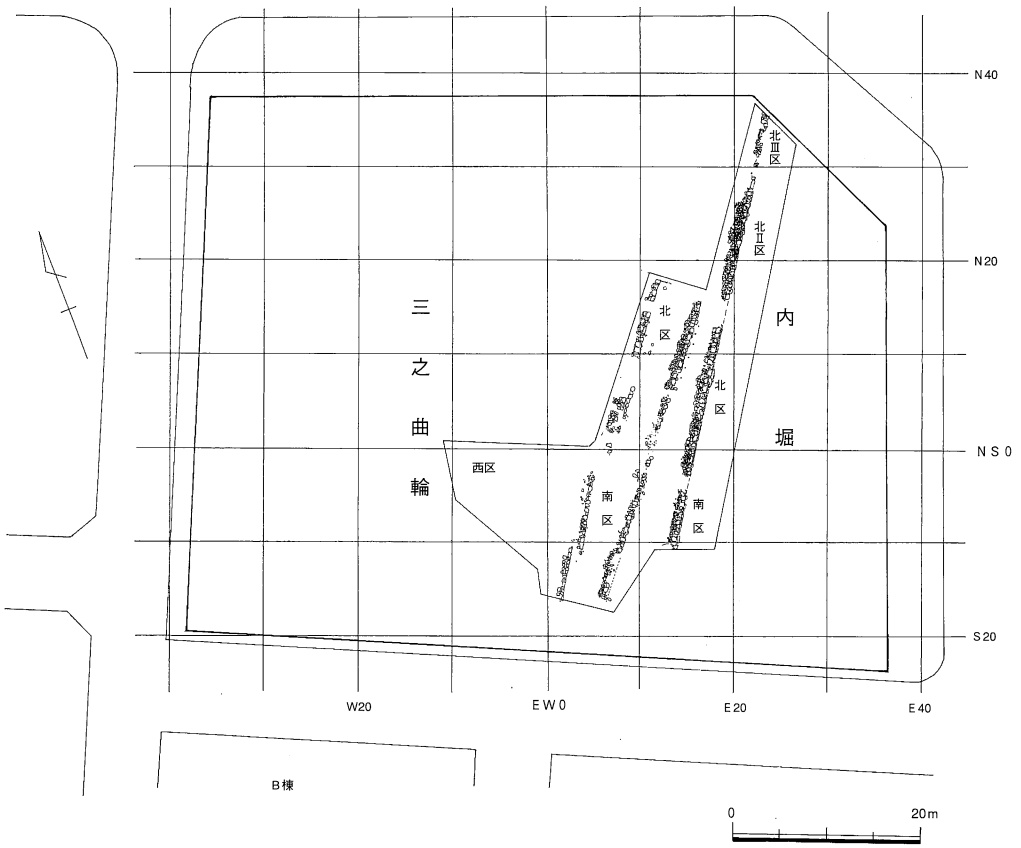
第１節　概要と基本層序

4624㎡の面積をもつＡ棟ビルの用地は、北東が隅切りとなった長方形で、内堀跡とその西の三之曲輪跡にかかっている。しかし、発掘の所期の目的が、城郭構造としての内堀石垣の調査にあったため、発掘区は石垣線に沿って南北に長く、用地のうちでも限定された部分に留まっている。

内堀石垣の発掘は、建設工事との兼ね合いで工程が分断されたため、南から北の順に、南区、北区、北Ⅱ区、北Ⅲ区の呼称を与えた。三之曲輪内の遺構は、南区と北区の西寄りでも少数が検出されたが、西区で検出されたものが主体をなしている。西区は、南区での遺構の検出状況を踏まえて、三之曲輪内の遺構の追求を目的に設定した発掘区で、当初の発掘計画には含まれていなかった部分である。なお、西区の北隣、北区の西隣は、民間ビルの地下室があり既に遺構が失われていたが、その他の個所に遺存が予想された三之曲輪内の町家関連の遺構は、発掘調査の対象とすることができなかった。したがってＢ棟用地も発掘調査の対象外であった。

遺構図の作製等に用いたグリッド割りは、ビル建設工事の設計軸線と一致させて設定した。発掘グリッドの南北軸は、工事用の「７」通りから東に2.0ｍのラインをＥＷ０とした。また、東西軸は工事用の「Ｆ」通りから南に約1.4ｍのラインがＮＳ０である。国土座標への変換は行えなかったが、発掘グリッドの南北軸から西偏20度30分が磁北である。

内堀の護岸石垣ないしは内堀が埋まっていく過程の関連遺構として、下層石垣、上層石垣、上層石



第５図　発掘区とグリッド割り（１／8000）

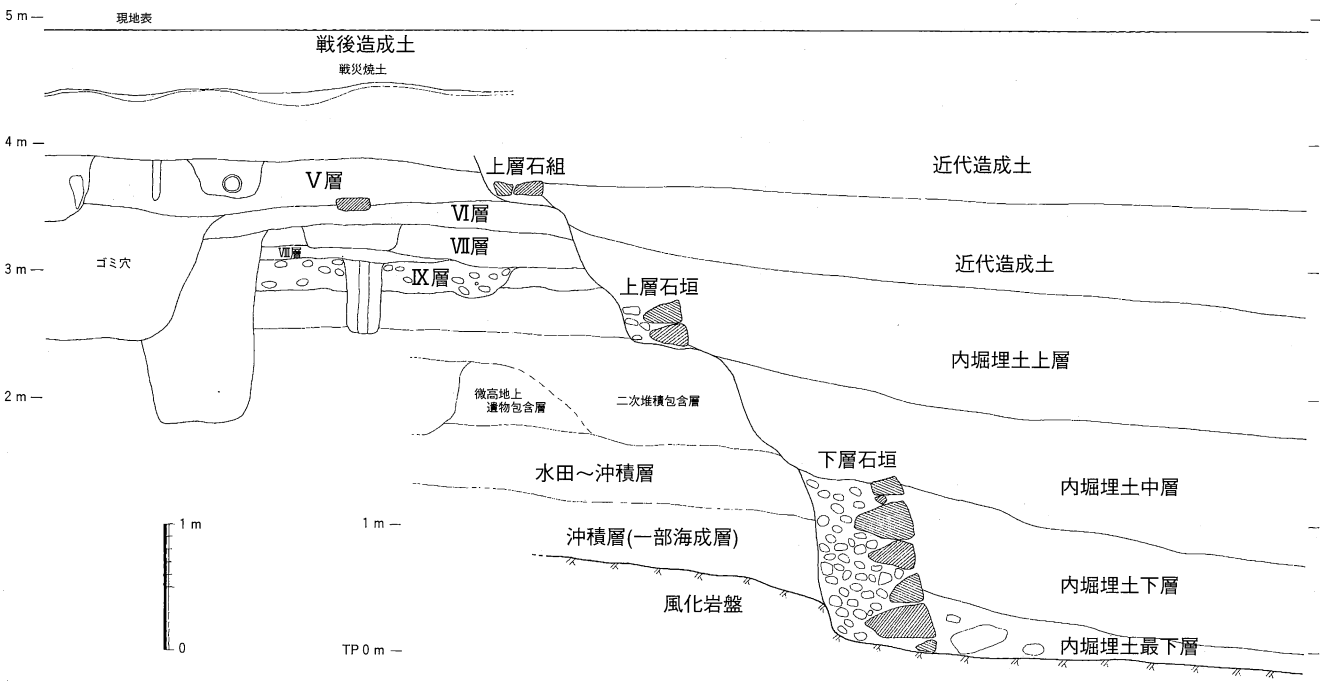
組が検出された。これらは、平面的には微妙に主軸を違えているが、大局としては平行して延び、層位的に新しいものほど西にある。下層石垣は、本来の内堀護岸石垣と判断できるもので、基底が標高０m内外にあり、そこからの立ち上がりの高さは最大で1.8m分が残っていた。築石は原則として長辺が100cm以下、平均的には50cm内外の自然石もしくは矢穴を残さない粗割り石で、積み方や石材は場所によって偏差をもち、長年にわたる修理や積替えが累積した結果とみられる。最下段は風化岩盤(花崗岩質)に直に据えつけられている個所が多く、東に向って僅かづつ下がっていく堀底も沖積層ではなく風化岩盤となっている。上層石垣の基底は、下層石垣の基底から2.5mほど高い位置にあり、最大で高さ0.8mが残っていた。築石は30～100cmの粗割り材で、最下段は城郭以前の堆積層に載り、前面に杭列を伴う個所もあった。上層石垣は基底高や裏込中の遺物から判断して、江戸時代後期もしくはそれ以後に、下層石垣の後身代替として構築された内堀護岸である。上層石組は基底が標高3.6mにあり、長辺数十cmの方形の割石を堀側に面を揃えて一段に配するものである。厳密な走行は一直線ではなく鋸歯状で、場所によって構造を変える。明治時代に堀が埋め立てられていく過程もしくはその後になお痕跡として残った低地の護岸か土留と判断できる。

内堀の埋土は、最下層・下層・中層と、上層に大別される。最下層～中層は水性堆積で、一部グライ化した暗灰色系の粗砂～微砂からなる。最下層には下層石垣からの転落石材を含み、平時の滞水状況での堆積を示す微砂・シルトを主体とする個所もある。下層・中層は、それより砂粒が粗くて洪水時の堆積としての側面が強く、大量に含まれる陶磁器類は、17世紀初頭から18世紀までのものを主体とするが、19世紀のものも含まれ、堆積年代は江戸後期ないしは明治まで下ると判断できる。下層石垣は埋土中層を形成した時の洪水によって上部を壊されたとみられ、埋土下層も同じ洪水による一連の堆積であった可能性がある。こうした遺物の出土状況は、長年にわたって少しづつ堀に流入した遺物や曲輪内で埋まった遺物が、洪水や堀の浚渫で幾度も攪拌され再堆積した結果であろう。

堀埋土の上層は、暗褐灰色系の汚染度の高い細砂で、水性堆積ではなく人為的な埋立土で、遺物の年代観とも合せて明治39・40年の堆積と判断できる。中層以下を遥かに上回る量の陶磁器を含み、漆喰土・木材・ガラス片・鉄片などとあわせて、ゴミ捨場として堀が埋められていった状況が窺える。上層石垣は、この埋土上層によって直に埋込まれている。

三之曲輪内では、現地表下0.5m内外ほどで昭和20年６月の岡山大空襲によるとみられる焼土層が検出された個所がある。一方、城郭関連の造成土の最下面は標高2.8m内外で、16世紀末から戦前にかけての間に人為的な生活面の重あげが1.7mほどあったことになる。その内に相当数の生活面を含んでいるが、生活面の上昇は17世紀中葉までの古い段階ほど大幅で、また高い頻度で行われている。幕末の生活面は明確な形で捉えられたわけではないが、標高4.5mほどの戦前の生活面と大差ないのに対し、17世紀中葉までの生活面であるⅤ層上面は既に標高3.9mほどの高さをもつのである。各造成土のうち、相対的に下層のものは、沖積層もしくは旧水田土壌に由来する細微砂分が目立つが、総じていえば各造成土とも暗褐灰～灰褐黄色系で、花崗岩風化(バイラン質)土分を含み、ときに焼土や炭粒の薄層を挟みながら、よく締まっている。

Ⅴ層上面が三之曲輪内で精査できた最上位の生活面であるが、この遺構面で検出した遺構は、現実にはさらに上層から掘り込まれた遺構も含んでいる。このほか、Ⅵ層上面、Ⅶ層上面、Ⅷ層上面、Ⅸ層上面も生活面として認識し、それぞれに遺構の検出と実測を試みた。ただ、各造成土とも複雑な堆積をしているうえ、遺構が切り合っているため、上の層に伴う遺構でありながら掘り残して、下の層



第６図　基本層序模式図（縦1／60）

の精査工程ではじめて認識できた遺構もある。次節以降に記述する遺構の帰属層位は、遺構の検出工程に忠実に従ったものではなく、整理・再検討した結果を含んでいる。ぎゃくに言えば、各遺構の帰属層位は、一部に不確定要素を含むことになる。

共伴遺物から判断できる年代観は、Ｖ層上面の本来的部分、Ⅵ層上面、Ⅶ層上面の遺構までが、おおむね17世紀前半のもので、監国期の池田利隆、池田忠継、池田忠雄といった前池田氏(慶長７年～寛永９年)が岡山城主であった時を主体に、小早川秀秋期(慶長５～７年)や、入国直後の池田光政期(寛永９年～)を含む可能性がある。また、Ⅷ層上面、Ⅸ層上面は16世紀末の宇喜多秀家期(天正９～慶長５年)を軸とし、特にⅨ層の形成は宇喜多直家期(天正１年～９年)に遡るものと展望できる。

具体的な検出遺構として、上層遺構としたＶ層上面や中層遺構としたⅥ層上面では、瓦土管を繋いだ暗渠や中小の土壙、下層遺構としたⅦ層上面では大形のゴミ穴群、最下層遺構としたⅧ層上面とⅨ層上面では、円礫を敷きつめて地盤改良を行った敷地に建つ掘立柱建物や井戸がある。

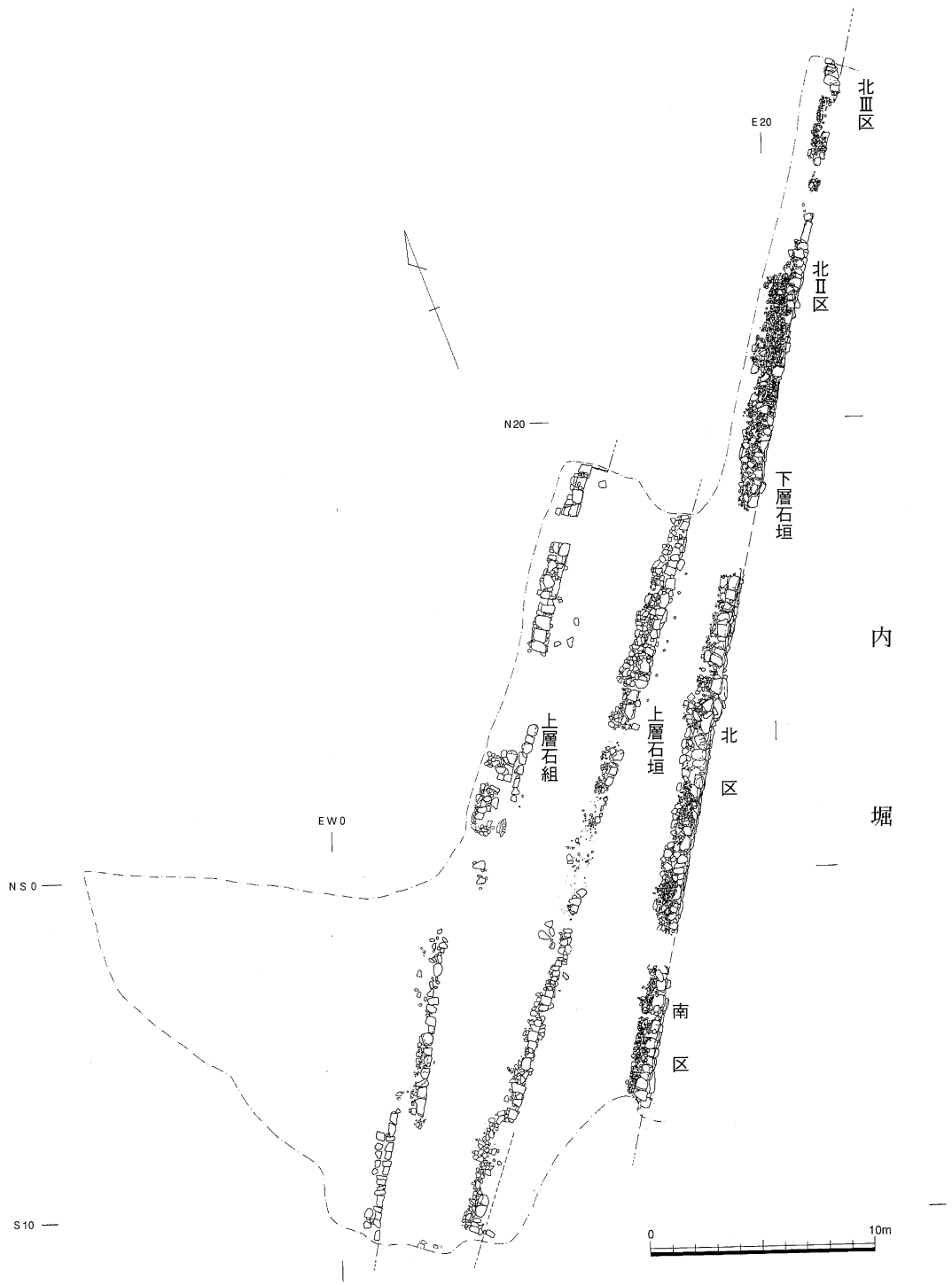
Ｘ層以深には風化岩盤との間に厚さ2.0mほどの土砂する。大半は暗灰褐～黄灰色系の微砂～粗砂で、自然流水による堆積ないしは弥生中期以降の水田耕土とみられる。これらは東と南に向って緩やかに下がって行くが、総じて標高2.0m付近に弥生中期から平安時代の遺物を含む地点がある。その多くは、平安時代もしくはそれ以降の流水による二次堆積と判断できるが、発掘区最北端では洪水によって形成された微高地基盤土の上に暗褐灰色細微砂からなる一次的な遺物包含層(土壌化層)が残り、古墳時代前期の明確な遺構も観察できた。また、標高1.0m余りの高さでは各所で旧水田耕土とみられる堆積があり、少なくとも弥生中期から古墳時代前期には発掘地の北に集落、東に流路、大半部に水田が広がっていた景観が復原できる。

風化岩盤も南と東に傾斜し、発掘区南端付近の風化岩盤直上には、縄文海進期のカキ殻を含む海岸堆積層が残っていた。

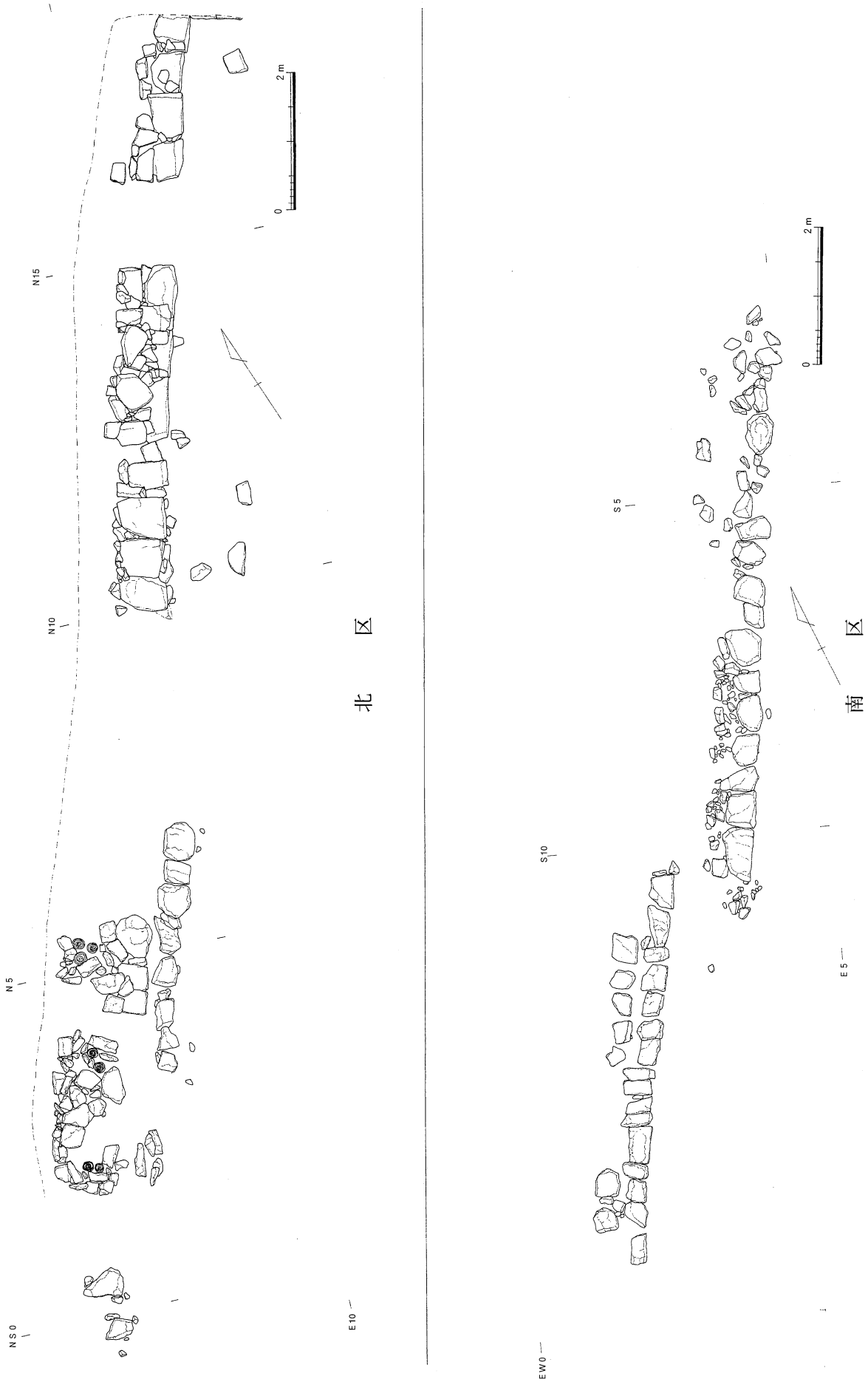
第２節　内堀関連の遺構

１．上層石組（第８図）

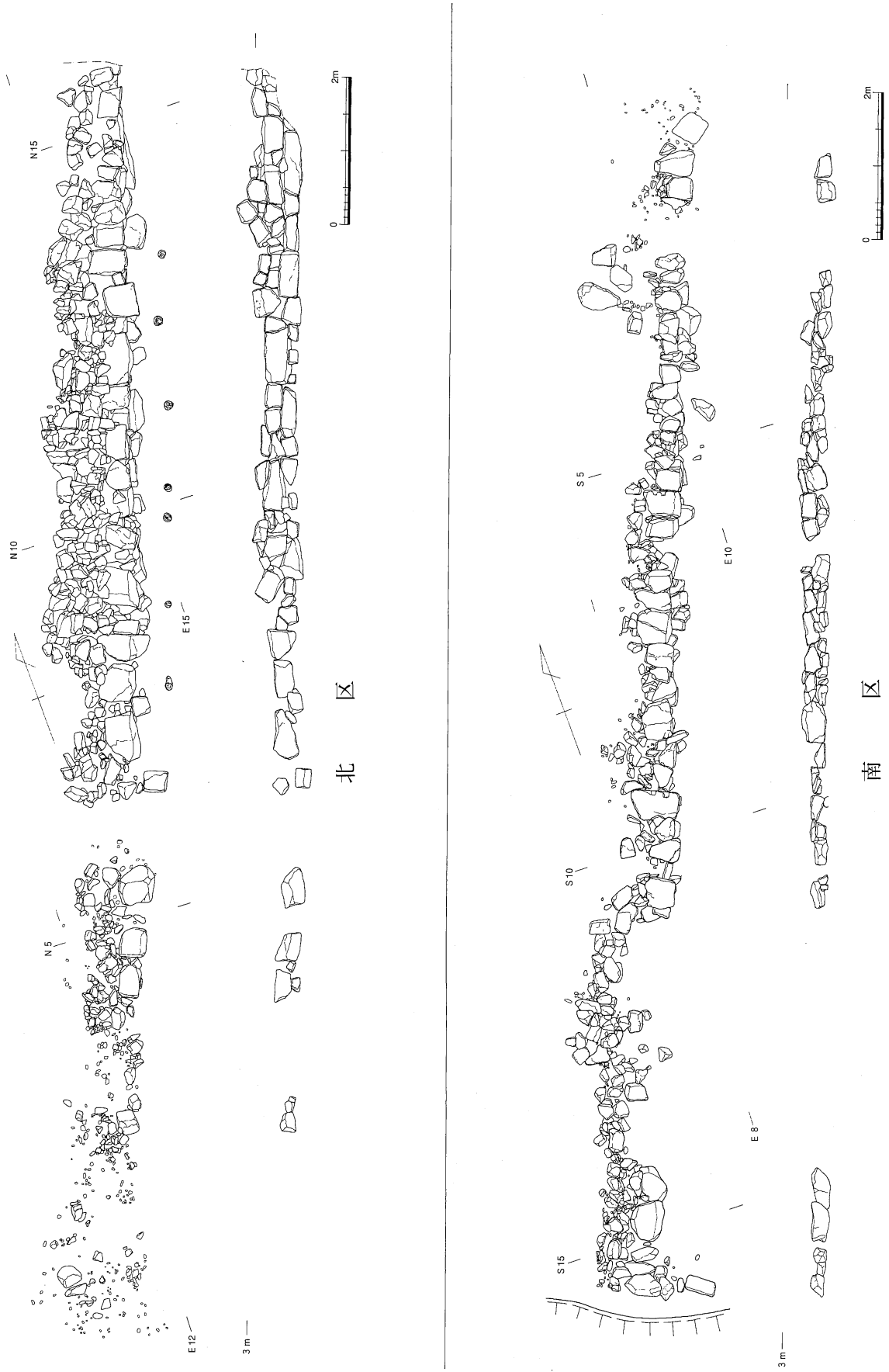
明治に入ってからの遺構で、堀が埋められていく過程もしくはその後に残った窪地に関連した、護岸・土留め・基礎のたぐいとみられる。遺構として残っていない個所もあるが、南北の長さにして約36m分を検出した。基底は標高3.6m内外にあって、南北でほぼ水平である。石材は最大長辺90cm、



第７図　内堀護岸の石垣・石組（１／300）



第８図　上層石組平面（１／80）



第９図　内堀上層石垣（１／80）

平均的な長辺50cm内外の花崗岩粗割り石で、矢穴を残すものは確認できない。石材の多くは扁平な方形で、基本的に一段で横置きもしくは小口置きされている。上面を揃えようとする意図が窺え、石材が重なる個所もあるが、石垣と呼べるものではない。石組としての高さは最大で0.6m、平均的には0.2～0.3cmである。築石の高さ調節のために小石を咬ませた個所があり、背後に控えの石材ないしは裏込石を伴う所もある。三之曲輪側の石材が及ぶ範囲いっぱいに構築のための掘り方を伴っている。東の内堀側は端線を良く揃えて石材が配されているが、一直線に延びるのではなく、ジグザグを描き、その単位ごとに細かな構造が異なっている。

南部は石材が小形で扁平度が高く、内堀側と控えの石材の大きさが近似して、布基礎もしくは土塀基礎状である。中南部は、築石に丸みをもったものが目立ち、裏込に握りこぶし大円礫や長辺30cm以下の割石を伴い、掘り方が曲輪内の上層遺構である暗渠２を切っている。中北部は列石状石組の内側に、南北3.9m、東西1.5mの長方形の敷石がある。この敷石は、大小の割石の上面を標高3.7m付近に丁寧に揃えたもので、内側には垂直に打ち込まれた直径13～18cmの丸太が３ブロックに分かれて合計７本が残っていた。あたかも橋脚ないしはヤグラ類の柱の根固めのように観察できた。北部は石材が大きくて方形度の高い割石で、石材の隙間に入念に詰石が施されている。その北端でこの石垣は鉤状に折れ、内堀側に張り出している。

２．上層石垣（第９図）

南北の長さ33.6m分を検出した。平面の上では南部では下層石垣に対して5.7m離れているが、北ほど接近する。最下段基底の高さは標高2.8～2.9mで、僅かに南に向かって低くなる。石垣としての遺存高は最大で0.9m(築石４段)であるが、平均的には0.4m内外(築石２段)である。築石は花崗岩の粗割り材が主体で、長辺は最大のもので90cm、平均的には30～40cmである。グリッドのＳ５ライン南やＳ10ライン北には幅５～６cmの矢穴を残すものがある。北寄りの築石は大きくて方形度が高く、横積みされたものが多いのに対し、南では小さく不定形で小口積みの傾向が強い。角の鋭い築石の形とも連動して、間詰石は少ないが、平面的な石垣面を形成している。石垣面の立ち上がりは80°以上ある。裏込は石垣面から奥に1.4mまでの範囲に施されている。その石材は、長辺30cm以下の割石や自然角礫が主体で、円礫はあまり含まない。築石や他の裏込石と緻密に噛み合って充填されているわけでなく、土砂も交えて入念さに欠ける。また、陶磁器片をけっこう含み、最新は江戸中期末から後期のもので、この石垣の構築がそれ以後のものであった事が判る。築石最下段が載るのは、城郭以前に堆積した細微砂層で軟弱であるのに、胴木など特別な下部構造はない。ただ、北寄りでは0.4～1.2mの不等間隔で打たれた直径10cm内外の杭が石垣前方に残っていた。石垣上部は失われた状態であるが、構造的に考えて、本来の高さはせいぜい２m足らずとみられる。

３．下層石垣（第10・11図）

長さにして南北47.5m分を検出できた。

最下段基底の高さは標高0.1～0.4mで、微妙な上下を繰り返しながら、大局としては南に向かって僅かに低くなる。大半の個所では最下段が風化岩盤ないしはその古い二次堆積の強固な地山に直に設置されているが、北Ⅲ区の一部などでは風化岩盤との間に厚さ0.3mほどの軟弱な自然堆積(暗灰色粘質細砂・中砂)を残している。また北区のグリッドＮ８ｍライン付近では未風化の丸い岩の上に構築

第10図　内堀北区・南区下層石垣（1／80）

されている。解体作業を行ったが、胴木などの下部構造はない。

石垣としての遺存高は最大で1.8m(築石６段)であるが、平均的には1.3m(築石４段)前後である。断面は平均して80°の傾斜で立ち上がる。築石は花崗岩の粗割り材が主体で、面が平滑で方形に近いものが多いが、不定形な割石や丸みをもった自然石も交えている。その長辺は最大のもので100cm、平均的には50cm前後である。矢穴を残すものは確認できなかった。築石は、小口積みが優位で横積みされたものもあり、合わせて水平近く置かれたものが主体を占めるが、落し積みに近い部分もある。間詰めは比較的入念で、角石が多いが、握りこぶし大の円礫も散見できる。全体として平面的な石垣面を形成し、上層石垣に比べて本格的な石垣といえる。

裏込は石垣面から奥に1.0～1.6mの範囲に施されている。長辺30cm以下の割石や自然角礫も混ざるが、握りこぶし大の円礫が主体で、土砂を交えず空石が基本で、混入遺物は皆無に近い。裏込背後は、北区のＡセクション付近のように風化岩盤ないしはその古い二次堆積の固い地山にもたせている個所もあるが、基本的には旧水田や自然流水による微細砂層となっている。すなわち石垣ないし堀は沖積層を掘り込んで構築されているが、風化岩盤を大きく削り込むものではなかったことが判る。

検出頂は本来の状況ではなく、石垣上部は崩壊している。築石とみられる石材が裏込側に動いて転がっている個所も多いが、こうした検出時の石垣頂部の各石材は中粗砂を主体とする堀の埋土中層によって直接に覆われており、この石垣の最終的な崩壊が堀埋土中層の堆積をもたらした洪水によって起きた可能性が窺える。石垣前面にも大形の築石をはじめとして、石垣を構成していたとみられる大小の石材が堆積しているが、石垣擁護のための人為的な捨石とは考えられず、これも石垣崩壊による転落石と判断できる。ただ、その多くは堀の埋土最下層から下層に含まれ、総てが埋土中層と同時一連の崩落との保証はない。石垣前面では、上層石垣にあった杭列などは検出されなかった。

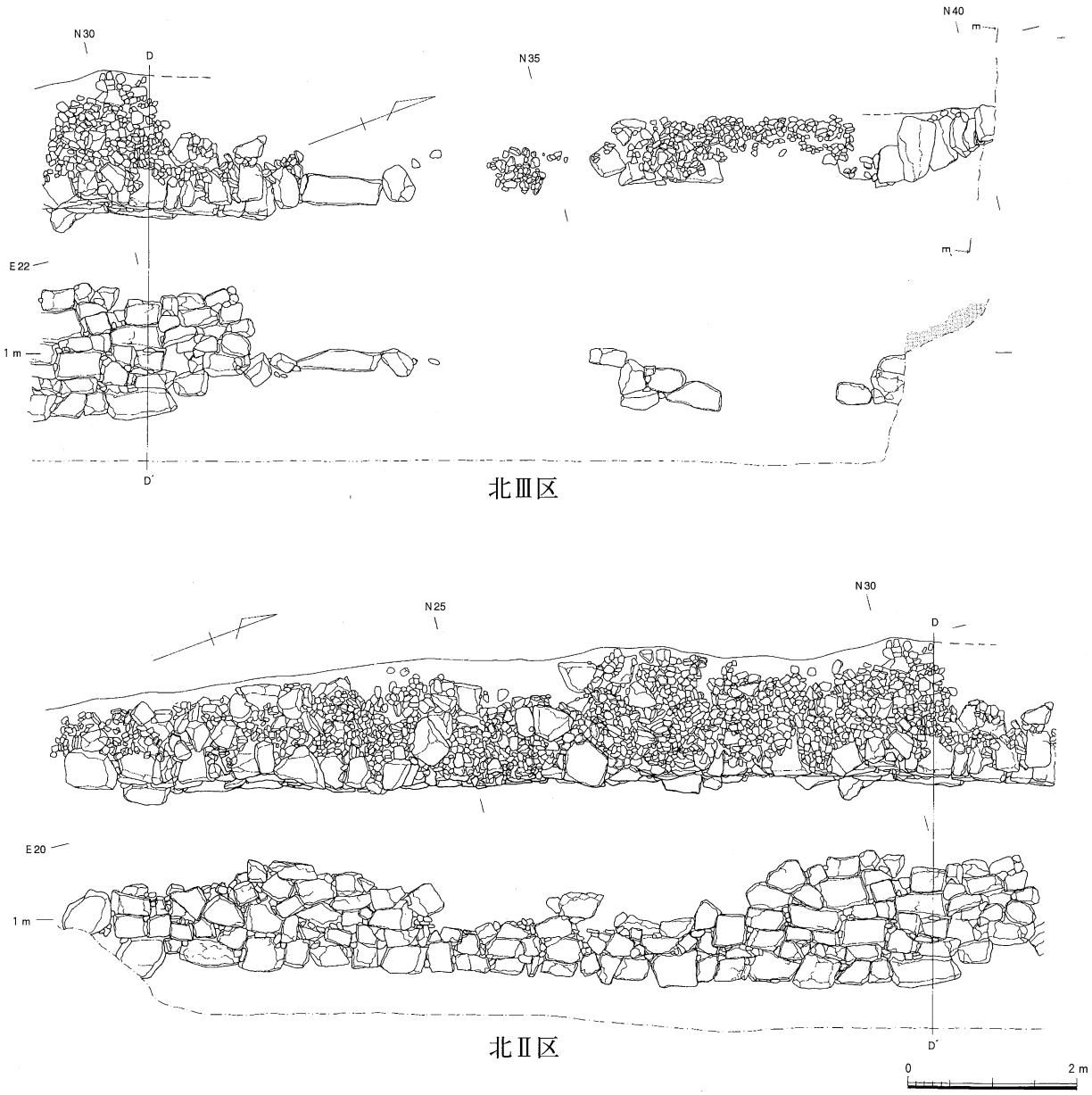
以上が全体状況であるが、細かく構造を観察すると場所によって偏差があり、工程や工人差に加え、長年に渡る補修や積み直しが累積した結果と判断できる。

南区では小口積みが比較的徹底していて最下段上面には横メジが通り、その最下段は上方の石垣面に対して10cmほど前面に突き出して、いわゆるアゴ石となっている。また、そのＳ10mライン付近には地山由来とみられる巨大な自然石を含み、Ｓ10mライン付近には縦メジが通る。なお、南区で傾いて図示される現頂部付近の築石は崩壊過程で二次的に動いたものとみられる。

北区では、全体に小口を石垣面に向けて水平に置かれた築石が優位であるが、横メジは目立たない。特に、Ｓ１mラインからＮ６mライン付近の上部は築石が小さく、落し積み状となり、二次的な補修部とみられる。この部分の築石の残りが悪いのも、補修部ゆえに構造的に弱かったからであろう。逆にＮ５mライン以北の本体部は築石が大きい。Ｎ７mライン付近は地山岩の上に構築されており、力の無理があったのか南隣の築石２石が競り出している。N10mライン付近には縦メジが通るが、これは工程上の継ぎ目の可能性が高い。

北Ⅱ区は築石が小さいが、方形度や面の平滑度が高く、また規格性が高い。石垣面での築石どうしの接合が緻密で、間詰も少なく、短い単位で弱い横メジを通す。断面の立ち上がりが急で、垂直に近い。N21mラインとN30mラインに付近に工程上の継ぎ目とみられる縦メジが通り、それぞれ南が低い形で最下段が25cmほど段落ちしている。先の北区の縦メジと合わせて９～10mおきに構築時の工区があったと展望でき、その各単位ごとに基底高もダウンとアップを反復している。

北Ⅲ区は残りが悪いが、北Ⅱ区と大局は近似するようである。ただ、最下段に横積みされ棒状石を



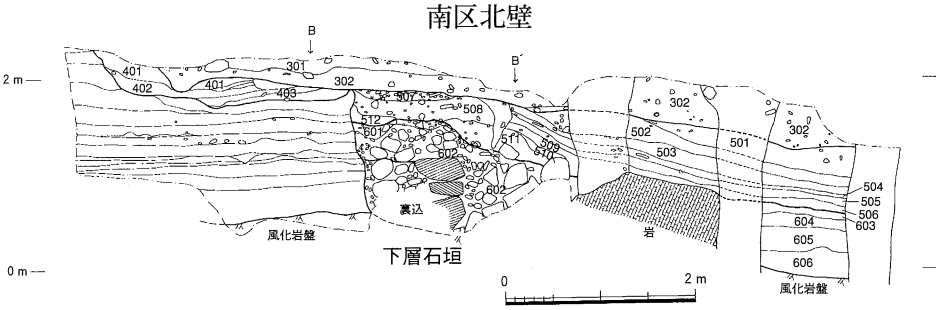
第11図　内堀北Ⅱ区・北Ⅲ区下層石垣（1／80）

含み、その下面高は標高0.8mもの高さとなっている。最下段の段落ちがN30ラインの縦メジから北に5.2mの地点にあり、N30ライン以南の縦メジ間隔の半分の位置といえる。

石垣直前での掘り底は、標高0.0～0.4mで南に向って次第に低くなり、東西方向はそれ以上の傾斜で堀の中心部が深くなる。しかし、概して言えば堀底は平坦といえ、風化岩盤が露出している。発掘区内で計測できた掘り底の最深部は標高－0.4m前後である。

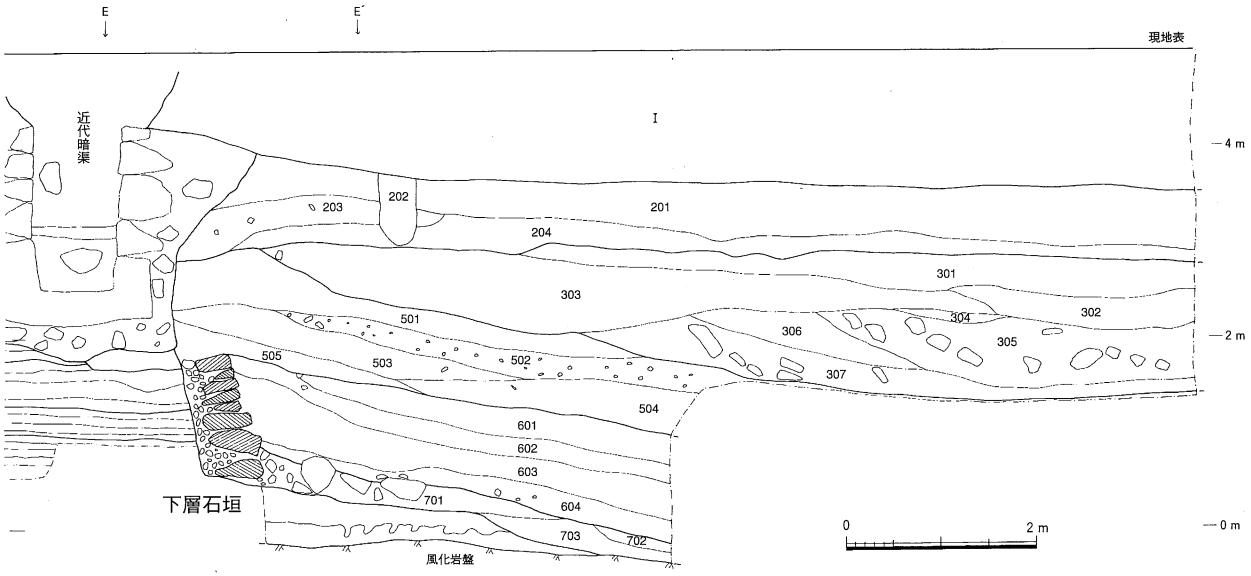
堀の埋土の状況は第12図に示したが、概要は前節で記した通りである。

南区北壁



Ⅲ　明治39･40年の内堀埋立土(埋土上層)
301 (暗)褐黄灰色細微砂
302 暗褐黒灰色細微砂（含ガラス片・陶磁器）
Ⅳ　埋土中層
401 暗褐灰黄色細粗砂
402 暗褐灰黒色細微砂
403 暗褐灰色細砂
Ⅴ　埋土中層
501 褐黒灰色細微砂
502 褐黒灰色細砂
503 褐黄色粗細砂
504 褐灰色細粗砂
505 褐灰黄色粗砂
506 褐灰黄色細微砂
507 灰色粗砂(含３cm円礫)
508 灰黄色粗細砂
509 褐灰黄色細微砂
510 灰黒褐色細砂
511 灰褐色細砂
512 灰黒褐色細微砂
Ⅵ　埋土下層
601 暗褐灰黒色細微砂（円礫）
602 暗褐灰黒色細微砂（円礫・転落石材顕著）
603 黒灰褐色細微砂
604 暗灰褐色細微砂
605 灰褐黒色細微砂
606 褐灰黒色粗砂細礫

北Ⅲ区北壁

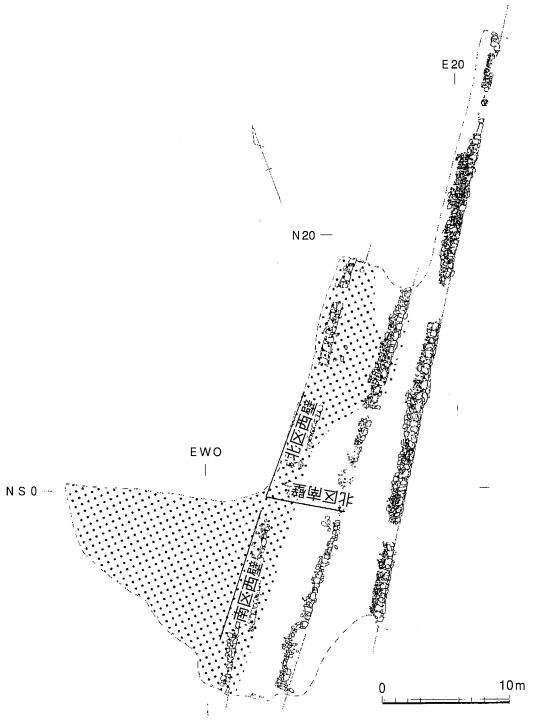


Ⅰ　現代造成土
Ⅱ　戦前造成土
201 灰黄褐色細砂
202 暗灰褐色細砂
203 暗灰色細砂混礫石
204 明灰色粗細砂（洪水堆積）
Ⅲ　明治39･40年の内堀埋立土(埋土上層)
301 暗灰黒色細礫～シルト
302 淡灰緑色細中砂
303 暗灰黒色細砂細礫混炭灰
304 淡灰緑色細中砂
305 淡灰褐色中砂　含　淡黄色タタキ塊
306 暗黒色炭粒
307 淡緑灰色細砂　含　淡黄色タタキ塊
Ⅴ　埋土中層（流水堆積）
501 暗灰褐黒色微砂シルト
502 暗褐灰黒色シルト微砂
503 灰褐色中粗砂
504 灰色細中砂
505 淡暗灰褐色シルト
Ⅵ　埋土下層（流水堆積）
601 暗灰色中微砂
602 淡灰色細粗砂
603 暗灰色シルト微砂
604 灰色細中砂
Ⅶ　埋土最下層（滞水堆積）
701 淡暗灰褐色シルト
702 暗灰褐色微砂シルト
703 暗灰色シルト

第12図　内堀の埋土堆積（１／80）

第３節　三之曲輪内の上層～下層遺構

西区を中心に南区・北区で各生活面に伴って近世の遺構を検出した。遺構は上層石組の下から一部は上層石垣の下にまで及んでいるが、遺構が密集するのは上層石垣面から概ね4.0m以西、下層石垣面10m以西である。これは、内堀側の造成土が削平を受けている事にもよるが、本来内堀と町家の敷地との間に道路があったためとみられる。近世造成土の堆積は第14図・第15図に示したように極めて複雑で、実際にはⅤ層以下に限っても10以上の生活面があったものと判断されるが、大局的にみて図示したように各生活面をとらえた。検出遺構は、多くがゴミ穴とみられる土壙である。



第13図　三之曲輪上の遺構・土層壁位置
（１／600）

１．上層遺構（第16図）

標高3.8m前後の高度をもつⅤ層上面で検出した遺構を上層遺構としたが、この面は精査を行った最上面であるため、上の層位から掘り込まれた遺構も含んでいる。また、内堀寄りで検出された遺構は帰属層位が特定しにくいが、多くはⅤ層上面期以降の可能性が強いため、ここに含めた。

ａ．西区・南区のⅤ層上面より上位から掘り込まれたとみられる遺構（第16図）

ＳＫ１は検出長径1.3m、深さ0.2mの楕円形の土壙で19世紀以降のコンロ細片が出土した。

ＳＫ５は検出長径1.7m、深さ0.3mの土壙で18世紀の灰釉陶器細片が出土した。

ＳＫ28は検出長径1.1m、深さ0.3mの土壙で17世紀後半～18世紀の備前焼片が出土した。

ＳＫ29は直径0.6m、検出深0.3mの円形土壙で17世紀末～18世紀の肥前磁器などが出土した。

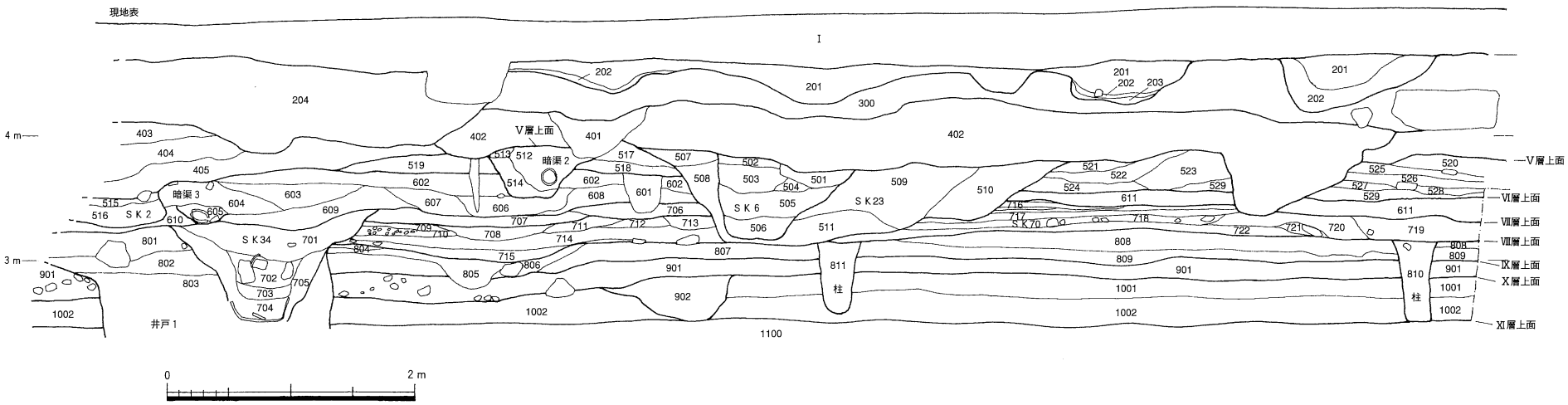
ＳＫ48は直径0.6m、検出深0.2mの円形土壙で17世紀後半の肥前陶器細片などが出土した。

ＳＫ51(第18図)は検出した長さ1.8m以上、幅1.5m、深さ0.3mの楕円形で底が平坦な土壙で、17世紀後半の遺物がまとまって出土した。

ＳＫ54は(第18図)は1.2m四方の方形で検出深0.4mほどの土壙に、長辺50cm内外の石材を無秩序に入れたもので、19世紀のカキ釉を施した行平の細片が出土した。

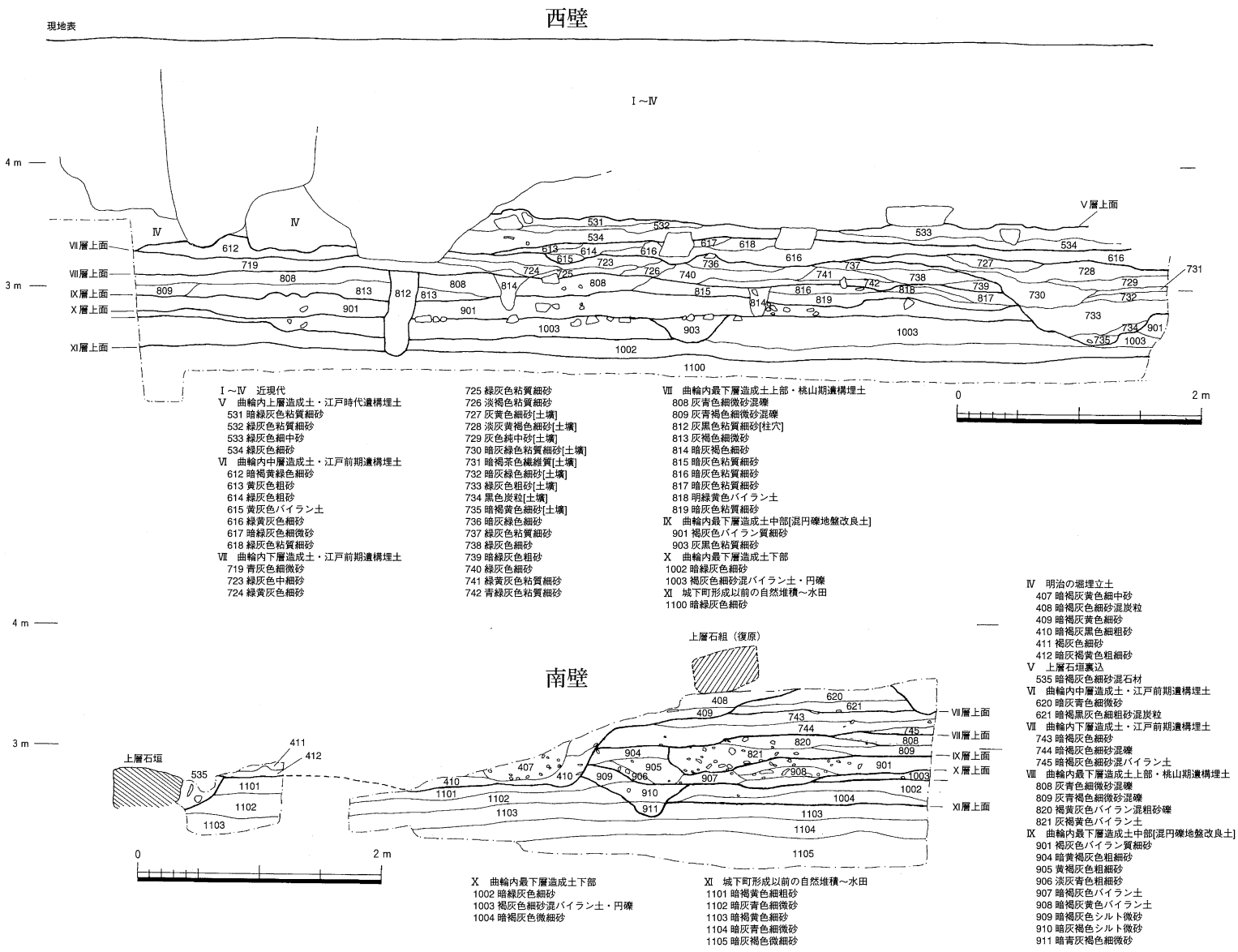
ＳＸ55は(第18図)は東西2.8m、南北1.1mの長方形の範囲に長辺60cm以下の角石が散乱する。掘り方として検出できなかったが、土壙の底部にあたるものと判断できる。石材の間から19世紀代のカキ釉を施した行平の蓋が出土し、東南に隣接するＳＫ54と一連であった可能性が強い。また、この遺構を切るものとして、直径40cmほどの木桶の底が残っていた。本来は木桶が地中に据えられていて、底だけが残ったものであろう。同様の桶底はＳＫ54の北やＳＫ51の北でも発見された。

ＳＫ74(第17図)は長さ2.8m以上、幅1.5mの長方形で、検出できた深さ0.8mの土壙を主体部とし、内部に木材を組立てた特殊な構造である。すなわち、この土壙は各辺がほぼ垂直に立ち上がった壁で、



Ⅰ　現代造成土
Ⅱ　戦災関連層
201 混焼土塊暗褐灰色細砂
202 黒色純炭
203 赤褐色焼土層
204 暗褐黄色細微砂
Ⅲ　戦前～近代造成土
300 暗黄褐色細砂
Ⅳ　近代造成土・遺構埋土
401 暗黄褐灰色細砂(備前焼土管埋納溝埋土)
402 暗褐灰色細砂(混炭焼土)
403 暗褐黄色細砂(混炭焼土)
404 黄褐灰色細砂(混炭焼土)
405 暗灰褐色細砂(混炭焼土)
406 暗灰黄色細砂
Ⅴ　曲輪内上層造成土・江戸時代遺構埋土
501 暗黄灰褐色細砂[ＳＫ16]
502 暗黄褐色細微砂[ＳＫ16]
503 暗褐灰黒色細微砂(混炭焼土)[ＳＫ16]
504 暗黄褐灰色細砂[ＳＫ16]
505 暗黄褐色細微砂[ＳＫ16]
506 暗灰褐色(混炭焼土)[ＳＫ16]
507 暗褐灰色細微砂[ＳＫ23]
508 暗褐黄灰色細微砂[ＳＫ23]
509 暗褐灰色細微砂[ＳＫ23]
510 褐灰黄色細微砂[ＳＫ23]
511 暗褐黄灰色細微砂[ＳＫ23]
512 暗褐灰色細微砂(混焼土炭)[暗渠２]
513 石材[暗渠２]
514 暗褐灰色細微砂[暗渠２]
515 灰褐色細微砂[ＳＫ２]
516 暗灰褐色細微砂[ＳＫ２]
517 黄灰色細砂
518 黒灰色純炭灰
519 黄褐色混バイラン質土
520 暗黄褐色細微砂
521 黄灰色細微砂
522 暗黄灰褐色細微砂(混炭粒)
523 暗褐灰色
524 明黄褐色細微砂
525 暗褐黄灰色細微砂
526 暗黄褐灰色細微砂
527 黄褐色細微砂
528 黄褐色細微砂
529 暗黒灰色細微砂
Ⅵ　曲輪内中層造成土・江戸前期遺構埋土
601 暗褐黄色細砂
602 黄灰色粘質微砂
603 灰黒色炭灰十鮮黄褐色バイラン土
604 鮮黄褐色バイラン土
605 淡灰青色細微砂[暗渠３]
606 淡灰黄色細砂
607 鮮黄褐色バイラン土
608 淡灰黄色細砂
609 淡灰褐色細微砂
610 灰色細微砂
611 黄褐灰色粘質微砂
Ⅶ　曲輪内下層造成土・江戸前期遺構埋土
701 暗灰青黒色微細砂[ＳＫ34]
702 暗灰青色微細砂[ＳＫ34]
703 暗灰褐青色微細砂[ＳＫ34]
704 暗灰青褐色微細砂[ＳＫ34]
705 暗灰青褐色微細砂[ＳＫ34]
706 黄褐灰色細砂
707 灰色微砂シルト[ＳＤ71]
708 暗灰青色細砂
709 黄褐色バイラン土
710 灰黄色礫
711 灰白褐色バイラン土
712 灰白褐色粘質微砂
713 褐灰色細微砂
714 暗灰青色細微砂
715 暗灰青色細微砂
716 黄灰色細砂・褐黄色細微砂・灰褐色粗砂
717 暗褐灰色細微砂
718 灰褐色バイラン土[ＳＫ70]
719 青灰色細微砂
720 褐黄色細微砂
721 灰青色細砂
722 黄褐色細砂バイラン土
Ⅷ　曲輪内最下層造成土上部・桃山期遺構埋土
801 暗灰青褐色微細砂[井戸１]
802 暗灰褐青色微細砂[井戸１]
803 暗青灰褐色微細砂[井戸１]
804 暗灰青色微細砂
805 暗灰青色微細砂
806 暗灰青褐色微細砂
807 灰青褐色細微砂混礫
808 灰青色細微砂混礫
809 灰青褐色細微砂混礫
810 灰青色細微砂[柱穴]
811 暗灰青褐色細微砂[柱穴]
Ⅸ　曲輪内最下層造成土中部[混円礫地盤改良土]
901 褐灰色バイラン質細砂
902 淡灰青色バイラン土
Ⅹ　曲輪内最下層造成土下部
1001 褐灰色細砂混バイラン土・円礫
1002 暗緑灰色細砂
Ⅺ　城下町形成以前の自然堆積～水田
1100 暗緑灰色細砂

第14図　三之曲輪上南区西壁の土層堆積（１／50）



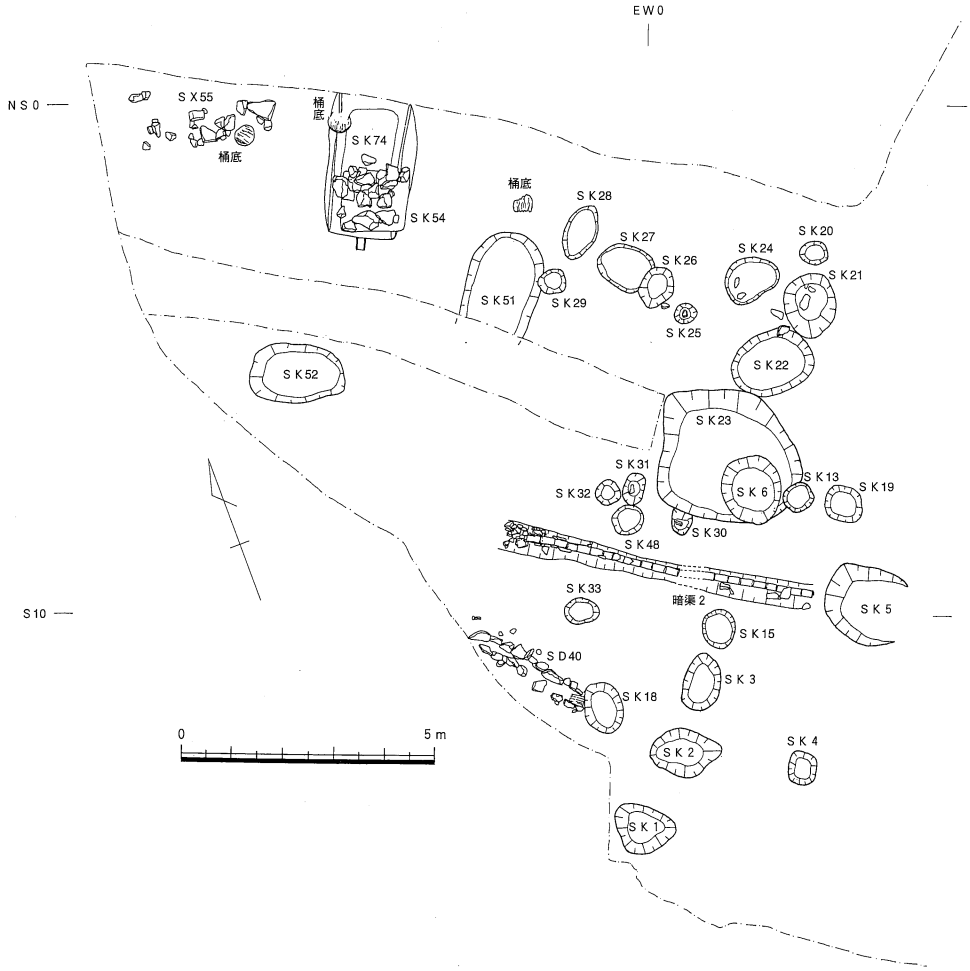
Ⅰ～Ⅳ　近現代
Ⅴ　曲輪内上層造成土・江戸時代遺構埋土
531 暗緑灰色粘質細砂
532 緑灰色粘質細砂
533 緑灰色細中砂
534 緑灰色細砂
Ⅵ　曲輪内中層造成土・江戸前期遺構埋土
612 暗褐黄緑色細砂
613 黄灰色粗砂
614 緑灰色粗砂
615 黄灰色バイラン土
616 緑黄灰色細砂
617 暗緑灰色細微砂
618 緑灰色粘質細砂
Ⅶ　曲輪内下層造成土・江戸前期遺構埋土
719 青灰色細微砂
723 緑灰色中細砂
724 緑黄灰色細砂
725 緑灰色粘質細砂
726 淡褐色粘質細砂
727 灰黄色細砂[土壙]
728 淡灰黄褐色細砂[土壙]
729 灰色純中砂[土壙]
730 暗灰緑色粘質細砂[土壙]
731 暗褐茶色繊維質[土壙]
732 暗灰緑色細砂[土壙]
733 緑灰色粗砂[土壙]
734 黒色炭粒[土壙]
735 暗褐黄色細砂[土壙]
736 暗灰緑色細砂
737 緑灰色粘質細砂
738 緑灰色細砂
739 暗緑灰色粗砂
740 緑灰色細砂
741 緑黄灰色粘質細砂
742 青緑灰色粘質細砂
Ⅶ　曲輪内最下層造成土上部・桃山期遺構埋土
808 灰青色細微砂混礫
809 灰青褐色細微砂混礫
812 灰黒色粘質細砂[柱穴]
813 灰褐色細微砂
814 暗灰褐色細砂
815 暗灰色粘質細砂
816 暗灰色粘質細砂
817 暗灰色粘質細砂
818 明緑黄色バイラン土
819 暗灰色粘質細砂
Ⅸ　曲輪内最下層造成土中部[混円礫地盤改良土]
901 褐灰色バイラン質細砂
903 灰黒色粘質細砂
Ⅹ　曲輪内最下層造成土下部
1002 暗緑灰色細砂
1003 褐灰色細砂混バイラン土・円礫
Ⅺ　城下町形成以前の自然堆積～水田
1100 暗緑灰色細砂

Ⅳ　明治の堀埋立土
407 暗褐灰黄色細中砂
408 暗褐灰色細砂混炭粒
409 暗褐灰黄色細砂
410 暗褐灰黒色細粗砂
411 褐灰色細砂
412 暗灰褐黄色粗細砂
Ⅴ　上層石垣裏込
535 暗褐灰色細砂混石材
Ⅵ　曲輪内中層造成土・江戸前期遺構埋土
620 暗灰青色細微砂
621 暗褐黒灰色細粗砂混炭粒
Ⅶ　曲輪内下層造成土・江戸前期遺構埋土
743 暗褐灰色細砂
744 暗褐灰色細砂混礫
745 暗褐灰色細砂混バイラン土
Ⅷ　曲輪内最下層造成土上部・桃山期遺構埋土
808 灰青色細微砂混礫
809 灰青褐色細微砂混礫
820 褐黄灰色バイラン混粗砂礫
821 灰褐黄色バイラン土
Ⅸ　曲輪内最下層造成土中部[混円礫地盤改良土]
901 褐灰色バイラン質細砂
904 暗黄褐灰色粗細砂
905 黄褐灰色粗細砂
906 淡灰青色粗細砂
907 暗褐灰色バイラン土
908 暗褐灰黄色バイラン土
909 暗褐灰色シルト微砂
910 暗灰褐色シルト微砂
911 暗青灰褐色細微砂

Ⅹ　曲輪内最下層造成土下部
1002 暗緑灰色細砂
1003 褐灰色細砂混バイラン土・円礫
1004 暗褐灰色微細砂

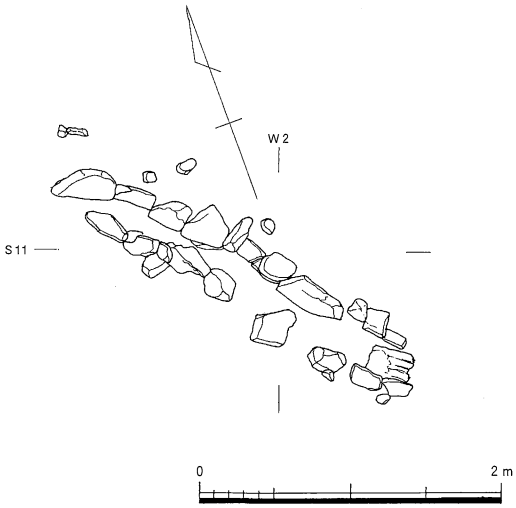
Ⅺ　城下町形成以前の自然堆積～水田
1101 暗褐黄色細粗砂
1102 暗灰青色細微砂
1103 暗褐黄色細砂
1104 暗灰青色細微砂
1105 暗灰褐色微細砂

第15図　三之曲輪上北区の土層堆積（1／50）

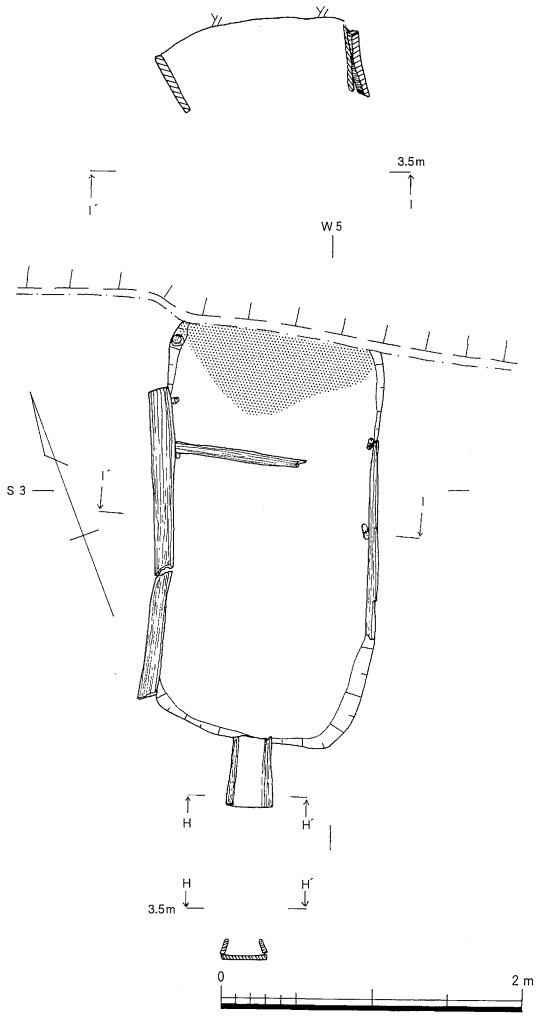


第16図　三之郭内西区の上層遺構（１／150）

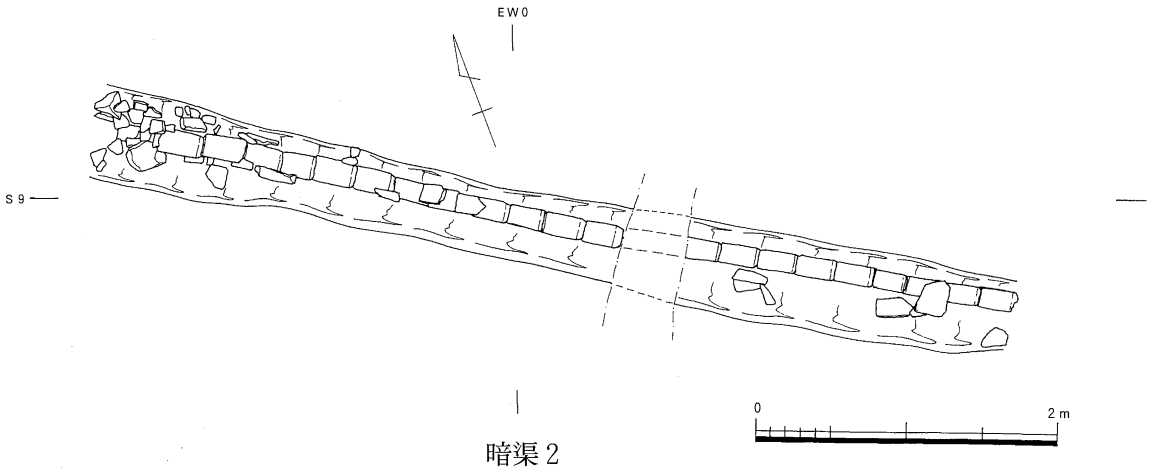
長辺側の壁面には厚さ５～６cmの一枚板を横に立て、内側から杭を打って固定していた。板は土圧で内側に傾き、上部が腐って無なっているが、土壙の頂部付近まであったと考えてよい。また北側は本来の土壙壁からかなり内で、やはり杭を打って立て板を固定していたが、板材は底部から10cmほどしか残っていなかった。一方、南小口側の壁には板材がないが、壁の上角には板材で画された溝が取りついていた。溝は底板の上に側板が載る構造で、長さ50cm、内法20cm、深さ10cm、各板の厚さは２cmほどである。この溝の底面と土壙底の段差は65cm内外である。土壙の南壁と各板壁によって画される範囲は南北1.7m、東西1.3mとなる。その床は単に下の堆積土が露出するだけであるが、北の隔壁板を隔てた背後の床は黄灰色で粗製の漆喰(三和土)が施されている(図のアミ部)。こうした遺構の埋土は隔壁の南北とも、黄灰褐色で汚れの少ない純中砂で、意図的に埋戻されたものとみられる。遺物は土師質土器の細片が１点だけ出土したが、埋没時期を示しうるものではない。ただ漆喰の使用は岡山城本丸内では17世紀後半以降でしか認められないことから、Ｖ層上面より上の層位に伴う新しい遺構の可能性が高い。溝が取りつくことからすれば、便槽の可能性もあるが、内部に汚物が溜まった痕跡はなく、また隔壁の南はかえって張床でないことから、貯水槽とも考えにくい。あるいは地下式倉庫の類かも知れない。



S D40

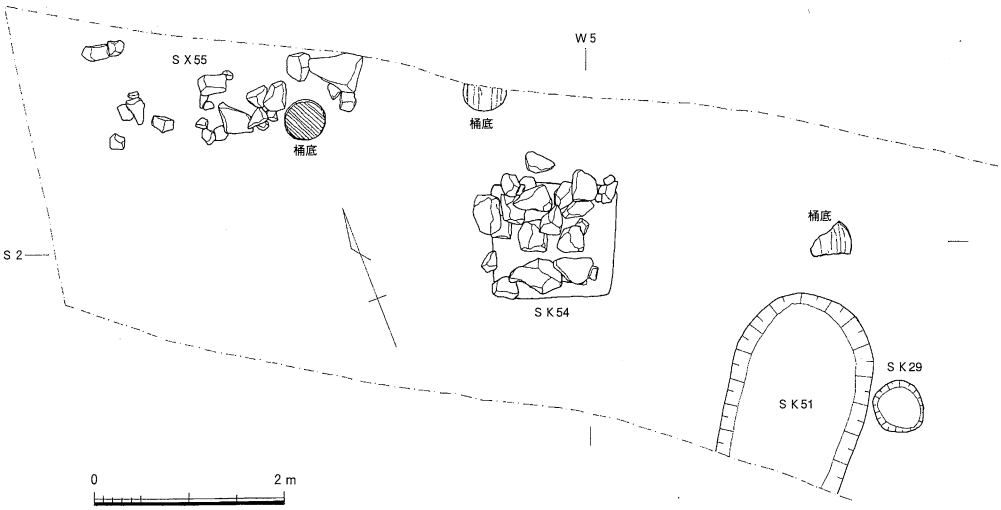


S K74



暗渠 2

第17図　三之曲輪内西区上層の各遺構（1／50）



西区北西部

第18図　三之曲輪内西区上層の各遺構Ⅱ（１／80）

ｂ．西区・南区のＶ層上面に伴うとみられる遺構＝17世紀前葉～中葉（第16図）

ＳＫ２は長さ1.4m、幅1.0m、深さ0.3mの土壙で、青花や備前焼の細片が出土した。

ＳＫ６は長径1.4m、深さ0.7mの土壙で、ＳＫ23を切る。16世紀の中国青磁片などが出土した。

ＳＫ15は直径0.8m、深さ0.8mほどの円形で平底の土壙で、美濃焼の細片などが出土した。

ＳＫ21は長径1.2m、深さ0.3mの土壙で、17世紀中葉の備前焼の擂鉢などが出土した。

ＳＫ22は長径1.6m、深さ0.2mの楕円形の土壙で、唐津焼片などが出土した。

ＳＫ23は3.0m四方の不整方形、深さ0.8mの土壙で、唐津焼片などが出土した。

ＳＫ24は長径1.1m、深さ0.2mの土壙で、埋土中に20cm大の石材を伴っていた。

ＳＫ25は直径0.5m、深さ0.4m以上で、底部一杯に平石を置き、礎盤を伴う掘立柱建物の柱穴とみられる。組み合う他の柱穴は不明であるが、候補はＳＫ30・31・32などである。

ＳＫ30はＳＫ23に一部を切られるが直径0.5mほどの柱穴状で、底部に柱の添石の可能性がある長辺20cmほどの石を伴う。

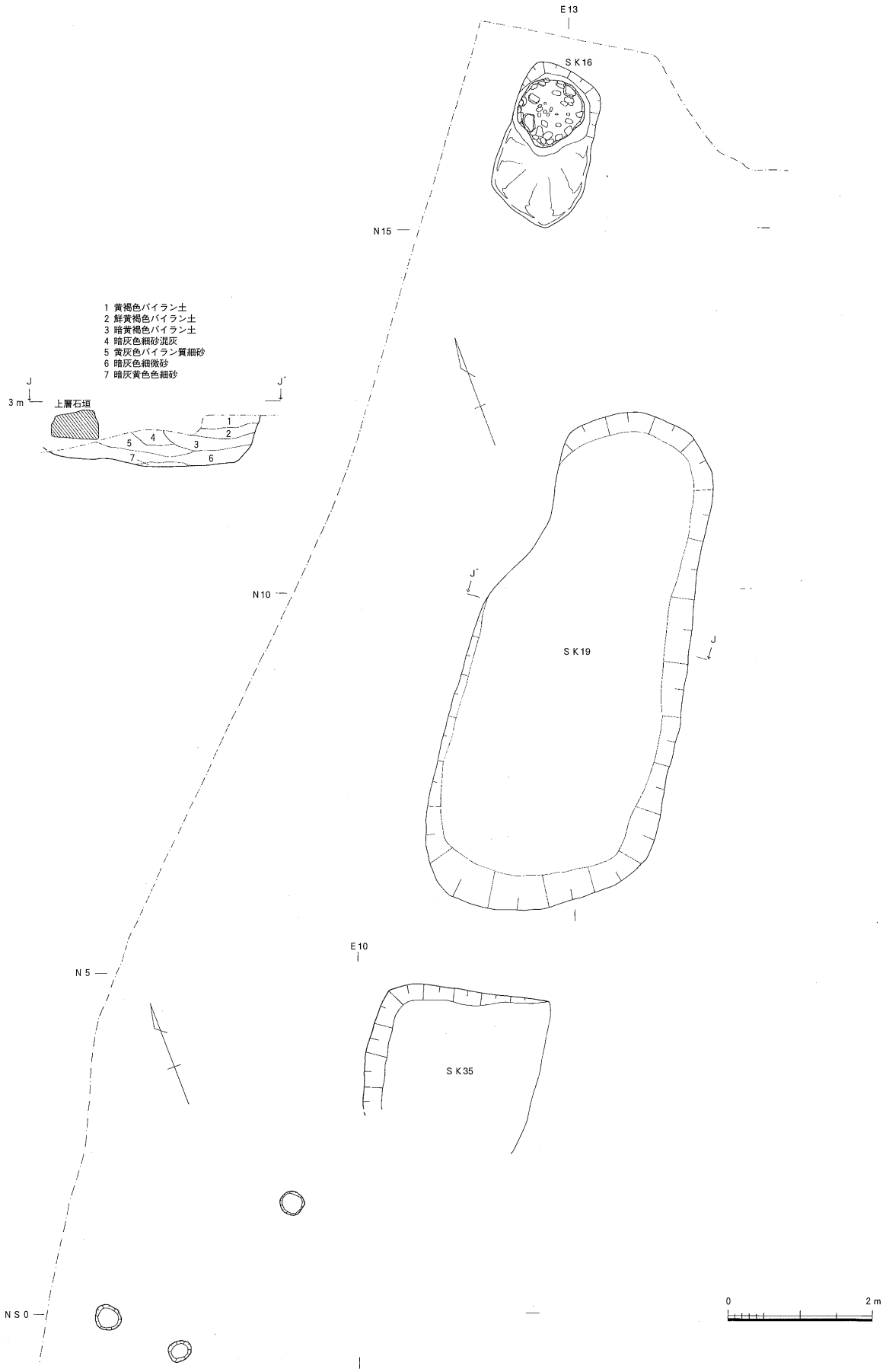
ＳＫ31はＳＫ30のすぐ西にある。同じく柱穴状で、底に石を伴い、備前焼や唐津焼が出土した。

ＳＫ32はＳＫ31も直径0.5mほどで、底には石を伴わないが、柱痕跡が残っていた。

ＳＫ33は長辺0.6m、深さ0.3mの楕円で、土師質土器細片が出土した。

ＳＤ40(第17図)は石組溝である。長さ2.6m分を検出したが、南東はＳＫ18によって切られ、北西は工事掘削によって調査時には失われていた。整った構造ではなく、蛇行気味に延びる。溝の内法は20cmほど、深さは15cm以内である。長辺45cm以下の不定形な粗割り石や自然石を両側に１段だけ配している。溝底は検出部のうちで南東が5cmほど低く、三之曲輪内の町家から内堀側への排水を行うためのものとみられる。南東端付近の溝底には厚板が落ち込んで残り、本来は木板を蓋とした暗渠であったとみられる。溝内埋土からは17世紀中葉の肥前磁器や唐津焼の細片が出土した。

暗渠２(第17図)は、やはり曲輪内の町家から内堀方面への排水を行うための構造である。これは瓦と同質で長さ30cm前後、直径14cm前後の土管をソケット方式で繋いだもので、幅50cmの溝状の掘り



第19図　三之曲輪内北区上層の各遺構（1／80）

方のなかに埋められている。各土管は丸瓦の生産工程で製作する円筒を半裁せずに焼いた形で、水を受けやすいように先細りの尾部が内堀側になるように繋がれている。遺物としての詳細は第Ⅳ章で述べるが複数のタイプが組み合っており、内面のコビキ痕はＢのものが多いがＡのものも含まれる。曲輪側の検出端から50cmは吸水口になっている。すなわち、土管に続く溝底に平瓦が敷かれ、左右に長辺25cm以下の石材が配されて深さ20cmの明渠となっている。ここを桝として水を上から落とす仕組みであろう。吸水口にすぐ続く暗渠部では、土管外の補強石材や接合部での漏水防止のための控えの瓦片が、他所より入念に施されている。吸水口を含めた全体の検出長は6.2mで、その間に内堀側が25cmほど下がる傾斜をもち、走行は下層石垣と直交している。なお、暗渠の内堀側は上層石組に切られて失われている。

ＳＫ52は長さ1.8m、幅1.2m、深さ0.3mの土壙で、備前焼擂鉢などが出土した。

ｃ．北区の上層遺構（第19図）

ＳＫ16は長さ2.3m、幅1.3mの土壙で、北寄りの直径1.1mほどの円形部が深くなる。検出深は0.7mほどである。深部の底は平坦で、全面に円礫が及ぶが、これは意図的に敷かれたというより、土壙底が円礫混じりの流水堆積層に到達した結果としての側面が強い。17世紀中葉の肥前磁器などが出土した。

ＳＫ19は南北7.2m、東西3.2mの土壙で、検出深は0.8mである。埋土を上層石垣に切られている。大形の土壙の土壙の割りに遺物が少なく、18世紀以降の可能性が考えられる備前焼の破片が出土しただけである。

ＳＫ35は長辺2.0mあまり、最大深40cmの土壙で、やはり上層石垣に切られる。17世紀前葉とみられる土師質土器片が出土した。

ＳＫ35の南西には柱穴状の遺構が３つ検出された。不詳であるが、位置と状況からすれば、最下層に伴うものかも知れない。

２．中層遺構＝17世紀前葉（第20図）

標高3.5～3.7mの高度をもつⅥ層上面に伴う遺構を中層遺構とした。

ＳＫ７は南北0.9m、東西0.7m、深さ0.3mの土壙で、唐津焼細片などが出土した。

ＳＫ８は直径0.5m、深さ0.5mの円形の土壙で、遺物は土師質土期細片が出土しただけである。

ＳＫ９は直径0.4m、深さ0.3mの土壙で、遺物は出土しなかった。

ＳＫ17は直径0.7m、深さ0.3m内外の土壙で、16世紀代の中国青磁片などが出土した。

ＳＫ42は直径0.6m、深さ0.3mの円形の土壙で、青花や土師質土器の細片が出土した。

ＳＫ43は直径0.6m、深さ0.2mの円形の土壙で、コビキＢ痕を残す瓦片や青花片が出土した。

ＳＫ44は直径0.5m、深さ0.2mの円形の土壙で、埋土に握りこぶし大円礫を含んでいた。

ＳＫ45は直径0.5m、深さ0.2mの円形の土壙で、備前焼の擂鉢細片が出土した。

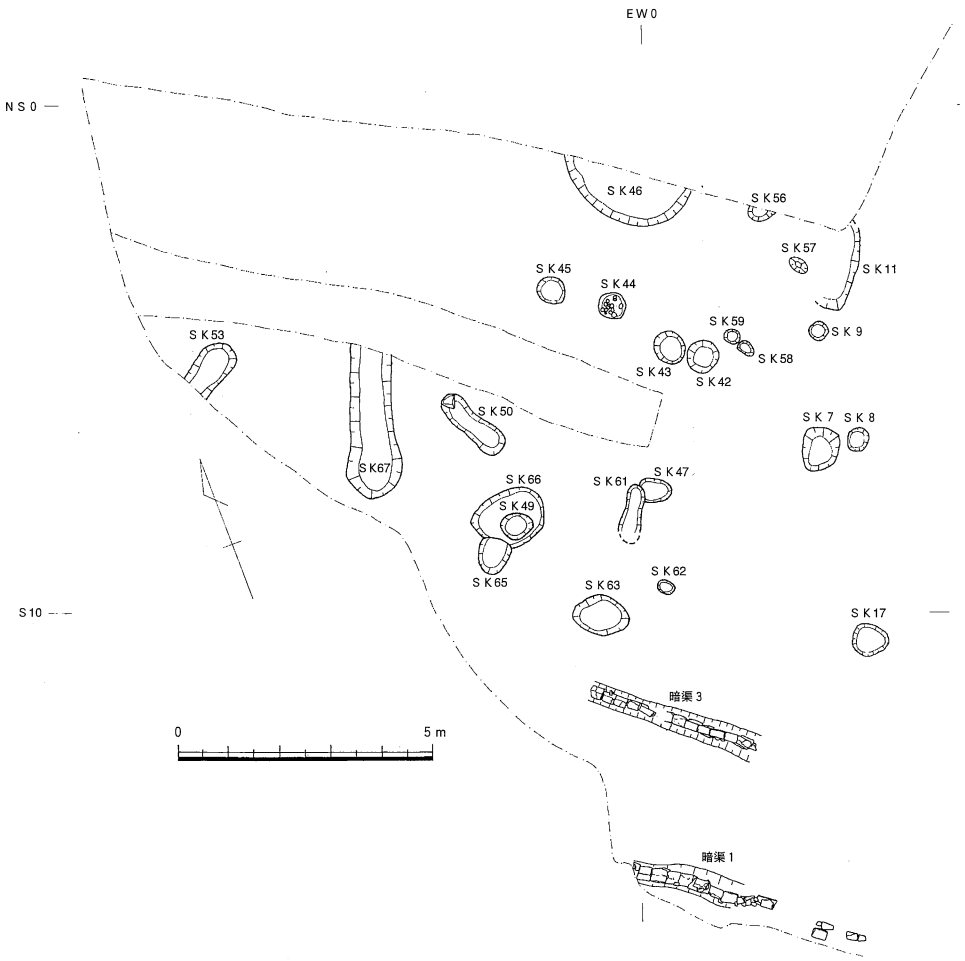
ＳＫ46は長径2.6m以上、深さ0.3mの土壙で、備前焼の擂鉢細片が出土した。

ＳＫ50は長さ1.5m、幅0.5m、深さ0.2mの土壙で、唐津焼などが出土した。

ＳＫ53は長さ1.1m以上、幅1.2m、深さ0.2mの土壙で、備前焼の鉢片が出土した。

ＳＫ63は長さ1.1m、幅0.8m、深さ0.3mの土壙で、唐津焼や土師質土器が出土した。

ＳＫ66は長さ1.5m、幅1.1m、深さ0.3mの土壙で、唐津焼・美濃焼・土師質土器が出土した。浅い



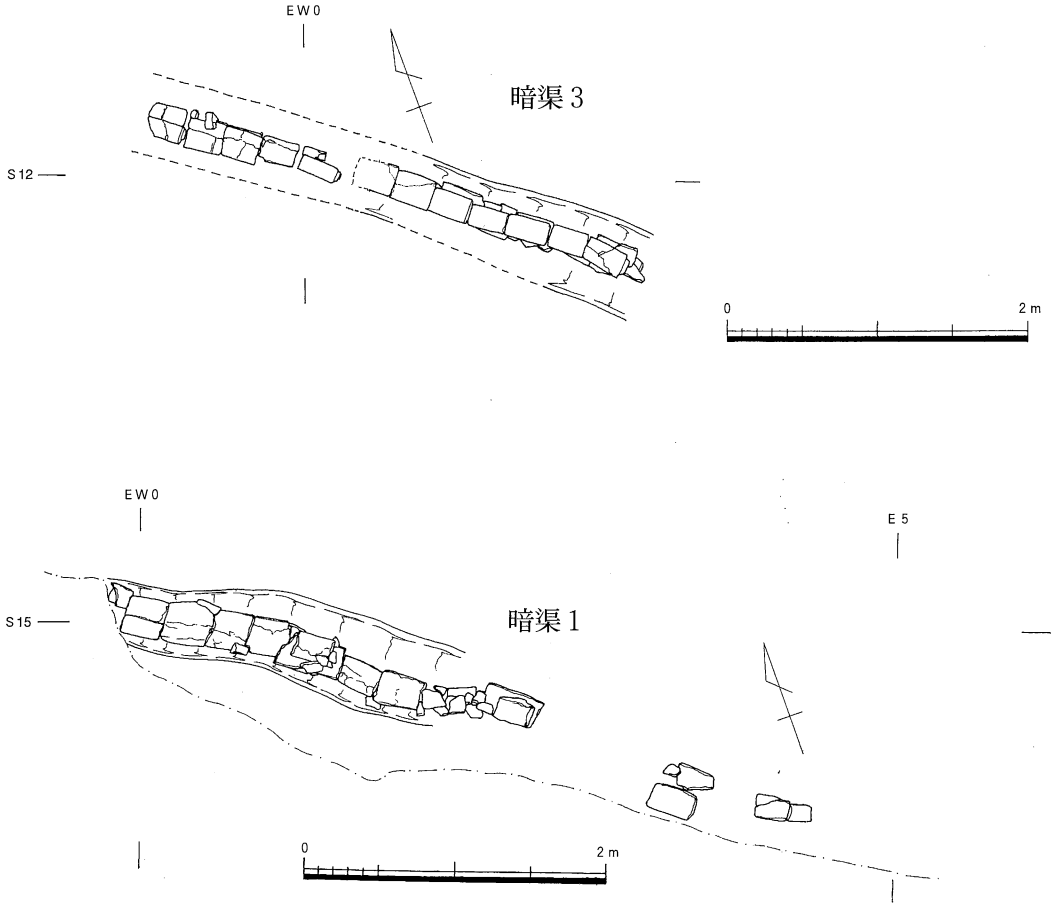
第20図　三之郭内西区の中層遺構（1／150）

土壙であるＳＫ49とＳＫ65に切られている。

ＳＫ67は長さ3.0m、幅0.8、深さ0.4mの南北に長い溝状の土壙である。青花などが出土した。

暗渠１(第21図)は、曲輪内の町家から内堀方面への排水を行うための構造である。上層の暗渠２と同じく瓦質の土管を凸部を内堀側に向けてソケット方式で繋いだものであるが、各土管の直径は20～25cmで、通常の丸瓦よりかなり太く、土管に特化した専用材としての側面が強い。内面のコビキ痕は総てＢである。最大幅60cmの溝状の掘り方のなかに埋められており、長さにして5.0mぶんを検出したが、両端とも本来の端部を保っていない。

暗渠３(第21図)は、曲輪内で検出した暗渠のうち最も下の層位・高度のもので、土管としての専用材ではなく普通形態の瓦を用いている。底に平瓦や丸瓦を敷き、上に丸瓦を被せ、その丸瓦は尾部を内堀側として入念に繋いでいる。瓦のコビキ痕は総てＡである。こうした瓦組は幅0.5mの溝のなかに埋込まれ、長さ3.5m分を検出したが、両端とも本来の端部を保っていない。



第21図　三之郭内西区中層の暗渠（1／50）

３．下層遺構＝17世紀前葉（第22図）

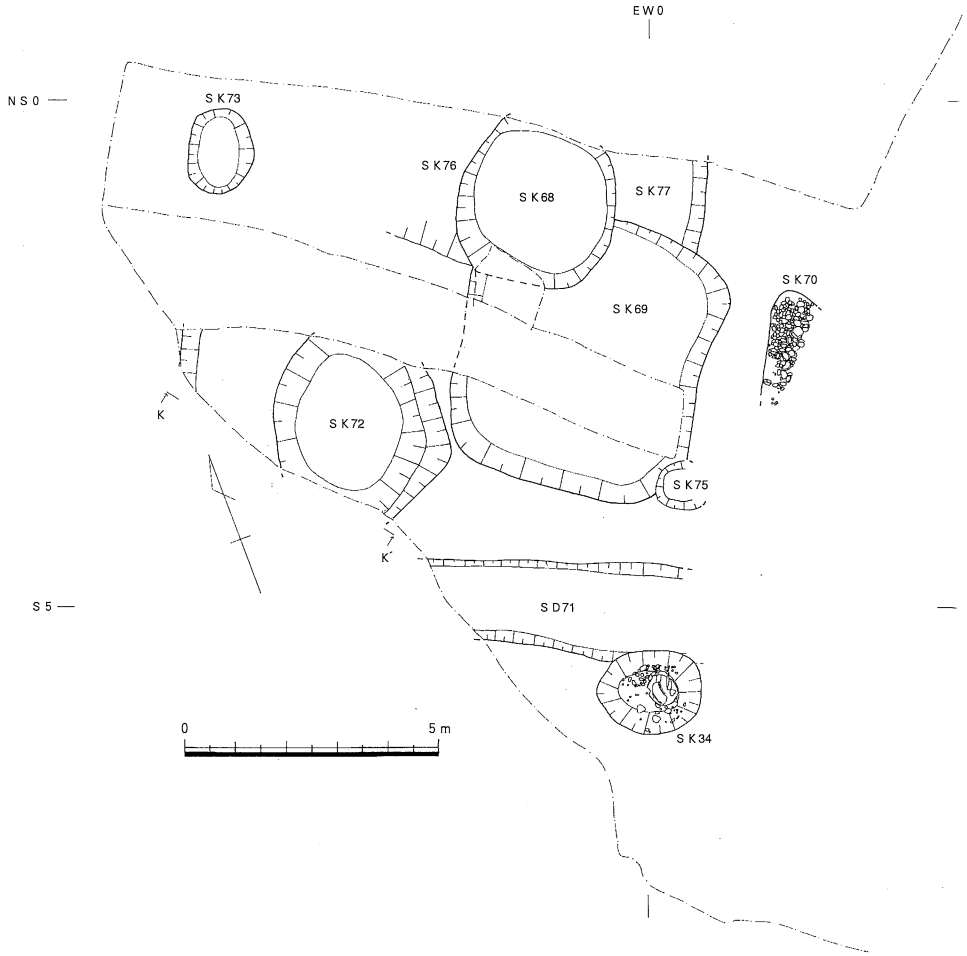
標高3.4m前後の高度をもつⅦ層上面に伴う遺構を下層遺構とした。

ＳＫ34(第23図)は、東西2.1m、南北1.8m、深さ0.9mの擂鉢形の土壙である。最下層のⅧ層上面に伴う井戸１の直上部にあり、井戸１埋土の沈下による窪みに位置を規定された可能性はあるが、第14図の土層断面に示されるように、明らかに井戸１とは帰属層位が異なる別の遺構である。またＳＤ71を切り込み、埋没後に中層の暗渠３が構築されたのが判る。内部には備前焼の大甕が据えられていたようで、床には正位に固定された甕下半部が残り、内に体部片が落ち込んでいた。甕の内容物を示す痕跡はなかったが、甕底部の周囲に長辺15cm以下の角石や握りこぶし大の円礫を伴う。

ＳＤ71は幅1.6m、深さ0.15mほどの東西に延びる浅溝で、唐津焼や備前焼などが出土した。

ＳＫ70(第23図)は、長辺2.3m以上、深さ0.15mほどの浅い土壙であるが、南は上層のＳＫ23に切られ、南区にかかる東部は遺構としての認識が遅れたため、本来の平面は不明である。床は平坦で、長辺25cm以下の自然石やこぶし大円礫を敷きつめていた。この石材は、組成から判断して元は最下層に伴う石材の流用とみられるが、遺構の深さは最下層に到達しておらず、最下層の円礫敷きが露呈したものではない。埋土から土師質土器や青花の細片が出土した。

ＳＫ68は直径3.3m前後、深さ0.9mほどの円形の土壙で、大形のゴミ穴とみられる。ＳＫ69・ＳＫ76・ＳＫ77を切っている。埋土には植物質の腐食物がブロックで含まれ、各種陶磁器や下駄・漆器椀



第22図　三之郭内西区の下層遺構（1／150）

をはじめとする木器など、大量の遺物が出土した。

ＳＫ69は長辺5.5m、短辺4.8m、深さ0.6mほどの隅丸方形で、やはり大形のゴミ穴である。ＳＫ77を切り、ＳＫ68・ＳＫ75に切られている。各種陶磁器や木製品が大量に出土した。

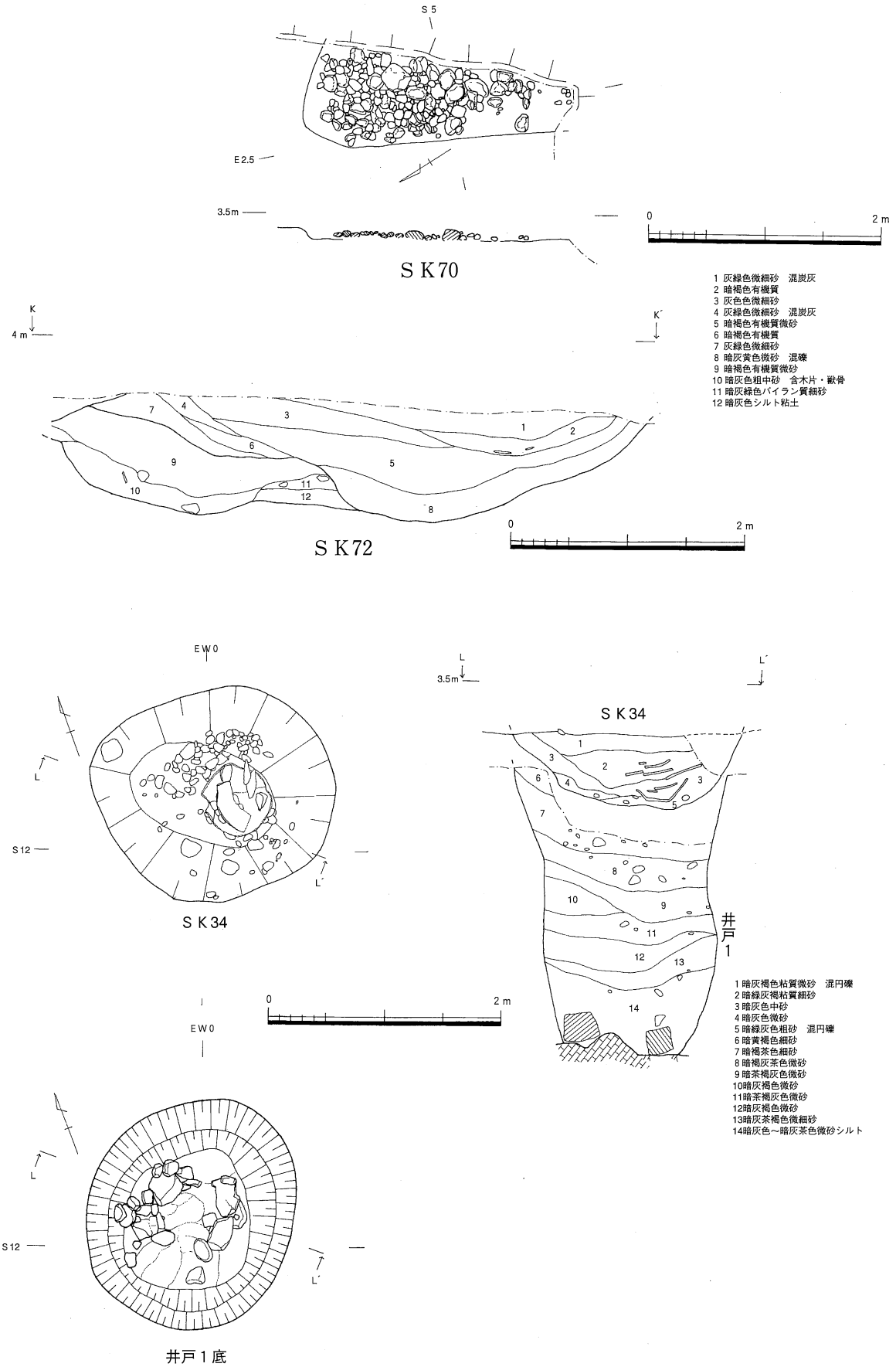
ＳＫ75は直径1.0m、深さ0.3mほどの土壙で、少量の陶磁器類が出土した。ＳＫ69を切る。

ＳＫ77は深さ0.3mほどの土壙であるが、ＳＫ68などに切られ本来の形は不明である。唐津焼細片などが出土した。

ＳＫ76も深さ0.3mほどの土壙で、ＳＫ68などに切られ本来の形は不明である。ＳＫ77と同一のゴミ穴であった可能性もあるが、判然としない。各種陶磁器類がまとまって出土した。

ＳＫ72(第23図)は長辺5.7m、深さ1.1mの大形のゴミ穴である。東部は埋積の過程でいったん掘り直されているか、もしくは自身が二つの土壙が切り合っている可能性がある。埋土には有機分が多く含まれ、大量の陶磁器類や木製品が出土した。

ＳＫ73は長径1.7m、短径1.3m、深さ0.5mの土壙である。唐津碗や青花が出土した。



ＳＫ34（下層）と井戸１（最下層）

第23図　三之曲輪内西区下層（最下層）の各遺構（１／50）

第４節　三之曲輪内最下層の遺構

Ⅷ層・Ⅸ層に伴う遺構を最下層遺構とした。検出遺構は掘立柱建物・井戸などと、その敷地を形成する地盤改良痕(掘り方地形)である。柱穴や井戸はⅧ層上面から掘り込まれたものとⅨ層上面から掘り込まれたものがあるが、遺構検出作業は一元的にⅨ層上面で行った。このため、Ⅷ層上面に伴う柱穴は、Ⅸ層上面に伴う柱穴より、検出時の深さが浅くなっている。

第14図・第15図に示されるⅨ層とＸ層が掘り方地形の一次的な埋土で、握りこぶし大の円礫を含み、特にⅨ層上面は円礫が敷石状となり生活面を形成している。その上のⅧ層は混礫細微砂層で、掘り方地形によって形成された敷地とその特性を踏襲しながら、生活面の重あげを行う造成土と理解できる。各造成土などから出土した陶磁器の年代観や組成から、最下層遺構は16世紀に遡る宇喜多期のものとみられる。

なお、第24図はⅧ層上面に伴う遺構とⅨ層上面に伴う遺構を同時に示したが、円礫は概ねⅨ層上面での状況である。

１．Ⅷ層上面に伴う遺構（第23図・第24図・第26図・第28図上）

ａ．柱穴と掘立柱建物（ＳＢ１）

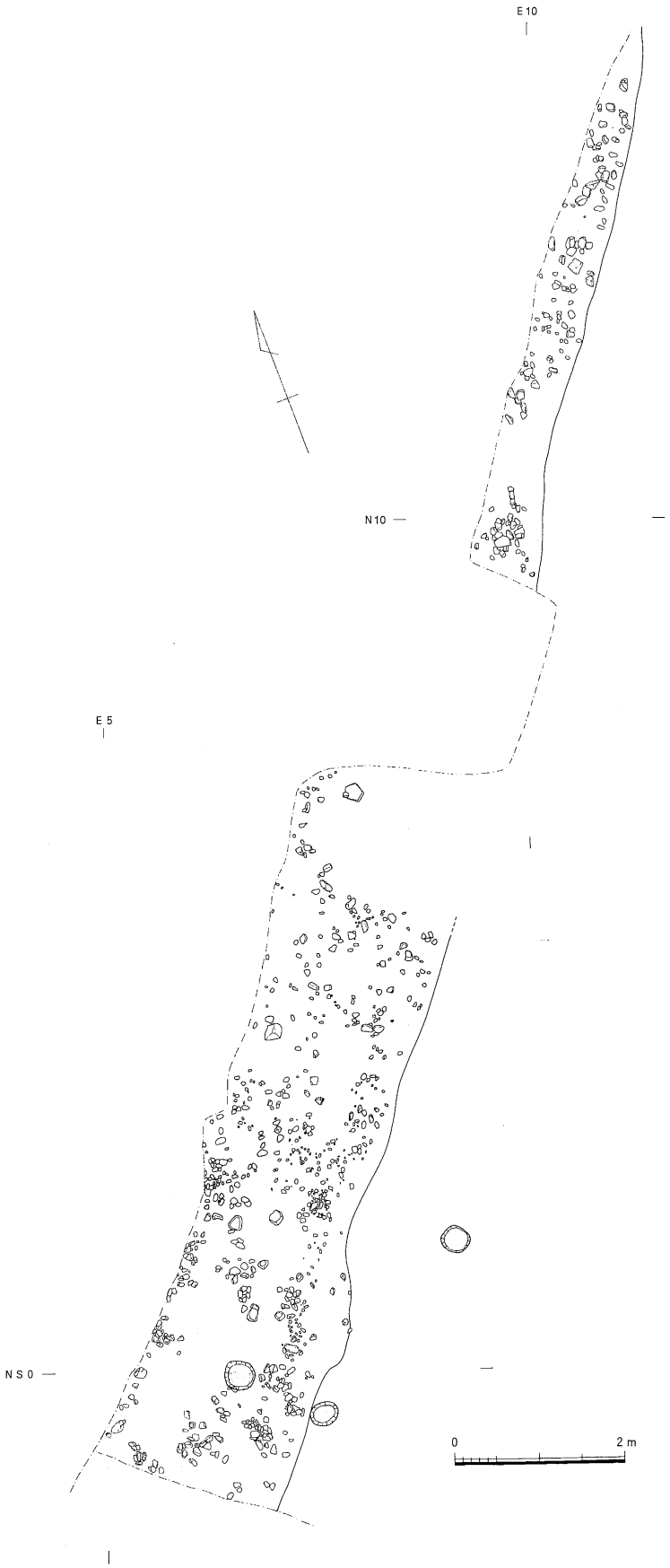
Ⅷ層上面は標高3.0～3.15ｍの高度にある。第23図に示した西区・南区では、柱穴もしくはその可能性がある遺構は北半に集中し、25基ほどが検出された。いずれも直径が0.4ｍ前後で、底の高度が2.5～2.65ｍ(復原深0.5ｍ前後)にあって大局として揃い、柱材の基底が遺るものもあった。一帯に掘立柱建物があったことは疑いなく、それをＳＢ１とした。攪乱や発掘区の限界に阻まれて検出できない柱穴もあるため、形態や規模は未確定であるが、第28図に穴の配置と復原案を示した。すなわち、発掘区の北縁に沿って東西に柱穴が９つ並び、これが建物の北壁を示すものとみられるが、その平面はやや北に脹む形に復原せざるを得ない。北辺柱穴群の軸線の通りかたや、南北方向の柱穴を勘案すると、東西三連の長屋風の建物で、各単位ごとに微妙に北辺がずれているともみれる。あるいは東西２つの小建物の間を塀や柵・門扉で繋ぐニュアンスの建物であったのかも知れない。建物の東壁は、発掘区東寄りでＮ30°Ｅの軸線で並ぶ５穴に復原できる。そのうち２穴には、柱材の基底が木質のまま残っており、南端のものは長辺15cmほどの角柱、その北隣のものは直径約10cmの円柱であった。

ＳＢ１全体を１棟にみたてれば、東西長は9.4ｍ、柱間0.8～1.4ｍ(平均104cm)の９間、南北長は4.8ｍ、柱間1.0～1.2(平均120cm)の４間の建物となる。それが３つの部分の連結と捉えれば、各部とも同じく東西３間で、その実長は柱の心々で東から順に2.8ｍ(１間93cm平均)、3.4ｍ(同113cm)、3.2ｍ(同106cm)となり、東部が狭く、中部が広かったことになる。中部は南側に柱や壁がなくオープンであった可能性もあるし、西方の発掘外に４つ目の建物部分が続いていた可能性も残る。

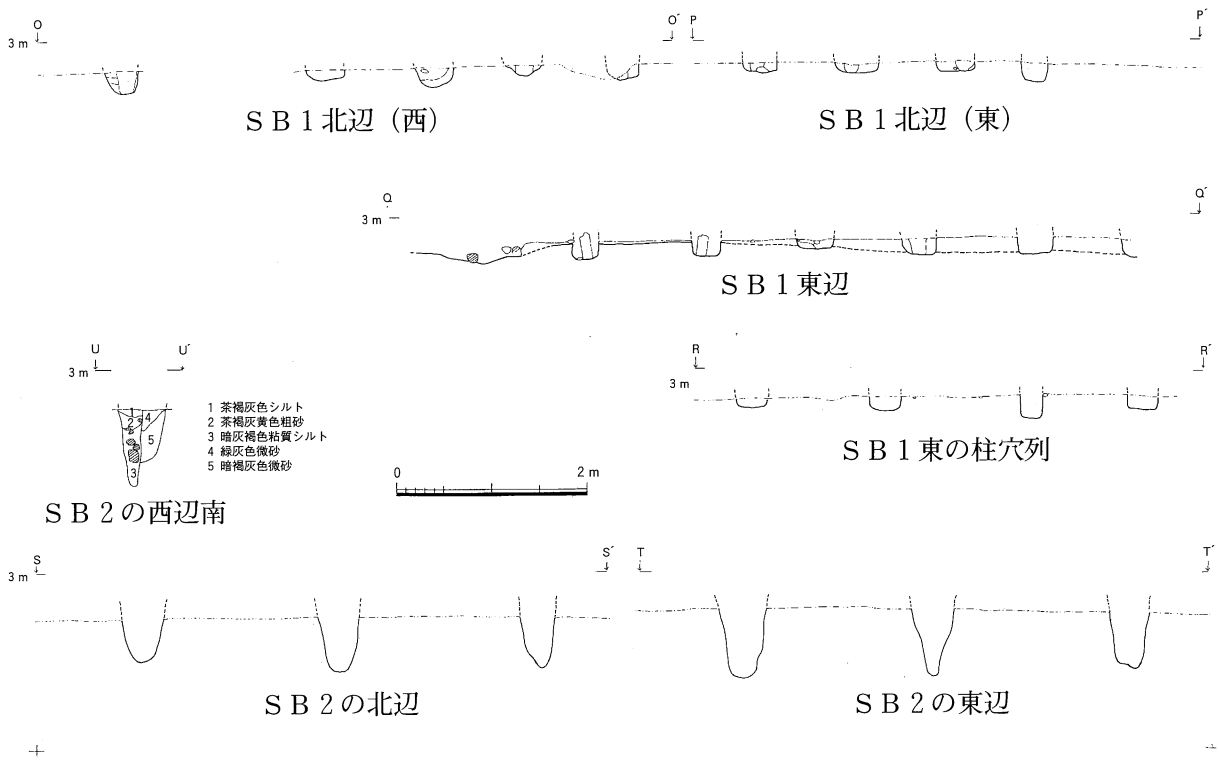
また、別案として、東に東西2.7ｍの３間、南北4.8ｍの４間、西に東西5.2ｍの５間、南北4.6ｍの４間の建物が北壁がおよそ揃えて別個にあった可能性も捨てきれない。

いずれにせよ、想定される建物は柱間が１ｍ前後(長さ半間程度)と一般の中世掘立柱建物よりかなり詰んでいて特殊なものであるが、一方で、柱間のバラツキが大きく、各壁がなす直角度もやや劣って、規格性の低さや粗雑感が否めない。

第24図　三之曲輪内西区・南区の最下層遺構（1／80）



第25図　三之曲輪内北区の最下層遺構（１／80）



第26図　三之曲輪内西区・南区の柱穴断面（１／80）

建物東辺柱穴列に平行して、外方１ｍ余りの位置にも柱穴が並び、少なくとも１穴が北壁側にも廻り込んでいる。建物の北東に庇、もしくは柵・塀が想定できる。

なお、これら建物の東壁や庇～塀を示す柱穴列は、第24図に示されるように、Ⅸ層上面の円礫敷きの東縁(掘り方地形の切り込み線)と平行している。Ⅸ層上面期に形成された敷地の方向軸が、このⅧ層上面期に踏襲されていることが判る。

ｂ．井戸１（第23図）

南部では柱穴などは確認できないが、井戸が検出された。井筒の上端は南北2.0ｍ、東西1.8ｍの楕円形で、深さは約2.4ｍ、底は標高0.3～0.5ｍの岩盤面に到達したところで終っている。基本的に素掘りであるが、未風化岩盤によって起伏のある底面に長辺30cm以下の花崗岩割石と自然円礫を一段に配して水溜部を造り出している。この水溜部は内法40cmほどの多角形で、石材頂からの深みが25～50cmある。発掘時は工事によって既に水脈が断たれて湧水がなかったが、井筒は標高1.2ｍ付近が膨らんでいて、かつての水面高を示す可能性がある。埋土は一部にこぶし大円礫を交える微～粗砂で、人為的に一気に埋められたものとみられる。下層以上の遺構埋土と異なり、陶磁器片などは一切含まれない。なお、井戸の直上では下層期にＳＫ34が形成され、豊富な遺物を伴っていた。

２．Ⅸ層上面に伴う遺構（第24図～第28図）

ａ．ＳＢ２

Ⅸ層上面は標高2.7～2.9ｍの高度にある。西区の南寄りでは、ＳＢ２とした掘立柱建物を構成する柱穴が６穴検出された。いずれも直径が0.5ｍ前後で、底は掘り方地形の底を貫いて標高1.8～2.0ｍ(深

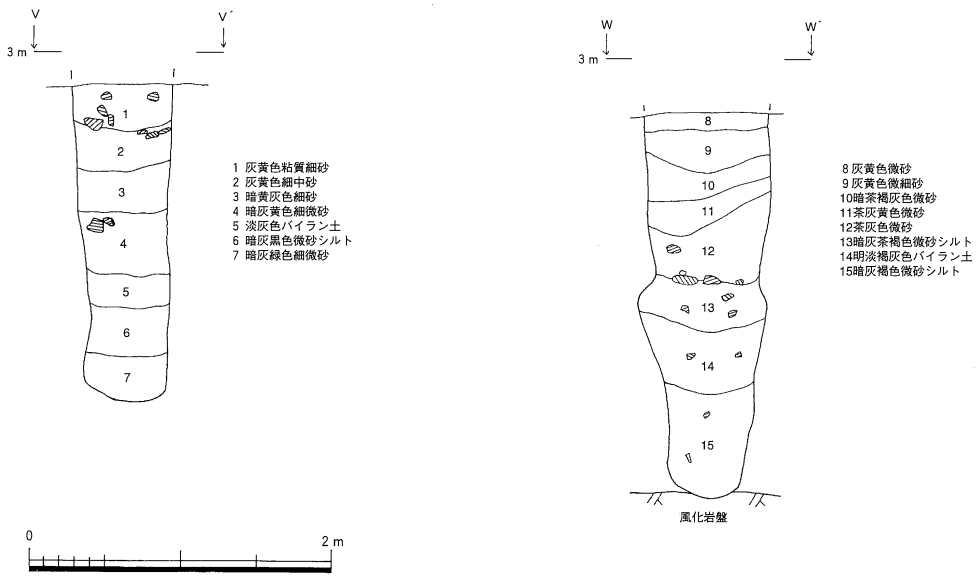
さ1.0m前後)に達し、大局として高度が揃っている。柱材の木質を残すものはないが、締まりのない粘質土に置換された柱根跡が確認できる。いずれも丸柱であったようである。建物の北辺は心々で4.1m、東辺も4.0m分が検出された。東西２間は確定的であるが、南西部が失われているため、南北は２間で終るのか、さらに続くかは判断できない。建物東辺の軸線はN24°Ｅである。各柱間とも2.0～2.1mで良く揃い、一間６尺５寸の基準尺が用いられた可能性が強い。Ⅷ層上面のＳＢ１に比べて、規格性に富んだ柱配置で、柱穴も大きくて深く、しっかりした造りの掘立柱建物であったとみられる。この建物の外形に合わせて地盤改良に伴う円礫は特に濃密で、円礫敷きの床をなしていたと考えてよい。なお、ＳＢ２の床面は井戸１に切られているが、井戸はＳＢ２の東に偏っており、ＳＢ２が井戸の上屋ではなく、両者が別の層位に属するものとの認識に合致している。

ｂ．井戸２（第27図）

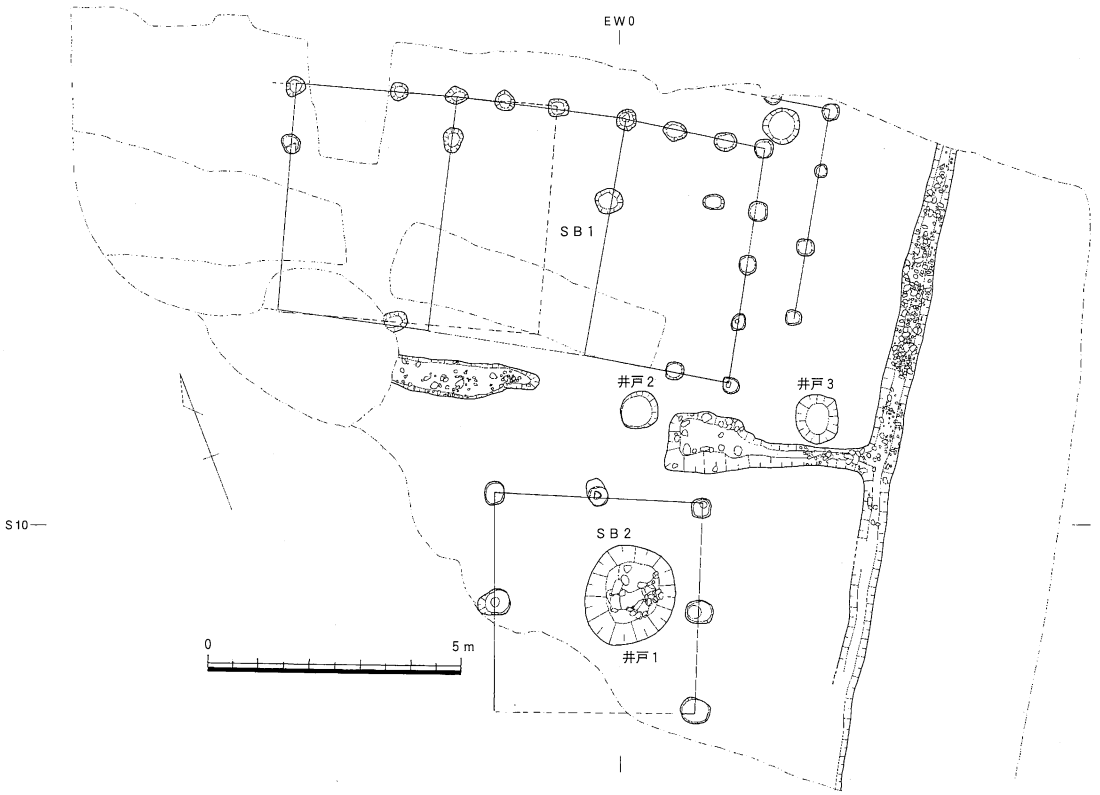
ＳＢ２の北1.0mほどの位置で検出された。井筒の直径0.65m、深さ2.3mの素掘りで、標高0.7mの底面は岩盤に到達していない。この井戸の埋土も陶磁器などの遺物を一切含んでいなかった。

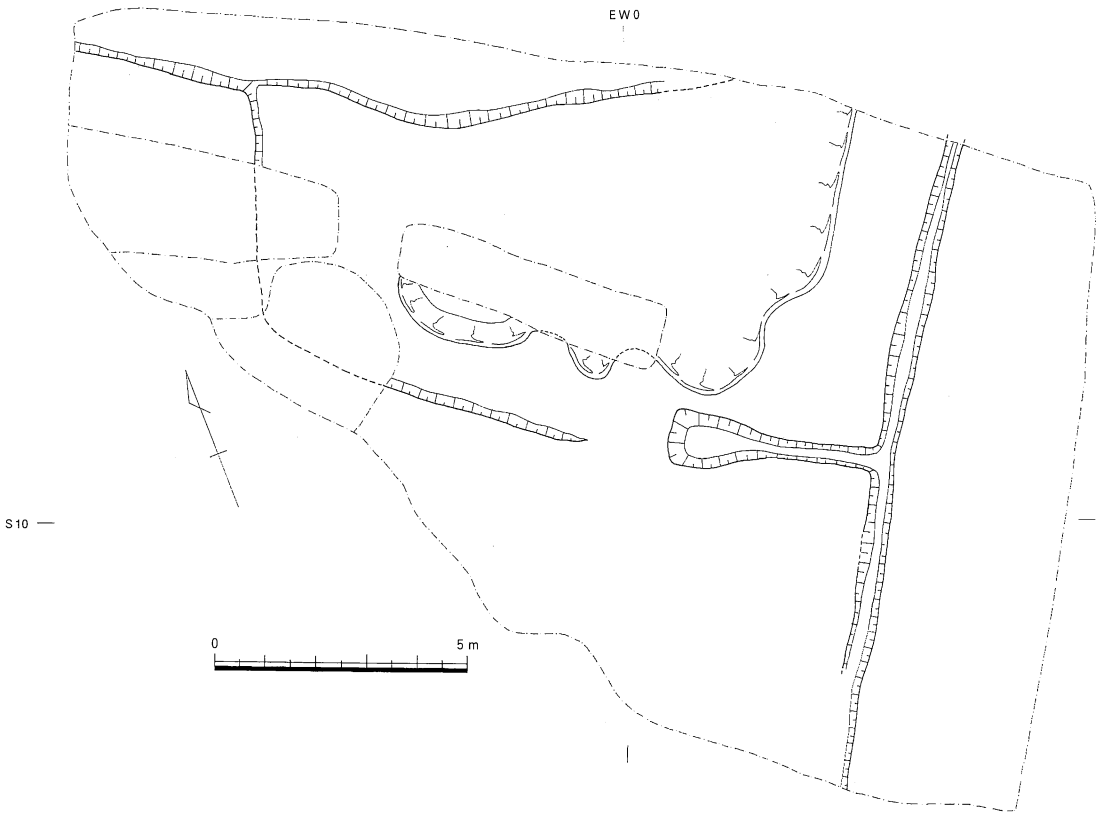
ｃ．井戸３（第27図）

ＳＢ２の北東2.4mほどで検出された。井筒の直径0.8m、深さ2.7mの素掘りで、底は標高0.1mの風化岩盤に到達したところで終っている。井筒は標高1.3m付近が膨み、かつての水面高を示す可能性がある。この井戸の埋土も遺物をほとんど含まないが、コビキＡ痕を残す丸瓦が２片出土した。



第27図　三之曲輪内西区最下層井戸２(左)・井戸３(右)の土層（１／50）





第28図　三之曲輪内西区・南区最下層の建物復原(上)と地盤造成痕(下)（1／150）

ｄ．掘り方地形と円礫敷き

先ず、西区と南区の状況を述べる。地盤改良のための掘り方は、第15図に示されるように東辺で明瞭である。掘り方外の先行する堆積土やⅨ層上面に対して平均的に0.4～0.5ｍの深さをもつが、東端部はやや深く溝状になっている。その東端溝の走行はほぼN30°Ｅで、上の層位のＳＢ１の軸線に近く、半ばから西に枝溝が延びている。また、掘り方の底面は大局として平坦であるが、第28図下に示されるように、大きな皿状の削平が切りあった様な微妙な起伏があり、南北方向の断面は極端に言えば鋸歯の段(段差20cm未満)が反復する。この微妙な段や枝溝に着目すれば、ＳＢ２が建って後に井戸１が掘られる南部と、当初は明確な遺構がなく(広場～庭？)、後にＳＢ１が建つ北部は、当初から別の空間として意識されて造成された可能性が窺える。

こうした掘り方を埋めるＸ層とⅨ層は共に円礫を含むが、Ⅸ層の方が多く、またバイラン質土の含有率が高い。Ｘ層は直下の流水堆積～水田耕土の再堆積とみられる細砂を主体とし、陶磁器などの遺物を全く含まない。円礫はⅨ層上面で特に密度が高く、一部は敷石状となるが、その直下では東辺付近と先の南部と北部の境界付近に限って、第28図上に示されるように円礫が溝状に落ち込んでいる。東辺溝は掘り方の東辺を踏襲するが、南北境界溝は掘り方の溝や段の位置を踏襲しつつ、東西に抜けるのではなく、半ばが陸橋状に途切れている。Ⅸ層上面での円礫の状況は第24図に示した通りであるが、北半部では東辺溝の上層部で顕著である。また、溝から幅0.6ｍほどの空白部をおいた西側でも濃密で、この部分の東端は端線をなすように意図的に石が配されている。南半部では、掘り方東辺溝の直上ではさほど多くないが、そこから数十cmの空白部を隔てた西側で顕著で、その東端線はやはり意図的に石材が配されている。この端線の方向は、地下の掘り方東辺線とはズレるが、床に円礫が敷きつめられたＳＢ２の軸線と一致し、建築と円礫敷設の一体感が強く窺える。

こうした円礫を用いた掘り方地形は、軟弱な砂質土堆積地に最初に屋敷地を造成するに当たって行われた地盤改良で、単に堅固な生活面を造るためだけでなく、円礫の溝状埋設や地表化粧が敷地や建物内の防湿に大きな役割を果たしたとみられる。

具体的に用いられた石材は直径５～10cmの円礫が主体で、直径３cm内外の円礫、20cm級の円礫、30cm弱の自然角石なども含んでいる。石材の密度が高い所では相対的に大きなものが含まれ、密度が低いところでは小ぶりである。ＳＢ２北東隅柱の脇では豊島石の五輪塔石材が流用されていたが、基本的な石材の採集地は河床であったとみられる。同様の円礫は発掘区内では第29図ｂ地点の平安時代もしくはそれ以降の流路堆積で確認できたが、最下層形成前後の流路の本体はさらに東方の内堀部に予想され、そうした流路を堀として整備する過程で採集された可能性が考えられる。

なお、Ⅸ層上面を埋めるⅧ層にも円礫は含まれ、かつての掘り方地形の東辺部では第15図に示されるように円礫が溝状に落ち込む状況が反復されている。

北区でも第25図に示されるように、Ⅸ層上面の円礫敷きと掘り方地形(ちきょう)が検出され、南区・西区と合わせて一連の造成が南北32ｍ以上の広範囲にわたって行われたことが判る。西方に予想される屋敷地本体の状況は、近代建築の地下室が及んで不詳である。南寄りで柱穴らしき遺構を３基検出したが、建物としてのまとまりは不詳で、もっと上の層位に伴う遺構の可能性もある。円礫面の直下では、やはり掘り方に沿う溝が確認できたが、円礫はあまり施されていなかった。

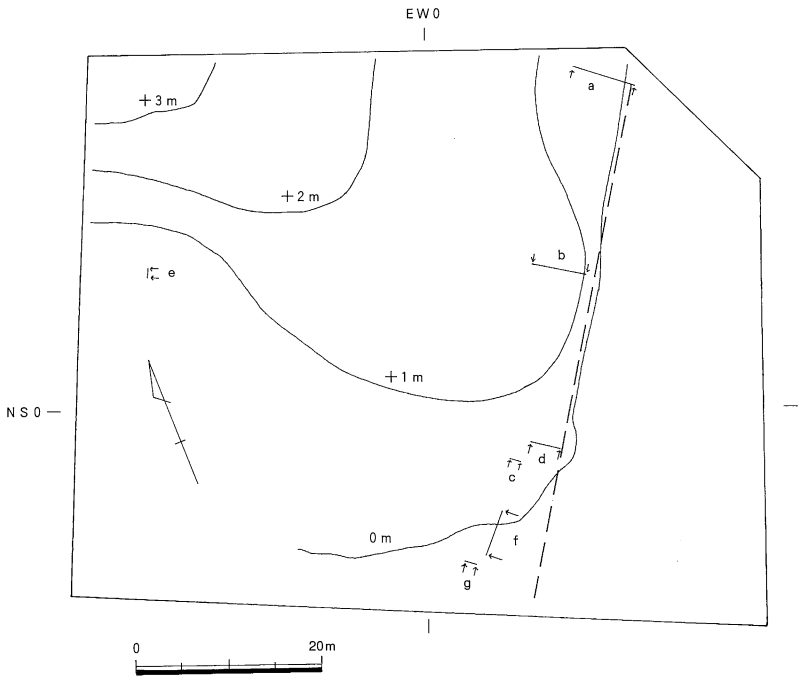
第５節　城郭以前

発掘調査は岡山城を対象に着手したが、一帯は古い時代の遺跡としての側面ももっていることが判った。城以前の層位については、土層観察が主体で面的調査ができなかったが、ここで報告する。土層図を作製できた地点は第29図の通りであるが、大半は水田や自然流水層に関わるものである。

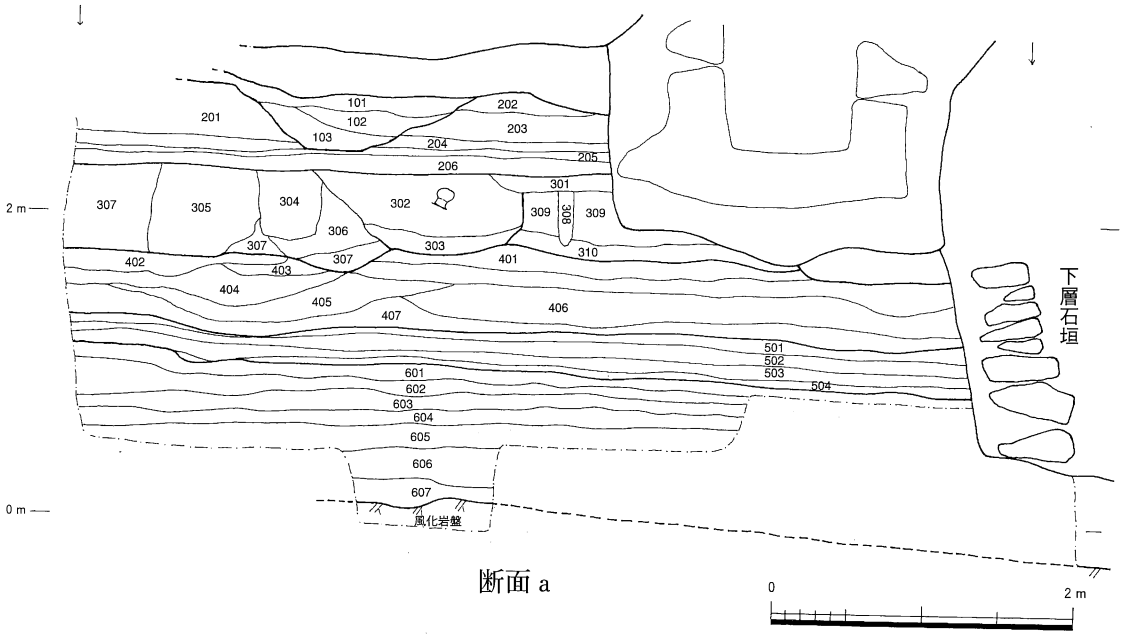
１．ａ地点［微高地上遺構・水田］（第30図上）

発掘区の最北部で、遺跡の主体部に位置する。ここでは、洪水による黄灰色細砂が微高地基盤土として堆積し(Ⅳ層)、その上に暗褐色の遺物包含層(Ⅲ層)が50cm前後の厚さで残っていた。弥生時代後期～古墳時代前期の土器片が含まれ、上面は標高2.3mである。包含層の実体は多数の遺構が切り合ったもので、特に古墳時代前期の小形坩を完形で含む土壙がある。包含層の東側は岡山城の内堀や近代の攪乱に切られ、近代の建築基礎が及ぶ西側も十分に追求できなかったため、東西方向の本来の広がりは不詳である。また、南側もこのままの状況で続いていたわけでなく、ｂ地点より北で途切れている。これは、ｂ地点で確認できた流路によって流失したためと判断できる。

微高地基盤の洪水砂より下の堆積は、最下の風化岩盤に呼応して内堀側に向って傾斜し、東方は城以前から低地が広がっていたとみられる。Ｖ層は水田耕作土とみられるシルト・微砂層で、土壌サンプルの顕微鏡観察でイネのプラントオパールが確認された。その上面は1.2～1.35mで、長さ6.0mに対して15cmの割りで内堀側が低い。Ｖ層直上の407層も水田耕土の可能性があり、洪水砂に覆われた上面に畔状の起伏がみられた。こうした水田層の時期は、共伴遺物がないために特定できないが、水田廃絶後に形成された微高地上の遺物などから、およそ弥生中期末以前と展望できる。



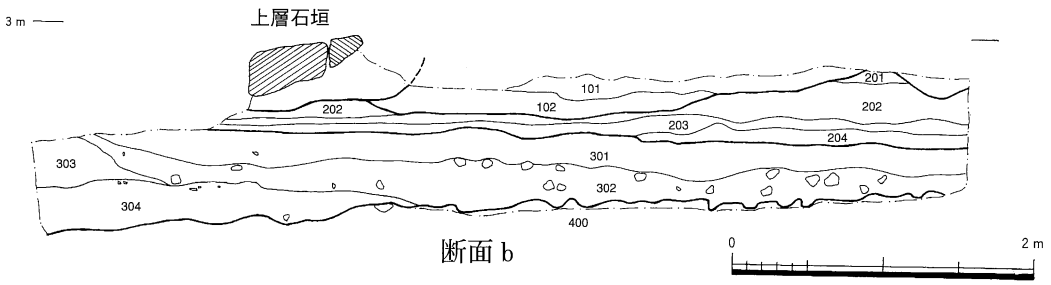
第29図　城郭以前の土層観察地点と風化岩盤高（１／800）



断面 a

Ⅰ中世溝？埋土
101 灰黄色細砂
102 灰黄色細砂
103 淡灰褐色細砂
Ⅱ中世？水田
201 淡黄褐色細微砂
202 灰黄色細微砂
203 灰黄色細微砂
204 淡黄灰色細微砂(下面に鉄分水平沈着)
205 黄灰色細砂
206 灰黄色微細砂
Ⅲ弥生後期～古墳前期微高地上包含層・遺構埋土
301 淡褐灰色細砂　含土器細片
302 暗褐灰色細砂　完形小形坩含む[遺構埋土]
303 灰褐色粘質細砂[遺構埋土]
304 暗褐色細砂
305 暗褐色粘質細砂　含土器細片
306 暗灰褐色細中砂
307 暗褐色細中砂
308 褐灰色粘質細砂[柱穴痕埋土？]
309 暗灰褐色細中砂
310 暗灰色細砂

Ⅳ弥生洪水砂(微高地基盤)・水田？
401 黄灰色細砂
402 暗黄灰色粘質細砂
403 黄灰色細砂
404 灰色粗砂(洪水砂)
405 灰黄色粗砂(洪水砂)
406 黄灰色粗砂
407 黄褐色粘質微砂(水田耕土？)
Ⅴ弥生水田旧耕作土？
501 灰色シルト微砂
502 暗灰色シルト微砂
503 暗灰色シルト
504 灰色シルト
Ⅵ沖積層(自然堆積)
601 暗灰色粗砂
602 暗灰白色粗砂
603 淡黄灰色粘質微砂
604 淡灰黄緑色粘質微砂
605 淡灰緑色シルト微砂
606 灰緑色シルト微砂
607 暗灰緑色シルト微砂



断面 b

Ⅰ無遺物流水堆積
101 暗灰青色細砂
102 灰褐黄青色細砂
Ⅱ流水二次堆積の遺物包含層上層(弥生～平安時代)
201 暗青褐色細微砂
202 暗青灰色細微砂
203 暗青灰色細砂
204 暗褐灰青色細砂混礫

Ⅲ流水二次堆積の遺物包含層下層
301 暗灰褐色細粗砂　含大円礫
302 暗灰褐色細粗砂　含大円礫
303 暗灰褐色細粗砂混小礫
304 暗褐黄色細礫
Ⅳ河道堆積？
400 明灰黄色細礫～微砂　疎に円礫含む

第30図　城郭以前の堆積土Ⅰ（１／50）

2．b地点［自然流路］（第30図下）

標高1.6～2.5mの堆積層であるⅡ層・Ⅲ層から遺物が出土した。この高さはa地点の微高地上包含層の高度を含んでいる。遺物の量は大量の円礫を含むⅢ層に多いが、全体として弥生時代中期末から平安時代のものが混在し、自然流水が包含層を侵蝕したことによる二次堆積と判断できる。Ⅳ層も流水性の砂礫堆積で、かつて弥生水田層が広がっていたとしても、流失している。

3．c地点・d地点［水田・自然流路］（第31図上）

ここでも標高1.35～2.0mのⅡ層中で、弥生時代から平安時代の遺物が出土した。その量は、b地点よりかなり少量であるが、やはり自然流水による二次堆積と判断できる。その下の標高0.9～1.2mに水田耕土とみられる土層(Ⅲ層の一部)が堆積し、a地点からの弥生水田の広がりが確認できる。

4．e地点［水田］（第31図下）

ビル用地西側で唯一の土層観察地点である。Ⅳ層以下は自然流水性の堆積であるが、標高1.0～1.5mには特徴的な水田耕土がⅢ層として堆積し、一連の弥生水田が西方にも広がっていた可能性が高い。その上方も水田耕作土とみられる土層が、ときに薄い洪水砂を挟みながら堆積し、東方でみられたような粒子の粗い流水堆積は確認できず、河道からの距離を予見させる。なお、図示した土層図は風化岩盤に到達していないが、風化岩盤の高度は直下にあることを、工事掘削時に見届けた。

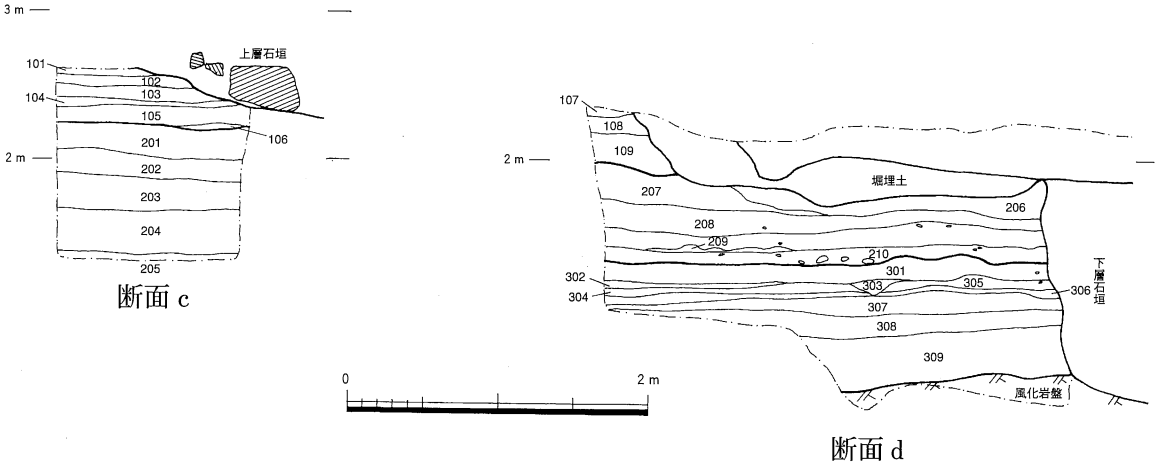
5．f・g地点［水田・波蝕棚］（第32図）

発掘区の南端付近で、fは南北壁面、gはその南に続く柱状の東西壁である。ここでも標高0.9～1.25mに弥生水田の耕土とみられる堆積がある。さらにf壁では耕土下で耕土類似土の落ち込みが検出された。落ち込みは、壁面での上幅が3.8m、深さが0.8mあり、風化岩盤から浮き上がった岩に底が到達する。遺物は確認できなかったが、弥生水田に伴う用水溝の可能性がある。

この地点での風化岩盤は、標高－0.6m～＋0.1mにあって、南北6.0mのうちに0.7mの割合で北に向かって高くなっている。上には厚さ10～25cmで上方に向かって薄くなり円礫を顕著に含む砂層(504)が堆積し、さらに上には大量のカキ殻を含む細砂層(503)が堆積している。この503層は最大厚が20cmで、やはり上方に向かって薄くなり、未風化岩の背後には及んでいない。カキ殻は、あたかも波に洗われて海岸に打ち上げられたように細片化し、これを含む503層や下の504層の砂礫組成も海浜堆積と考えてよい。g壁で各層の土壌サンプルを採集して電導度を計測したところ、501層以上に対して502・503層の値が断絶的に高く、501層以上が淡水性堆積(沖積層)であるのに対し、502層以下は海水性堆積との判断に至った。502層は501層に整合で続く干潟の堆積とみられ、そのg壁での上面高度は標高＋0.1mである。また、g壁503層中で採集したカキ殻について日本アイソトープ協会に依頼してC14年代を測定した(協会コードN-5584　報告書は平成1年11月28日付けKN-89028号)ところ、半減期5730年にもとづく計算で6220±95yB.P.(半減期5568年で6040±90yB.P.)との値を得た。

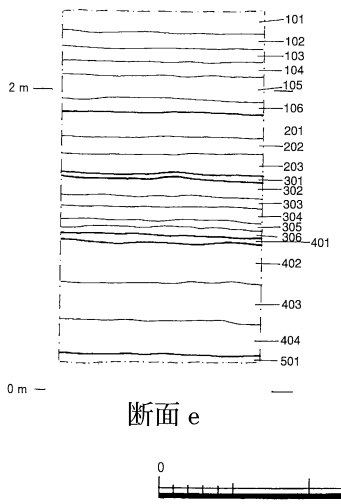
以上を総合すると、503・504は縄文海進期の波打ち際の堆積で、風化岩盤の傾斜は当時の波蝕棚として理解できる。また、縄文海進期の満潮時の海面水位(波蝕部高)は標高0.0m付近にあったことが判る。未風化の岩は波で洗われて露出したに違いない。

当地点の調査は、特に高橋学氏(現 立命館大学)のご助成・ご教示のもとに行った。



Ⅰ 古代～中世の滞水・流水堆積
101 暗褐黄色細粗砂
102 暗灰青色細微砂
103 褐黄色細砂
104 褐白色細粗砂
105 暗灰青色細微砂
106 灰色微砂シルト
107 灰褐青色微砂シルト
108 灰褐青色微砂細礫
109 灰褐青色微砂シルト
Ⅱ　流水堆積の遺物包含層（弥生～平安遺物二次堆積）
201 暗灰褐色微砂シルト混礫
202 暗灰色微細砂
203 暗灰褐色微砂シルト混炭粒
204 暗褐灰色微砂シルト
205 暗褐色粗礫粗砂
206 灰褐色シルト
207 暗灰褐色シルト
208 暗褐灰黒色シルト
209 暗褐灰黒色細砂
210 暗褐黒色粗細砂混礫　含弥生土器片

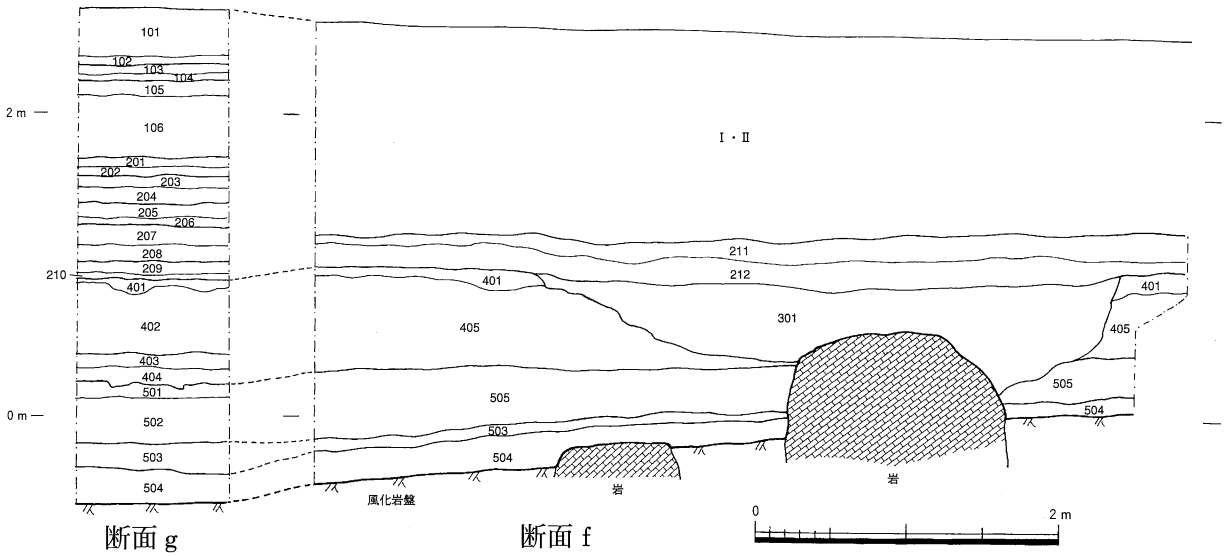
Ⅲ　弥生水田？・自然流水堆積
301 暗褐灰色細粗砂［洪水砂？］
302 暗褐灰緑色シルト［水田耕土？］
303 暗褐色細粗砂
304 暗褐灰色シルト～細砂［水田耕土？］
305 暗褐灰色シルト～細砂［水田耕土？］
306 暗褐灰緑色微砂シルト［水田耕土？］
307 暗褐灰緑色微砂シルト［水田耕土？］
308 暗褐灰黄色微砂シルト［水田耕土？］
309 暗褐灰色砂礫・円礫



Ⅰ 中世の水田耕土～滞水堆積
101 緑灰色細砂混小礫
102 灰緑色微細砂
103 淡灰緑色微砂シルト
104 淡緑灰色微砂シルト
105 淡灰青色シルト微砂
106 淡灰緑青色シルト微砂
Ⅱ古墳～中世の水田耕土～滞水堆積
201 緑灰色粘質シルト
202 暗灰色粘質シルト
203 暗緑灰色粘質シルト

Ⅲ弥生～古墳の水田耕土～滞水堆積
301 明灰緑色シルト
302 暗灰色微砂シルト　含弥生土器細片
303 明緑黄色シルト
304 灰色微砂シルト
305 灰緑黄色シルト
306 淡緑黄色粘質シルト
Ⅳ滞水～流水の自然堆積
401 淡灰色粗砂小礫
402 灰黄色粘質シルト
403 暗灰色中砂
Ⅴ流水の自然堆積
501 暗灰褐色砂礫層

第31図　城郭以前の堆積土Ⅱ（１／50）



Ⅰ 中世の水田耕土～滞水堆積
　101 褐灰緑色微細砂
　102 灰色細微砂
　103 灰緑色細微砂
　104 灰緑色細微砂シルト
　105 淡灰青黄灰色微砂
　106 暗灰青色シルト微砂
Ⅱ 弥生～古代の水田耕土～滞水堆積
　201 暗灰褐青色粘質シルト
　202 暗灰褐黄色粘質シルト微砂
　203 暗灰(青)黄粘質微砂
　204 暗灰(青)粘質微砂
　205 暗灰黄色シルト粘土
　206 暗灰色粗中砂［洪水砂］　弥生後期土器片含
　207 暗黄灰褐色微砂シルト［弥生水田耕作土？］
　208 暗灰黄褐色微砂シルト［弥生水田耕作土？］
　209 暗黄灰褐色微砂シルト［弥生水田耕作土？］
　210 暗黄灰褐色微砂シルト［弥生水田耕作土？］
　211 暗灰黄色粗中砂［洪水砂］　弥生後期土器片含
　212 暗灰黄褐色微砂シルト［弥生水田耕作土？］
Ⅲ弥生中～後期の溝？埋土
　301 暗灰黄色粘質微砂
Ⅳ滞水～流水の自然堆積
　401 暗灰黄色粘質シルト
　402 灰白黄色粘質微砂
　403 黄灰色シルト粘土
　404 灰黄色細中砂
　405 灰黄白色粘質微砂
Ⅴ海岸堆積
　501 暗黄灰色細砂
　502 暗灰(青)細砂
　503 暗灰褐黄色細砂　多混カキ殻
　504 暗灰褐色細砂　混円礫

電導度計測値
　550ccの水道水に３～４つまみの土壌サンプルを入れ、撹拌後１分で計測。
東西電波工業製CM-1k　使用

土層	温度	測定値 X μS/cm	電導度
101	26°C	240	235.2
102	23°C	170	177.1
103	23°C	200	208.4
104	26°C	250	245.0
105	22°C	200	212.8
106	26°C	155	151.9
201	23°C	160	166.7
202	23°C	230	239.7
203	23°C	180	187.6
204	22°C	160	170.2
205	23°C	180	187.6
206	22°C	160	170.2
207	22°C	140	149.0
208	23°C	160	166.7
209	26°C	180	176.4
210	26°C	140	137.2
401	26°C	165	161.7
402	26°C	210	205.8
403	26°C	170	166.6
404	26°C	140	137.2
501	26°C	140	137.2
502	26°C	400	392.2
503	26°C	310	303.8
水道水	22°C	100	

第32図　城郭以前の堆積土Ⅲ（１／50）

第Ⅳ章　遺　　物

整理用コンテナ90箱にのぼる出土遺物は、ほとんどが近世・近代の陶磁器類である。そのうち明治39・40年の内堀埋立時のゴミ層(内堀上部埋土)から出土した近代遺物は量の過半を占め、完形・大形のものも多数含まれるが、それらは相当に取捨選択し、全体として近世あるいはそれ以前の遺物に焦点を絞って掲載することとした。本章では、遺物の共伴関係を重視し、層位ごと、遺構ごとに記述を進めるが、個々の遺物の詳細は観察表に委ねる。記述にあたっては観察表凡例に示した文献や多くの研究者のご教示を参考とした。

第１節　城郭以前の遺物（第35・36図）

岡山城が成立する以前の層位や年代の遺物を取りあげる。

６は城郭以前の土層観察地点のうち、ａ地点微高地上遺構(Ⅲ層302)から出土した。城郭以前の遺物のうち明確な遺構に伴う唯一の遺物で、古墳時代前期末頃の土師器丸底坩で、完形である。

１～５、７～20はｂ地点Ⅲ層(流路堆積)から出土した。

１～５は弥生土器である。壺はいずれも口縁に凹線を施し、１には円形浮文を伴っている。５は体部がボール形の高坏である。これらの弥生土器は弥生中期中葉から後葉の古い段階、菰池式～前山Ⅱ式に相当し、本発掘により出土品のうち、年代が判る土器としては最古のものである。

７～13は古墳時代前期から中期前半にかけての土師器である。７の甕は、口縁が内湾気味に立ち上がり、８～10の甕は口縁が「く」字に外反する。11から13は高坏である。

14は平安時代(９世紀頃)とみられる土師器の碗で、丹を施しているように観察できる。

15・16は須恵器の甕で、古墳時代後期～飛鳥時代(６～７世紀)のものである。

17～20は円筒埴輪である。17は外面が細かな縦ハケで、タガの突出度が高く、焼成時の黒斑を有し、内面・外面ともに丹が僅かに残り、古い埴輪の特徴を備えている。当発掘地の北2.1kmにある墳長約150mの前方後円墳、神宮寺山古墳の埴輪と極めて近似している。一方、18～20は、外面が粗い縦ハケで、タガは扁平、黒斑がなく窖窯焼成とみられる、古墳時代中期末から後期にかけての新しい埴輪(川西Ⅴ期)である。もともと17の埴輪と共存したとは考えられず、別の古墳に伴ったか、供給を予定されていたものと判断できる。

21～28は、16世紀後葉以降の岡山城に伴う造成土や遺構から出土したもので、本来この地に伴っていたものか、客土中に紛れて他所から持ち込まれたかは、厳密には特定できない。

21は、弥生中期後葉の甕の口縁である。22～24は古墳時代前～中期の土師器で、内堀下部埋土出土の24は完形である。25は弥生後期～古墳時代初の製塩土器の脚台である。26は曲輪内の江戸前期の土壙(ＳＫ34)から出土した、平安時代の10世紀頃とみられる緑釉陶器である。近世まで古物として伝世したというより、破片として混入した可能性が高い。釉は一部銀化し、高台内を含めて全釉である。27は平安時代の９世紀頃とみられる須恵器の坏である。28は中国製の白磁碗で、肥厚する特徴的な口縁形態などから、平安時代後葉の11世紀後半～12世紀前半のものとみられる。

遺物観察表凡例

＊冒頭の番号は、本章の図に付した遺物番号と一致する。

＊法量は、土器・陶磁器類については口径・器高・底径(高台径)を示したが、その他の遺物についても大きさを示すように心がけた。
数値のみは実測値である。復元値は（　）を付したが、確実性が保てないものは記していない。また、[　]は遺存部に限っての実測値である。

＊胎土と焼成は、胎土の種類・状況や含有物、器面色と断面色、焼成状況を、順に－や・でつないで示した。
色調は『新版 標準土色帖』2000年版によるが、該当しないものは、文字による表記とした。(以下の各項も同じ)
胎土の色調のうち、「・」の前の標記は釉薬などが掛らない露体部の器面色で、「・」の後の標記は断面色である。備前焼類など部位による器面色の偏差が大きいものは、「～」で繋いで振幅を示した。断面では外側(表部)と芯部とで色が違う場合もその旨の標記を心がけた。なお、全面施釉陶器では断面色のみを示した場合があり、また器面色と断面色が同じ土師質土器などでは両者を一本化したため、「・」を含まない標記となっている。
この欄は、土器・陶磁器以外の遺物については、その素材についての記載に充てた。
特に木製品の樹種は、藤井裕之氏(京都大学院生)に依頼して行った切片の顕微鏡観察による同定成果である。樹木の名称および分類は、基本的に北村四郎・村田源1971『原色日本植物図鑑木本編Ⅰ』保育社　および北村四郎・村田源1979『原色日本植物図鑑木本編Ⅱ』保育社にしたがった。ただし、マツ属複維管束亜属は「ニヨウマツ類」と表記した。

＊釉の色は、基本的に施釉部の見かけの色調を記載したため、透明釉や灰釉などでは胎土の色調が作用した結果となっている。したがって透明釉を掛けた磁器の多くは、釉色が透明ではなく白色となるが、その場合は釉の「赤味」「青味」の程度をやや強調した標記とした。
施釉部位は、末尾に「無」を示して非施釉部を記載した場合がある。なお、ここでは一旦釉薬が掛けられた個所を施釉部とし、「全釉」であっても、畳付や見込の釉が削り取られている場合がある。
備前焼の塗土、木製品の塗漆などもこの欄の対象とした。

＊文様は、施文材の種類と色、意匠を記載した。呉須の色調は、素材の精良度を念頭に、鮮・鈍、濃・淡、藍・青・緑・褐の度合いを示した。意匠は詳細不明なものが多く、主体的なもの、遺存部で確認できるものに限っている。

＊技法は、成形、調整、釉削り、施文、窯詰め、重ね焼きなどに関わる方法や痕跡のうち留意すべきものを記載した。

＊製作時期は、出土した層位や遺構内での他の遺物との共伴関係、末尾の文献に示された編年研究や各研究者からの直接のご教示、それに筆者の見通しを加味した目安であり、将来の編年研究の進展によっては、変動がありうる。

＊備考は前欄外の重要事項や、前欄に対応すべき内容であっても、スペースの関係で記載できなかった事がらを記載した。これまでの研究成果に照らして、分類や編年期を示した場合がある。

＊遺物の記述や本表の作製には、主に次のような文献・研究成果を参照した。

埴輪：川西宏幸1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻2号(備考欄の埴輪年代は本書による)

焼塩壺：渡辺誠「塩壺」1985『講座・日本技術の社会史』第二巻　日本論評社、田中一廣1991「泉州名産『焼塩壺』」『関西近世考古学研究』Ⅱ　関西近世考古学研究、小谷城郷土館編2000『シンポジュウム　焼塩壺の旅－ものの始まり堺－』

焙烙：難波洋三1992「第６節　徳川氏大坂城期の焙烙」『難波宮址の研究』第九　大阪市文化財協会(備考欄の焙烙分類は本書による)、徳島城下町遺跡研究会2001『四国と周辺の土器-焙烙の生産と流通』

中国製青花：森毅1995「一六・一七世紀における陶磁器の様相とその流通－大阪の資料を中心に」『ヒストリア』第149号(備考欄の青花碗・皿の分類は本文献による)

漳州窯系中国陶磁器：西田記念東洋陶磁史研究グループほか1994『ＳＷＡＴＯＵ　福建省漳州窯系陶磁器について』Ⅱ、小谷城郷土館2001『中日陶磁器国際シンポジュウム』

朝鮮王朝陶磁器：茶道資料館1990『遺跡出土の朝鮮王朝陶磁』

肥前陶磁器：大橋康二1984「肥前陶磁の変遷と出土分布」『国内出土の肥前陶磁』九州陶磁文化館・大橋康二・尾崎葉子1988『有田町史　古窯編』ほか同氏の一連の著作、九州近世陶磁学界編2000『九州陶磁の編年』(肥前陶磁の備考欄には大橋編年を示したが、これは同氏の一連の著作をベースに『九州陶磁の編年』の各論などを参照して記載した。)

京焼類：徳島城下町研究会1999『京焼－消費地出土の様相－』

瀬戸美濃陶磁器：田口昭二1983『考古学ライブラリー17　美濃焼』、井上喜久男ほか1980『日本焼物集成』３、藤澤良祐1993～1998『瀬戸市史陶磁史篇』四・五・六　瀬戸市、瀬戸市埋蔵文化財センター2001『瀬戸大窯とその時代』

備前焼：桂又三郎1973『時代別古備前名品図録』(陶印について)、間壁忠彦1991『考古学ライブラリー60　備前焼』、備前市教育委員会ほか1998『備前焼紀年銘土型調査報告書』、中近世備前焼研究会2000『第３回中近世備前焼研究会資料』、(備考欄に示した擂鉢の編年期は本報告書第Ⅴ章第３節参照)

関西系擂鉢：白神典之1988「堺擂鉢について」『堺環濠都市遺跡(SKT79)発掘調査報告』堺市教育委員会、稲原昭嘉2000「明石擂鉢の編年について」『近世の実年代資料』関西近世考古学研究会、佐藤隆ほか1999『堂島蔵屋敷跡』大阪市文化財協会　ほか

大谷焼・珉平焼：徳島城下町研究会2000『四国・淡路の陶磁器－生産と流通Ⅰ－』

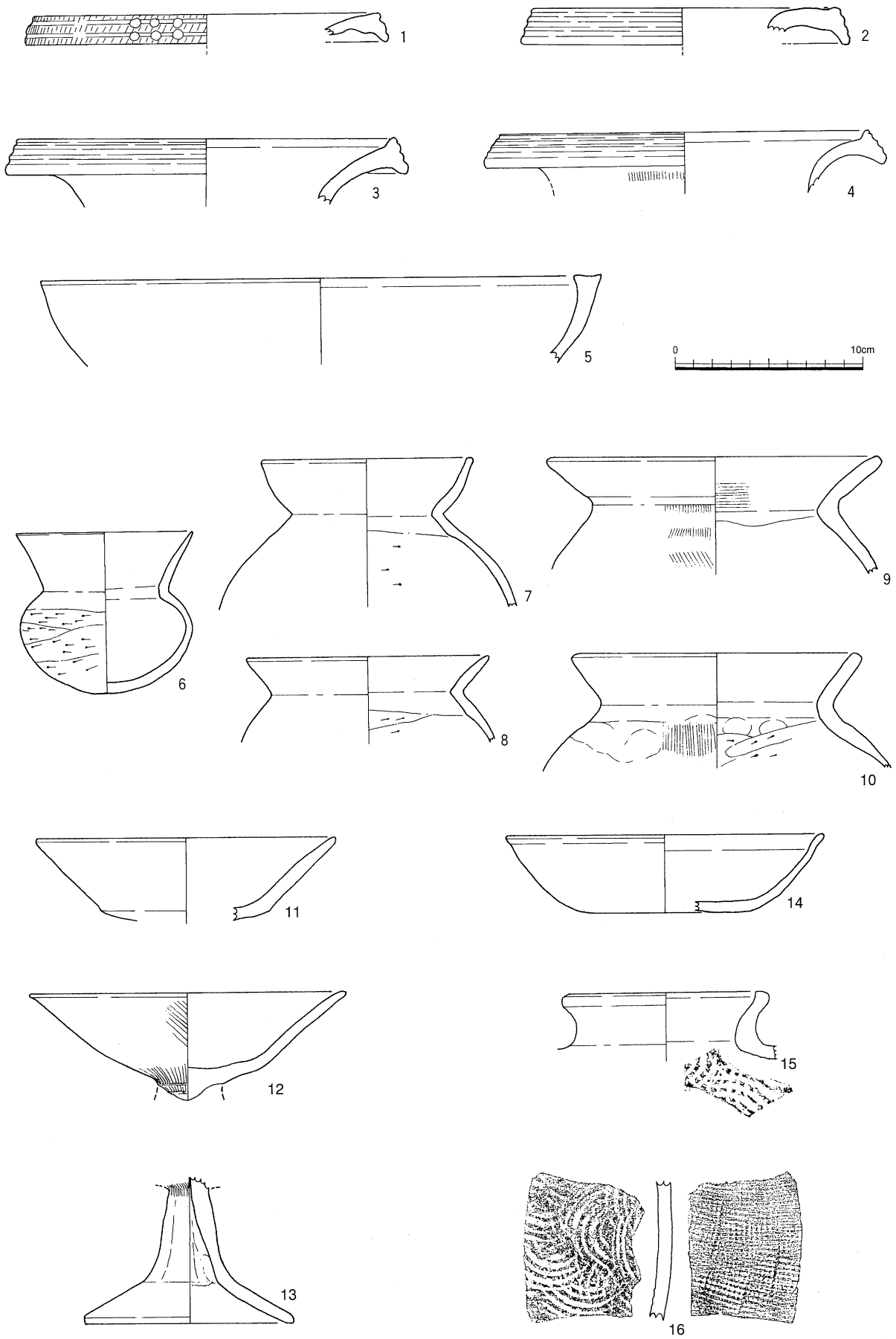
銭貨：兵庫埋蔵銭調査会1996『日本出土銭総覧』

瓦：森田克行1984「屋瓦」『摂津高槻城』高槻市教育委員会（コビキ・キラコの理解などは同書による)、岡山市教育委員会2001『史跡岡山城跡本丸下の段発掘調査報告』(備考欄に示した岡山城出土瓦に関する型式は同書第Ⅴ章第４節による)

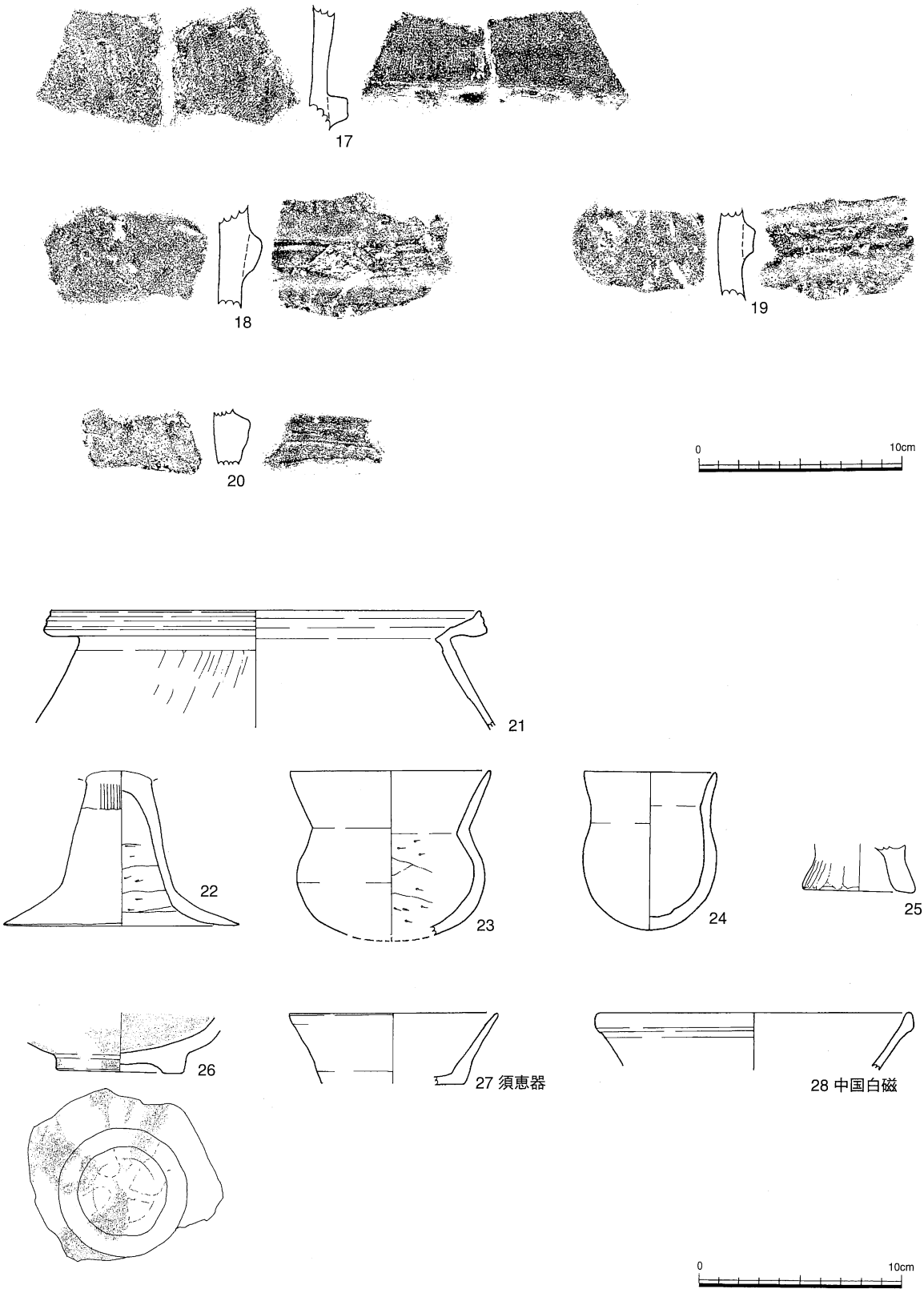
その他全般：関西近世考古学研究会1993『近世陶磁器の諸様相』、江戸陶磁土器研究グループ編1996『江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅱ』、江戸遺跡研究会編2001『図説　江戸考古学研究事典』

城郭以前の遺物（第33図・第34図）

番号	種　類	器種・部位	法量（cm）			胎土（素材）と焼成 種類・状況・含有物-器面色・断面色-焼成	釉(・漆・装飾) 釉種-色-部位	文　様 施文材-意匠	技　法　な　ど	製　作　時　期	備　　考
			口径 長さ	器高 高さ	底径 幅						
1	弥生土器	壺・口縁	(18.6)			1mm以下砂粒-10YR8/2・10YR3/1-良好		凹線・刻み・浮文	凹線	弥生中期中葉	b地点Ⅲ層出土
2	弥生土器	壺・口縁	(16.5)			1mm以下砂粒多-2.5Y8/2・2.5Y5/1-良好		凹線	凹線	弥生中期後葉	b地点Ⅲ層出土
3	弥生土器	壺・口縁	(20.4)			1mm以下砂粒-2.5Y6/2・2.5Y3/1-良好		凹線	凹線	弥生中期後葉	b地点Ⅲ層出土
4	弥生土器	壺・口縁	(19.8)			1mm以下砂粒-2.5Y7/3・2.5Y2/1-良好		凹線	凹線	弥生中期後葉	b地点Ⅲ層出土
5	弥生土器	高坏・口縁	(30.0)			1mm以下砂粒-10YR7/3・10YR4/1-良好			外面ヨコヘラミガキ	弥生中期中葉	b地点Ⅲ層出土
6	土師器	坩	9.6	8.6		1mm以下砂粒-10YR7/3-良好			体部外面ヘラケズリ	古墳時代前期末	a地点Ⅲ層302土壙出土、完形
7	土師器	甕・口縁	(11.4)			1mm以下砂粒-10YR6/2・10YR4/1-良好				古墳時代中期前葉	b地点Ⅲ層出土
8	土師器	甕・口縁	(13.2)			1mm以下砂粒-10YR7/4-良好				古墳時代中期前葉	b地点Ⅲ層出土
9	土師器	甕・口縁	(17.7)			1mm以下砂粒-10YR7/2-良好				古墳時代中期前葉	b地点Ⅲ層出土
10	土師器	甕・口縁	(15.0)			2mm以下砂粒-7.5YR7/4-良好				古墳時代中期前葉	b地点Ⅲ層出土
11	土師器	高坏・体部	(15.9)			2mm以下砂粒-10YR8/3-良好				古墳時代前期	b地点Ⅲ層出土
12	土師器	高坏・体部	(17.1)			1mm以下砂粒・鉄分粒-7.5YR6/6-良好				古墳時代前期	b地点Ⅲ層出土
13	土師器	高坏・脚部			(11.1)	1mm以下砂粒・鉄分粒-10YR7/3-良好				古墳時代前期	b地点Ⅲ層出土
14	土師器	碗	(17.1)	(4.2)		1mm以下砂粒・鉄分粒-10YR6/4・10YR7/2-良好	丹塗-2.5YR6/6-内外面			9世紀	b地点Ⅲ層出土
15	須恵器	甕・口縁	(10.8)			1mm以下砂粒・生地砂質-7.5Y6/1-良好				7世紀	b地点Ⅲ層出土
16	須恵器	甕・胴部片				0.5mm以下砂粒・生地砂質-外N6/内N7/-良好				6・7世紀	b地点Ⅲ層出土
17	埴輪	円筒・胴部片				0.5mm以下砂粒-2.5Y6/2-良好	丹塗-2.5YR6/3-外内面僅		外面：細縦ハケ、有黒斑	古墳前期末(川西Ⅱ期)	b地点Ⅲ層出土
18	埴輪	円筒・胴部片				0.5mm以下砂粒-7.5YR7/4・2.5Y6/1-良好			外面：粗縦ハケ、無黒斑	古墳後期(川西Ⅴ期)	b地点Ⅲ層出土、窖窯焼成
19	埴輪	円筒・胴部片				1mm以下砂粒-7.5YR7/4・2.5Y6/1-良好			外面：粗縦ハケ、無黒斑	古墳後期(川西Ⅴ期)	b地点Ⅲ層出土、窖窯焼成
20	埴輪	円筒・胴部片				1mm以下砂粒-5YR6/6-良好			外面：粗縦ハケ、無黒斑	古墳後期(川西Ⅴ期)	b地点Ⅲ層出土、窖窯焼成
21	弥生土器	甕・口縁片	(21.6)			1mm以下砂粒-2.5Y6/2・2.5Y4/1-良好		凹線	外面：縦ハケ	弥生中期後葉	西区Ⅵ層(江戸前期造成土)出土
22	土師器	高坏・脚部			(11.6)	1mm以下砂粒-7.5YR7/6・10YR6/1-良好				古墳前期	北区内堀埋土出土
23	土師器	壺	(9.9)			3mm以下砂粒-外10YR6/3・内10YR4/1-良好				古墳前期	北区内堀埋土出土
24	土師器	壺	6.6	7.6		2mm以下砂粒-外10YR8/3・内ト芯7.5YR7/6-良好				古墳中期	北区内堀埋土出土、完形
25	土師器	製塩土器・脚台			(5.7)	2mm以下砂粒-10YR7/6-良好				弥生後期～古墳前期	西区Ⅸ層(桃山造成土)出土
26	緑釉陶器	碗・高台部			6.4	2mm以下砂粒-7.5Y8/1-良好(軟質)	緑釉10Y4/2～10Y8/2-全釉		底面に十字形窯道具痕	10世紀	西区ＳＫ34(江戸前期土壙)出土
27	須恵器	碗・体部片	(10.2)	3.6		1mm以下砂粒・生地微粒-N7/-良好				9世紀	西区Ⅸ層(桃山造成土)出土
28	中国白磁	碗・口縁片	(10.9)			陶石-2.5GY8/-良好				11世紀後半～12世紀前半	南区Ⅸ層(桃山造成土)出土



第33図　城郭以前の遺物Ⅰ（1／3）



第34図　城郭以前の遺物Ⅱ（１／３）

第２節　曲輪内最下層の遺物

１．Ⅸ層出土（第35図29～42）

円礫を伴う掘方地形の埋土からの出土品である。

29～31は土師質土器の皿である。後の層位から出土した土師質土器皿は圧倒的に糸切り底であるのに、これらは底部に糸切り痕を残さず、手づくね成形とみられる。32～34は中国製の青花で、32はやや粗製、33は16世紀後葉に多見する薄手の景徳鎮の精良品である。35は龍泉系の青磁で前代の遺物の伝世品か混入品とみられる。36・37は備前焼擂鉢で、37は確かに16世紀後葉の特徴をもつが、36は15世紀中葉に遡る製品である。38は自在鉤形の木製品。39・40は平瓦で、コビキＡ痕が観察できる。41は豊島石製の五輪塔水輪で、地盤改良用の円礫に紛れ込んだ転用材である。42は初鋳1056年の北宋銭である嘉祐通寳である。

２．井戸３出土（第35図43･44）

ともに丸瓦で、コビキＡ痕を残し、16世紀代の製品である。

３．Ⅸ層～Ⅶ層出土（第35図45～50）

最下層下部遺構面の掘立柱建物ＳＢ２を伴う地表付近の造成土と、その最下層下部遺構面を埋めて上部遺構面を造りだす造成土中の遺物である。

45～47は土師質土器の皿で、45・46は手づくね成形とみられるのに対し、47は回転糸切り痕をもつ。48は美濃の灰釉丸碗で16世紀後葉の大窯製品である。49・50は土師質の土錘。

４．Ⅶ層出土（第36・37図51～87）

ＳＢ１などを伴う最下層上部遺構面を埋め、下層遺構面を造りだす造成土中の遺物である。

51～58は土師質土器の皿である。51～56は回転糸切痕を残し、57・58は手づくね成形とみられる。

59～66は中国景徳鎮窯系の磁器である。59～62は薄手で呉須の発色も良い青花碗で、59・61は龍文を意匠とし、61・62は饅頭心形の高台である。63・64は端反の白磁皿。65・66は青花皿で、66は端反である。

67・68は中国福建の漳州窯系の染付皿である。いずれも見込を蛇目釉剥ぎにし、少なくとも67は高台内を無釉にしている。67は陶質である。68は磁器質に焼きあがるが、やや甘い感がする。

69～72は美濃焼である。69は灰釉の丸碗、70は鉄飴釉の天目碗で、ともに大窯期の製品である。71・72は縁折皿で、71は灰釉、72は鉄釉を施す。また72の底面には輪トチン痕を残している。

73は唐津焼の灰釉端反皿である。本例が層位的にみて唐津焼の初出となるが、この層位に伴うものとして取り上げた唐津は唯一である。釉は緑灰色で、鉄絵はなく、見込に胎土目を伴っている。

74～77・79・80は備前焼である。74は小皿(坏)で、底部に回転糸切り痕を残す。75・76は徳利の口縁、77は鉢である。79・80は擂鉢で、80は16世紀後葉でも天正頃の特徴をもつが、79は14世紀末～15世紀初めにまで遡る。

78は無釉陶器の小形擂鉢(小鉢)で、備前焼のなま焼け品の可能性もある。

81は須恵質(瓦質)の擂鉢で、備中南部の亀山系と言われている類である。

82～84は銅製品・鉄製品で、小柄(こづか)の部品とみられる。

85は丸瓦で内面に細かい布目痕が残るがコビキ痕は観察不能、86は平瓦でコビキＡ痕が残る。

87は初鋳1107年の北宋銭である大観通寳である。

曲輪内最下層Ⅸ層出土（第35図）

番号	種　類	器種・部位	法量（cm）			胎土（素材）と焼成 種類・状況・含有物-器面色・断面色-焼成	釉(・漆・装飾) 釉種-色-部位	文　様 施文材-意匠	技　法　な　ど	製　作　時　期	備　　考
			口径 長さ	器高 高さ	底径 幅						
29	土師質土器	小皿	(7.8)	1.8		0.5mm以下砂粒・生地微粒-2.5Y7/4-良好			手づくね成形？	16世紀末	北区出土
30	土師質土器	小皿	(8.1)	1.8		0.5mm以下砂粒・生地微粒-2.5Y7/4-良好			手づくね成形？	16世紀末	北区出土
31	土師質土器	小皿	(9.9)	1.8		0.5mm以下砂粒・生地微粒-2.5Y7/3-良好			手づくね成形？	16世紀末	西区出土
32	中国青花	碗・体部	(1.5)			陶石-N8/-良好	透明釉-5GY7/1	呉須(暗緑・暗青)		16世紀後半	西区出土
33	中国(景徳)青花	碗・体部	(12.0)			陶石-N8/-良好	透明釉-2.5GY8/1	呉須(藍)		16世紀後半	西区出土、染付碗Ｅ群？
34	中国青花	碗・底部			(3.3)	陶石-N8/-良好	透明釉-5G7/1	呉須(青)	底面粗砂付着	16世紀中～後半	西区出土、染付碗Ｃ群
35	中国龍泉系青磁	碗・底部			5.9	陶石-N7/-良好	青磁釉-緑灰	陰花	全釉後高台内釉剥ぎ	15世紀(～16世紀)	西区出土、青磁碗Ｅ類？
36	備前	擂鉢・口縁	(27.0)			2mm以下砂粒-10R4/2・2.5Y3/1-良好				15世紀前半	西区出土
37	備前	擂鉢・体部	(33.9)			2mm以下砂粒-5YR4/3・N5/-良好				16世紀後葉(天正以前)	西区出土
38	木器	鍵状材				スギ				16世紀後半？	北区出土
39	瓦	平瓦			1.8	１mm以下砂粒-N4/・N6/-良好				16世紀後半	西区出土
40	瓦	平瓦			1.6	１mm以下砂粒-N4/・N6/-良好			凹面にコビキＡ痕	16世紀後半	西区出土
41	石造物	五輪塔・水輪	17.6	13.7	17.2	豊島石				室町時代	西区ＳＢ２北東部出土
42	銅銭	嘉祐通寶	2.2	2.2	0.1	銅-2.5GY5/1				初鋳1056年	南区出土、完形2.8g、北宋銭

曲輪内最下層井戸３出土（第35図）

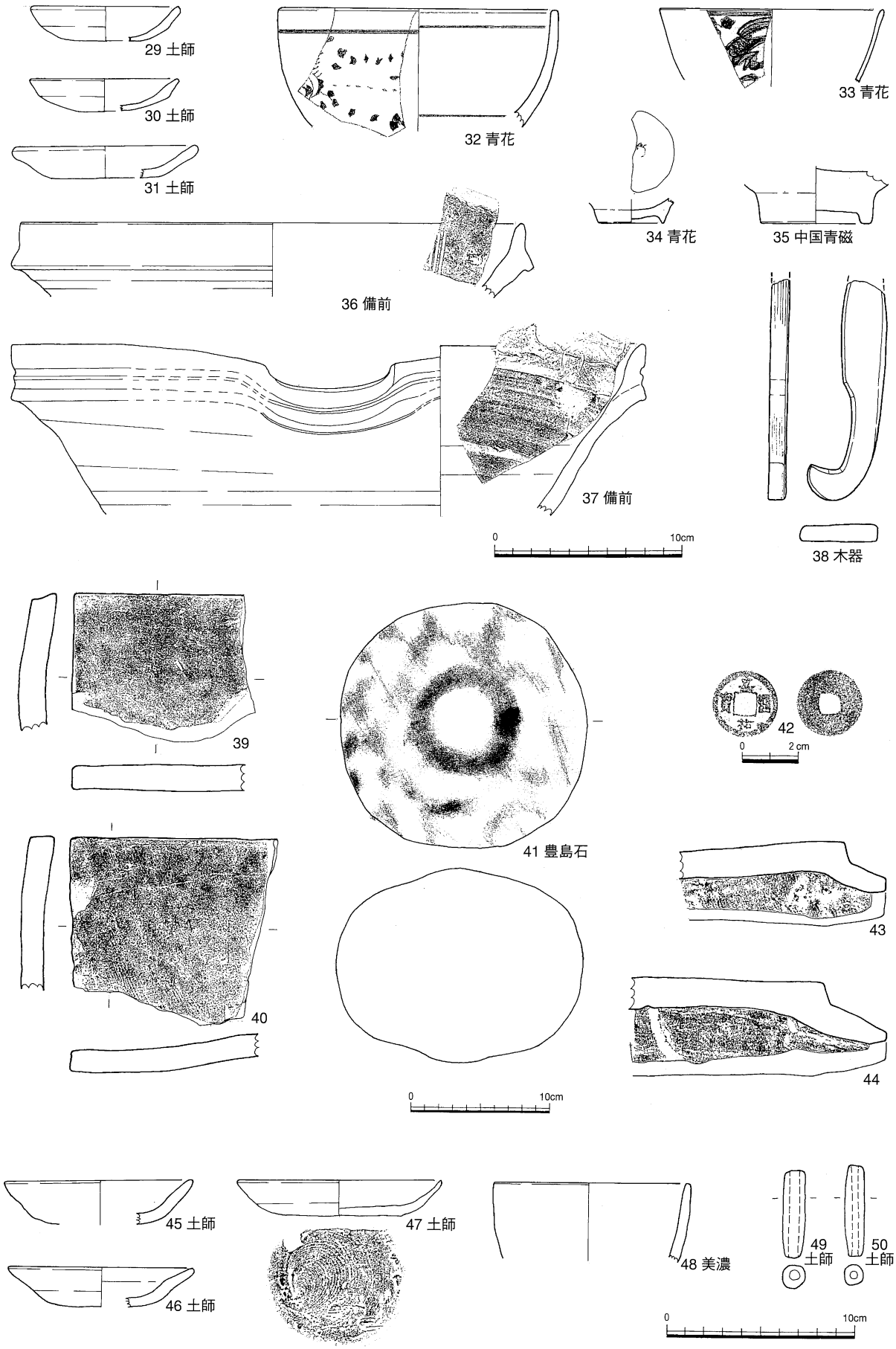
番号	種　類	器種・部位	法量（cm）			胎土（素材）と焼成 種類・状況・含有物-器面色・断面色-焼成	釉(・漆・装飾) 釉種-色-部位	文　様 施文材-意匠	技　法　な　ど	製　作　時　期	備　　考
			口径 長さ	器高 高さ	底径 幅						
43	瓦	丸瓦・尾部		6.0		1.5mm以下砂粒・黒色粒-N6/・N6/-良好			内面コビキＡ、細布目	16世紀	岡山城１式
44	瓦	丸瓦・尾部		7.0		4mm以下砂粒・黒色粒-N4/・N6/-良好			内:細布目・吊紐痕、外:縄目	16世紀	岡山城１式

曲輪内最下層Ⅸ～Ⅹ層出土（第35図）

番号	種　類	器種・部位	法量（cm）			胎土（素材）と焼成 種類・状況・含有物-器面色・断面色-焼成	釉(・漆・装飾) 釉種-色-部位	文　様 施文材-意匠	技　法　な　ど	製　作　時　期	備　　考
			口径 長さ	器高 高さ	底径 幅						
45	土師質土器	小皿	(7.9)			0.5mm以下砂粒-10YR7/4-良好			手づくね	16世紀後葉	南区出土
46	土師質土器	小皿	(9.9)			微粒-2.5YR7/3-良好			手づくね	16世紀後葉	南区出土
47	土師質土器	小皿	(11.1)	1.8	7.0	0.5mm以下砂粒-10YR7/4-良好			回転糸切り	16世紀後葉	南区出土
48	美濃	丸碗・口縁	(10.5)			0.5mm以下砂粒-2.5Y8/2-良好	灰釉-5Y7/4			16世紀後葉	南区出土、大窯後半期
49	土師質土器	土錘	0.8	4.7	1.0	0.5mm以下砂粒-5YR6/6-良好				16世紀後葉？	南区出土、8.2ｇ
50	土師質土器	土錘	0.7	4.9	0.7	0.5mm以下砂粒-5YR6/6-良好				16世紀後葉？	南区出土、5.3ｇ

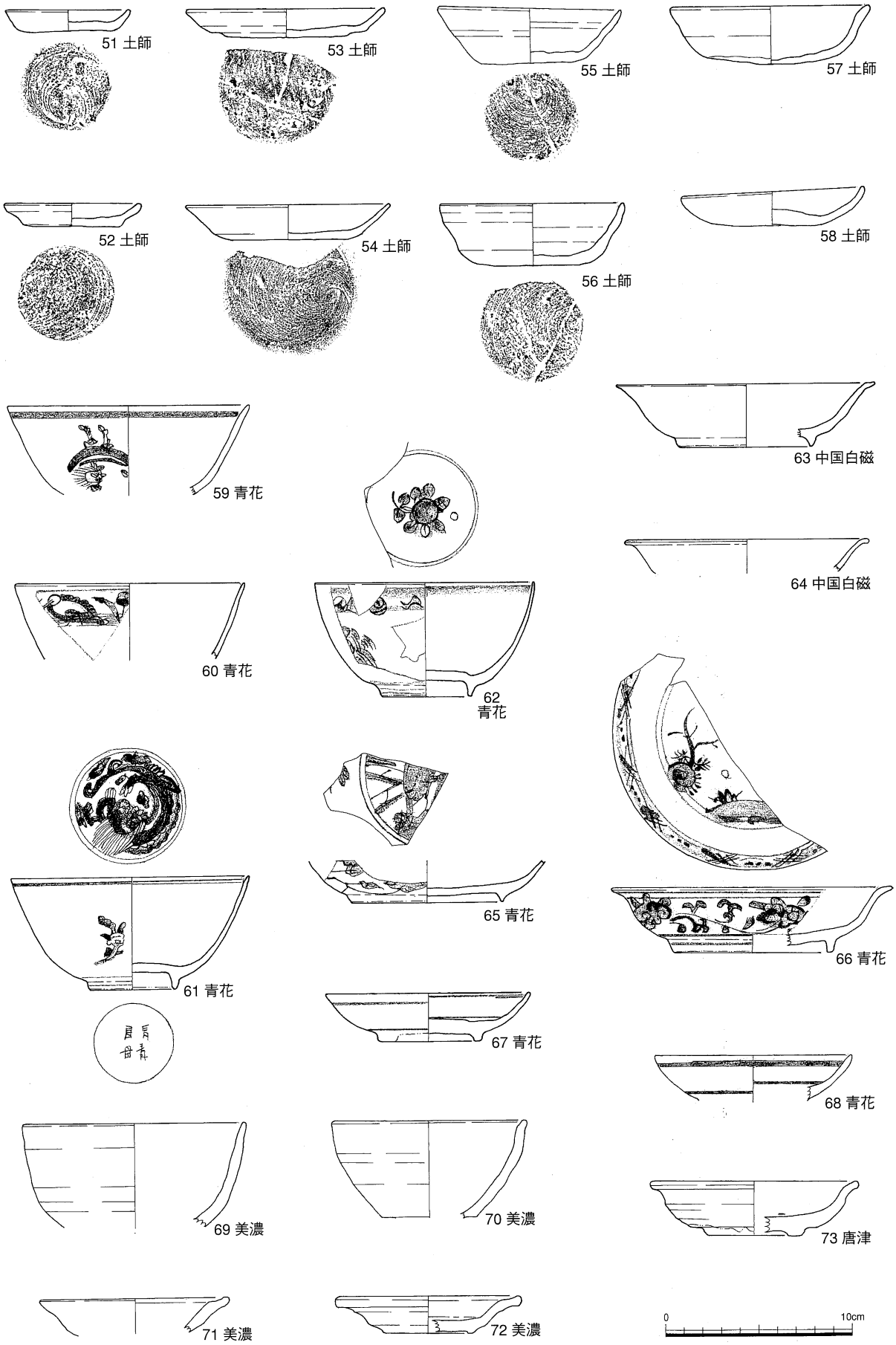
曲輪内Ⅶ層出土（第36図・第37図）

番号	種　類	器種・部位	法量（cm） 口径長さ	器高高さ	底径幅	胎土（素材）と焼成 種類・状況・含有物-器面色・断面色-焼成	釉(・漆・装飾) 釉種-色-部位	文　様 施文材-意匠	技　法　な　ど	製　作　時　期	備　　考
51	土師質土器	小皿	6.7	1.8	4.7	微粒-10YR6/3-良好			回転糸切り	16世紀末～17世紀初	南区出土
52	土師質土器	小皿	7.4	1.2	5.1	微粒-10YR7/3-良好			回転糸切り	16世紀末～17世紀初	南区出土
53	土師質土器	小皿	(10.5)	1.5	6.6	微粒-10YR6/3-良好			回転糸切り	16世紀末～17世紀初	南区出土
54	土師質土器	小皿	(10.8)	1.9	6.5	微粒-2.5Y8/2-良好			回転糸切り	16世紀末～17世紀初	西区出土
55	土師質土器	小皿	9.9	3.2	5.3	微粒-10YR7/4-良好			回転糸切り	16世紀末～17世紀初	南区出土、完形
56	土師質土器	小皿	(9.9)	3.3	4.8	1mm以下の鉄分粒・生地微粒-7.50YR6/3-良好			回転糸切り	16世紀末～17世紀初	南区出土
57	土師質土器	小皿	(10.8)	3.0	6.0	1mm以下の鉄分粒・生地微粒-10YR7/3-良好			手づくね成形	16世紀末～17世紀初	南区出土
58	土師質土器	小皿	9.5	2.1	5.0	微粒-10YR6/3-良好			手づくね成形	16世紀末～17世紀初	完形、底面中央器壁厚い、西区出土
59	中国（景徳鎮）青花	碗・口縁	(12.9)			陶石-N8/-良好	透明釉-2.5GY8/1	呉須(濃青)-龍		16世紀後葉	南区出土
60	中国（景徳鎮）青花	碗・口縁	(12.3)			陶石-N8/-良好	透明釉-2.5GY8/1	呉須(藍)		16世紀後葉	南区出土
61	中国（景徳鎮）青花	碗	(12.6)	6.0	4.7	陶石-N8/-良好	透明釉-2.5GY8/1	呉須(藍)-龍		16世紀後葉	南区出土、染付椀Ｅ群
62	中国（景徳鎮）青花	碗	(11.7)	6.0	4.8	陶石-N8/-良好	透明釉-10GY8/1	呉須(濃青)-花他		16世紀後葉	西区出土、染付椀Ｅ群
63	中国白磁	皿	(13.8)	3.3	(6.9)	陶石-N8/-良好	透明釉-N8/		畳付両角釉ケズリ	16世紀後葉	西区出土
64	中国白磁	皿				陶石-N8/-良好	透明釉-N8/			16世紀後葉	西区出土
65	中国（景徳鎮）青花	皿			(7.8)	陶石-N8/-良好	透明釉-2.5GY8/1	呉須(濃青)-花他	畳付両角釉ケズリ・砂付着	16世紀後葉	西区出土、染付皿Ｅ群
66	中国（景徳鎮）青花	皿	(15.0)	3.6	(8.4)	陶石-N8/-良好	透明釉-7.5GY8/1	呉須(藍)-風景他	畳付両角釉ケズリ	16世紀後葉	南区出土、染付皿Ｂ群
67	中国（ｼｮｳ州）青花	皿	(10.8)	2.4	(5.4)	陶石-5Y8/3-良好（陶質）	透明釉-5Y8/2-高台内無	呉須(濃青)-圏線	見込み蛇目釉剥ぎ	16世紀後葉	南区出土、染付皿Ｅ群粗製
68	中国（ｼｮｳ州）青花	皿	(10.5)			陶石-N8/-良好（磁器質）	透明釉-2.5GY8/1	呉須(緑灰)-圏線	見込み蛇目釉剥ぎ	16世紀後葉	南区出土、染付皿Ｅ群粗製
69	美濃	丸碗	(12.0)			1mm以下の砂粒僅-5Y8/2-良好	灰釉-5Y7/4			16世紀後葉	南区出土、大窯期後半
70	美濃	天目碗	(10.2)			1mm以下の砂粒僅-5Y8/2-良好	飴釉-7.5YR2/2～2.5Y5/4			16世紀後葉	南区出土、大窯期後半
71	美濃	縁折皿	(9.4)			1mm以下の砂粒僅-7.5Y8/1-良好	灰釉-7.5Y7/3			16世紀後葉	南区出土、大窯期
72	美濃	縁折皿	(9.9)	1.8	(4.8)	1mm以下の砂粒僅-2.5Y8/2-良好	鉄釉-5YR3/4		底面に輪トチン痕	16世紀後葉	南区出土、大窯期後半
73	唐津	皿	(9.9)	2.7	(5.1)	1mm以下の砂・鉄分粒僅-10Y7/1-良好	灰釉-10Y6/1		見込みに胎土目	16世紀末～17世紀初	南区出土、大橋！期
74	備前	小皿	7.5	2.2	4.0	1mm以下の砂粒僅-2.5YR3/2・N4/-良好			回転糸切り	16世紀後葉～17世紀初	南区出土、完形
75	備前	徳利・口縁	(3.9)			0.5mm以下の砂粒僅-2.5YR4/2・N5/-良好				16世紀後葉～17世紀初	南区出土
76	備前	徳利・口縁	(4.8)			0.5mm以下の砂粒僅-5YR3/1・N4/-良好				16世紀後葉～17世紀初	南区出土
77	備前	鉢	(13.8)	5.1	(7.5)	0.5mm以下砂粒僅・生地微-5YR3/3・5YR4/3-良好				16世紀後葉	南区出土
78	産地不明	ミニチュア擂鉢	(8.1)	3.9	(3.9)	0.5mm以下砂粒僅-2.5Y8/2			体部外面弱いケズリ	16世紀後葉～17世紀初	西区出土、スリメ単位６本
79	備前	擂鉢	(27.3)			２mm以下砂粒-5YR4/2・2.5Y4/1-良好				15世紀前葉	西区出土、スリメ単位６本
80	備前	擂鉢	(32.1)			２mm以下砂僅・生地微-2.5YR4/2・2.5Y4/2-良好				16世紀後葉（天正頃）	南区出土、近世１ｂ期
81	須恵質		(30.5)	10.2		２mm以下砂・生地砂質-7.5Y7/1・N4/-良好			体部外面ケズリ	16世紀後葉～17世紀初？	いわゆる亀山系、スリメ単位６本
82	銅製品・鉄器	こづか	[8.7]			銅-2.5GY5/1、鉄				16世紀後葉～17世紀初？	内部にこづか本体の鉄部が遺存
83	銅製品	こづか柄	[5.4]			銅-2.5GY5/1				16世紀後葉～17世紀初？	
84	鉄製品	こづか刃部？				鉄				16世紀後葉～17世紀初？	
85	瓦	丸瓦	29.2	6.8	14.0	1.5mm以下砂粒-N3/・N7/-良好			内面細布目・コビキ痕不明	16世紀	外面縄目ﾀﾀｷ痕僅、西区出土、１式
86	瓦	平瓦				２mm以下砂粒-器面N3/～2.5Y6/1・断面N7/-良好			凹面にコビキＡ痕	16世紀	西区出土
87	銅銭	大観通寶	2.4	2.4	0.1	銅-5GY5/1				初鋳1107年	完形、2.3g、北宋銭

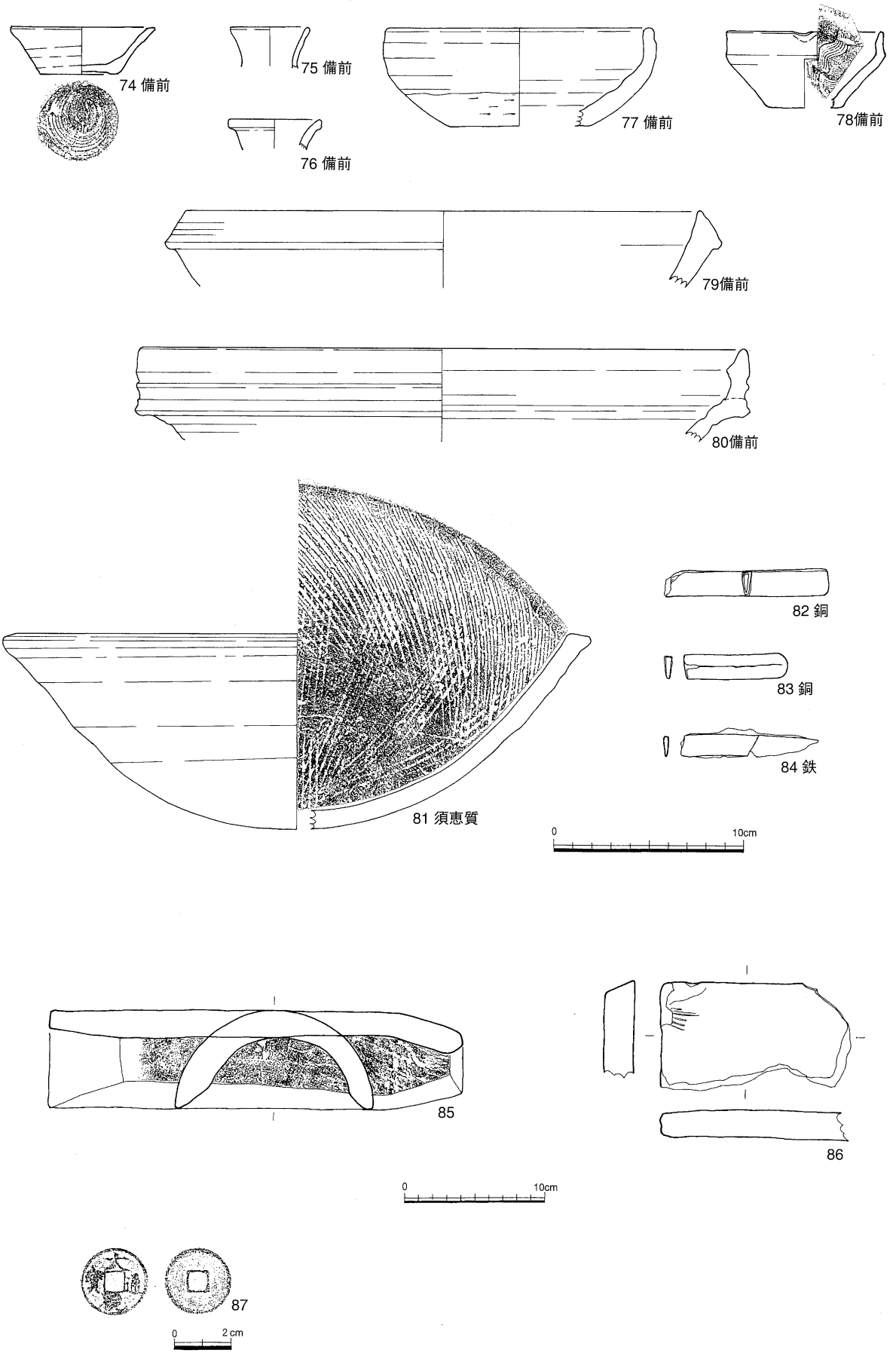


第35図　曲輪内最下層の遺物（銭：１／２　瓦：１／４　他：１／３）

29～42はⅨ層、43・44は井戸３、45～50はⅨ・Ⅷ層出土



第36図　曲輪内Ⅶ層造成土の遺物Ⅰ（1／3）



第37図　曲輪内Ⅶ層造成土中の遺物Ⅱ（銭：１／２　瓦：１／４　他：１／３）

第３節　曲輪内下層～上層遺構の遺物

１．下層遺構

下層遺構は、17世紀第１四半期から第２四半期でも古い段階に埋没した大形のゴミ穴が多く、各遺構ごとに、良好な一括遺物が出土した。

ａ．ＳＫ34出土（第38図88～103）

88～96は土師質土器の皿である。88～93は底部に回転糸切り痕を残すが、他は観察できない。ただ、94・95は手づくね成形というより、回転糸切り後に底部をナデて痕跡を消した結果の可能性がある。一方、96は明らかに手づくね成形である。胎土は浅黄色で白色土はさほど強くなく地元産の可能性が強いが、その特徴的な器形と合わせて広い意味での京都系とみられる。

97は肥前・唐津系の瓶口縁で、藁灰釉を掛け、古い特徴をもっている。

98～101は備前焼である。98は手づくね成形の輪花の小皿、99は大皿(盤)である。100の大甕は、口縁が内湾気味の筒形に立ち上がり、16世紀末の文禄年間頃の製品とみられる。一方、この遺構の主体をなす据甕であった101の大甕は、残念なことに口縁が検出できなかったが、体部の肩が張って丸く、外面に細かなヘラ削りの単位を残して、16世紀中頃に遡る特徴をもっている。体部の上方に「二石入」の文字がヘラ書きされている。102は粘板岩製の小形硯、103は飾瓦か滑止付の平瓦である。

ｂ．ＳＫ72出土（第39～43図104～181）

104～119は土師質土器の皿である。細かくみると、大小様々な形態のものがあるが、総て底部糸切り成形である。少なくとも104・106・116・118は、口縁に煤が付着して灯明皿として使用されたことが判る。法量のほか、胎土の色調からも細別可能で、107は乳白色系、113～118は明黄褐色系、104・106・108～110は黄灰～にぶい黄色系の各群に括れる。

120～122は中国景徳鎮窯の青花碗である。123～125は中国漳州系の磁器質青花碗で、123・125の畳付には砂を付着させている。124・125はこの系統の染付に特徴的な意匠の花唐草である。

126～128は朝鮮王朝製である。126・127は白磁に分類されるが、胎土はしっとりした白土で、本格的な磁器というより、やや陶質的である。126は皿で見込と畳付に５個程度の砂目を残す。127は体部が逆ハ字に開く碗である。128は陶器で、鉄分が多い暗灰色の胎土に、印花を施して白土を埋込み、透明に近い灰釉を掛けている。畳付に目砂を残している。

129～143は唐津焼である。129は灰釉の碗である。130～143の皿も総て灰釉で、小皿では溝縁のものは１点も含まれず、目跡を残すものは総てが胎土目である。130・131・139には鉄絵を施す。

144～148は美濃焼である。144は鉄釉を施す天目碗、145・146は灰釉の折縁ソギ菊皿、147は鉄釉皿、148は灰釉の丸皿である。いずれも大窯期の製品である。

149～156は備前焼である。149・150は大皿(盤)で口縁を鉤形に内折する16世紀最終末から17世紀初頭の特徴をもっている。150の底面には二重円の刻印がある。151・152は盤状の浅鉢で、152の見込には重焼時の圧痕がボタ餅となっている。153も鉢類であるが、細片のため、全形は不詳である。154・155は擂鉢で、154のスリメはやや密度が高い放射スリメ、155のスリメは放射に斜めのものが付加される型式である。156は頸部にクシ書き波状文を廻らせた壺で前代からの伝世品とみられる。

157は漆器碗で、内外とも黒漆を施している。高台は小さく、シャープな造りである。

158～164は白木の箸である。長さ21.8～26.2cmで、158・159の様に両端とも先細りにした両口にし

たものと、162～164の様に片方だけを先細りにした片口のものがある。中間部の断面は159が四角形、162は亀甲形であるが、158の様に部位によって偏差をもち、粗雑な造りのものが多い。165は白木の折敷膳板とみられ、脚や側板の固定用の釘孔が残る。長辺は30.0cmで約１尺。166・167は何かの側板とみられ釘孔が残る。両面に黒漆を塗り、165とは別の折敷の部材の可能性がある。

168～170は用途不明の木製品で、何かの補強材とみられる。169は漆塗であった可能性がある。

171～176は下駄で、後の紐孔はすべて後歯の前方に穿たれている。171～173は歯を含めて一木で作る連歯型で、171の歯上部には補修のためとみられる鉄釘が残っている。また、子供用の173は台部側面や裏面に黒漆が残り、本来は全体が漆塗の高級品であったとみられる。174～176は差歯式でホゾ穴が台部を貫通する露卯型である。いずれも歯の側面が下を広く取った台形の高下駄で、使用によって摩耗し、接地面には砂粒が多数めり込んでいる。歯の減り方は多様であるが、とくに176は同じ歯の左右で減り方が極端に異なり、しかもその方向は前歯と後歯で逆になって、特異である。足を痛めた人が特殊な歩き方をした結果か、歯の表裏の差替補修をした直後に投棄されたものかも知れない。

177は羽子板とみられる。現状は白木で彩色や装飾貼付痕などは観察できないが、板部の両面ともに羽子による敲打痕ともみられるアバタ状窪みが多く残る。柄側両角の二段切り込みの収めかたや上辺両角の丸みからして、板部の両側とも端部を保ち、本来から相当に細身であったとみられる。

178は砂岩製とみられる不定形の砥石である。

179～181は瓦である。179の軒丸は左巻き三巴に12個ほどの珠文を配した文様で、17世紀前葉の特徴を備えている(岡山城４式)。180の軒平は、中心飾三葉･唐草三転の文様で、16世紀末の宇喜多秀家期(岡山城２式)に遡る。181は鬼瓦の貼付文様が剥落したもので、人物か猿の手が表現されている。

この他に、アカニシの貝殻６点、サザエの貝殻１点、動物骨８点などが出土した。

ｃ．ＳＫ71出土（第44図182～191）

182～186は土師質土器皿で、186は手づくね成形の可能性がある。187は中国景徳鎮窯の青花碗、188は唐津焼の灰釉丸皿、189は美濃焼の天目碗である。190は備前焼の擂鉢で、口縁体は立ち上がりが萎縮し、スリメは放射状のものだけである。191は備前焼の鶴首徳利である。

ｄ．ＳＫ77出土（第44図192～197）

192～195は土師質土器皿で、総て回転糸切り痕を残す。196は備前焼の大皿(盤)で口縁が小さく鉤状となる。197は備前焼の98に似た輪花小皿であるが、土師質土器である。

ｅ．ＳＫ76出土（第45図198～211）

198は土師質土器皿で、回転糸切り痕を残す。199は中国漳州窯系とみられる青花碗である。200は景徳鎮窯の端反り白磁皿、201・202は景徳鎮窯の青花丸皿である。203は唐津焼の灰釉碗、204は唐津焼の灰釉火入(香炉)である。206～208は美濃焼で、206は鉄釉碗、207は灰釉の折縁ソギ菊皿で見込に印花文を施す。208は灰釉丸皿。209～211は備前焼の擂鉢と大皿(盤)である。

ｆ．ＳＫ73出土（第45・46図212～222）

212・213は糸切り痕を残す土師質皿である。214は焼塩壺で、よく焼けていて、実際に焼き塩に用いられたとみられる。岡山城内外のこの期の焼塩壺のうち薄手で、堺産の可能性がある。215・216は中国景徳鎮青花、217～220は唐津焼である。217の鉢形碗は鉄釉で、体部上半の恐らく三か所をロクロ成形後に意匠として窪めている。218～220は灰釉で、219はやや珍しい器形である。221は高台が高いが高台内は浅い特徴的な漆器碗で内外とも朱漆を塗っている。222は連歯型の下駄である。

ｇ．ＳＫ69出土（第46～48図223～260）

223～228は総て連歯下駄である。台形は、223が端部丸型、224・225が長方形型、226が幅広隅丸方形型、227・228が細身の端部丸型である。女性用とみられる228は歯の後側面に黒漆が残る。

229は箱物の柾目板で、端部付近に木釘が残り、内面側に朱漆、外面側に黒漆を塗っている。

230～235は土師質土器の皿で、235が手づくね成形の可能性があるほかは、回転糸切り痕を残している。236は土師質の三足火入れで、外側面に印花文を複数施し、使用によって口縁に煤が付着している。237・238は土師質のナベで、外面全体に煤が顕著に付着している。239は土師質の土錘。

240は中国景徳鎮窯の龍文青花碗、241は畳付に砂を付ける中国漳州窯の磁器質青花碗である。

242～249は灰釉の唐津焼である。皿の246は胎土目で、大皿(盤)の249には鉄絵を施すが、248は砂目を残す溝縁皿で、244の碗は全釉であり、新しい段階の唐津が加わっているのが判る。

250・251は肥前磁器(伊万里)である。250は瓶の体部で、全周の四分の一ほどの遺存破片のうちには染付がなく、白磁かも知れない。251は高台部無釉の碗で、高台上部に圏線を残す染付である。

252・253は美濃焼の大窯期灰釉碗と折縁ソギ菊皿である。

254は備前焼の無頸壺、255～257は備前焼の擂鉢である。肥前磁器の存在など、この遺構の埋没は17世紀前～中葉にまで下ることが明らかであるが、これらの擂鉢の製作年代は16世紀末に遡る。

258～260は瓦である。258の丸瓦内面にはコビキＢ痕が残り、259の軒平瓦は唐草二転で側区も広く、17世紀前葉(岡山城４～５式)の特徴を示している。ただ260はそれらより製作が古そうである。

他に、イノシシの下顎骨など数点の動物骨が出土している。

ｈ．ＳＫ75出土（第48図261～263）

261は底部に回転糸切り痕を残す土師質土器の皿、262は中国景徳鎮窯の青花碗である。263は焼成不良で産地不明の皿である。高台無釉、見込を円形に釉剥ぎし、圏線を施す。

ｉ．ＳＫ68出土（第49・50図264～298）

264～268は土師質土器の皿である。264・265は底部に糸切り痕を残すのに対し、266～268は手づくね成形の可能性がある。269は土師質土器の羽釜で、激しい使用のためか器面剥離が著しい。

270・271は中国漳州窯の磁器質花唐草文の青花碗で、271の畳付に砂が付着する。

272～277は灰釉の唐津焼である。皿のうち272は胎土目を残すが、274～276は砂目で、とくに275は溝縁である。また277の碗は全釉である。278も肥前系陶器で、緑釉と灰釉を内外面に掛け分ける。

279は美濃焼の織部・向付で、内面に布目を残す白色釉部分の破片である。裏に貼付脚部が残る。

280～282は備前焼である。280の擂鉢のスリメは斜め気味のみであるが、スリメの間隔は詰んできている。281は茶入形の水注で、体部に穴があき注口の剥落痕がある。282は徳利の口縁である。

282～289は漆器碗である。283・284・288は内外面とも黒漆、285・286・289は内面朱漆、外面黒漆、287は内外面とも朱漆である。283・284、それに恐らく285・286は高高台で、285の外面には花紋が描かれている。287～289は高台が低く、とくに287・288は薄手でシャープな造りである。

290は白木の片口箸で、ＳＫ72の木箸に比べると各部の断面が円形に近く、精良である。

291は連歯下駄で、細身の端部丸型である。292は両面黒漆塗りの丸板で曲物類の蓋か底とみられる。293は三角板の片面に、各辺端から引いた位置に細板を木釘で固定し、器物の蓋類とみられる。

294はカスガイ状の折曲げ鉄板、295は頁岩製の砥石である。

296は牛角芯である。表の角鞘は残っていおらず、角製品の製作に用いられたとみられる。解体時

のものとみられる幅1mm強、長さ20mmの切擦痕が内湾側の側部に斜めについている。

297の軒平瓦は中心飾が不明であるが唐草二転で側区も長く、298の軒丸瓦は左三巴に15個前後の珠文を配し、ともに17世紀前葉(岡山城４～５式)のものと判断できる。

他に、珊瑚に付着したカキ殻が１点、イノシシほかの動物骨が２点出土している。

ｊ．出土遺構不明の下駄（第50図299）

この下駄は出土遺構が不明となってしまったが、下層遺構のいずれかの大形土壙から出土したものとみられる。連歯型で長方形の台部に「ハ」形の焼印を押している。

２.中層遺構

中層遺構は17世紀第２四半期頃に埋没したとみられるが、大形の土壙が少なく、暗渠３・暗渠１に伴う遺物が主体である。その他の土壙から出土した遺物は、大量の遺物を含む下層遺構の埋土を中層遺構が切り込んだ結果として、本来は下層に伴っていたものが混入した可能性も否定できない。

ａ．暗渠３出土（第５１図300～303）

暗渠３の土管を構成するのは、尾部有段式の普通の丸瓦で、総ての内面にはコビキＡ痕が観察でき、器面への炭素の吸着が悪く、灰色を呈するものや、焼成が甘く断面の芯部と外側でサンドイッチ状に発色が異なるものが含まれる。内面に吊紐痕を残すものも多い。長さは27.5～31.0cmとややバラツキがある。遺構の年代は17世紀第２四半期頃とみられるが、瓦の製作年代は16世紀末の宇喜多秀家期(岡山城２式)に遡り、古瓦を流用して構築されたとみられる。一部を300～303として示した。

ｂ．暗渠１出土（第５１図304～310）

暗渠３と異なり、土管を構成するのは304・305を代表例として示した筒形の専用材である。口縁と先細りの尾部を入れ子に繋ぐ仕組みであるが、瓦と全く同質で、瓦工人によって、瓦と一緒に焼成されたと考えてよい。内面はコビキＢ痕の後に横ナデを行い、305にはヘラ書きの文字がある。「御ふく」などと読めそうであるが、全体の判読には至っていない。各個体とも長さは26cm前後であるが、口径は21～24cmと個体差があり、それほど緻密に組めるものではない。また、この口径は一般の丸瓦製作時にできる円筒よりかなり大きく、土管材としてより特化したものといえる。

306～310は土管の掘り方埋土などから出土した。306は初鋳1107年の北宋銭である大観通寶、307は底部回転糸切りの土師質土器皿である。308は畳付に砂を付着させる中国漳州窯の花唐草文磁器質碗、309は景徳鎮窯の青花皿、301は漳州窯とみられる磁器質青花の端反皿である。

ｃ．ＳＫ63出土（第52図311～312）

311は手づくね成形の可能性がある土師質土器皿で、口縁に煤が付着して灯明皿として使用されたことが判る。312は胎土目を残す唐津の灰釉皿である。

ｄ．ＳＫ66出土（第52図313～317）

313・314は唐津の灰釉皿で、313には鉄絵が施され、314は胎土目を残す。315は美濃焼の灰釉縁折ソギ菊皿、316・317は底部回転糸切りの土師質土器の皿である。

ｅ．ＳＫ50出土（第52図318～320）

318は中国景徳鎮窯の薄手精製の青花碗、319・320は唐津の灰釉皿で、320は胎土目を残す。

ｆ．ＳＫ17出土（第52図321）

321は中国龍泉窯系とみられる青磁碗の高台部で、前代遺物の混入か伝世品とみられる。

ｇ．ＳＫ53出土（第52図322）

322は備前焼の鉢である。体部は内抱え気味に立ち上がり、口縁の内外に凹線による変化をもつ。

3.上層遺構

上層生活面は17世紀中葉に埋没したとみられるが、上方の層位から掘り込まれた遺構もこの面で検出したため、17世紀中葉までの遺物だけを含む遺構と17世紀後半以後の遺物を含む遺構がある。

ａ．暗渠２出土（第53・54図323～335）

323～324は、開口部や掘方の埋土から出土した。323は唐津の灰釉大皿で、鉄絵を施し、見込に胎土目が残る。324は備前焼の擂鉢であるが、製作は16世紀後葉に遡る。325は粘板岩製の硯である。

326～329の瓦は、補助材として掘方内の土管周囲に配されていたものである。326～328の軒丸は左三巴に19～27と多数の珠文を配し、16世紀最終末から17世紀初の製品(岡山城２～４式)とみられる。329は完形の丸瓦で、内面にはコビキＢ痕を残す。

330～335はこの遺構の本体を形成した瓦質の土管である。胎土や焼成は岡山城で出土する16世紀末～17世紀前半の瓦と同じで、丸瓦製作中にできる円筒を半裁せずに製品としたような形態と大きさをもつ。長さは27～30cm、口径14cm前後であるが、尾部の形態から、先細タイプと有段タイプに分類できる。先細タイプが量の主体を占め、たいていがコビキＢ痕を残すが、図化できなかった個体に確実にコビキＡ痕を残すものがある。また、有段タイプは基本的にコビキＡ技法によると判断できるが、335は典型的なコビキＡ痕を残す部分をもちながら、部位によっては図に拓本を示したような粗いコビキＢと観察できる状況に変化する。いずれにせよ、この遺構の全体とすれば、尾部に異なるタイプがあり、コビキもＡ・Ｂのものがあることから、同時に焼かれた新調の土管が一括して組まれたというより、流用品を含む土管材の寄せ集めと判断できる。

ｂ．ＳＫ23出土（第55図336～345）

17世紀中葉までの遺物からなる。336～338は糸切りの土師質土器皿、339は美濃焼の灰釉皿で大窯期中頃の製品とみられる。340～342は灰釉の唐津焼で、341は鉄絵を施すが、340は高台内にも施釉し、新しい段階の唐津である。343・344は備前焼、345は珠文17個前後の左三巴文軒丸瓦である。

ｃ．ＳＫ31出土（第55図346～351）

17世紀中葉までのものだけで構成される。346～348は回転糸切り痕を底部に残す土師質土器の皿である。349は中国漳州窯系の磁器質青花碗で、特徴的な花唐草文を意匠としている。350は唐津焼の灰釉皿で、高台脇の削りが浅く、見込には胎土目を残している。351は備前焼の擂鉢で、口縁帯が寸詰まりになりながら、スリメに斜め方向のものが付加され、17世紀初頭の特徴をもっている。

ｄ．ＳＫ22出土（第56図352～359）

17世紀中葉までのものだけで構成される。352～354は土師質土器皿で、353・354は底部に回転糸切り痕が残る。352では観察されないが、糸切り後にナデが行われた結果の可能性が考えられる。355は中国景徳鎮窯の青花碗であるが、破片のため、体部の主文は残っていない。356は唐津焼の灰釉丸皿、357も唐津焼の灰釉碗である。358の備前擂鉢は、口縁帯が寸詰まりになりながら、スリメに斜め方向のものが付加される段階のものである。359の丸瓦には、内面にコビキＡ痕が残る。

ｅ．ＳＫ52出土（第56図360～368）

この遺構は17世紀の中葉を過ぎ、後半に至る遺物を含む。360・361は灰釉の唐津焼で、ともに鉢形

であるが内面に無釉部があり、火入の類とみられ、胎土は鉄分が多い。362～365は肥前磁器の染付碗で、362は網文、365は松葉が残る。366は備前焼の擂鉢で、口縁内面が二条の凹線状となり、放射状のスリメは間隔が詰まっている。367は頁岩製の砥石、368は内面に細布目を残す軒丸瓦である。

ｆ．ＳＫ21出土（第57図369～376）

17世紀の中葉の遺物を含む。369～373は回転糸切り底の土師質土器皿である。374は備前焼の擂鉢で、放射状のスリメの間隔が詰まっている。375は備前焼の亀形水滴で完形である。甲羅の文様は棒状スタンプの刺突による。376は鉄器で小柄とみられる。

ｇ．ＳＫ16出土（第57図377～382）

17世紀の中葉の遺物を含む。377は底部糸切りの土師質土器の皿、378は唐津焼の灰釉鉢、379は美濃の灰釉皿である。380は肥前磁器の染付皿で菊花文を意匠とする。381は備前焼の擂鉢で、放射状のスリメの間隔が詰まっている。382は鉄の針金である。

ｈ．ＳＫ51出土（第58図383～396）

17世紀第３四半期頃の一括資料といえる。383は糸切りの土師皿で、17世紀前葉に比べて薄手で、見込が浅く、底部と体部の境の段が滑らかである。384は土師質の焙烙で、難波Ｅ類に当り、煤が顕著に付く。385は瓦と同質の三足火鉢である。386は精良土を用いた肥前内野山系の灰釉陶器で全釉である。387は肥前の鉄釉陶器碗で、高台が高く整っている。388・389は肥前磁器の染付碗で、388は網文、389は風景で高台内に圏線と「太明成化年製」銘。390は肥前磁器の赤絵で、高台脇に呉須圏線、体部は赤筆で円文を書き、内を赤く塗りつぶしている。391・392は備前焼擂鉢で、スリメが高密度で、392は口縁内が凹線状となるが、体部はヘラ削りを行わず、底面も整美なベタ底には至っていない。393は備前焼徳利、394は頁岩の砥石、395・396は主文数12個の軒丸瓦で、395はコビキＢ痕を残す。

ｉ．ＳＫ62出土（第59図397～402）

江戸後期の遺物を含む。397は土師質の回転糸切り皿、398は土師質の甕、399・401は京・信楽系の灰釉陶器で、401には見込にハリ痕が残る。400は瀬戸美濃の染付磁器、402はカキ釉の行平である。

ｊ．ＳＫ55出土（第59図403～407）

403は唐津の碗で、胎土に砂粒が多く藁灰釉を掛け、初期の唐津である岸岳系に分類される。404は胎土目の灰釉唐津の大皿(盤)、405は肥前磁器染付碗で、高台は無釉である。406は土師質で外型成形とみられる十能類、407は暗赤褐色の塗土を施す備前の変形徳利で17世紀末頃のものとみられる。

ｋ．ＳＫ５出土（第59図408）

408は備前焼擂鉢でスリメは放射状に斜めが付加されている。16世紀末～17世紀初の製品。

ｌ．調査区外井戸出土（第59図409）

409は発掘区外の工事掘削で検出された近代石組井戸から出土した。光沢のある陶石を用いた染付磁器の蓋付き鉢で、文様が細かく発色も良い高級品である。19世紀の関西系諸窯製とみられる。

ｍ．調査区ＳＫ２出土（第59図410）

410は備前焼の火入類で、底部にヘラ記号がある。16世紀末～17世紀前葉の製品とみられる。

ｎ．調査区ＳＫ29出土（第59図411～413）

411は中国漳州窯の磁器青花碗で畳付に砂が付着する。412は美濃焼の灰釉皿、413は17世紀代とみられる肥前磁器の染付瓶である。

曲輪内下層ＳＫ34出土（第38図）

番号	種　類	器種・部位	法量（cm）			胎土（素材）と焼成 種類・状況・含有物-器面色・断面色-焼成	釉(・漆・装飾) 釉種-色-部位	文　様 施文材-意匠	技　法　な　ど	製　作　時　期	備　　考
			口径 長さ	器高 高さ	底径 幅						
88	土師質土器	小皿	(6.6)	0.9	(5.4)	1mm以下砂粒-7.5YR8/2・7.5YR6/4-良好			回転糸切り	16世紀末～17世紀初	
89	土師質土器	小皿	10.4	2.9	6.6	2mm以下砂粒-10YR7/4-良好			回転糸切り	16世紀末～17世紀初	
90	土師質土器	小皿	10.2	3.1	6.3	0.5mm以下砂粒-10YR7/4-良好			回転糸切り	16世紀末～17世紀初	
91	土師質土器	小皿	9.1	2.0	5.6	1mm以下砂粒・鉄分粒-10YR7/4-良好			回転糸切り	16世紀末～17世紀初	
92	土師質土器	小皿	(10.8)	1.6	5.6	1mm以下砂粒・鉄分粒-10YR7/2-良好			回転糸切り	16世紀末～17世紀初	
93	土師質土器	小皿	(9.9)	2.4	(5.7)	0.5mm以下砂粒-7.5YR6/6-良好			回転糸切り	16世紀末～17世紀初	
94	土師質土器	小皿	(9.6)	1.5	(6.6)	2mm以下砂粒・鉄分粒-7.5YR6/6-良好			底部回転糸切り後にナデか	16世紀末～17世紀初	
95	土師質土器	小皿	(9.0)	1.7	(6.0)	0.5mm以下砂粒-7.5YR6/6-良好			底部回転糸切り後にナデか	16世紀末～17世紀初	
96	土師質土器	小皿	9.7	1.9	5.6	0.5mm以下砂粒-2.5Y7/3-良好			手づくね成形	16世紀末～17世紀初	京都系
97	唐津	瓶・口縁	3.5			1mm以下砂粒-2.5Y7/1-良好	藁灰釉-10Y7/2～7.5Y6/2			16世紀末～17世紀初	体部は鉛釉掛け分けか、大橋Ⅰ期
98	備前	輪花皿	(5.4)	2.4		0.5mm以下砂粒-10R3/2・N6/-良好			手づくね成形	16世紀末～17世紀初	
99	備前	大皿(盤)	(32.1)			1mm以下砂粒-10YR3/4～5/4・10YR6/3-良好				16世紀末	内面僅かに黄ゴマ
100	備前	大甕・口縁	(41.6)			3mm以下砂粒-2.5YR3/2・2.5YR5/4-良好				16世紀末(文禄頃)	
101	備前	大甕・体部			(42.4)	3mm以下砂粒-2.5YR3/2・2.5YR5/4-良好				16世紀中葉	
102	石製品	小形硯石				粘板岩-N4/				16世紀末～17世紀初？	右側部欠損
103	瓦	飾瓦～滑止付平瓦			2.0	1mm以下砂・生地微粒-N3/・表皮N7/芯N/4-良好			貼付凸帯下にカキヤブリ痕	16世紀末～17世紀初	

曲輪内下層ＳＫ72出土（第39図～第43図）

番号	種　類	器種・部位	法量（cm）			胎土（素材）と焼成 種類・状況・含有物-器面色・断面色-焼成	釉(・漆・装飾) 釉種-色-部位	文　様 施文材-意匠	技　法　な　ど	製　作　時　期	備　　考
			口径 長さ	器高 高さ	底径 幅						
104	土師質土器	小皿	7.3	1.8	4.8	1mm以下砂僅-2.5Y6/3-良好			回転糸切り	17世紀初	ほぼ完形、口縁一部煤付着
105	土師質土器	小皿	(8.4)	1.5	(5.4)	0.5mm以下砂僅-2.5Y5/1・2.5Y7/1-良好			回転糸切り	17世紀初	
106	土師質土器	小皿	(8.7)	1.5	(5.1)	0.5mm以下砂僅-2.5Y6/3・2.5Y3/1-良好			回転糸切り	17世紀初	口縁に煤付着
107	土師質土器	小皿	(9.6)	2.1	(4.8)	微粒-2.5Y8/1-良好			回転糸切り	17世紀初	
108	土師質土器	小皿	(9.0)	2.2	5.0	0.5mm以下砂僅-2.5Y7/2-良好			回転糸切り	17世紀初	
109	土師質土器	小皿	(8.7)	1.8	4.2	1mm以下砂僅-2.5Y7/3-良好			回転糸切り	17世紀初	
110	土師質土器	小皿	(10.2)	1.8	(6.0)	微粒-2.5Y6/2-良好			回転糸切り	17世紀初	
111	土師質土器	小皿	(10.2)	(2.1)	(6.0)	1mm以下砂僅-2.5Y7/3-良好			回転糸切り	17世紀初	
112	土師質土器	小皿	(10.2)	(1.8)	(6.0)	1mm以下砂僅-5Y7/2～-5Y3/1-良好			回転糸切り	17世紀初	
113	土師質土器	小皿	(10.2)	(2.9)	5.3	0.5mm以下砂僅-10YR7/4-良好			回転糸切り	17世紀初	
114	土師質土器	小皿	(10.2)	(2.5)	6.0	0.5mm以下砂僅-7.5YR7/6-良好			回転糸切り	17世紀初	
115	土師質土器	小皿	(10.5)	(3.0)	5.9	微粒-7.5YR7/6-良好			回転糸切り	17世紀初	
116	土師質土器	小皿	(11.1)	(2.1)	7.5	1mm以下砂僅-10YR7/4-良好			回転糸切り	17世紀初	口縁に煤付着
117	土師質土器	小皿	(9.9)	(3.3)	5.2	1mm以下砂僅-7.5YR7/6-良好			回転糸切り	17世紀初	
118	土師質土器	小皿	11.4	2.7	6.7	1mm以下砂・鉄分粒-10YR7/4-良好			回転糸切り	17世紀初	口縁に煤付着
119	土師質土器	小皿	(9.3)	2.1	5.4	微粒-5Y6/1-良好			回転糸切り後ゴザ目状圧痕	17世紀初	口縁肥厚気味
120	中国(景徳鎮)青花	碗			(5.1)	陶石-N8/-良好	透明釉-2.5GY8/1	呉須(濃青)	畳付釉ゲズリ	16世紀末～17世紀初	染付椀Ｈ群
121	中国(景徳鎮)青花	碗	(9.9)			陶石-N8/-良好	透明釉-2.5GY8/1	呉須(濃青)-花唐		16世紀末～17世紀初	
122	中国(景徳鎮)青花	小碗	(6.7)	3.7	2.4	陶石-N8/-良好	透明釉-2.5GY8/1	呉須(藍)		16世紀末～17世紀初	
123	中国(漳州)青花	碗			(4.2)	陶石-N8/-良好(磁器質)	透明釉-2.5GY8/1	呉須(濃青)	畳付に砂付着	17世紀初	染付椀Ｆ群
124	中国(漳州)青花	碗	(10.2)			陶石-N8/-良好(磁器質)	透明釉-2.5GY8/1	呉須(鈍青)-花唐		17世紀初	染付椀Ｆ群
125	中国(漳州)青花	碗			(4.5)	陶石-N8/-良好(磁器質)	透明釉-2.5GY8/1	呉須(鈍青)-花唐	畳付に砂付着	17世紀初	染付椀Ｆ２群
126	朝鮮王朝白磁	皿	(16.2)	3.3	(6.3)	陶石-N8/-良好(陶質的)	透明釉-7.5GY8/2		見込・畳付に５～６の砂目	16世紀末～17世紀初	
127	朝鮮王朝白磁	碗	(10.7)			陶石-N8/-良好(陶質的)	透明釉-7.5GY7/1			16世紀末～17世紀初	
128	朝鮮王朝陶器	中皿			(5.4)	0.5mm以下砂僅-10R3/2・10R4/1-良好	灰釉-5Y4/1	押印花文に白土	畳付きに砂目痕	16世紀末～17世紀初	

曲輪内下層ＳＫ72出土（第39図～第43図）つづき

番号	種類	器種・部位	法量（cm） 口径長さ	器高高さ	底径幅	胎土（素材）と焼成 種類・状況・含有物-器面色・断面色-焼成	釉(・漆・装飾) 釉種-色-部位	文様 施文材-意匠	技法など	製作時期	備考
129	唐津	丸碗	(10.8)	6.9	3.7	0.5mm以下砂僅-10YR6/4・2.5Y7/3-良好	灰釉-5Y7/3-高台脇無	鉄絵(2.5Y3/1)	見込に胎土目	17世紀初	大橋Ⅰ期
130	唐津	皿	12.6	4.2	3.9	0.5mm以下砂僅-5Y6/2・2.5Y7/3-良好	灰釉-5Y5/2-高台脇無	鉄絵(2.5Y3/1)	見込に胎土目	17世紀初	大橋Ⅰ期
131	唐津	皿			(4.6)	1mm以下砂僅-5YR4/3・10YR6/2-良好	灰釉-2.5Y6/3-高台脇無		見込に胎土目	17世紀初	大橋Ⅰ期
132	唐津	皿	(11.1)	4.2	4.2	0.5mm以下砂僅-10YR5/4・10YR6/3-良好	灰釉-7.5YR5/2-高台脇無		見込に胎土目	17世紀初	大橋Ⅰ期
133	唐津	皿	(12.2)	3.7	4.2	0.5mm以下砂僅-7.5YR4/3・5Y6/1-良好	灰釉-7.5Y6/3-高台脇無		見込に胎土目	17世紀初	大橋Ⅰ期
134	唐津	皿	(12.8)	3.3	(4.2)	0.5mm以下砂僅-10YR6/4・10YR7/3-良好	灰釉-2.5Y6/3-高台脇無		見込に胎土目	17世紀初	大橋Ⅰ期
135	唐津	皿	(13.2)	4.5	4.7	0.5mm以下砂僅-2.5Y6/3・2.5Y8/3-良好	灰釉-2.5Y6/4-高台脇無		見込に胎土目	17世紀初	大橋Ⅰ期
136	唐津	皿	12.0	3.4	4.3	0.5mm以下砂僅-7.5YR4/3・7.5Y6/1-良好	灰釉-7.5Y6/2-高台脇無		見込に胎土目	17世紀初	体部外面に別個体片熔着、大橋Ⅰ期
137	唐津	皿	(13.5)	3.2	4.3	1mm以下砂僅-2.5Y7/2・7.5YR7/3-良好	灰釉-7.5Y7/1-高台脇無		見込に胎土目	17世紀初	大橋Ⅰ期
138	唐津	皿	(12.5)	3.6	4.8	1mm以下砂-7.5Y6/1・7.5Y6/1-良好	灰釉-7.5Y6/1-高台脇無	鉄絵(7.5Y4/1)	見込に胎土目	17世紀初	大橋Ⅰ期
139	唐津	皿	10.8	3.5	3.8	0.5mm以下砂僅-7.5Y7/2・7.5Y7/2-良好	灰釉-7.5Y7/2-高台脇無		見込に胎土目	17世紀初	大橋Ⅰ期
140	唐津	皿	(10.2)	2.9	(3.8)	0.5mm以下砂-5YR4/3・2.5Y6/2-良好	灰釉-7.5Y5/1-高台脇無		見込に胎土目	17世紀初	大橋Ⅰ期
141	唐津	輪花皿	12.7	3.5	4.5	0.5mm以下砂僅-10YR6/3・10YR6/1-良好	灰釉-7.5Y6/2-高台脇無		見込に胎土目	17世紀初	大橋Ⅰ期
142	唐津	皿	11.3	3.2	5.0	0.5mm以下砂僅-7.5YR5/3・10YR7/3-良好	灰釉-105YR5/3-高台脇無			17世紀初	大橋Ⅰ期
143	唐津	大深皿	(33.0)			1mm以下砂-7.5YR4/2・10YR7/3-良好	灰釉-105YR5/3-高台脇無			17世紀初	釉ガラス化不十分、口縁折、大橋Ⅰ期
144	美濃	天目碗			4.7	1mm以下砂僅-N8/・N8/-良好	鉄釉-2.5Y2/1-高台脇無		高台内に輪トチン痕	17世紀初	登窯Ⅰ期
145	美濃	縁折ソギ菊皿	(10.8)	1.8	(6.0)	0.5mm以下砂僅-7.5Y7/1-良好	灰釉-7.5Y4/3-全釉		見込み釉剥ぎ・輪トチン痕	16世紀後葉	大窯期後半
146	美濃	縁折ソギ菊皿	(10.8)	2.2	(5.9)	0.5mm以下砂僅-7.5Y8/2-良好	灰釉-7.5Y6/3-全釉		全釉、高台内に輪トチン痕	16世紀後葉	大窯期後半
147	美濃	皿			(6.3)	1mm以下砂僅-2.5Y8/1-良好	鉄釉5YR3/4+鉛釉2.5Y4/6		見込釉剥ぎ、高台内輪トチン痕	16世紀後葉	大窯期後半
148	美濃	丸皿	(10.5)	2.2	6.3	0.5mm以下砂僅-2.5Y8/2-良好	灰釉-5Y6/6-全釉			16世紀後葉	大窯期後半
149	備前	大皿(盤)	(30.9)	5.5	(20.1)	0.5mm以下砂-7.5YR6/3・7.5YR6/2-良好	塗土-7.5YR3/2～4/3-外面		底面に重焼痕	17世紀初	底面に黄ゴマ
150	備前	大皿(盤)	(26.9)	4.7	(17.7)	1mm以下砂僅-10YR6/3・10YR6/2-良好			体部外面に重焼痕	17世紀初	見込灰被り、底面に二重円刻印
151	備前	浅丸鉢(盤)	(29.7)	4.4	(24.6)	1mm以下砂-5YR2/1～3/3・N5/-良好			体部外面に重焼痕	16世紀末～17世紀初	見込に黄ゴマ、152と同一個体？
152	備前	浅丸鉢(盤)	(25.7)	4.5	(18.6)	0.5mm以下砂-5YR2/1～3/3・N5/-良好				16世紀末～17世紀初	見込に重焼痕(ボタ餅)・黄ゴマ
153	備前	鉢				0.5mm以下砂僅-7.5YR3/2～6/2・N4/-良好			放射スリメ	16世紀末～17世紀初	
154	備前	擂鉢	(27.9)	12.6	(11.7)	1mm以下砂僅-2.5YR5/6・2.5YR5/6-良好			放射+斜めスリメ、見込十字	17世紀初	スリメ単位8・12本、Ⅰc期
155	備前	擂鉢			13.7	2mm以下砂僅-2.5YR4/4・2.5YR6/4-良好			体部上に波状文・ヘラ刻印△	17世紀初～前葉	スリメ単位10本、使用痕顕著、Ⅰ期
156	備前	壺	(9.9)			1mm以下砂-2.5YR3/1・2.5YR4/1-良好				15世紀	櫛目単位４本
157	漆器	椀			(6.3)		内外面とも黒漆		粗製(粗割)	16世紀末～17世紀初	
158	木製品	白木箸	26.2		0.8	ヒノキ属				16世紀末～17世紀初	両口、断面不定形で部位差が大
159	木製品	白木箸	23.4		0.9	ヒノキ属				16世紀末～17世紀初	両口、断面は体部:方形、先:円
160	木製品	白木箸	[21.4]		0.7	スギ				16世紀末～17世紀初	体部断面は亀甲形
161	木製品	白木箸	[21.3]		0.8	スギ				16世紀末～17世紀初	両口？、体部断面は亀甲形
162	木製品	白木箸	23.3		0.7	スギ				16世紀末～17世紀初	片口、体部断面は整った亀甲形
163	木製品	白木箸	21.8		0.7	スギ			比較的精製	16世紀末～17世紀初	片口、体部断面は不定亀甲形
164	木製品	白木箸	21.9		0.8	スギ			正目取り	16世紀末～17世紀初	片口、断面は一部不定も円形に近い
165	木製品	白木折敷	30.0			ヒノキ属			板目取り	16世紀末～17世紀初	釘穴あり、表面に線状キズ
166	木製品	側部材	[24.5]	2.4			黒漆-両側・上面		板目取り	16世紀末～17世紀初	折敷の側板か、木釘穴、167とセット
167	木製品	側部材	[24.7]	2.4			黒漆-両側・上面		精製品	16世紀末～17世紀初	折敷の側板か、釘穴
168	木製品		17.6			スギ				16世紀末～17世紀初	釘穴４穴
169	木製品	補強用飾り材	20.4	3.2	1.2	針葉樹	墨塗または薄い黒漆塗			16世紀末～17世紀初	両小口に釘穴
170	木製品	角棒材						表面に刻線・×文	台部柾目、裏面に補修釘遺存	16世紀末～17世紀初	中支え用？
171	木製品	連歯下駄	20.7	3.3	8.5	ヒノキ属			台部柾目取り	16世紀末～17世紀初	右足使用、裏面に補修釘遺存
172	木製品	連歯下駄	21.5	2.4	8.7	針葉樹			台部柾目取り	16世紀末～17世紀初	右足使用、歯の消耗顕著
173	木製品	連歯下駄(子供用)	14.3	3.1	5.3	針葉樹	側面・裏面に黒漆遺存		台部板目(芯寄)	16世紀末～17世紀初	
174	木製品	露卯下駄	21.6	5.6	9.6	針葉樹			台部柾目取り	16世紀末～17世紀初	逆ハ形歯、歯消耗・砂付着
175	木製品	露卯下駄	18.0	5.7	7.4	ニヨウマツ類		焼印-草状文	台部板目(芯寄)、台部打釘補修	16世紀末～17世紀初	逆ハ形歯、歯消耗・砂付着
176	木製品	露卯下駄	21.4	7.3	8.7	ヒノキ属				16世紀末～17世紀初	逆ハ形歯、歯の消耗ｱﾝﾊﾞﾗﾝｽ・砂付着
177	木製品	羽子板	29.2	5.0		針葉樹				16世紀末～17世紀初	板部の一部に敲打痕
178	石製品	砥石	[9.3]		[6.9]	砂岩-10Y5/1				16世紀末～17世紀初	表裏面とも研磨に使用

曲輪内下層ＳＫ72出土（第39図～第43図）つづき

番号	種　類	器種・部位	法量（cm）			胎土（素材）と焼成 種類・状況・含有物-器面色・断面色-焼成	釉(・漆・装飾) 釉種-色-部位	文　様 施文材-意匠	技　法　な　ど	製　作　時　期	備　　考
			口径 長さ	器高 高さ	底径 幅						
179	瓦	軒丸瓦・瓦当	(13.3)	3.3		1mm以下砂・生地微粒-器面N3/・表N7/芯N6/-良好		左三巴、珠文12?	炭素吸着良好	17世紀前葉	岡山城４式
180	瓦	軒平瓦・瓦当				0.5mm以下砂-7.5YR6/6・2.5Y8/3-二次被熱焼戻		三葉に唐草三転		16世紀末～17世紀前葉	岡山城中の段10などと同笵か、２式
181	瓦	鬼瓦・貼付文様部				0.5mm以下砂-N4/・N6/-良好		人物か猿の手		16世紀末～17世紀前葉	貼付文様部

曲輪内下層ＳＫ71出土（第44図）

番号	種　類	器種・部位	法量（cm）			胎土（素材）と焼成 種類・状況・含有物-器面色・断面色-焼成	釉(・漆・装飾) 釉種-色-部位	文　様 施文材-意匠	技　法　な　ど	製　作　時　期	備　　考
			口径 長さ	器高 高さ	底径 幅						
182	土師質土器	小皿	(6.0)	1.2	(4.2)	微粒-2.5Y7/2-良好			回転糸切り	16世紀末～17世紀前葉	
183	土師質土器	小皿	(7.2)	1.5	(4.5)	0.5mm以下砂粒僅-2.5Y7/2-良好			回転糸切り	16世紀末～17世紀前葉	
184	土師質土器	小皿	(9.3)	1.2	(6.9)	0.5mm以下砂粒僅-10YR7/3-良好			回転糸切り	16世紀末～17世紀前葉	
185	土師質土器	小皿	(16.5)	3.3	(7.5)	1mm以下砂粒僅-10YR7/4-良好			回転糸切り	16世紀末～17世紀前葉	
186	土師質土器	小皿	(10.5)	2.1	(5.1)	微粒-5Y7/2-良好			手づくね成形？	16世紀末～17世紀前葉	
187	中国(景徳鎮)青花	碗	(13.5)			陶石-N8/-良好	透明釉-5GY8/1	呉須(濃青)		16世紀末～17世紀初	
188	唐津	丸皿	(12.3)	3.9	(4.8)	0.5mm以下砂粒僅-7.5YR2/1・7.5YR5/1-良好	灰釉-7.5Y3/2-高台脇無			17世紀前葉	大橋Ⅰ期
189	美濃	天目碗	(11.4)			1mm以下砂粒僅-5Y8/2・5Y8/2-良好	鉄釉-7.5YR3/2			16世紀末	大窯期
190	備前	擂鉢	(21.3)	(9.9)	(9.9)	1mm以下砂粒僅-5YR4/2・2.5YR5/4-良好				17世紀前葉	ｽﾘﾒ単位10本、内面炭化物付着、2a期
191	備前	徳利	(5.4)			1mm以下砂粒僅-10R4/2・2.5Y7/1-良好				16世紀末～17世紀前葉	口縁黄ゴマ

曲輪内下層ＳＫ77出土（第44図）

番号	種　類	器種・部位	法量（cm）			胎土（素材）と焼成 種類・状況・含有物-器面色・断面色-焼成	釉(・漆・装飾) 釉種-色-部位	文　様 施文材-意匠	技　法　な　ど	製　作　時　期	備　　考
			口径 長さ	器高 高さ	底径 幅						
192	土師質土器	小皿	6.9	1.6	3.9	0.5mm以下砂粒僅-2.5Y7/3-良好			糸切り後ナデ(～手づくね)	16世紀末～17世紀前葉	
193	土師質土器	小皿	(7.8)	1.6	(4.2)	0.5mm以下砂粒僅-2.5Y7/3-良好			糸切り後ナデ(～手づくね)	16世紀末～17世紀前葉	
194	土師質土器	小皿	9.0	1.5	(5.7)	2mm以下砂粒僅-2.5Y8/3～4/1-良好			回転糸切り	16世紀末～17世紀前葉	
195	土師質土器	小皿	(9.9)	3.3	(6.3)	微粒-2.5Y7/2-良好			回転糸切り	16世紀末～17世紀前葉	
196	備前	大皿(盤)	23.3	3.8	14.1	2mm以下砂粒-2.5YR3/1～4/2-良好			見込み重焼き痕(ボタ餅)	16世紀末～17世紀初	
197	土師質土器	輪花小皿	(6.6)	2.1	3.3	0.5mm以下砂粒僅-2.5YR4/6・7.5YR7/4-良好				16世紀末～17世紀初	

曲輪内下層ＳＫ76出土（第45図）

番号	種類	器種・部位	法量（cm） 口径長さ	器高高さ	底径幅	胎土（素材）と焼成 種類・状況・含有物-器面色・断面色-焼成	釉(・漆・装飾) 釉種-色-部位	文様 施文材-意匠	技法など	製作時期	備考
198	土師質土器	小皿	9.9	2.1	6.0	0.5mm以下砂粒僅-2.5Y8/1-良好			回転糸切り	16世紀末～17世紀前葉	染付椀Ｆ群系
199	中国(漳州)青花	碗			(5.7)	陶石-N8/-良好	透明釉-5BG7/1		畳付釉ケズリ	16世紀末～17世紀前葉	
200	中国白磁	端反皿				陶石-N8/-良好	透明釉-N8/			16世紀末	染付皿Ｅ群
201	中国(景徳鎮)青花	丸皿	(11.1)	2.1	(6.6)	陶石-N8/-良好	透明釉-10GY8/1	呉須(藍)-葉	畳付外角釉ケズリ	16世紀末～17世紀初	染付皿Ｅ群
202	中国(景徳鎮)青花	丸皿	(10.8)	2.6	(6.3)	陶石-N8/-良好	透明釉-10GY8/1	呉須(藍)-人物	畳付外角釉ケズリ	16世紀末～17世紀初	大橋Ｉ期
203	唐津	碗	(11.4)	5.1	(4.5)	2mm以下砂粒-7.5YR5/4・7.5YR6/3-良好	灰釉-2.5Y5/3-高台脇無			17世紀初	大橋Ｉ期
204	唐津	三足火入(香炉)			(6.2)	1mm以下砂・生地微粒-5YR5/6・5YR5/1-良好	灰釉-5YR5/1-内面・底無			17世紀初	
205	欠番										大窯(後半期)製
206	美濃	碗	(9.9)			1mm以下砂-2.5Y8/2-良好	鉄釉-2.5YR3/4～2/1			16世紀末	大窯(後半期)製、完形
207	美濃	折縁ソギ菊皿	11.0	2.2	5.5	1mm以下砂-2.5Y8/2-良好	灰釉-5Y6/4-全釉	見込に陰花文	外底面に輪トチン痕	16世紀末	大窯(後半期)製
208	美濃	丸皿	(10.5)	2.1	5.9	1mm以下砂-7.5YR5/4・2.5Y8/3-良好	灰釉-5Y6/4-全釉		見込円形釉剥、外底面輪トチ	16世紀末	スリメ部を遺存しない破片、Ｉc期
209	備前	擂鉢				1mm以下砂-2.5YR3/3・7.5YR4/1-良好			口縁帯下に重焼痕	17世紀初	放射スリメ＋斜めスリメ、Ｉc期
210	備前	擂鉢				1mm以下砂-2.5YR5/4・N6/-良好				17世紀初	
211	備前	大皿(盤)				2mm以下砂多-5YR4/4・外7.5YR6/4芯7.5YR5/1-良				16世紀末～17世紀初	

曲輪内下層ＳＫ73出土（第45図・第46図）

番号	種類	器種・部位	法量（cm） 口径長さ	器高高さ	底径幅	胎土（素材）と焼成 種類・状況・含有物-器面色・断面色-焼成	釉(・漆・装飾) 釉種-色-部位	文様 施文材-意匠	技法など	製作時期	備考
212	土師質土器	小皿	(9.9)	1.8	7.0	0.5mm以下砂粒僅-2.5Y5/1・2.5Y6/1-良好			回転糸切り	16世紀末～17世紀前葉	
213	土師質土器	小皿	9.5	3.3	6.3	1mm以下砂粒僅-10YR6/4・10YR6/4-良好			回転糸切り	16世紀末～17世紀初	
214	土師質土器	焼塩壺			(5.7)	1mm砂僅・雲母含まず-10YR6/4・2.5YR6/6-良好			内面に細布目	16世紀末～17世紀前葉	二次被熱(焼塩に使用か)、畿内産
215	中国(景徳鎮)青花	丸皿	(11.1)			陶石-N8/-良好	透明釉-10GY8/1	呉須(藍)-人物	畳付外角釉ケズリ	16世紀末～17世紀初	染付皿Ｅ群
216	中国(景徳鎮)青花	丸皿			(8.1)	陶石-N8/-良好	透明釉-7.5GY8/1	呉須(濃青)-花		16世紀末～17世紀初	
217	唐津	碗(鉢形)	(11.1)	7.9	5.2	1mm以下砂粒僅-5YR6/6・5YR7/4-良好	鉄釉-5Y2/2-高台無			17世紀前葉	体上部を意匠として窪ませる、Ｉ期
218	唐津	碗	(10.8)			0.5mm以下砂粒僅-5Y6/1-良好	灰釉-5Y4/2			17世紀前葉	Ｉ期
219	唐津	浅鉢形皿	(11.1)			1mm以下砂粒-5YR6/4-良好	灰釉-5YR6/4			17世紀前葉	Ｉ期
220	唐津	丸皿	10.6	3.4	4.0	0.5mm以下砂粒僅-2.5YR4/4・2.5YR6/4-良好	灰釉-5Y5/3-高台脇無			17世紀前葉	底面墨書、Ｉ期
221	漆器	椀			6.9	トネリコ属	内外面とも朱漆			16世紀末～17世紀前葉	
222	木製品	連歯下駄	20.0	3.8	10.0	マツ属				16世紀末～17世紀前葉	

曲輪内下層ＳＫ69出土（第46図～第48図）

番号	種類	器種・部位	法量（cm） 口径長さ	器高高さ	底径幅	胎土（素材）と焼成 種類・状況・含有物-器面色・断面色-焼成	釉(・漆・装飾) 釉種-色-部位	文様 施文材-意匠	技法など	製作時期	備考
223	木製品	連歯下駄	20.0	3.2	8.9	ニヨウマツ類			台部は心部付近の板目	16世紀末～17世紀前葉	
224	木製品	連歯下駄	20.0	4.7	8.2	ツガ属		台部刻み「一」	歯部に心持ち、台部に板目	16世紀末～17世紀前葉	右足使用
225	木製品	連歯下駄	21.0	8.1	2.5	ヒノキ属			台部柾目取り	16世紀末～17世紀前葉	
226	木製品	連歯下駄	21.1	3.2	11.2	ツガ属			台部柾目取り	16世紀末～17世紀前葉	
227	木製品	連歯下駄	21.1	2.6	7.4	ヒノキ属			台部柾目取り	16世紀末～17世紀前葉	女性用？
228	木製品	連歯下駄		4.7	7.5	ヒノキ属？	歯側後面に黒漆遺存		台部柾目取り	16世紀末～17世紀前葉	女性用？、歯は逆ハ形

曲輪内下層ＳＫ69出土（第46図～第48図）つづき

番号	種　類	器種・部位	法量（cm）			胎土（素材）と焼成 種類・状況・含有物-器面色・断面色-焼成	釉(・漆・装飾) 釉種-色-部位	文　様 施文材-意匠	技　法　な　ど	製　作　時　期	備　　考
			口径 長さ	器高 高さ	底径 幅						
229	木製品	箱物部材板	[16.9]		[8.6]	ヒノキ属	内面朱漆、外面黒漆		柾目板	17世紀前葉	木釘遺存
230	土師質土器	小皿	(9.3)	1.3	6.4	1mm以下砂粒僅-10YR8/3-良好			回転糸切り	16世紀末～17世紀前葉	
231	土師質土器	小皿	(8.9)	1.4	(5.4)	1mm以下砂粒僅-10YR7/3-良好			回転糸切り	17世紀前葉	
232	土師質土器	小皿	10.3	1.8	6.2	0.5mm以下砂粒僅-2.5Y7/2・2.5Y2/1-良好			回転糸切り	16世紀末～17世紀前葉	口縁に煤付着
233	土師質土器	小皿	8.7	2.4	5.4	1mm以下砂粒僅-7.5YR6/4-良好			回転糸切り	16世紀末～17世紀前葉	
234	土師質土器	皿	(11.1)	3.0	(6.9)	0.5mm以下砂粒僅-7.5YR6/4-良好			回転糸切り	16世紀末～17世紀前葉	
235	土師質土器	小皿	(10.8)	2.1	(6.9)	0.5mm以下砂粒僅-10YR6/2・10YR4/1-良好			手づくね成形の可能性あり	16世紀末～17世紀前葉	
236	土師質土器	火入	(12.9)	5.1	(11.5)	1mm以下砂粒僅-10YR7/3・N5/-良好	外側～底面に塗墨？	外側面に花文印		16世紀後半～17世紀前葉	３足、口縁に煤付着
237	土師質土器	ナベ	(31.5)			2mm以下砂粒-N3/・2.5Y6/1-良好				16世紀後半～17世紀前葉	外面に煤付着
238	土師質土器	ナベ	(33.0)			1mm以下砂・鉄分粒-N3/・2.5Y3/2-良好				16世紀末～17世紀前葉？	外面に煤付着
239	土師質土器	土錘	4.5		0.8	0.5mm以下砂粒僅-10YR6/3-良好				16世紀末～17世紀前葉	3.6ｇ
240	中国(景徳鎮)青花	碗			(4.8)	陶石-N8/-良好	透明釉-5GY8/1	呉須(藍)-龍	畳付外角釉削り	17世紀前葉	染付碗Ｇ群
241	中国(漳州)青花	碗	(4.5)			陶石-N8/-良好(磁器質)	透明釉-2.5GY7/1-全釉	呉須(暗青)	畳付砂付着	17世紀前葉	染付碗Ｆ２群
242	唐津	碗	10.6	6.5	4.0	0.5mm以下砂粒僅-7.5YR5/3・5Y6/1-良好	灰釉-5Y6/2-高台脇無			17世紀前葉	大橋Ⅰ～Ⅱ期
243	唐津	碗	(9.7)			1mm以下砂・生地砂質-7.5YR5/4・7.5YR7/2-良好	灰釉-5Y5/2-高台脇無			17世紀前葉	大橋Ⅰ期
244	唐津	碗			4.7	0.5mm以下砂粒僅-7.5YR5/3・5Y6/1-良好	灰釉-2.5GY7/1-全釉			17世紀前葉	大橋Ⅱ期
245	唐津	皿	(13.8)			0.5mm以下砂粒僅-7.5YR7/3・5Y6/1-良好	灰釉-10Y6/2-高台脇無			17世紀前葉	大橋Ⅰ期
246	唐津	皿	12.2	4.2	4.8	0.5mm以下砂・生地砂質-10YR6/3・10YR6/3-良好	灰釉-5Y5/3-高台脇無		見込に胎土目	17世紀前葉	大橋Ⅰ期
247	唐津	皿	(11.4)	2.6	(3.9)	0.5mm以下砂-2.5Y6/2・5Y7/2-良好	灰釉-5Y6/3-高台脇無			17世紀前葉	大橋Ⅰ期
248	唐津	溝縁皿	(12.6)	2.4	4.5	0.5mm以下砂僅-2.5Y7/4・2.5Y7/4-良好	灰釉-10YR6/3-全釉		見込に砂目	17世紀前葉	大橋Ⅱ期
249	唐津	大皿(盤)	(27.6)			0.5mm以下砂-5Y7/1・5Y7/1-良好	灰釉-7.5Y7/2-高台脇無	鉄絵(2.5Y3/1)		17世紀前葉	大橋Ⅰ期
250	肥前白磁	瓶				陶石-N8/-良好	透明釉-10G7/1			17世紀前葉	漆継ぎで補修
251	肥前染付磁器	碗			(4.2)	陶石-N8/・N8/-良好	透明釉-10G7/1-高台内無	呉須(緑青)-圏線		16世紀末	大橋Ⅱ-2期
252	美濃	丸碗	(11.5)	6.0	5.2	0.5mm以下砂-2.5Y7/3・2.5Y8/2-良好	灰釉-5Y6/3			16世紀末	大窯(後半期)製、貫入
253	美濃	折縁ソギ菊皿	(10.9)	2.1	(6.6)	1mm以下砂粒-5Y8/2-良好	灰釉-5Y7/3			16世紀末	大窯(後半期)製
254	備前	無頸壺	(23.6)			3mm以下砂粒-10R3/2・2.5YR3/3-良好				16世紀末～17世紀初	外面黄ゴマ
255	備前	擂鉢			(18.0)	1mm以下砂粒-2.5YR4/1・N6/-良好				16世紀末	放射スリメ＋斜めスリメ、１期
256	備前	擂鉢	(28.8)			1mm以下砂粒-2.5YR4/4～7.5R4/2・2.5YR5/2-良好				16世紀末	放射スリメ＋斜めスリメ、１ｂ期
257	備前	擂鉢	(31.6)			2mm以下砂粒-10R3/1・10R4/1-良好				17世紀前葉	１ｂ期
258	瓦	軒丸	(14.5)			2mm以下砂粒-N3/～N5/・7.5Y7/1-良好		左三巴珠文17±	丸瓦部内面にコビキＢ痕	17世紀前葉	岡山城４式
259	瓦	軒平				1mm以下砂-7.5Y5/1・表7.5Y5/1芯7.5Y4/1-良好				16世紀末	岡山城４～５式
260	瓦	丸				1mm砂僅-N3/・表N7/芯N4/-良好			丸瓦部内面細布目、コビキ痕？		岡山城１～２式

曲輪内下層ＳＫ75出土（第48図）

番号	種　類	器種・部位	法量（cm）			胎土（素材）と焼成 種類・状況・含有物-器面色・断面色-焼成	釉(・漆・装飾) 釉種-色-部位	文　様 施文材-意匠	技　法　な　ど	製　作　時　期	備　　考
			口径 長さ	器高 高さ	底径 幅						
261	土師質土器	皿	(10.3)	2.0	6.6	0.5mm以下砂粒-5Y5/1～5Y7/2-良好			回転糸切り	17世紀前葉	
262	中国(景徳鎮)青花	碗			3.8	陶石-N8/-良好	透明釉-10G7/1	呉須(濃青)-花	畳付外角釉ケズリ	16世紀末～17世紀前葉	染付碗Ｆ１群、やや粗製
263	陶器～磁器	丸皿	(10.5)	3.1	4.5	0.5mm以下砂僅-2.5Y7/1・2.5Y7/1-不良(陶器質)	釉化不全-暗灰-高台無釉	呉須(黒褐)-圏線	見込み釉剥ぎ？		焼成不良の染付磁器か、見込み黒斑

曲輪内下層ＳＫ68出土（第49図・第50図）

番号	種類	器種・部位	法量（cm）			胎土（素材）と焼成 種類・状況・含有物-器面色・断面色-焼成	釉(・漆・装飾) 釉種-色-部位	文様 施文材-意匠	技法など	製作時期	備考
			口径 長さ	器高 高さ	底径 幅						
264	土師質土器	小皿	(8.1)	1.9	(5.4)	0.5mm以下砂粒-2.5Y7/2-良好			回転糸切り	17世紀前葉	
265	土師質土器	小皿	(8.7)	1.5	(6.0)	0.5mm以下砂粒-2.5Y6/1-良好			回転糸切り	17世紀前葉	
266	土師質土器	小皿	(9.6)			1mm以下砂粒-2.5Y5/1・2.5Y6/1-良好			手づくね？(～糸切り後ナデ)	17世紀前葉	
267	土師質土器	小皿	(9.6)	1.8	(5.7)	0.5mm以下砂粒-2.5Y6/2-良好			手づくね？(～糸切り後ナデ)	17世紀前葉	
268	土師質土器	小皿	(9.9)			1mm以下砂粒-7.5YR6/4-良好			手づくね？(～糸切り後ナデ)	17世紀前葉	
269	土師質土器	羽釜				3mm以下砂粒-10YR4/1・2.5YR6/4-良好				17世紀前葉？	器面剥離顕著
270	中国(漳州)青花	碗	(12.3)			陶石-N8/-良好(磁器質)	透明釉-5GY8/1	呉須(暗青)		17世紀前葉	染付碗Ｆ群
271	中国(漳州)青花	碗			4.6	陶石-N8/-良好(磁器質)	透明釉-5GY8/1-全釉	呉須(暗青)	畳付に砂付着	17世紀前葉	染付碗Ｆ２群
272	唐津	皿	(12.3)	3.4	4.2	0.5mm以下砂粒-2.5Y6/3・2.5Y6/3-良好	灰釉-5Y6/3-高台脇無		見込に胎土目	17世紀前葉	大橋Ⅰ期
273	唐津	皿	(11.7)	3.1	4.4	1mm以下砂粒-10YR5/3・10YR5/1-良好	灰釉-5Y6/3-高台脇無		見込に目痕なし	17世紀前葉	大橋Ⅰ期
274	唐津	皿	12.6	3.7	(5.1)	1mm以下砂粒-10YR3/3・10YR6/1-良好	灰釉-7.5Y6/2-高台脇無		見込・畳付に砂目	17世紀前葉	大橋Ⅱ期
275	唐津	溝縁皿	(12.9)	3.6	4.5	0.5mm以下砂粒-5YR5/4・N7/-良好	灰釉-2.5GY7/1-高台脇無		見込・畳付に砂目	17世紀前葉	大橋Ⅱ期
276	唐津	皿	(11.4)	3.1	4.6	0.5mm以下砂粒-5YR5/4・5YR6/6-やや不良	灰釉-7.5YR5/1-高台脇無		見込・畳付に砂目	17世紀前葉	釉化やや不良、大橋Ⅱ期
277	唐津	丸碗	(9.6)	7.3	4.6	0.5mm以下砂粒-10YR7/1-良好	灰釉-5Y6/3-全釉			17世紀前葉	高台内砂付着、大橋Ⅱ期
278	肥前陶器	筒碗	(12.0)	(7.8)	5.9	1mm以下砂粒-5Y7/2・5Y7/2-良好	外緑釉、内面・高台内灰釉		畳付無釉	17世紀前葉	灰釉7.5Y6/1、緑釉は透明濃緑、Ⅱ期
279	美濃織部	向付				0.5mm以下砂粒-5Y8/2-良好	長石釉-5Y8/2		内面細布目痕	17世紀前葉	長石釉部片、足付、他釉掛分か
280	備前	擂鉢	(29.1)			1mm以下砂粒-10R4/3～4/2・5Y6/1-良好				17世紀前葉	スリメ単位10本、１ｃ～２ａ期
281	備前	茶入形水注	(5.4)			1mm以下黒色粒-5Y3/1～7.5YR4/2・7.5YR6/1-良好				16世紀末～17世紀前葉	注口部剥離、把手付か
282	備前	徳利	(3.6)			1mm以下黒色粒-7.5YR3/1・7.5YR5/1-良好				16世紀末～17世紀前葉	口縁黄ゴマ
283	漆器	椀			7.0	トネリコ属	黒漆-内外面とも			17世紀前葉	高高台、体部厚手
284	漆器	椀				ケヤキ	黒漆-内外面とも			17世紀前葉	
285	漆器	椀				トチノキ	朱漆-内面、黒漆-外面	朱漆-花紋-体外		17世紀前葉	口端薄手
286	漆器	椀				トチノキ	朱漆-内面、黒漆-外面			17世紀前葉	
287	漆器	椀			4.4	ケヤキ	朱漆-内外面とも			17世紀前葉	薄手でシャープな作り
288	漆器	椀			6.0	トチノキ	黒漆-内外面とも			17世紀前葉	薄手でシャープな作り
289	漆器	椀			6.6	トチノキ	朱漆-内面、黒漆-外面			17世紀前葉	高台薄手、体部厚手
290	木製品	白木箸	25.3			スギ				17世紀前葉	片口、各部断面が円形に近い精良品
291	木製品	連歯下駄	19.2	3.4	7.3	ニヨウマツ類			台部板目取り	17世紀前葉？	女性用？
292	木製品	曲物類？蓋～底	8.9			コウヤマキ	黒漆-両面とも		柾目取り	17世紀前葉？	
293	木製品	三角蓋材？	11.7	1.2		ヒノキ属			板部は取り	17世紀前葉？	内法細板を本体に木釘で固定
294	鉄器	ガスガイ？								17世紀前葉？	
295	砥石		[8.8]		4.1	頁岩				17世紀前葉？	定形規格品的な製品
296	動物遺存体	解体痕つき牛角芯	[15.0]			牛角芯(表面一部は海綿状)-10YR4/2			長20mm、幅1mm強の切擦痕あり	17世紀前葉？	角鞘は切開されて遺存せず
297	瓦	軒平				1mm以下砂粒-2.5Y5/1～7/2・2.5Y7/2-良好		唐草二転		17世紀前葉	岡山城５式
298	瓦	軒丸	13.2			1mm以下砂粒-N4/～5Y5/1・外2.5Y7/1芯N5/-良好		左三巴、珠文15±	丸瓦部内面にコビキＢ痕	17世紀前葉	岡山城４式

出土場所不明（第50図）

番号	種類	器種・部位	法量（cm）			胎土（素材）と焼成 種類・状況・含有物-器面色・断面色-焼成	釉(・漆・装飾) 釉種-色-部位	文様 施文材-意匠	技法など	製作時期	備考
			口径 長さ	器高 高さ	底径 幅						
299	木製品	連歯下駄	18.2	5.3	7.9	針葉樹		焼印-「ハ」形	台部板目取り的	17世紀前葉？	下層遺構出土か

曲輪内中層暗渠３出土（第51図）

番号	種　類	器種・部位	法量（cm）			胎土（素材）と焼成 種類・状況・含有物-器面色・断面色-焼成	釉(・漆・装飾) 釉種-色-部位	文　様 施文材-意匠	技　法　な　ど	製　作　時　期	備　　考
			口径 長さ	器高 高さ	底径 幅						
300	瓦	丸瓦(土管材)	27.7	7.7	14.6	1mm以下砂粒-N4/～7.5Y6/1・N7/-良好			内面細布目・僅ニコビキA・吊紐	16世紀末	完形、岡山城２式
301	瓦	丸瓦(土管材)	30.6	6.6	14.5	1mm以下砂粒-N6/～7.5Y6/1・N7/-良好			内面コビキA痕	16世紀末	完形、岡山城２式
302	瓦	丸瓦(土管材)		8.2	15.6	0.5mm砂僅-N4/～7.5Y6/1・外7.5Y6/1芯N5/-良好			内面コビキA痕	16世紀末	口縁のみ欠損、岡山城２式
303	瓦	丸瓦(土管材)	28.2	7.6	14.8	1mm以下砂粒-N3/～7.5Y6/1・7.5Y6/1-良好			内面コビキA痕	16世紀末	完形、岡山城２式

曲輪内中層暗渠１出土（第51図）

番号	種　類	器種・部位	法量（cm）			胎土（素材）と焼成 種類・状況・含有物-器面色・断面色-焼成	釉(・漆・装飾) 釉種-色-部位	文　様 施文材-意匠	技　法　な　ど	製　作　時　期	備　　考
			口径 長さ	器高 高さ	底径 幅						
304	瓦質土器	土管	26.1	21		0.5mm砂僅-N5/～N6/・外N7/芯N5/-良好			内面コビキB後横ナデ	17世紀前葉	瓦と全く同質
305	瓦質土器	土管	26.2	23.6		1mm砂僅-7.5Y7/1～6/1・外7.5Y7/1芯N5/-良好			内面コビキB後横ナデ	17世紀前葉	瓦と同質、内面ヘラ字「御ふく」?他
306	銅銭	大観通寳	2.1			銅-7.5Y4/1				初鋳1107年	北宋銭、2.6ｇ
307	土師質土器	皿	(10.5)	3.1	6	1mm以下砂粒-10YR7/3-良好			回転糸切り	17世紀前葉	
308	中国(漳州)青花	碗			4.7	陶石-N8/-良好(磁器質)	透明釉-5GY8/1	呉須(青)-花唐草	畳付に砂付着	17世紀前葉	染付碗Ｆ１群
309	中国(景徳鎮)青花	皿			(8.6)	陶石-N8/-良好	透明釉-10GY8/1	呉須(藍)		16世紀末～17世紀前葉	染付皿Ｂ２群
310	中国(漳州)青花	皿	(15.9)			陶石-N8/-良好(磁器質)	透明釉-2.5GY8/1	呉須(暗青緑)		17世紀前葉	染付皿Ｂ２群

曲輪内中層ＳＫ63出土（第52図）

番号	種　類	器種・部位	法量（cm）			胎土（素材）と焼成 種類・状況・含有物-器面色・断面色-焼成	釉(・漆・装飾) 釉種-色-部位	文　様 施文材-意匠	技　法　な　ど	製　作　時　期	備　　考
			口径 長さ	器高 高さ	底径 幅						
311	土師質土器	小皿	(9)	1.3	(5.4)	1mm以下砂粒-2.5Y7/2-良好			手づくね?(～糸切り後ナデ)	17世紀前葉	大橋Ⅰ期
312	唐津	皿	(10.3)	3.9	4.6	1mm以下砂粒-5YR4/6・7.5YR7/1-良好	灰釉-5Y5/2-高台脇無		見込みに胎土目	17世紀前葉	

曲輪内中層ＳＫ66出土（第52図）

番号	種　類	器種・部位	法量（cm）			胎土（素材）と焼成 種類・状況・含有物-器面色・断面色-焼成	釉(・漆・装飾) 釉種-色-部位	文　様 施文材-意匠	技　法　な　ど	製　作　時　期	備　　考
			口径 長さ	器高 高さ	底径 幅						
313	唐津	皿			4.4	0.5mm以下砂粒-2.5YR4/3・2.5YR6/4-やや不良	灰釉-5YR5/2-高台脇無	鉄絵(7.5YR2/1)		17世紀前葉	釉化一部不全、大橋Ⅰ期
314	唐津	皿			4.3	0.5mm以下砂粒-10YR6/4・10YR6/4-良好	灰釉-2.5Y5/4-高台脇無		見込み胎土目	17世紀前葉	大橋Ⅰ期
315	美濃	縁折ソギ菊皿	(11.8)	2.6	5.8	0.5mm以下砂-2.5Y8/3・N8/-良好	灰釉-2.5Y7/4-全釉		見込み釉剥ぎ、高台内輪トチ痕	16世紀末	
316	土師質土器	皿	(9.7)	1.5	(5.7)	0.5mm以下砂僅-2.5Y6/2-良好			回転糸切り	17世紀前葉	
317	土師質土器	皿	(9.9)	2.3	6	1mm以下砂僅-2.5Y8/2-良好			回転糸切り	17世紀前葉	

曲輪内中層ＳＫ50出土（第52図）

番号	種　類	器種・部位	法量（cm） 口径長さ	器高高さ	底径幅	胎土（素材）と焼成 種類・状況・含有物-器面色・断面色-焼成	釉(・漆・装飾) 釉種-色-部位	文　様 施文材-意匠	技法など	製作時期	備　考
318	中国(景徳鎮)青花	碗	(10.8)			陶石-N8/-良好	透明釉-10GY8/1	呉須(濃青)		17世紀前葉	染付碗Ｈ群？
319	唐津	皿	11	2.8	4.3	0.5mm以下砂-7.5YR5/3・7.5YR5/3-良好	灰釉-5Y4/2-高台脇無		見込み目痕なし	17世紀前葉	大橋Ｉ期
320	唐津	皿			(4.9)	1mm以下砂-7.5YR6/4・7.5YR6/2-良好	灰釉-10YR6/2-高台脇無		見込み胎土目	17世紀前葉	大橋Ｉ期

曲輪内中層ＳＫ17出土（第52図）

番号	種　類	器種・部位	法量（cm） 口径長さ	器高高さ	底径幅	胎土（素材）と焼成 種類・状況・含有物-器面色・断面色-焼成	釉(・漆・装飾) 釉種-色-部位	文　様 施文材-意匠	技法など	製作時期	備　考
321	中国(龍泉系)青磁	碗			(5.2)	陶石-2.5Y7/1-良好	青磁釉-7.5Y6/3			15～16世紀	

曲輪内中層ＳＫ53出土（第52図）

番号	種　類	器種・部位	法量（cm） 口径長さ	器高高さ	底径幅	胎土（素材）と焼成 種類・状況・含有物-器面色・断面色-焼成	釉(・漆・装飾) 釉種-色-部位	文　様 施文材-意匠	技法など	製作時期	備　考
322	備前	鉢			(16.2)	1mm黒色粒・2.5YR4/2～2.5Y6/3・10YR6/1-良好				16世紀末～17世紀前葉	

曲輪内上層暗渠２出土（第53図・第54図）

番号	種　類	器種・部位	法量（cm） 口径長さ	器高高さ	底径幅	胎土（素材）と焼成 種類・状況・含有物-器面色・断面色-焼成	釉(・漆・装飾) 釉種-色-部位	文　様 施文材-意匠	技法など	製作時期	備　考
323	唐津	溝縁大皿	(17.7)	4.8	(6.9)	4mm以下砂粒-2.5Y6/2・7.5YR7/3-良好	灰釉-5Y5/2-高台脇無	鉄絵(7.5Y2/1)	見込みに胎土目	17世紀前葉	大橋Ｉ期
324	備前	擂鉢	(34.2)			3mm以下砂粒-2.5YR4/2～2/3・2.5YR4/2-良好			口縁下に重焼き痕	16世紀末	斜めスリメ、１ｂ期
325	石製品	硯				粘板岩-N5/			側端二段	17世紀前葉	破損後に側面を砥石として使用か
326	瓦	軒丸瓦	(12.9)			1mm以下砂僅-N4/～7.5Y7/1・7.5Y7/1-良好		右三巴、珠文21±	内面細布目、コビキ痕不明	17世紀前葉	岡山城３～４式
327	瓦	軒丸瓦	(15)			1mm以下砂僅-5Y6/1・外5Y7/1芯N4/-良好		左三巴、珠文27ヵ		16世紀末	中の段５３８などと同笵？、２式
328	瓦	軒丸瓦	(13)			0.5mm以下砂僅-N6/～5Y7/1・外5Y7/1芯N5/-良好		左三巴、珠文19±		17世紀前葉	岡山城３～４式
329	瓦	丸瓦	(24.1)	5.3	12.4	1mm以下砂僅-N4/～5Y6/1・5Y6/-良好			内面細布目、コビキＢ痕	17世紀前葉	完形、岡山城３～４式
330	瓦質土器	土管	29.2	14.2		0.5mm以下砂僅-N4/～5Y6/1・外5Y7/1芯N3/-良好			内面細布目、コビキＢ痕	17世紀前葉	尾部すぼみ形
331	瓦質土器	土管	(28.5)	14.8		1mm以下砂僅-N4/～5Y6/1・外5Y7/1芯N4/-良好			内面細布目、コビキＢ痕	17世紀前葉	尾部すぼみ形
332	瓦質土器	土管	27	14		1mm以下砂僅-N4/～5Y6/1・5Y7/1-良好			内面細布目、コビキＢ痕	17世紀前葉	尾部すぼみ形、完形
333	瓦質土器	土管	30.1	14.5		1mm以下砂僅-5Y5/1～7/2・5Y7/1-良好			内面細布目、コビキＢ痕	17世紀前葉	尾部すぼみ形、完形
334	瓦質土器	土管	28	14.2		0.5mm以下砂僅-N4/～N6/・外5Y7/1芯5Y6/1-良好			内面コビキＡ痕	16世紀末	尾部玉縁形
335	瓦質土器	土管	27	13.8		1mm以下砂僅-N3/～5Y6/1・5Y7/2-良好			内面粗いコビキB(一部Ａ的)	17世紀初	尾部玉縁形、完形

曲輪内上層ＳＫ23出土（第55図）

番号	種　類	器種・部位	法量（cm） 口径長さ	器高高さ	底径幅	胎土（素材）と焼成 種類・状況・含有物-器面色・断面色-焼成	釉(・漆・装飾) 釉種-色-部位	文　様 施文材-意匠	技　法　な　ど	製　作　時　期	備　　考
336	土師質土器	皿	(10.8)	1.9	(6.6)	1mm以下砂僅-10YR6/4-良好			回転糸切り	17世紀前葉	
337	土師質土器	皿	(11.7)	1.8	8.4	0.5mm以下砂僅-10YR8/2-良好			回転糸切り	17世紀前葉	
338	土師質土器	皿	(9.0)	1.8	(6.3)	0.5mm以下砂僅-7.5YR7/6-良好			回転糸切り	17世紀前葉	
339	美濃	丸皿	(10.5)	2.6	4.8	1mm以下砂粒-7.5YR5/4・10YR7/4-良好	灰釉-7.5Y5/3～6/3-全釉		高台内輪トチ痕	16世紀後葉	大窯３期製品
340	唐津	丸皿	(11.1)	2.6	(4.8)	1mm以下砂粒-7.5YR6/3・7.5YR7/2-良好	灰釉-5Y6/3-畳付無		見込みに目痕なし	17世紀前葉	高台内も施釉、大橋Ｉ期
341	唐津	皿			4.7	0.5mm以下砂-7.5YR4/2・5Y6/1-良好	灰釉-7.5Y5/2-高台脇無	鉄絵(2.5Y2/1)	見込みに目痕なし	17世紀前葉	大橋Ｉ期
342	唐津	鉢(深皿形)				1mm以下砂-2.5Y6/2-良好	灰釉-5Y6/2			17世紀前葉	立上り角度は図より緩い可能性有
343	備前	鉢	(17.7)	4.5		1.5mm以下砂-2.5YR5/6・外2.5YR5/6芯N5/-良好				16世紀末～17世紀前葉	
344	備前	小壺類・底部			4.4	1mm以下砂僅-N4/・N5/-良好				16世紀末～17世紀前葉	底面にヘラ書き記号
345	瓦	軒丸瓦				4mm砂ほか僅-2.5Y7/2・外2.5Y7/2芯5Y4/1-良好		左三巴、珠文17±		16世紀末～17世紀前葉	

曲輪内上層ＳＫ31出土（第55図）

番号	種　類	器種・部位	法量（cm） 口径長さ	器高高さ	底径幅	胎土（素材）と焼成 種類・状況・含有物-器面色・断面色-焼成	釉(・漆・装飾) 釉種-色-部位	文　様 施文材-意匠	技　法　な　ど	製　作　時　期	備　　考
346	土師質土器	小皿	(8.9)	1.8	5.1	0.5mm以下砂粒-5Y4/・2.5Y6/2-良好			回転糸切り	17世紀前葉	染付碗Ｆ群
347	土師質土器	皿	(9.9)	3.1	(5.7)	0.5mm以下砂粒-10YR7/4-良好			回転糸切り	17世紀前葉	大橋Ｉ期
348	土師質土器	皿	(9.3)	2.8	(5.1)	0.5mm以下砂粒-10YR7/6-良好			回転糸切り	17世紀前葉	放射スリメ＋斜めスリメ、１ｃ期
349	中国(漳州)青花	碗	(10.8)			陶石-N8/-良好(磁器質)	透明釉-5GY8/1	呉須(濃青)		17世紀前葉	
350	唐津	皿	(12.9)	3.7	4.1	1.5mm以下砂粒-10YR5/4-良好	灰釉-5Y6/3-高台脇無		見込み胎土目	17世紀前葉	
351	備前	擂鉢	(27.9)			2mm以下砂-10R4/4～10R3/2・10R3/1-良好			口縁下に重焼痕	17世紀前葉	

曲輪内上層暗ＳＫ22出土（第56図）

番号	種　類	器種・部位	法量（cm） 口径長さ	器高高さ	底径幅	胎土（素材）と焼成 種類・状況・含有物-器面色・断面色-焼成	釉(・漆・装飾) 釉種-色-部位	文　様 施文材-意匠	技　法　な　ど	製　作　時　期	備　　考
352	土師質土器	小皿	(9)	1.6	5.7	0.5mm以下砂粒-7.5YR7/6-良好			底部糸切り後ナデ？	17世紀前葉	
353	土師質土器	小皿	(9)	1.6	(5.1)	0.5mm以下砂粒-7.5YR7/4-良好			回転糸切り	17世紀前葉	
354	土師質土器	小皿	(11.4)			0.5mm以下砂粒-10YR7/4-良好			回転糸切り	17世紀前葉	
355	中国(景徳鎮)青花	碗			4.2	陶石-N8/-良好	透明釉-7.5GY8/1	呉須(藍)-圏線		17世紀前葉	
356	唐津	丸皿	(11.4)			1mm以下砂粒-5Y6/2-良好	灰釉-5Y5/3			17世紀前葉	大橋Ｉ期
357	唐津	碗			4.2	1mm以下砂粒-10YR6/3・10YR6/3-良好	灰釉-7.5Y6/2			17世紀前葉	大橋Ｉ期
358	備前	擂鉢				1mm以下砂粒-2.5YR4/2・2.5YR4/2～N5/-良好				17世紀前葉	(放射スリメ+)斜めスリメ、１ｃ期
359	瓦	丸瓦				1mm砂僅-7.5Y4/1～6/1・外7.5Y7/1芯10Y5/1-良好			内面コビキＡ痕	16世紀末	

曲輪内上層ＳＫ52出土（第56図）

番号	種類	器種・部位	法量（cm） 口径長さ	器高高さ	底径幅	胎土（素材）と焼成 種類・状況・含有物-器面色・断面色-焼成	釉(・漆・装飾) 釉種-色-部位	文様 施文材-意匠	技法など	製作時期	備考
360	唐津	鉢(火入？)・高台			(6.0)	0.5mm砂粒・鉄分多-2.5YR6/1・2.5YR5/4-良好	灰釉-5Y3/2-外面上半			17世紀中葉	高台脇・内面無釉、武雄系、大橋Ⅱ期
361	唐津	鉢(火入類)	(13.5)			0.5mm以下砂粒・鉄分多-10YR3/2・10YR3/2-良好	白土+透明釉10YR4/1		口縁折曲げ玉縁	17世紀中葉	内面無釉、武雄系、大橋Ⅱ期
362	肥前磁器	染付碗	(11.4)			陶石-N8/-良好(釉発色やや不良)	透明釉-5GY8/1	呉須(緑青)-網		17世紀中葉	大橋Ⅱ-2期
363	肥前磁器	染付碗			(4.5)	陶石-N8/-良好	透明釉-2.5GY8/1	呉須(濃青)-圏線		17世紀中葉～	大橋Ⅲ期
364	肥前磁器	染付碗			(6.4)	陶石-N8/-良好	透明釉-2.5GY8/1	呉須(濃青)-圏線	畳付両角釉削り	17世紀中葉～	大橋Ⅱ-2～Ⅲ３期
365	肥前磁器	染付碗			(4.8)	陶石-N8/-良好	透明釉-7.5GY8/1	呉須(青)-圏線	畳付両角釉削り	17世紀中葉～	大橋Ⅲ期
366	備前	擂鉢	(32.1)	13.3	11.7	1mm以下砂粒-10YR4/2～2.5YR3/3・2.5Y6/1-良好				17世紀中葉	スリメ詰った放射・単位13本、２b期
367	石製品	砥石	[10.5]		5.0	頁岩-5Y7/1					
368	瓦	軒丸瓦				0.5mm以下砂粒-5Y4/1・外5Y6/1芯5Y6/1-良好		三巴？＋珠文	内面細布目	16世紀末	

曲輪内上層ＳＫ21出土（第57図）

番号	種類	器種・部位	法量（cm） 口径長さ	器高高さ	底径幅	胎土（素材）と焼成 種類・状況・含有物-器面色・断面色-焼成	釉(・漆・装飾) 釉種-色-部位	文様 施文材-意匠	技法など	製作時期	備考
369	土師質土器	小皿	(9.0)	1.2	(5.1)	0.5mm以下砂粒-10YR6/4-良好			回転糸切り	17世紀中葉	
370	土師質土器	皿	(10.8)	2.1	(5.4)	0.5mm以下砂粒僅-7.5YR5/4-良好			回転糸切り	17世紀中葉	
371	土師質土器	小皿	(9.0)	(1.2)	(5.1)	0.5mm以下砂粒僅-7.5YR7/6-良好			回転糸切り	17世紀中葉	
372	土師質土器	皿	(10.8)	3.1	(6.3)	1mm以下砂粒僅-10YR7/3-良好			回転糸切り	17世紀前葉～中葉	体部外面に稜
373	土師質土器	皿			5.9	0.5mm以下砂粒僅-7.5YR8/3-良好			回転糸切り	17世紀前葉～中葉	
374	備前	擂鉢	(40)			3mm以下砂粒-2.5YR5/6～2.5YR3/3-良好			口縁下に重焼痕	17世紀中葉	スリメ詰った放射・単位16本、２b期
375	備前	亀形水滴	6.8	2.4	4.3	生地微粒-10R2/1・5Y5/1-良好		押印亀甲文		17世紀中葉？	完形、腹部にヘラ記号
376	鉄器	こづか？	[10.8]								

曲輪内上層ＳＫ16出土（第57図）

番号	種類	器種・部位	法量（cm） 口径長さ	器高高さ	底径幅	胎土（素材）と焼成 種類・状況・含有物-器面色・断面色-焼成	釉(・漆・装飾) 釉種-色-部位	文様 施文材-意匠	技法など	製作時期	備考
377	土師質土器	皿	9.7	1.8	6.8	1mm以下砂粒僅-2.5Y8/2-良好			回転糸切り	17世紀中葉	口縁に煤付着
378	唐津	鉢・高台			(8.4)	1mm以下砂粒僅-7.5YR4/2～6/4・7.5YR6/4-良好	灰釉-10YR6/2-高台脇無			17世紀前葉～中葉	大橋Ⅱ期
379	美濃	皿	10.4	2.3	5.4	0.5mm以下砂粒僅-10YR8/2-良好	灰釉-5Y6/4-全釉		高台内輪トチ痕	16世紀後葉	大窯後半期製
380	肥前磁器	染付皿			(4.2)	陶石-10Y7/1～7.5YR7/4-やや不良	透明釉-2.5GY8/1-全釉	呉須(鈍青)-菊		17世紀中葉	大橋Ⅱ-２期
381	備前	擂鉢				3mm以下砂粒-10R4/2・N5/-良好				17世紀前葉～中葉	スリメ詰った放射・単位５本、２b期
382	鉄器	針金								17世紀前葉～中葉？	端部は尖り、断面円形

曲輪内上層ＳＫ51出土（第58図）

番号	種類	器種・部位	法量（cm） 口径長さ	器高高さ	底径幅	胎土（素材）と焼成 種類・状況・含有物-器面色・断面色-焼成	釉(・漆・装飾) 釉種-色-部位	文様 施文材-意匠	技法など	製作時期	備考
383	土師質土器	皿	(9.9)	5.4	1.9	0.5mm以下砂粒僅-2.5Y6/1-良好			回転糸切り	17世紀後半	
384	土師質土器	焙烙				1mm以下砂粒-10YR6/3-良好			外面に煤付着顕著	17世紀後半	難波Ｅ類、小破片
385	瓦質土器	火鉢			(25.5)	1mm以下砂粒僅-N4/～7.5Y5/1・7.5Y6/1-良好				17世紀中葉～後半	瓦と全く同質
386	肥前内野山系陶器	碗	(12)	7.3	4.9	白土-5Y8/1-良好	灰釉-5Y7/2-全釉		畳付３か所に砂付着	17世紀後半	大橋Ⅲ期
387	肥前系陶器	碗	(11.4)	8.3	4.8	0.5mm以下砂粒-10YR6/4・10Y7/1-良好	鉄釉-N2/-高台脇無			17世紀後半	ピンホール顕著、大橋Ⅲ期
388	肥前磁器	染付碗	(10.2)	6.8	4.6	陶石-N8/-良好	透明釉-7.5GY8/1-全釉	呉須(鈍青)-網	畳付釉削り、粗砂付着	17世紀中葉	大橋Ⅱ-2期
389	肥前磁器	染付碗	(11.7)	6.6	4.9	陶石-N8/-良好(やや陶質的)	透明釉-2.5GY8/1	呉須(藍)-風景	畳付両角釉削り	17世紀中～後葉	高台内銘欵「太明成化年製」、Ⅲ期
390	肥前磁器	赤絵碗	(10.8)			陶石-N8/-良好	透明釉-7.5GY8/1	朱赤+呉須(濃青)		17世紀中～後葉	大橋Ⅲ期
391	備前	擂鉢				2mm以下砂粒-5YR4/3～N5/・7.5YR5/1-良好				17世紀中葉	スリメ放射状、２ｂ期
392	備前	擂鉢	(30.3)			2mm以下砂粒-5YR4/1～N4/・7.5YR4/2-良好				17世紀中～後葉	スリメ詰った放射・単位９本、２ｂ期
393	備前	徳利・底部			(10.8)	1mm以下黒色粒-2.5YR6/6～4/2・N6/-良好				16世紀末～17世紀中葉	
394	石製品	砥石	[8.1]		5.3	頁岩-10Y8/1				17世紀中～後葉？	規格品的
395	瓦	軒丸瓦	12.8			2mm以下砂粒-7.5Y4/1・外7.5YR7/1芯N4/-良好		左三巴珠文12	内面にコビキＢ痕	17世紀中～後葉	岡山城５式
396	瓦	軒丸瓦	(12.8)			0.5mm以下砂粒僅-7.5Y5/1・外7.5Y7/1芯N4-良好		左三巴珠文12？		17世紀中～後葉	岡山城５式

曲輪内上層ＳＫ62出土（第59図）

番号	種類	器種・部位	法量（cm） 口径長さ	器高高さ	底径幅	胎土（素材）と焼成 種類・状況・含有物-器面色・断面色-焼成	釉(・漆・装飾) 釉種-色-部位	文様 施文材-意匠	技法など	製作時期	備考
397	土師質土器	皿	(8.7)	2.4	(4.2)	0.5mm以下砂粒-2.5Y8/2-良好			回転糸切り	17世紀～	
398	土師質土器	甕				5mm以下砂粒多-2.5Y7/2・2.5Y6/1-良好				17～18世紀	
399	京～信楽	碗	(8.8)			白土-5Y8/1-良好	灰釉-7.5Y7/2			18世紀後半～	信楽？
400	瀬戸美濃磁器	染付碗			(2.7)	光沢陶石-N8/-良好	透明釉-10GY8/1	呉須(鮮藍)		19世紀	
401	信楽	灯明皿	(7.9)	1.8	3	白土-5Y6/・2.5Y8/1-良好	灰釉-2.5Y7/2-外面無		見込み針ピン痕	18世紀後半～	
402	カキ釉陶器	行平	(18.3)			0.5mm以下砂粒僅-7.5YR6/6-良好	カキ釉-2.5YR5/8			19世紀	

曲輪内上層ＳＫ55出土（第59図）

番号	種類	器種・部位	法量（cm） 口径長さ	器高高さ	底径幅	胎土（素材）と焼成 種類・状況・含有物-器面色・断面色-焼成	釉(・漆・装飾) 釉種-色-部位	文様 施文材-意匠	技法など	製作時期	備考
403	唐津	碗(鉢)	(12.6)			0.5mm以下砂粒顕著-2.5YR5/3・2.5Y7/2-良好	藁灰釉-白～7.5Y7/2			16世紀末～17世紀初	高台脇無釉、岸岳系、大橋Ⅰ-1期
404	唐津	折縁大皿	(22)	5.5	6.7	1mm以下砂粒-10YR6/3・10YR7/1-良好	灰釉-5Y6/2-高台脇無		見込み胎土目４個	17世紀前葉	大橋Ⅰ期
405	肥前磁器	染付碗			(4.2)	陶石-N8/-良好	透明釉-10GY8/1	呉須(鈍青)-風景		17世紀中葉	高台内無釉、大橋Ⅱ-2期
406	土師質土器	十能				2mm以下砂・金雲母-10YR7/4-良好			外型成形か	17世紀？	
407	備前	変形徳利				0.5mm以下砂粒僅-2.5YR5/6-良好	塗土-2.5YR3/6-外面		ロクロ成形後に変形	17世紀末～18世紀初	外面火襷

曲輪内上層ＳＫ５出土（第59図）

番号	種　類	器種・部位	法量（cm）			胎土（素材）と焼成 種類･状況・含有物-器面色･断面色-焼成	釉(･漆･装飾) 釉種-色-部位	文　様 施文材-意匠	技　法　な　ど	製　作　時　期	備　　考
			口径 長さ	器高 高さ	底径 幅						
408	備前	擂鉢			(15.6)	1mm以下黒色粒-2.5YR5/4～2.5YR4/1･5Y6/1-良好				16世紀末～17世紀初	放射スリメ＋斜めスリメ、１期

曲輪内調査区外井戸出土（第59図）

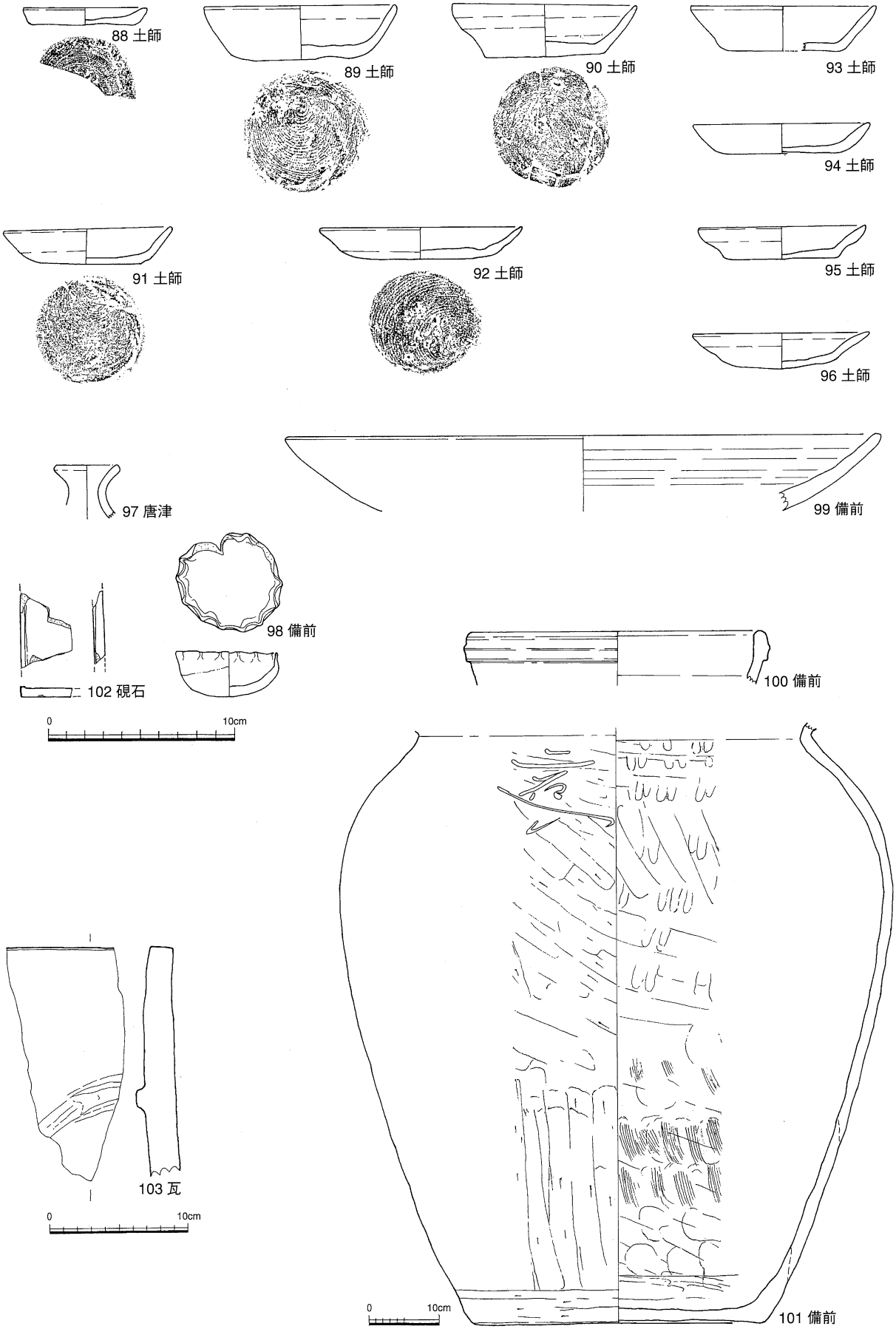
番号	種　類	器種・部位	法量（cm）			胎土（素材）と焼成 種類･状況・含有物-器面色･断面色-焼成	釉(･漆･装飾) 釉種-色-部位	文　様 施文材-意匠	技　法　な　ど	製　作　時　期	備　　考
			口径 長さ	器高 高さ	底径 幅						
409	染付磁器	蓋付鉢(段重形)	(13.2)	13.8	(8.7)	陶石･弱い光沢-N8/-良好	透明釉-7.5GY8/1	呉須(濃青)		19世紀	関西系

曲輪内上層ＳＫ２出土（第59図）

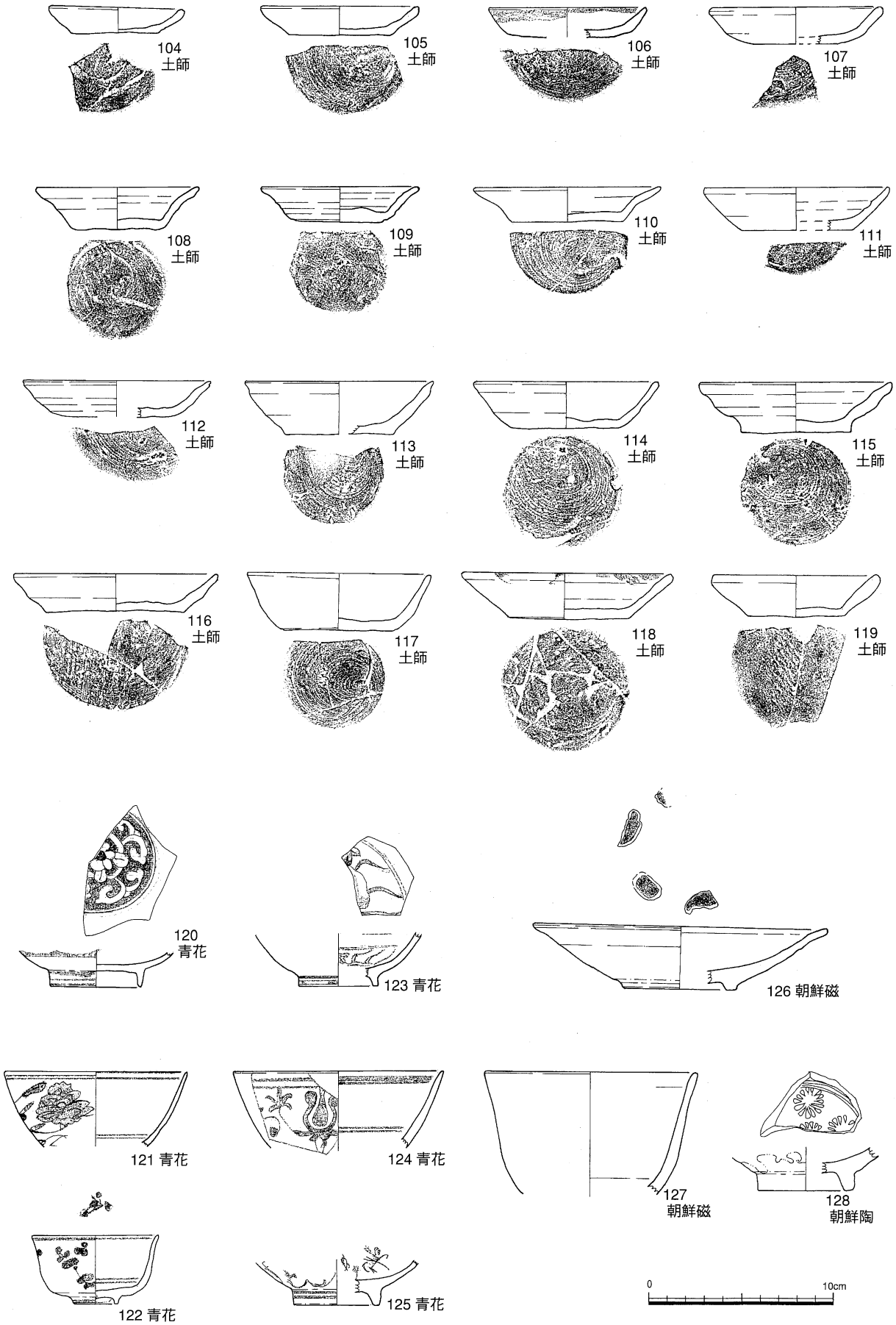
番号	種　類	器種・部位	法量（cm）			胎土（素材）と焼成 種類･状況・含有物-器面色･断面色-焼成	釉(･漆･装飾) 釉種-色-部位	文　様 施文材-意匠	技　法　な　ど	製　作　時　期	備　　考
			口径 長さ	器高 高さ	底径 幅						
410	備前	火入れ・香炉類？	7.6	6	5	1mm以下砂粒-5YR4/6～N4/･2.5YR5/2-良好			底部回転糸切り	16世紀末～17世紀	底部にヘラ字

曲輪内上層ＳＫ29出土（第59図）

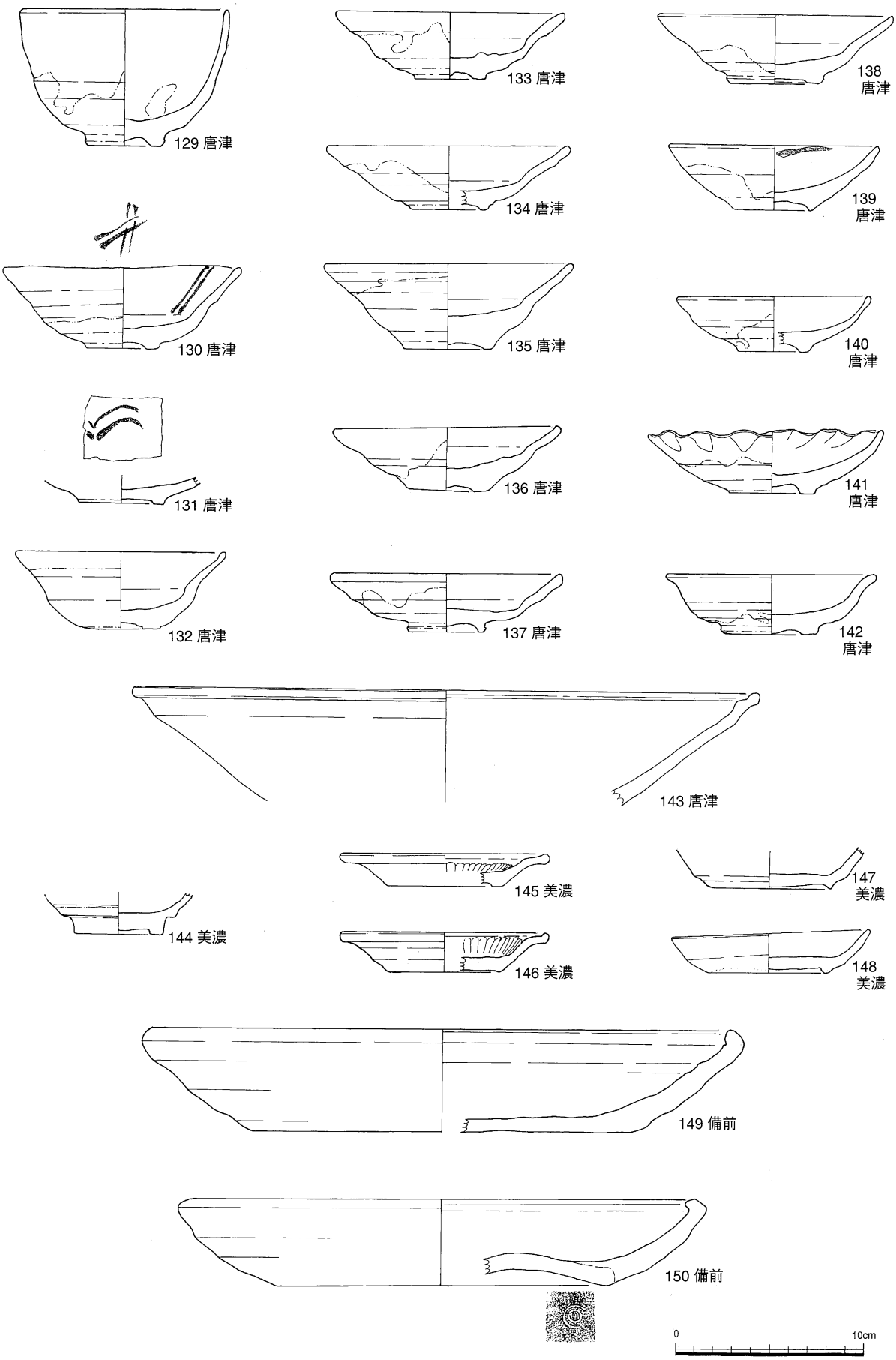
番号	種　類	器種・部位	法量（cm）			胎土（素材）と焼成 種類･状況・含有物-器面色･断面色-焼成	釉(･漆･装飾) 釉種-色-部位	文　様 施文材-意匠	技　法　な　ど	製　作　時　期	備　　考
			口径 長さ	器高 高さ	底径 幅						
411 412 413	中国(ｼｮｳ州)青花 美濃 肥前磁器	碗 折縁皿 瓶	(11.7)		(4.8)	陶石-N8/-良好(磁器質) 0.5mm砂粒-2.5Y8/2-良好 陶石-N8/-良好	透明釉-5GY8/1-全釉 灰釉-2.5Y7/4 透明釉-5GY8/1	呉須(鈍青)-花唐 呉須(青緑)	畳付粗砂付着	17世紀前葉 16世紀末 17世紀	染付碗Ｆ２群 大窯製品



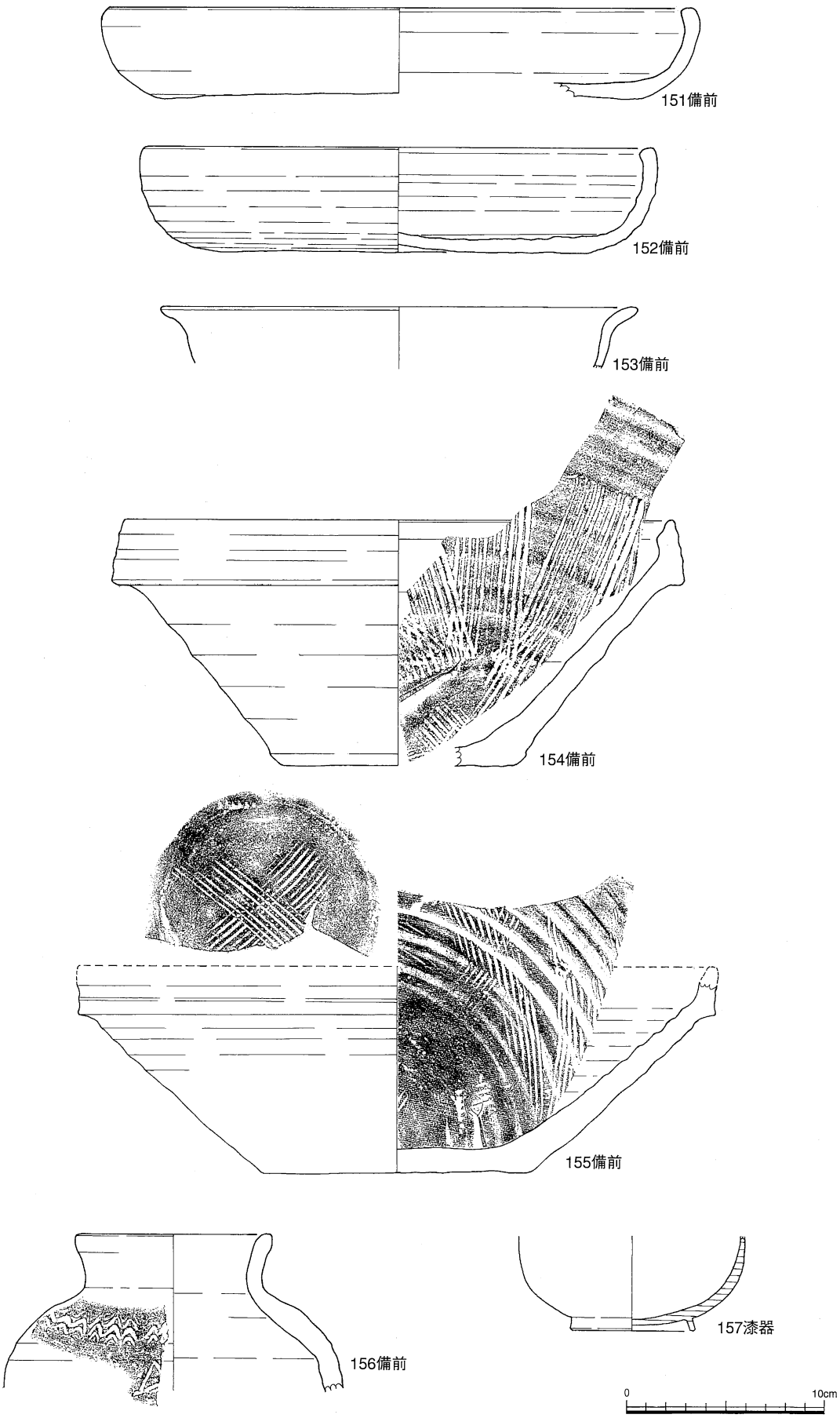
第38図　曲輪内下層ＳＫ34の遺物（瓦：１／４　大甕１／８　他：１／３）



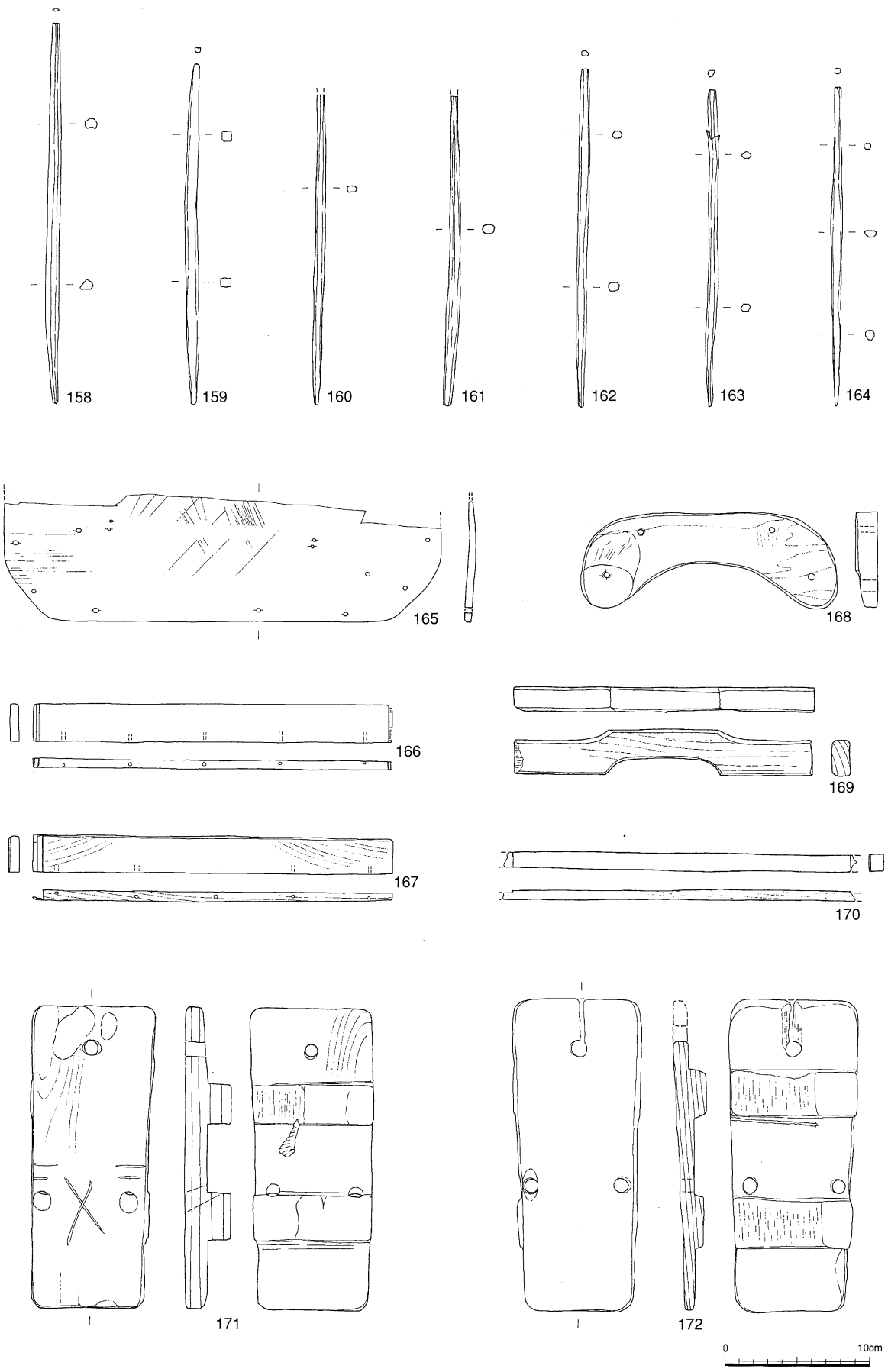
第39図　曲輪内下層ＳＫ72の遺物Ⅰ（１／３）



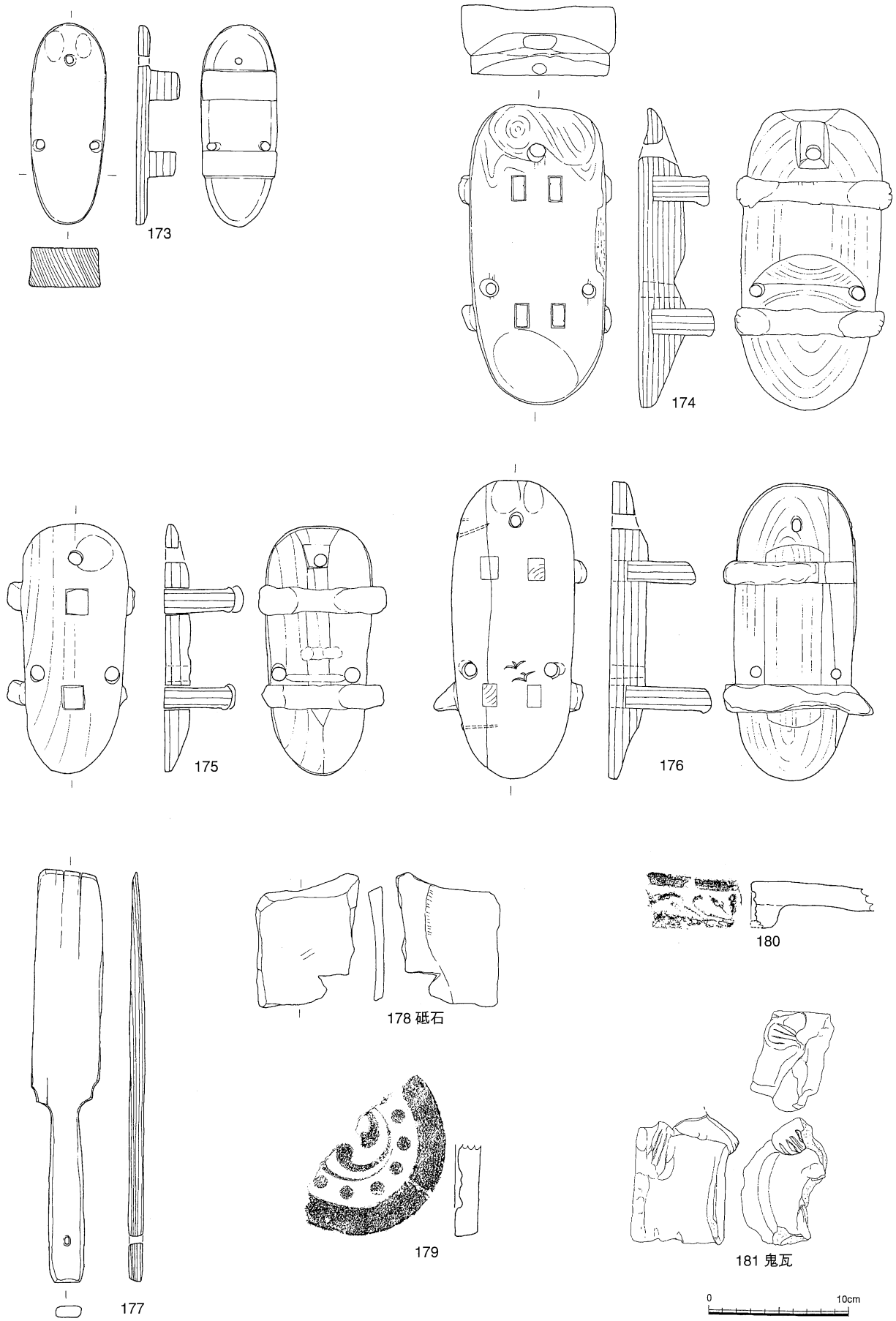
第40図　曲輪内下層ＳＫ72の遺物Ⅱ（１／３）



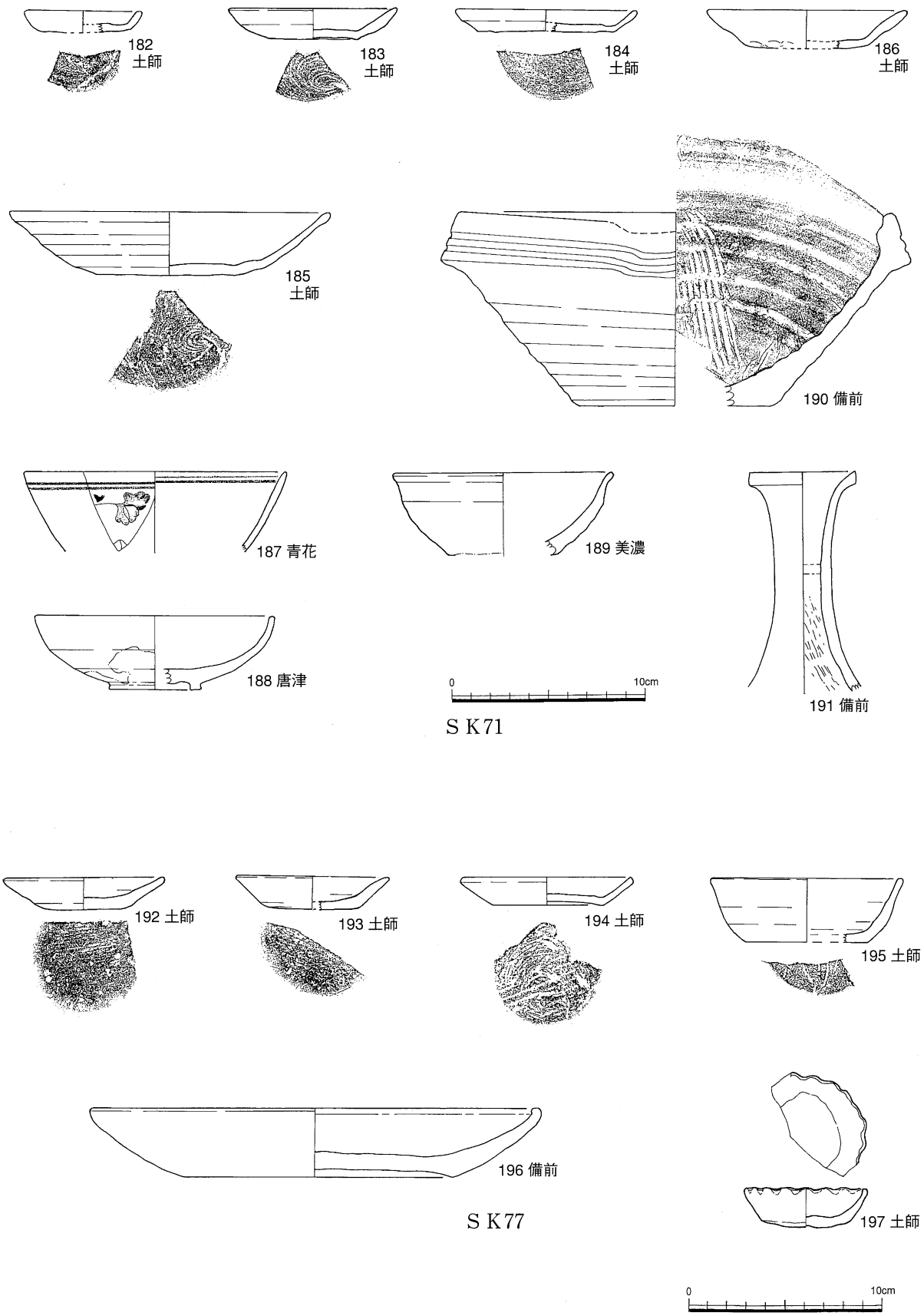
第41図　曲輪内下層ＳＫ72の遺物Ⅲ（１／３）



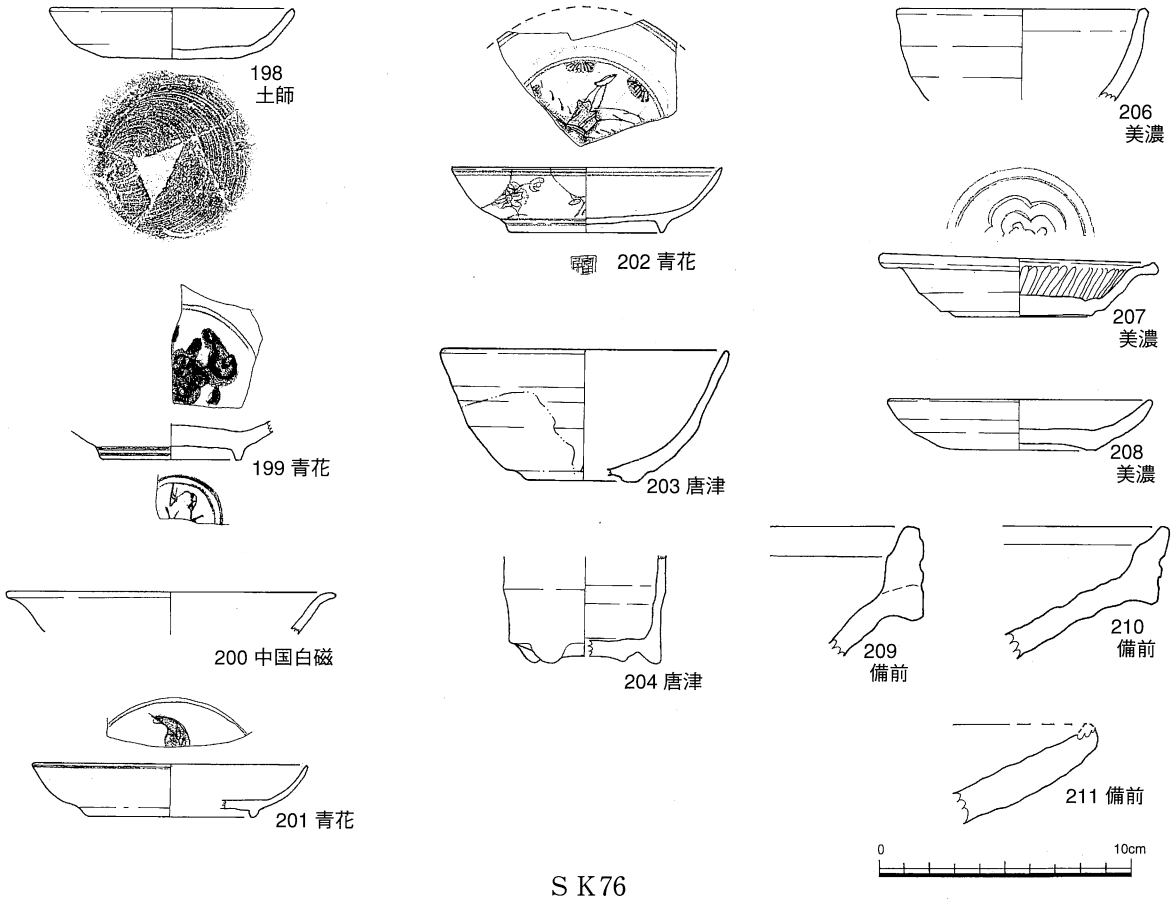
第42図　曲輪内下層ＳＫ72の遺物Ⅳ［木器］（１／４）



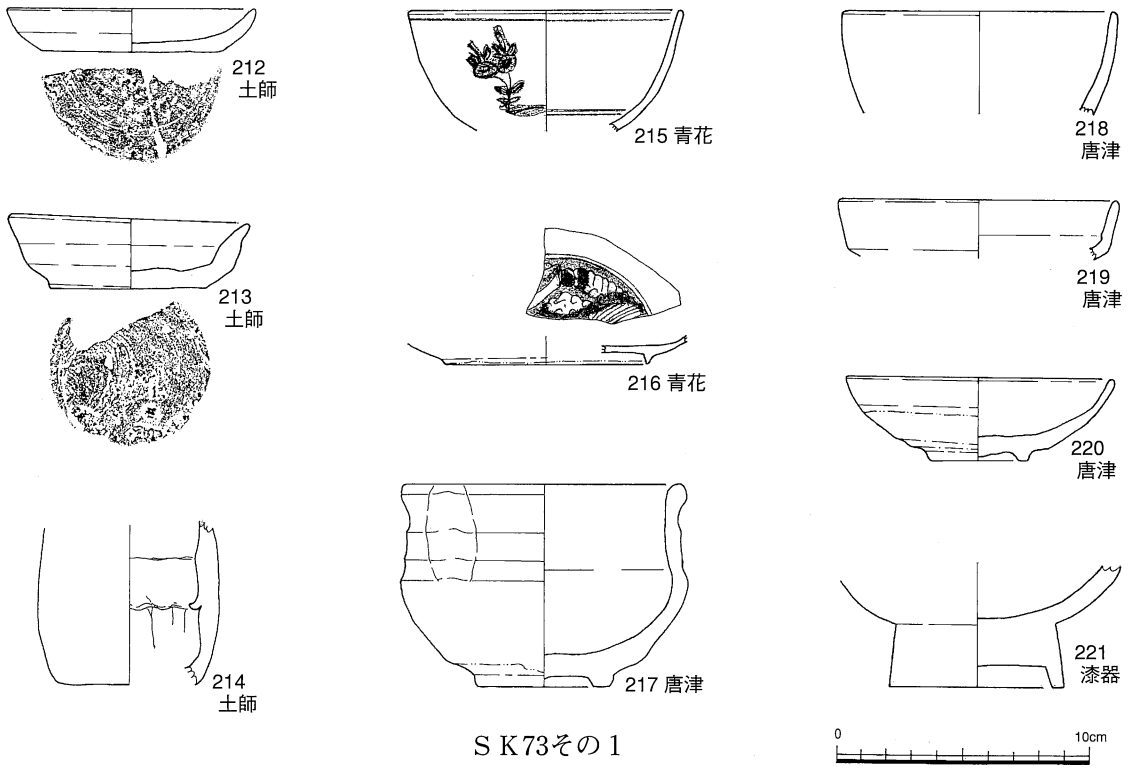
第43図　曲輪内下層ＳＫ72の遺物Ⅴ［木器ほか］（１／４）



第44図　曲輪内下層ＳＫ71・ＳＫ77の遺物（１／３）

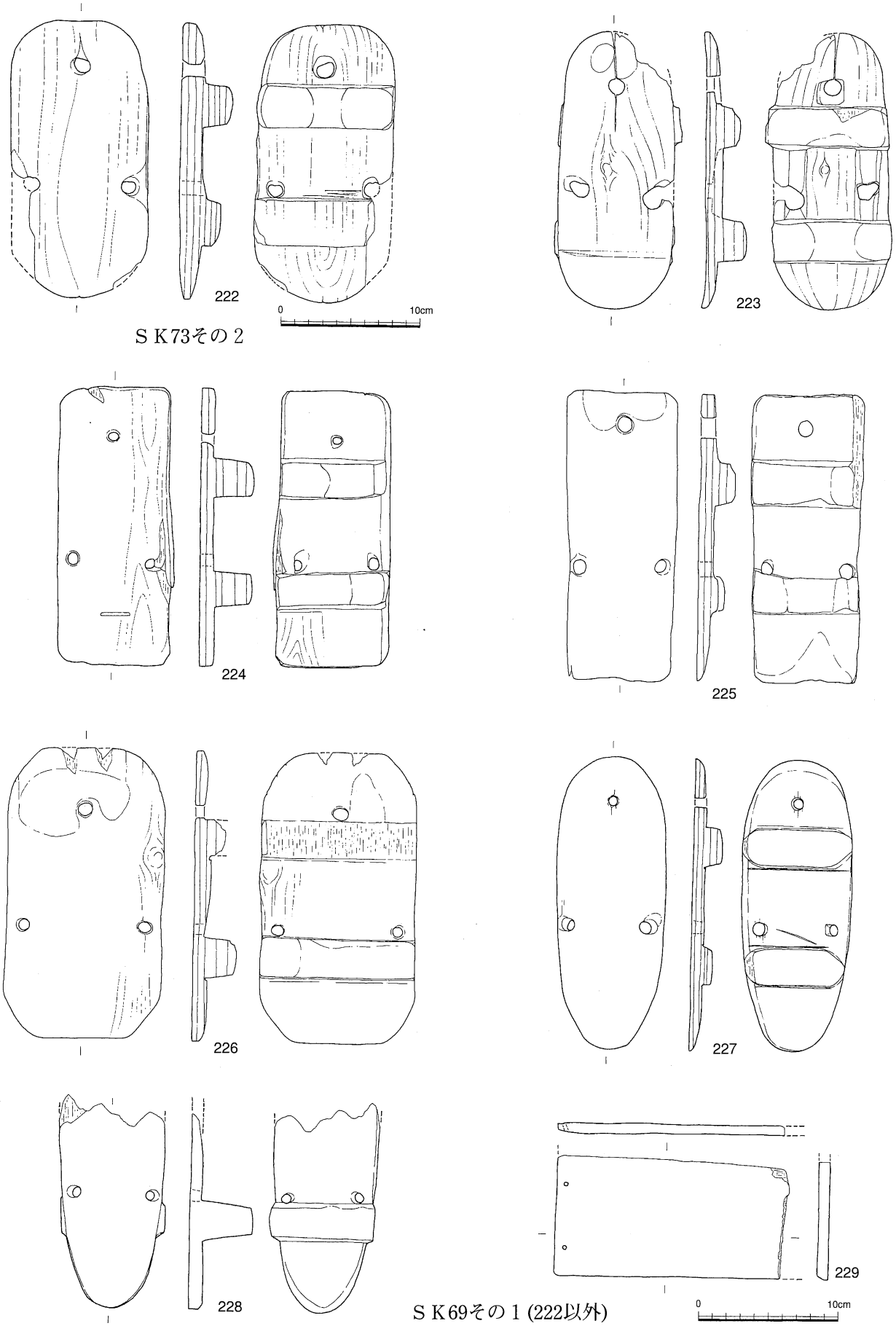


ＳＫ76

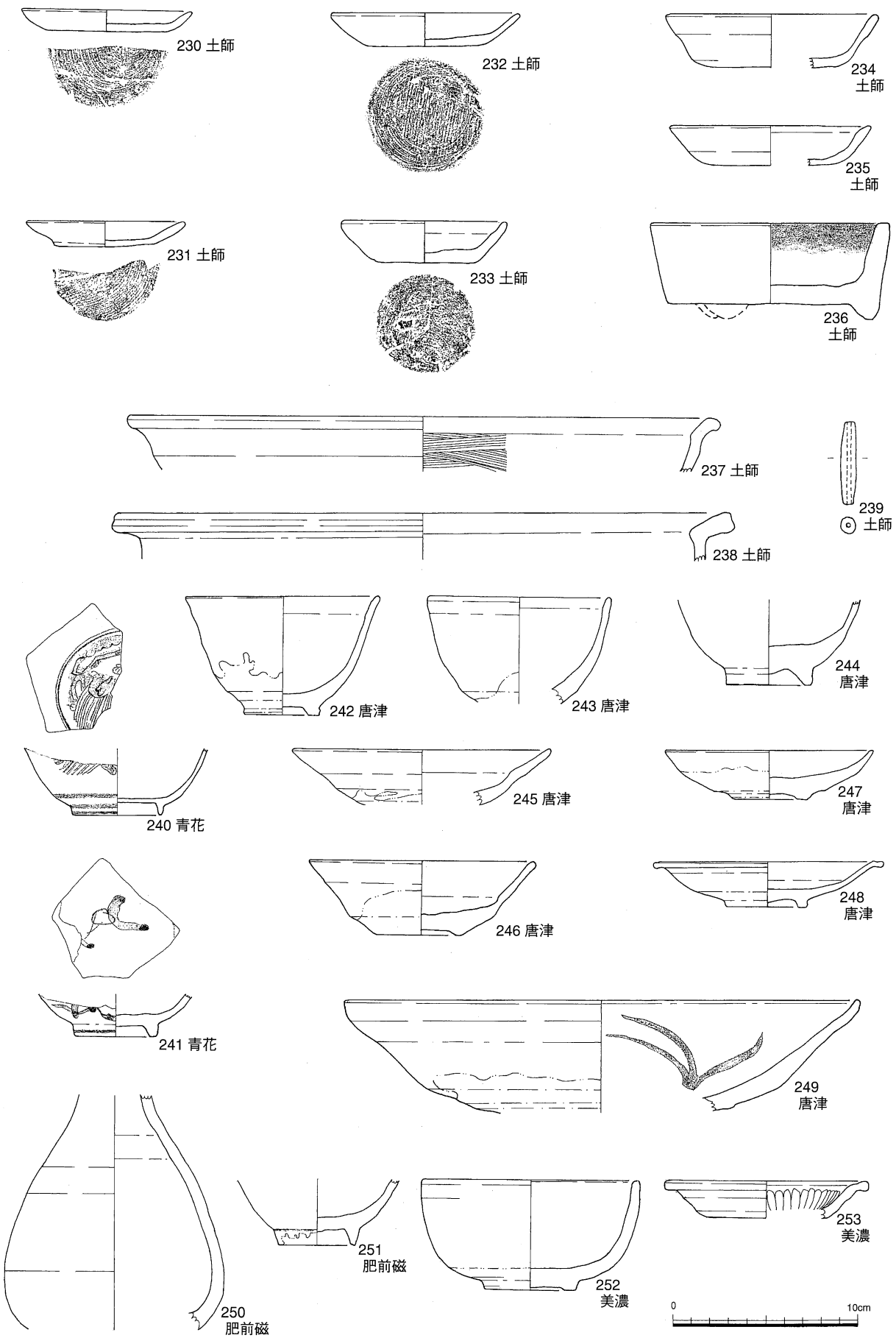


ＳＫ73その１

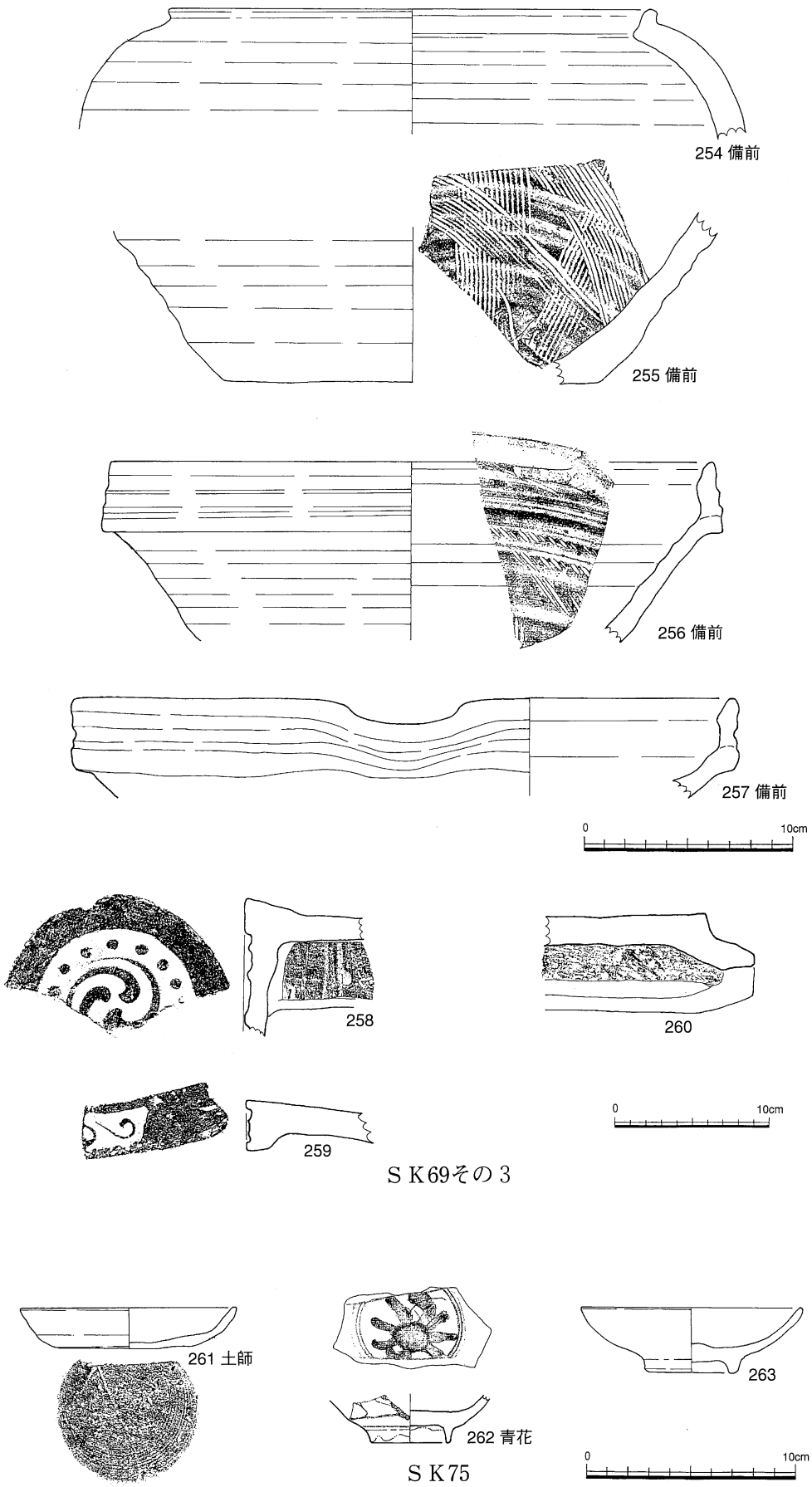
第45図　曲輪内下層ＳＫ76・ＳＫ73の遺物（１／３）



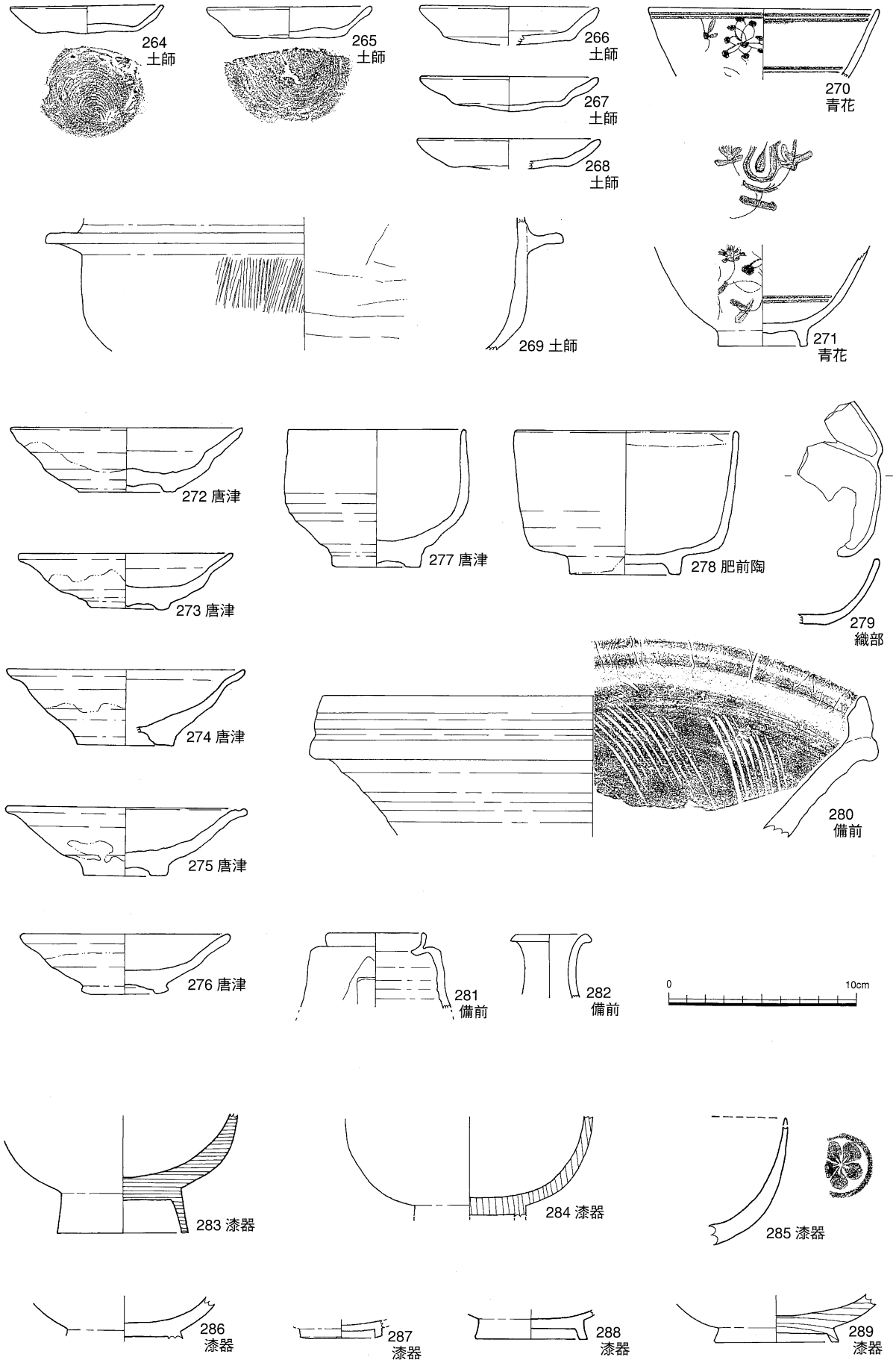
第46図　曲輪内下層ＳＫ73・ＳＫ69の遺物［木器］（１／４）



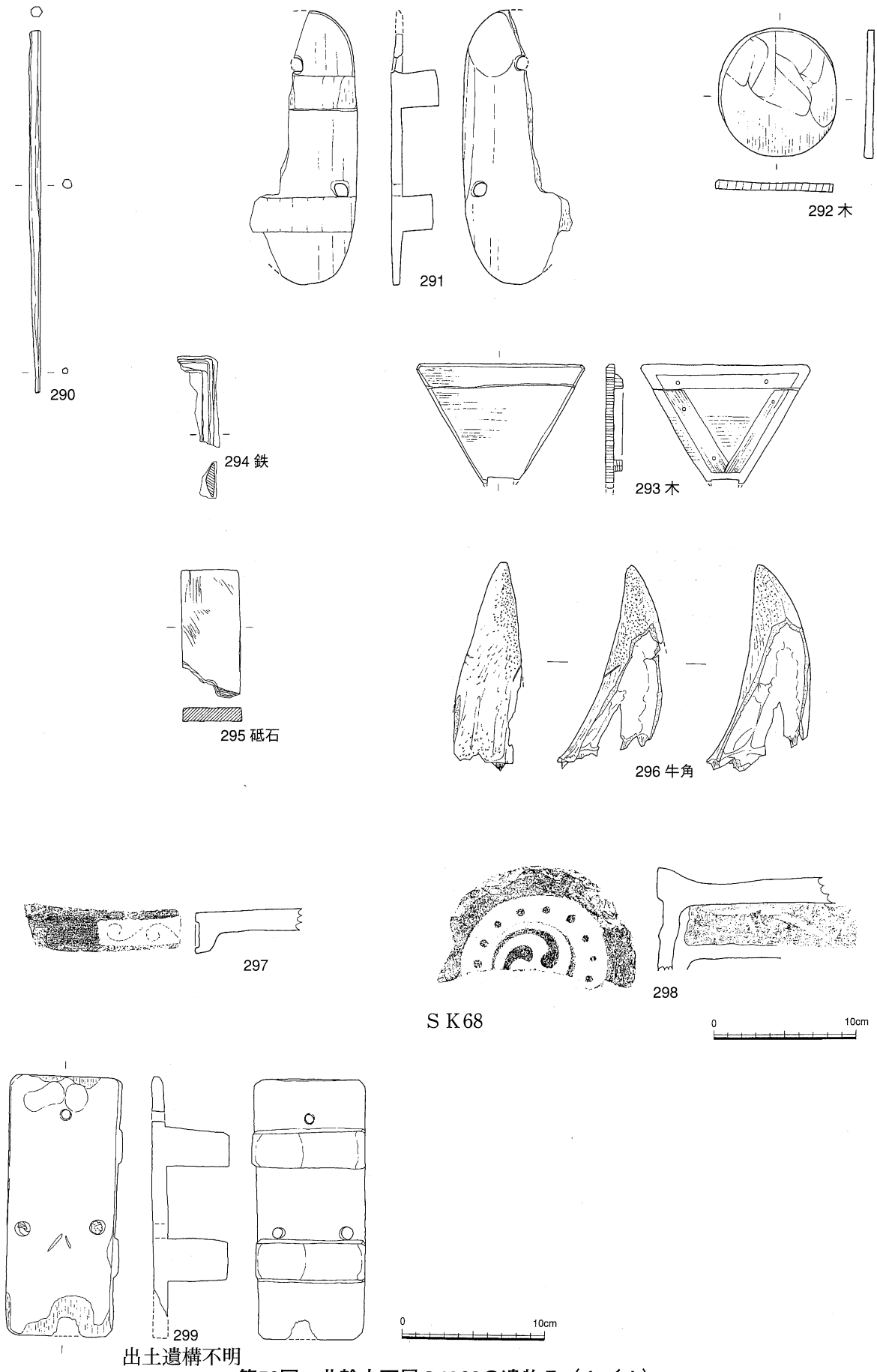
第47図　曲輪内下層ＳＫ69の遺物Ⅱ（１／３）



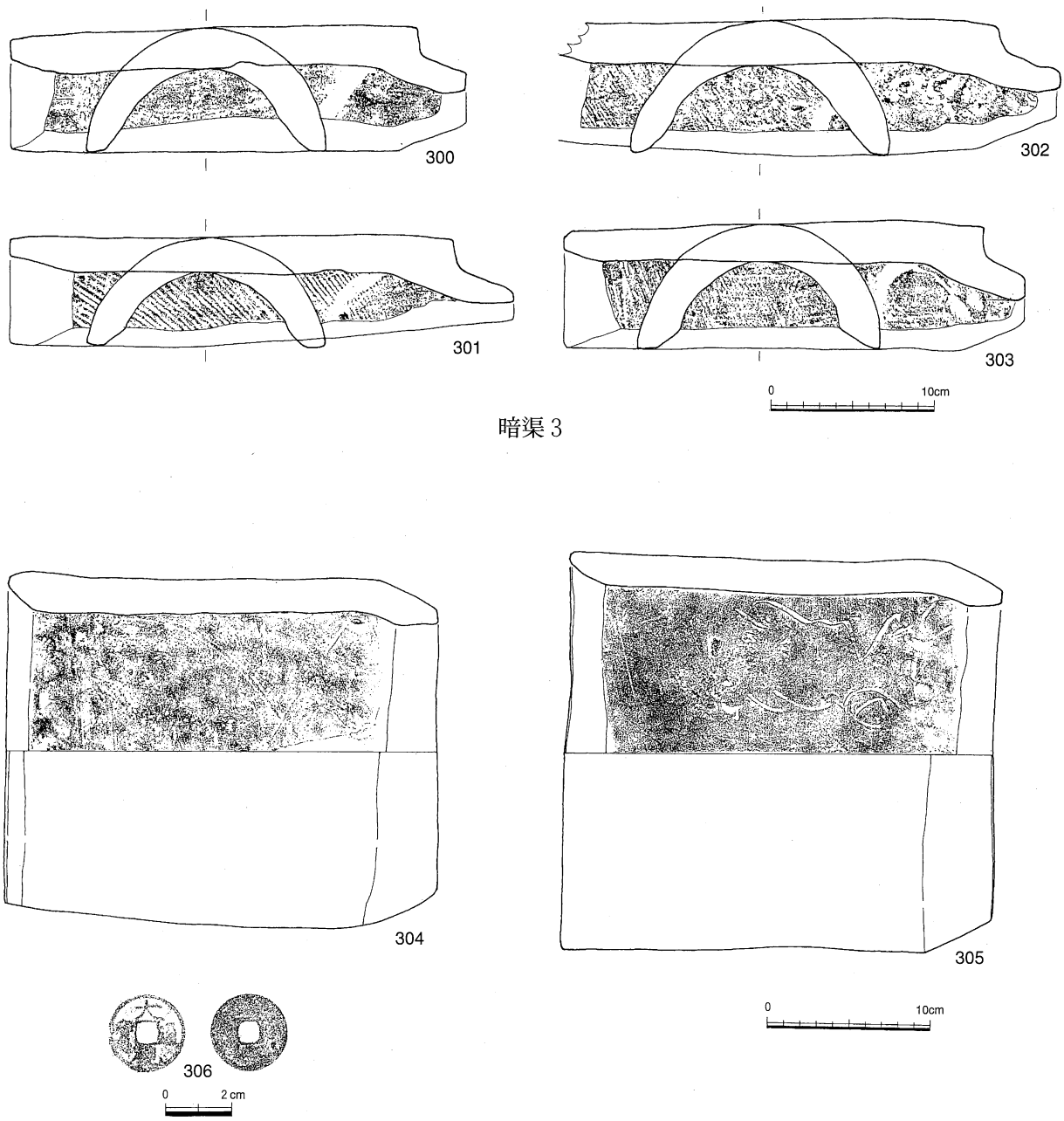
第48図　曲輪内下層ＳＫ69・ＳＫ75の遺物（瓦：１／４　他：１／３）



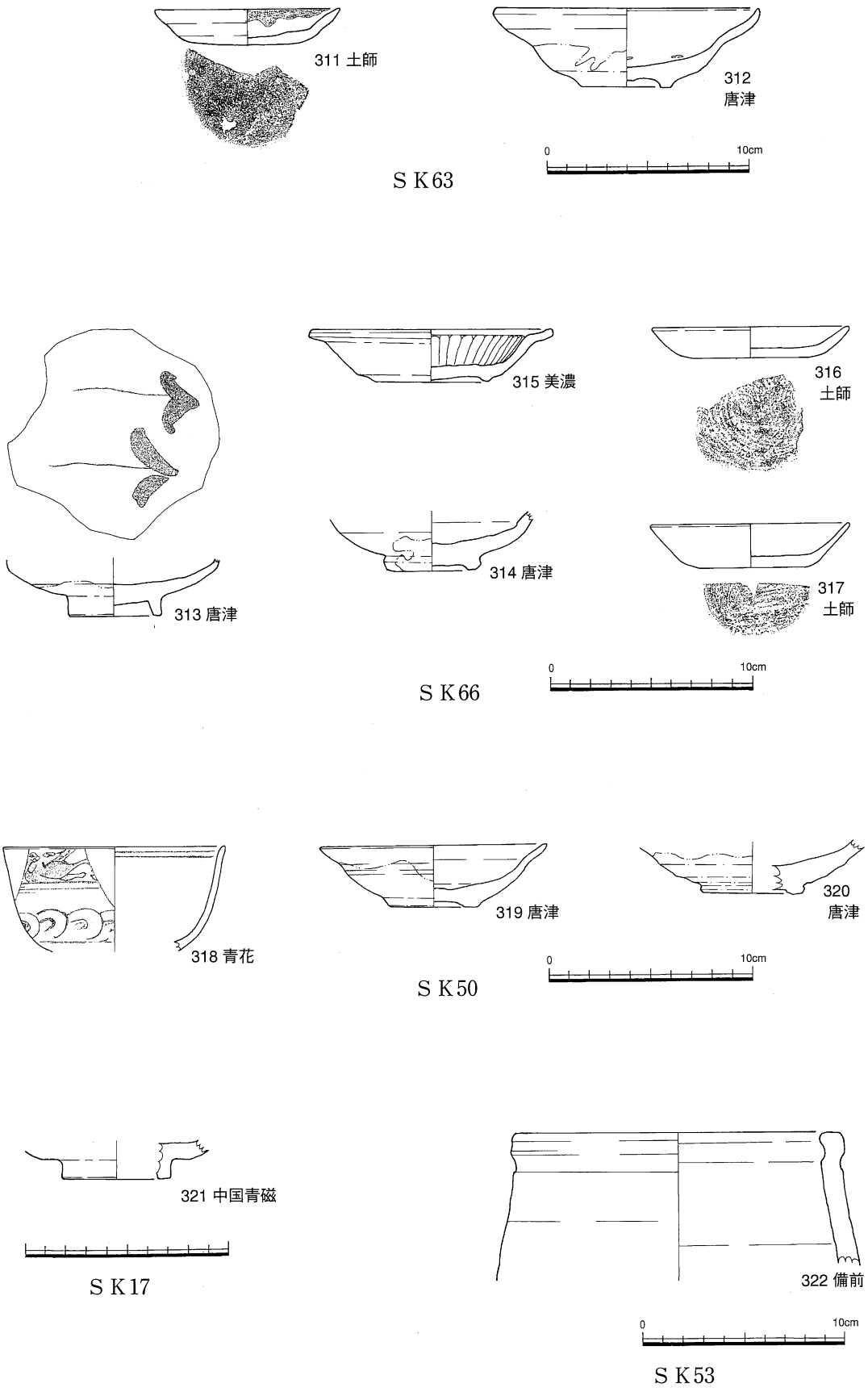
第49図　曲輪内下層ＳＫ68の遺物Ⅰ（１／３）



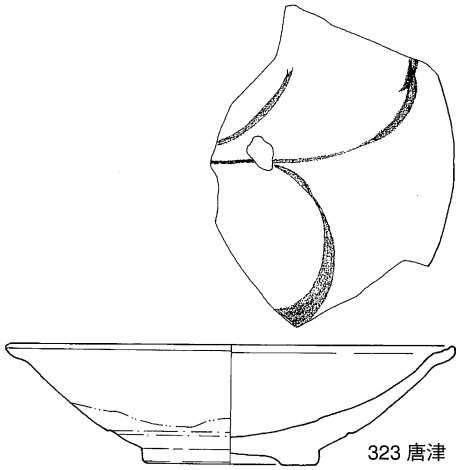
第50図　曲輪内下層ＳＫ68の遺物Ⅱ（１／４）

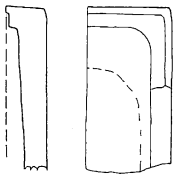


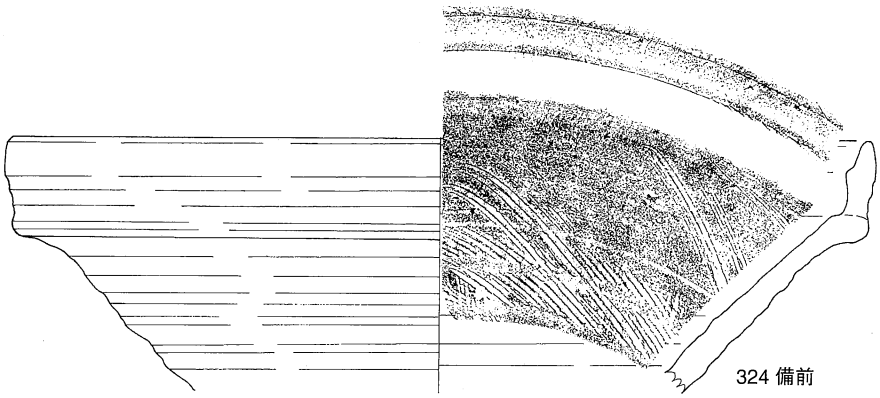
第51図　曲輪内中層暗渠３・暗渠１の遺物（銭：１／２　瓦類：１／４　他：１／３）

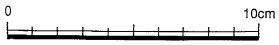


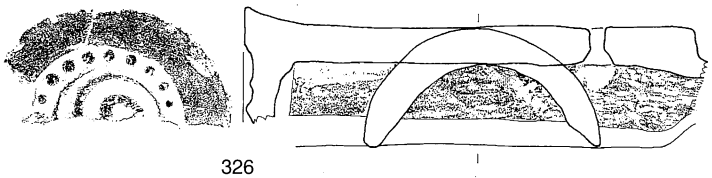
第52図　曲輪内中層ＳＫ63・ＳＫ66・ＳＫ50・ＳＫ17・ＳＫ53の遺物（１／３）

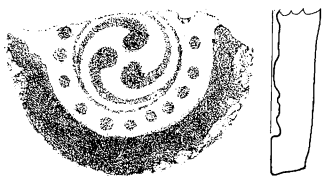


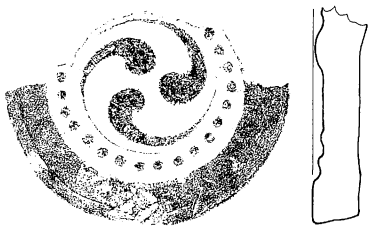


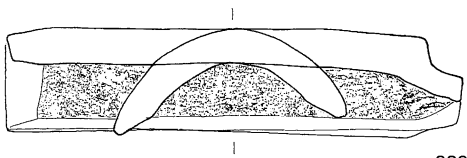


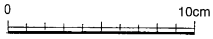




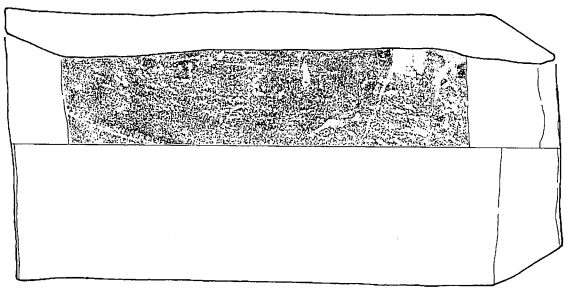


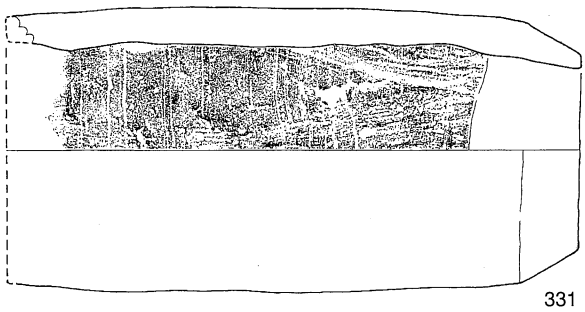


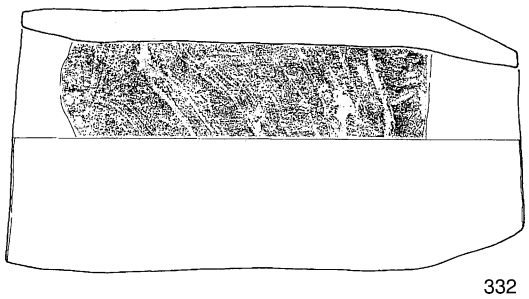


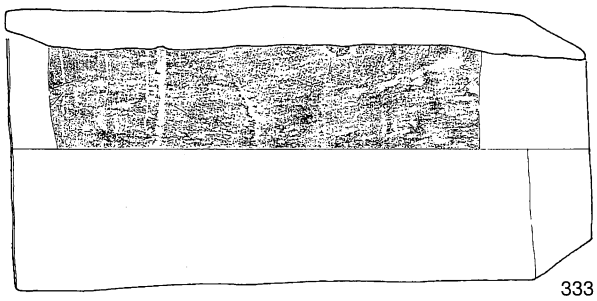


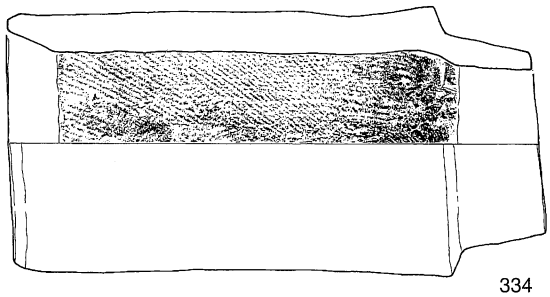
第53図　曲輪内上層暗渠２の遺物Ⅰ（瓦：1／4　他：１／３）

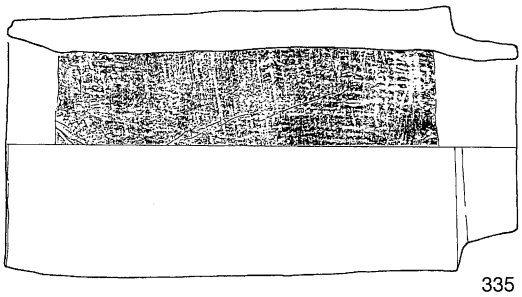


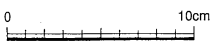




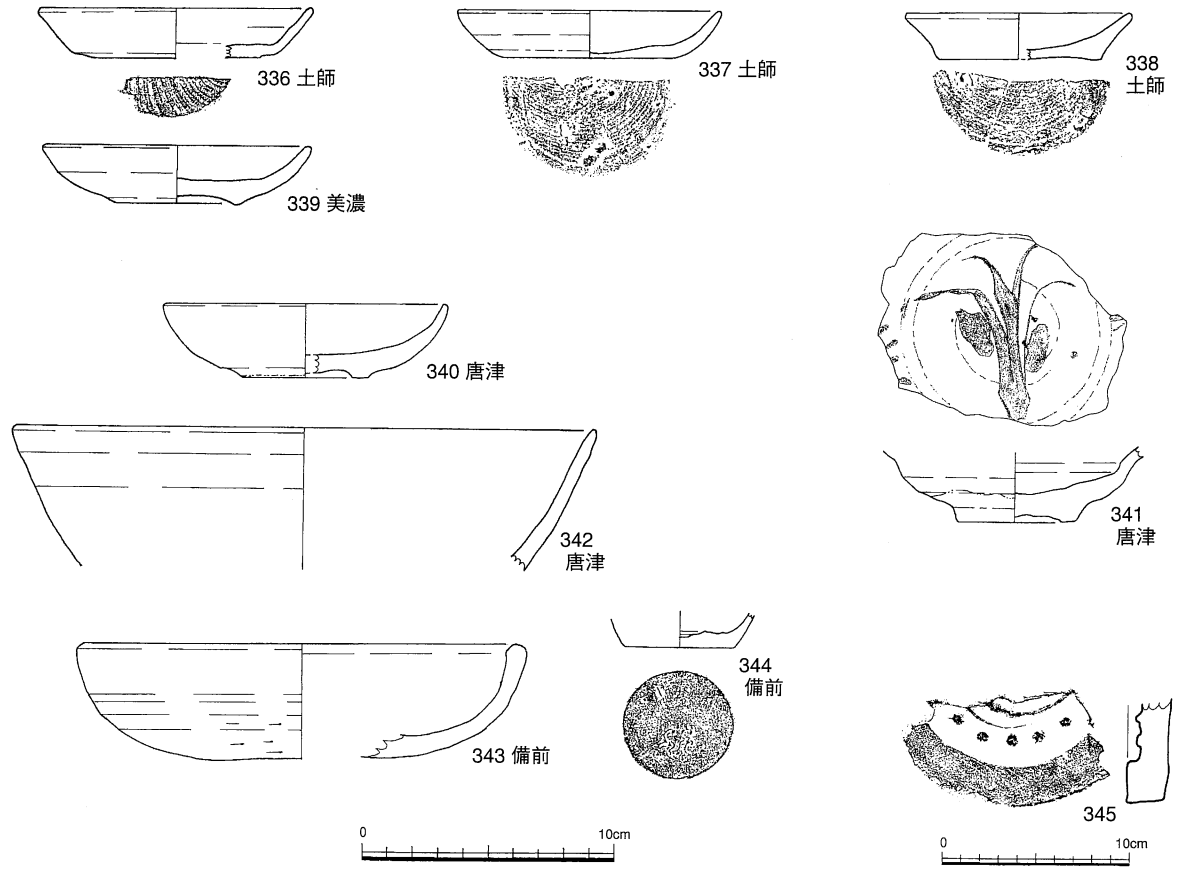




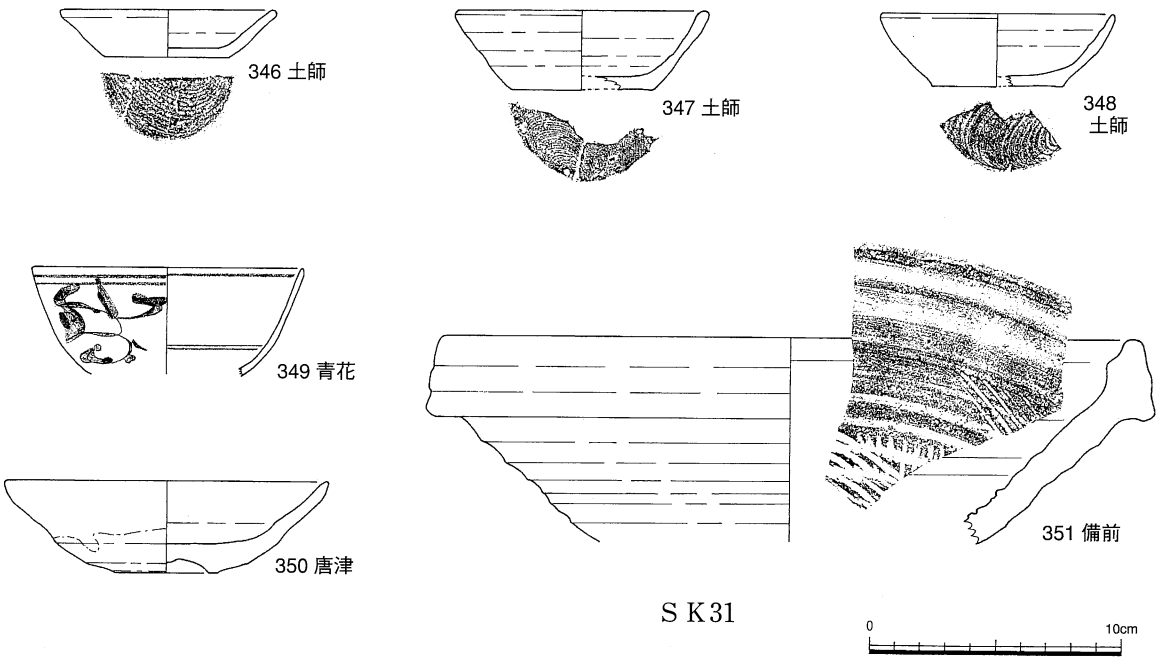




第54図　曲輪内上層暗渠２の遺物Ⅱ（1／４）

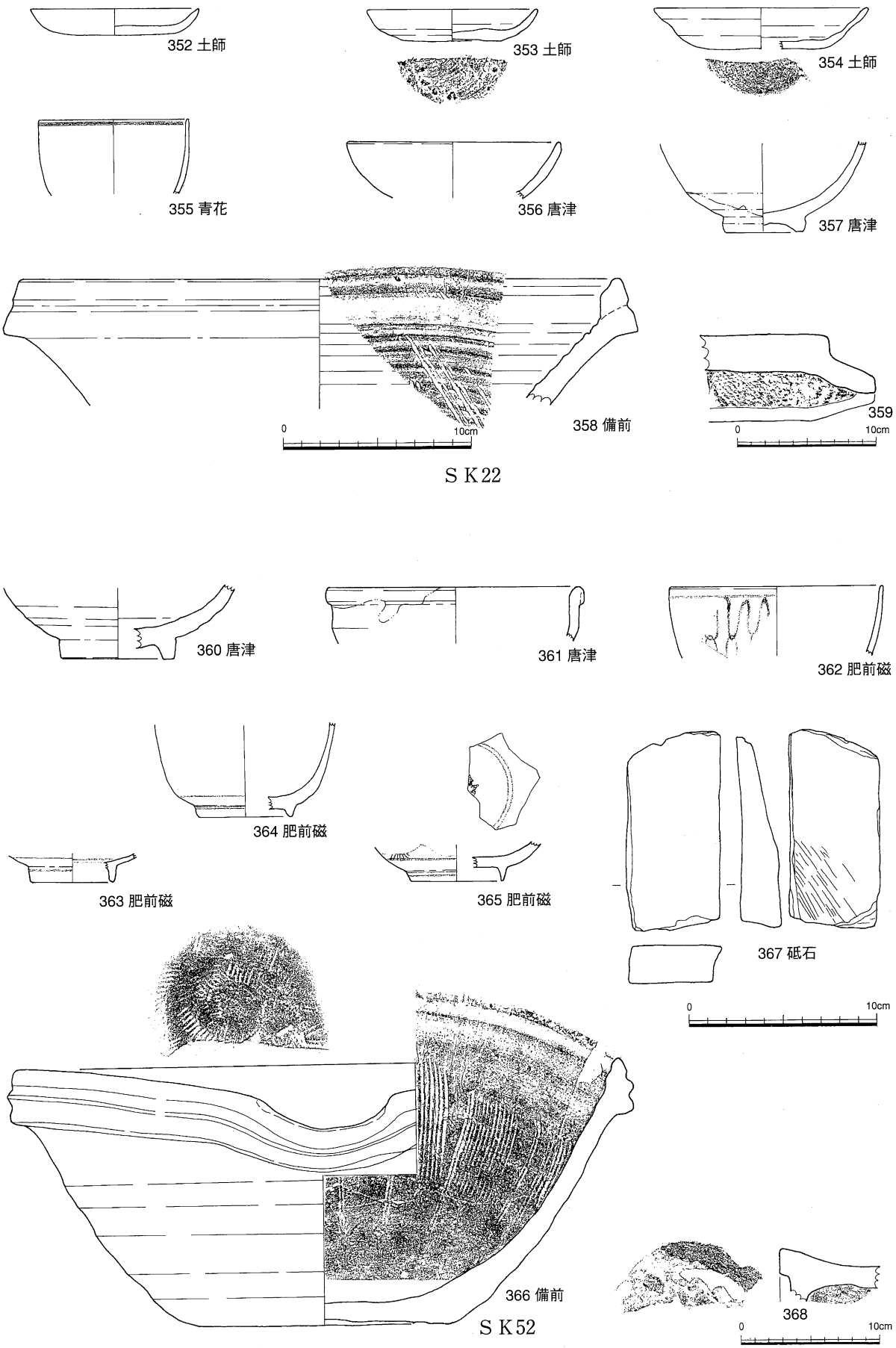


ＳＫ23

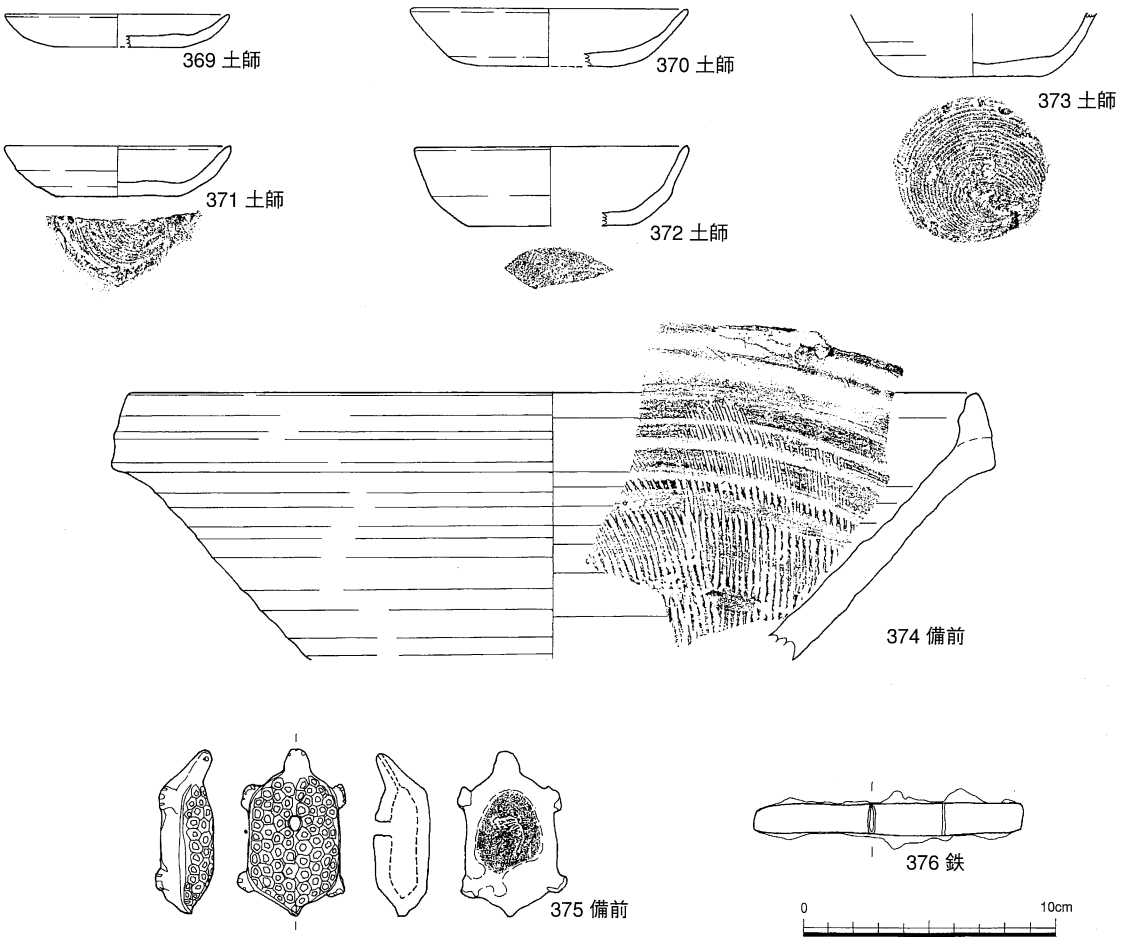


ＳＫ31

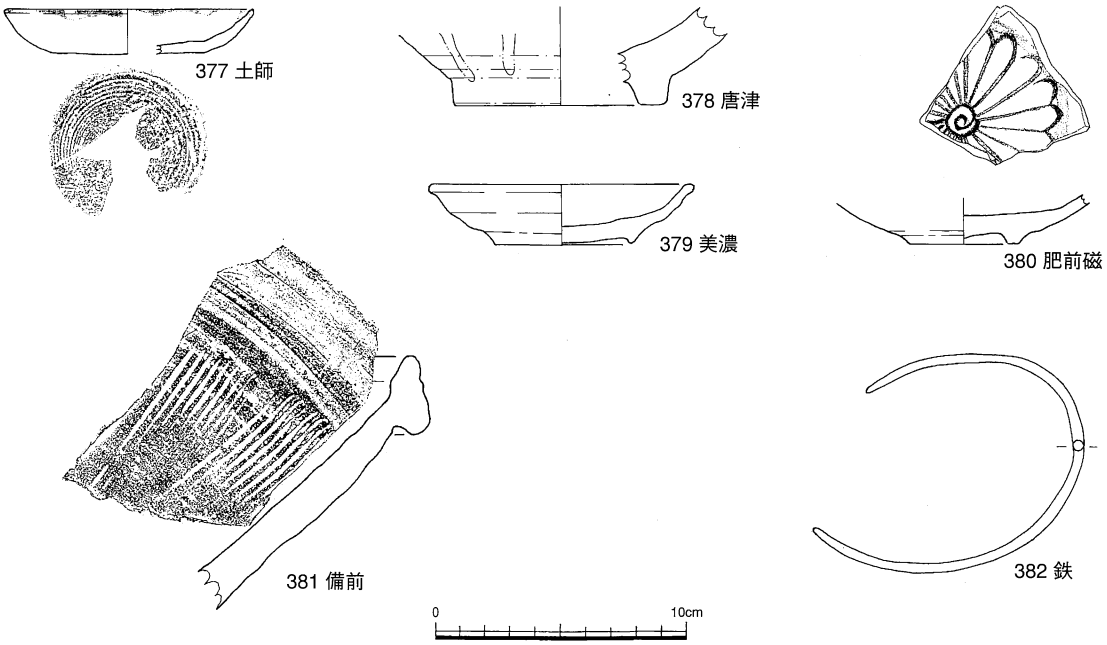
第55図　曲輪内上層ＳＫ23・ＳＫ31の遺物（瓦：1／4　他：1／3）



第56図　曲輪内上層ＳＫ22・ＳＫ52の遺物（瓦：1／4　他：1／3）

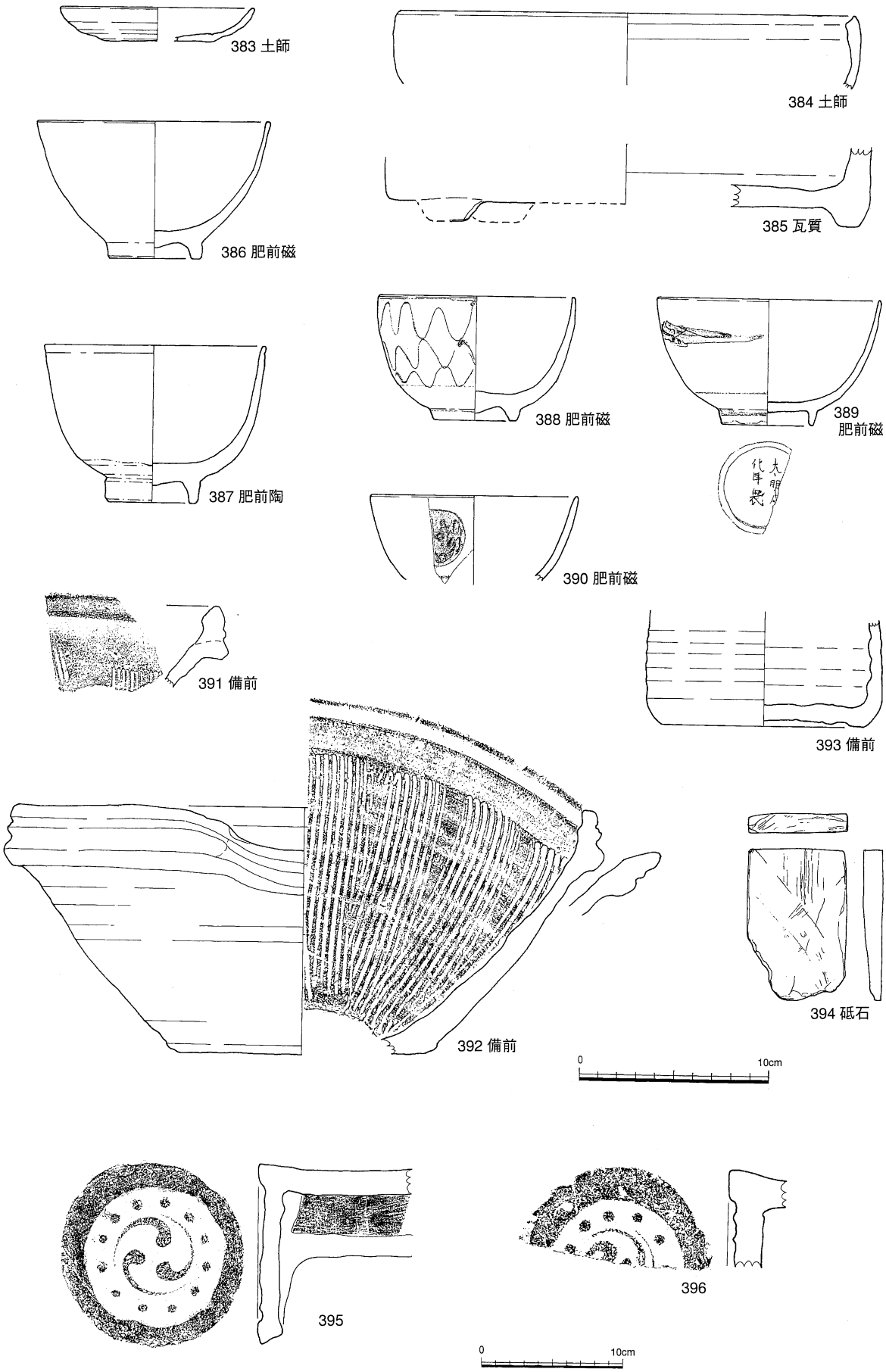


ＳＫ21

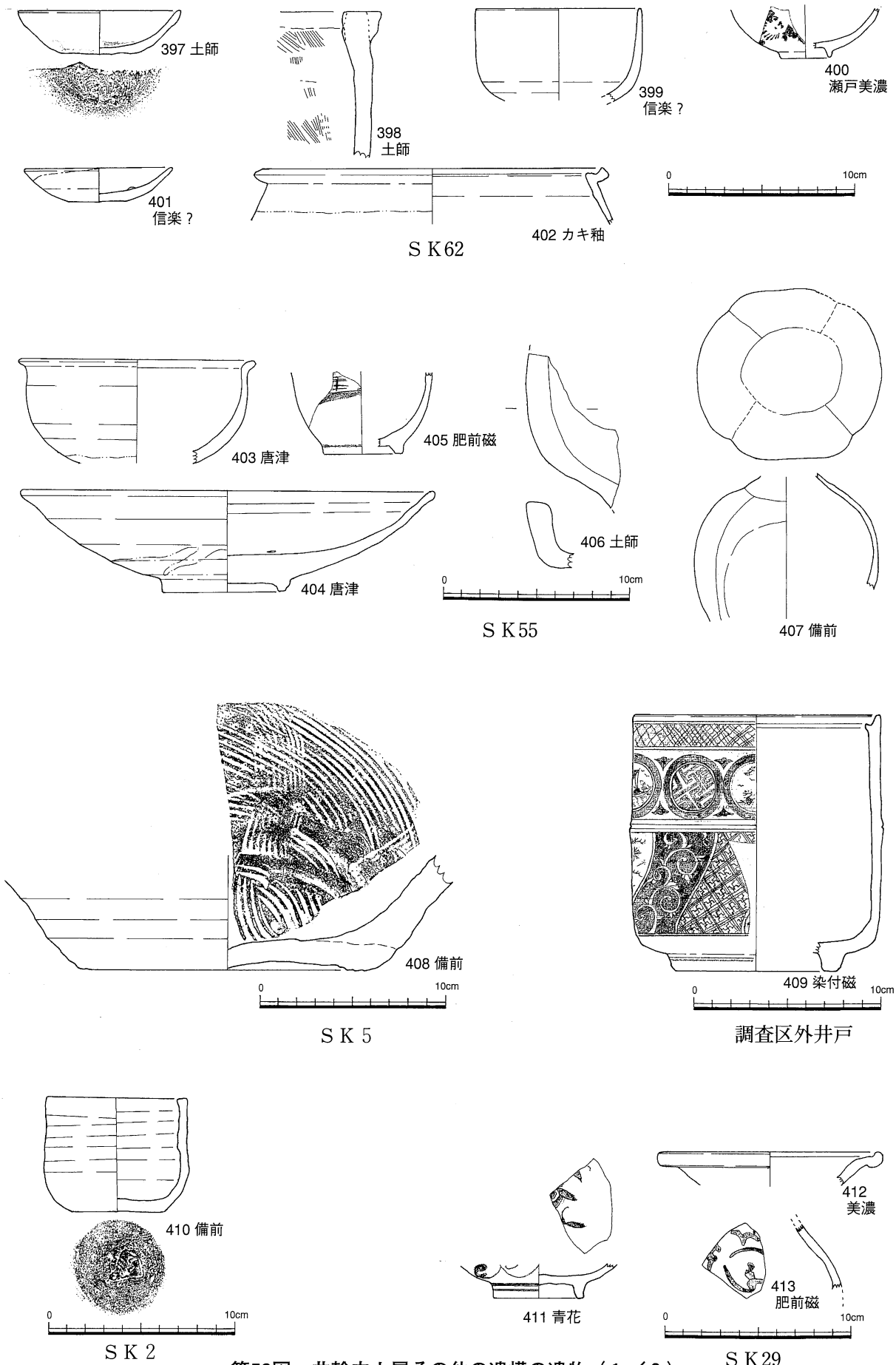


ＳＫ16

第57図　曲輪内上層ＳＫ21・ＳＫ16の遺物（１／３）



第58図　曲輪内上層ＳＫ51の遺物（瓦：1／4　他：1／3）



第59図　曲輪内上層その他の遺構の遺物（１／３）

第４節　曲輪内包含層の遺物

曲輪内でのⅥ層以上で出土した遺物のうち、遺構に帰属しないものを記述する。これには、下層－中層間(Ⅵ層)、中層－上層間(Ⅴ層)の地盤重あげの各造成土に含まれていた遺物のほか、遺構検出作業時の出土物で本来は特定の遺構に含まれながら帰属が特定できないもの、上層遺構面以上の高度にあった造成土や遺構中の遺物(主に機械掘削による)などが含まれ、その製作年代は17世紀前半代を中心としつつ、江戸時代全体を通じ、一部は近代に及んでいる。このうち、おおむねⅥ層・Ⅴ層もしくはこれに伴う遺構に含まれた可能性を特定できるものを下部包含層の遺物とし、漠とⅤ層以上の遺物としか限定できないものを上部包含層の遺物として記述する。

１．下部包含層の遺物（第60図414～425）

414は中国景徳鎮窯の青花碗で、高台は慢頭心形、見込に官人を描く。415は景徳鎮の青花大皿(盤)である。416も青花の大皿(盤)であるが、漳州窯製で釉が分厚い呉須手である。417は景徳鎮青花で薄手精製の丸碗、418は漳州窯製の磁器質青花皿である。

419・420は唐津焼の灰釉皿で、見込に砂目を残す。

421は美濃焼の志野釉輪花皿、422は美濃焼の灰釉皿で見込を円形釉剥ぎにする。

423は肥前産の磁器質に近い陶器で、内面に濁透明釉、外面に緑釉を掛け、高台は無釉である。

424は備前焼の円盤で薬研と組合うものかも知れない。425は16世紀末の備前焼大皿(盤)である。

426は手づくね成形の土器皿である。427は手づくねの坩堝小皿で、胎土は砂粒を多く含む暗色で、強熱されて器面がカセている。内面には僅かに金粒が残り、金溶解用であったとみられる。

428は素焼き手づくねの犬形土製品で、器面はにぶい黄橙色を呈している。

２．上部包含層の遺物（第61～68図429～563）

429～436は回転糸切り痕を残す土師質土器の皿である。435・356など17世紀前葉には無かったタイプのものが含まれる。437・438は焼塩壺の蓋と身である。438は関西産ではあまりみかけない厚手で、岡山産の可能性が考えられる。439は土師質の焙烙で難波Ｅ類、440も同じく焙烙であるが外面にクシ条線があり難波Ｃ類に属する。17世紀中～後葉のもので、ともに煤の付着が著しい。441は土師質の羽釜で、体部に穴が開くが、製作時期は不詳である。442・443は土師質の土錘である。

444～452は16世紀末～17世紀初の中国陶磁である。白磁端反皿の444はで景徳鎮窯製とみられるが、同じ白磁端反皿の445は焼成がやや甘く高台にシャープさが無く漳州窯製の可能性がある。446～448は景徳鎮の精製の青花で、447は慢頭心高台、448は碁けい底である。449は赤絵磁器で、見込を釉剥ぎして、漳州窯製とみられる。450は漳州窯の磁器質呉須手碗、451は同じく漳州窯の陶質染付碗で、高台内を無釉にする。452は鉄分の多い陶質の胎土に、緑・赤・黄の各釉を掛けた華南製三彩である。

453は朝鮮王朝の白磁碗である。しっとりした陶石を用い、焼成は磁器とするにはやや甘めで、体部が逆ハ形に開く。17世紀前葉のものとみられる。

454は白磁皿である。陶石に近い胎土を磁器質に焼き全釉である。肥前～朝鮮製とみられる。

455～473は17世紀前葉を中心とする唐津もしくは唐津系陶器である。碗のうち455は灰釉で口縁に鉄錆(口紅)を施し、456・457は鉄釉である。457は高台内無釉であるが、高い高台をもち、新相である。

458～465・469の皿は総て灰釉で、458・465・469は鉄絵を施す。また462・464には胎土目、459・463・469には砂目が残る。468は灰釉の小鉢(皿)で、見込に胎土目が残る。466・467・470は灰釉に鉄絵を施す変形四方皿(小鉢)である。471は鉄分が多い暗色の胎土に灰釉を掛けた大皿(盤)で、肥前の唐津のほか、福岡系窯製の可能性も考えられる。472は瓶で、ロクロ成形の体部外面には鉄飴釉が掛り、底面には鉄漿を塗り、目状に砂が付着する。473は瓶の口縁で、オパール化した藁灰釉と灰釉が掛り、唐津のほか福岡系窯製の可能性が考えられる。

474は唐津の灰釉火入、475は肥前内野山系の白土使用全釉の17世紀後半の碗である。

476～484は16世紀後葉～17世紀前葉の美濃焼である。476～478は大窯期後半の鉄釉天目碗、479～482は灰釉皿である。479は大窯期中葉に遡り、480～482は見込を円形に釉剥ぎする。483・484は志野の向付で、大窯５期の製品である。

485～491・493・500・502は17世紀中葉の肥前磁器(伊万里)である。485は風景、486は網、487は見込の菊花、490は柳を意匠とする染付碗で、いずれも畳付に砂が付着する。488は内面に透明釉、外面に青磁釉を掛け、高台を無釉にする碗である。また489は内面に透明釉を掛けて呉須で菊花を染付し、外面に鉄釉を掛け、高台を無釉にする碗である。491は見込に菊花を配する碗である。493は体部に縦筋をソギ入れ、寿字を染付けて、高台を無釉にした杯である。500も杯で、高台無釉の白磁である。502は折枝梅を意匠とする皿で、畳付に砂が付着する。

492は17世紀後半の肥前磁器染付碗、494は17世紀中～後葉の肥前磁器の松文染付瓶である。499の全釉の白磁杯も17世紀代の製品の可能性がある。

495は網文の染付碗、496は色絵の素材とみられる白磁碗、497は陶胎染付碗で、いずれも18世紀の肥前陶磁とみられる。498は陶石様の胎土に鉄赤文を描くベタ底の油瓶で、肥前磁器の焼成不良品の可能性がある。501は19世紀の肥前磁器染付の小花瓶である。

503は見込にコンニャク印判の五弁花文を配す肥前磁器の染付皿で18世紀前半の製品である。504は見込を蛇目釉剥ぎにする皿で、17世紀後半に遡る肥前波佐見系の可能性がある。

505～508は18世紀末～19世紀の肥前磁器染付である。505は矢羽文の丸碗、506は精製の麒麟文鉢、507は線書文の端反碗、508は栗文の碗蓋である。また510は外面に青磁釉を掛けた肥前磁器の火入類であるが年代は不詳である。

509・511～516は光沢のある陶石を用いた19世紀代(明治を含む)の磁器で、関西系～瀬戸美濃製とみられる。509は幕末に多見する風景を染め付けた皿、511と512は染付の段重鉢、513は花文を押印する青磁(非 三田青磁)である。また、514は松文染付の湯飲み、515は白磁皿、516は鉄釉碗である。

517は幕末～明治とみられる無釉陶器の鉢形焙烙～ナベで、外面に煤が顕著に付着する。

518は京系灰釉陶器の蓋、519は緑釉・灰釉掛け分けの段碗、520は鉄釉陶器の鉢、521は京系灰釉陶器のナベで、18・19世紀の製品である。

522は甘い磁器質のコップ形に緑印の染付を行うもので、戦時中の非常食容器である。

523～547は備前焼である。

523～525は大皿(盤)で、523は16世紀後葉、口縁に鉤をつくる524・526は16世紀最終末から17世紀初の製品とみられる。

526は皿で、高台が付く可能性がある。527～529は灯明皿で内面などに塗土を施し、返りのない527は17世紀中葉～18世紀、528・529は18・19世紀の製品とみられる。

530は輪花の小皿で、胎土や焼成からすれば16世紀末～17世紀前葉の製品である。

531は三足付きの鉢で、花器にも見立てられる。口縁は肥厚し、底面はボタ餅と黄ゴマが美しく、「叶」のヘラ書きがある。16世紀末～17世紀前葉の製品である。

532・533も鉢形で、532は把手が付く。やはり16世紀末～17世紀前葉の製品とみられる。

534はサヤ形の鉢で、側部に刻印がある。17～19世紀の内で時期は特定しにくい。

535は朱泥を塗土した茶碗で、明治の陶工である久本葛尾による「葛尾」印が高台内に残る。

536は小形甕で塗土を施し、18・19世紀の製品とみられる。

537～542は擂鉢である。537・538はスリメが相当に詰まるが、体部にヘラ削りを行わず、底面もベタ底に至っておらず、塗土もなく、17世紀第３四半期頃の製品とみられる。539・541は高台が付きだした頃のもので、発色も前代に比べてやや赤味が強くなっており、17世紀末から18世紀前葉の製品とみられる。540も同時期のものであるが、高台が筒形で大きく、スリメの入れ方なども丁寧な優品である。542は、破片の状況から確実に高台付きである。高台脇に削りを行い、口縁内のスリメをナデ消している。器面は塗土風の赤褐色に発色し、前代の擂鉢に比べると焼締の程度は低い。19世紀中葉の連房窯の製品とみられる。

543は回転糸切りの蓋、544は無頸小壺、545は小壺、546は小徳利で、いずれも16世紀後葉から17世紀前葉の製品とみられる。547は芋形の徳利で、17世紀代の製品とみられる。

548・549は無釉焼締の丹波焼である。548はスリメ一本引きの擂鉢で16世紀末～17世紀初の製品、549は浅鉢(盤)で、やはり16世紀末～17世紀前半の製品とみられる。

550は、関西系の無釉擂鉢で、口縁上が沈線状、口縁内のスリメをナデ消し、外面に鉄漿を塗っている。胎土や発色・焼き締めの甘さから19世紀の明石製の可能性がある。

551・552は素焼きの土製品である。共に鈍い橙色の胎土で、半身づつ型で造り、組立てている。剥離材にはキラコを用い、18世紀末以降のものとみられる。

553は銅製容器の蓋で、ツマミは花形の板を半球状に加工し、上下を合わせて鋲で止めている。

554・555は真鍮製とみられる煙管の雁首で、頸部が長い特徴から17世紀代の製品とみられる。

556・557は鉄釘、558は鉄製の延板である。559・560は砥石で、559は流紋岩製、560は頁岩製とみられる。

561は中心飾に三葉を据えて、唐草が三転する文様をもつ軒平瓦で、16世紀末の宇喜多秀家期(岡山城２式)に遡る製品である。562は中心飾に二巴を据えて、唐草が二転する文様をもつ軒平瓦で、17世紀末～18世紀前葉の製品とみられる。

563は16世紀末～17世紀前葉とみられる板状の飾瓦で、クギ孔をもつ。裏面の一部には細布目や指頭圧痕が残る。破片であることと、貼付文の剥離のため、意匠の詳細は不明であるが、二又に分かれた茎状部が残り、植物文様であったとみられる。上方寄りにヘラ書き直線が交差する。

曲輪内下部包含層出土（第60図）

番号	種類	器種・部位	法量（cm） 口径長さ	器高高さ	底径幅	胎土（素材）と焼成 種類・状況・含有物-器面色・断面色-焼成	釉(・漆・装飾) 釉種-色-部位	文様 施文材-意匠	技法など	製作時期	備考
414	中国(景徳鎮)染付	碗			3.2	陶石-N8/-良好	透明釉-5GY8/1-全釉	呉須(藍)-官人	畳付外角釉ゲズリ	16世紀末～17世紀前葉	染付碗Ｅ群
415	中国(景徳鎮)染付	大皿(盤)			(15.1)	陶石-N8/-良好	透明釉-7.5GY8/1-全釉	呉須(藍)	畳付両角釉ゲズリ	16世紀末～17世紀前葉	
416	中国(漳州)染付	大皿(盤)				陶石-N8/(やや灰)-良好	濁透明釉-7.5GY7/1	呉須(濃青)		17世紀前葉	呉須手
417	中国(景徳鎮)染付		(13.9)			陶石-N8/-良好	透明釉-7.5GY8/1	呉須(藍)		16世紀末～17世紀前葉	皿Ｆ群(皿Ｋ群)
418	中国(漳州)染付	皿	(11.7)	2.9	(7.0)	陶石-N8/-良好	濁透明釉-10GY7/1-全釉	呉須(鈍青)		17世紀前葉	染付皿Ｅ群粗製
419	唐津	皿	9.5	2.2	5.3	0.5mm以下砂粒-2.5Y8/4・2.5Y8/4-良好	灰釉-10YR6/3-高台脇無		見込みに砂目	17世紀前葉	大橋Ⅱ期
420	唐津	皿		4.7	4.6	3mm以下鉄分粒多-10YR6/3・10YR5/1-良好	灰釉-7.5Y5/2-高台脇無		見込みに砂目	17世紀前葉	大橋Ⅱ期
421	美濃	志野輪花皿	(18.6)			0.5mm以下砂僅-7.5Y8/2-良好	長石釉-7.5Y7/1			17世紀初	大窯５期、貫入
422	美濃	皿	(9.9)	2.1	5.8	1mm以下砂-2.5Y8/3・2.5Y8/2-良好	灰釉-5Y6/6-全釉		見込円形釉剥ぎ・高台内輪トチ	16世紀末	大窯後半期
423	肥前陶器	碗			2.6	精良-2.5Y7/1・2.5Y7/1-良好(磁器的)	内面:濁透明釉、外:緑釉		内外釉掛け分け、高台脇無釉	17世紀中葉	透明釉5Y7/1、緑釉5Y5/4、大橋Ⅱ期
424	備前	円盤(薬研用？)	(22)			2mm以下砂僅-10R3/4～H6/・H6/-良好				17世紀	
425	備前	大皿(盤)	(37.9)	6.3	(20.1)	2mm以下黒色粒-7.5R3/2～2/1・10YR6/1-良好				17世紀初	見込み灰かぶり(黄ゴマ顕著)
426	土師質土器	小皿	(7.8)	2.0	7.9	1mm以下砂僅-10YR7/4-良好			手づくね	17世紀前葉	
427	素焼き坩堝	小皿	(4.6)	1.8		1mm以下砂多-2.5Y5/1～6/1・N3/-良好			手づくね	17世紀前葉？	使用被熱、内面に金粒付着
428	素焼き土製品	犬形	6.8		4.5	0.5mm以下砂僅-10YR7/4～8/2・5Y8/-良好			手づくね	16世紀末～17世紀前葉	

曲輪内上部包含層出土（第61図～第68図）

番号	種類	器種・部位	法量（cm） 口径長さ	器高高さ	底径幅	胎土（素材）と焼成 種類・状況・含有物-器面色・断面色-焼成	釉(・漆・装飾) 釉種-色-部位	文様 施文材-意匠	技法など	製作時期	備考
429	土師質土器	皿	(10.9)	2.9	(7.8)	1mm以下砂褐色粒-10YR7/4・7.5YR6/6-良好			回転糸切り	17世紀前葉	口縁に僅かに煤付着
430	土師質土器	皿	10.2	3	5.9	0.5mm以下砂粒僅-2.5Y7/3-良好			回転糸切り	17世紀前葉	
431	土師質土器	皿	10.3	3.5	5.7	0.5mm以下砂粒僅-2.5Y8/3-良好			回転糸切り	17世紀前葉	
432	土師質土器	小皿	10.1	1.8	7.8	0.5mm以下砂粒僅-7.5YR6/4-良好			回転糸切り	17世紀前葉	口縁に煤付着、完形
433	土師質土器	小皿	(10)	1.7	6.7	0.5mm以下砂粒僅-5Y3/１-良好			回転糸切り	17世紀前葉	口縁に煤付着
434	土師質土器	小皿	(8.2)	1.4	(2.4)	3mm以下砂茶褐色粒-2.5Y8/3-良好			回転糸切り	17世紀前葉	口縁に煤付着
435	土師質土器	皿	(14.8)	2.5	(9.0)	0.5mm以下砂僅-2.5Y8/3-良好			回転糸切り	17世紀前半	
436	土師質土器	皿	(9.9)	2.2	(4.9)	0.5mm以下砂僅-2.5Y7/2～N3/-良好			回転糸切り	17世紀前半	口縁に煤付着、焼成時黒斑
437	土師質土器	焼塩壺蓋	(7.0)	2	5.4	2mm以下砂・生地砂質・雲母無-7.5YR7/4-良好				17世紀前葉	厚手(非関西産？)
438	土師質土器	焼塩壺			5.4	3mm以下砂・生地砂質・雲母無-7.5YR6/2-良好				17世紀前葉	厚手(非関西産？)
439	土師質土器	焙烙	(23.2)			1mm以下砂粒-2.5Y5/1・10R6/4～N3/-良好			底部外型成形	17世紀中～後葉	外全面に煤、内面に炭化物付着、Ｅ類
440	土師質土器	焙烙	(23.7)			1mm以下砂・生地砂質・金雲母-7.5YR6/3-良好			底部外型成形、体外面クシ	17世紀後葉	外全面に煤付着、難波Ｃ類
441	土師質土器	釜類	(9.9)			2mm以下砂・生地砂質-7.5YR6/6-良好			体部内面に細布目(内型成形？)	18世紀～？	体部に穴、遺存部では火受痕跡なし
442	土師質土器	土錘	4.5			0.5mm以下砂僅-7.5Y7/4～2.5YR5/6-良好				16世紀末～17世紀？	完形、7.3ｇ
443	土師質土器	土錘	5.3			0.5mm以下砂僅-2.5YR6/3-良好				16世紀末～17世紀？	完形、4.9ｇ
444	中国(景徳鎮)白磁	端反皿	(17.8)	3.8	(10.2)	陶石-N8/-良好	透明釉-10Y8/1-全釉		畳付両角釉削り	16世紀末	高台内釉一部虫食い
445	中国(漳州)白磁	端反皿	(13.9)	3.6	(7.7)	陶石-7.5Y7/1-良好	濁透明釉-7.5Y7/1-全釉		畳付外角軽く釉削り	17世紀初	破損後の漆継ぎ痕あり
446	中国(景徳鎮)青花	碗	(12.9)			陶石-N8/-良好	透明釉-7.5GY8/1	呉須(鮮濃青)		16世紀末	
447	中国(景徳鎮)青花	碗			(4.6)	陶石-N8/-良好	透明釉-10GY8/1	呉須(藍)	畳付釉削り	16世紀末	染付碗Ｅ群
448	中国(景徳鎮)青花	皿			(3.0)	陶石-N8/-良好	透明釉-7.5GY8/1	呉須(濃青)	畳付釉削り	16世紀末	染付皿Ｃ群精製
449	中国(漳州)赤絵	皿	(9.9)			陶石-7.5Y8/1-良好(磁器質)	透明釉-10Y8/1	赤絵(10R4/6)	見込み釉剥ぎ	17世紀前葉	
450	中国(漳州)青花	碗				陶石-N8/-良好(甘い磁器質)	濁透明釉-10Y8/1	呉須(淡鈍青)		17世紀前葉	呉須手
451	中国(漳州)青花	碗			(5.2)	陶石-10YR7/4・7.5YR8/1～7/6-良好(陶質)	濁乳色釉-5Y7/2-高台無	呉須(2.5GY3/1)	畳付・高台内無釉、高台内トキン	16世紀末	染付碗Ｊ１群
452	中国(華南)三彩	皿				0.5mm以下砂僅-5Y6/1-良好(陶質)	緑釉主体に鈍赤釉・黄釉	線刻＋三彩		16世紀末～17世紀前葉	釉色は鮮濃緑、鈍赤、鮮黄
453	朝鮮王朝白磁	碗	(17.1)			陶石-N7.5/-良好(やや甘い磁器質)	透明釉-10Y8/1			16世紀末～17世紀前葉	
454	肥前?陶器(白磁)	皿			(6.0)	陶石に近い白土-7.5Y8/1-良好(磁器質に近い)	透明釉-10Y7/1-全釉		畳付両角を施釉前に削り	17世紀前葉	高台脇に沈線様２条、大橋～朝鮮

曲輪内上部包含層出土（第61図～第68図）つづき

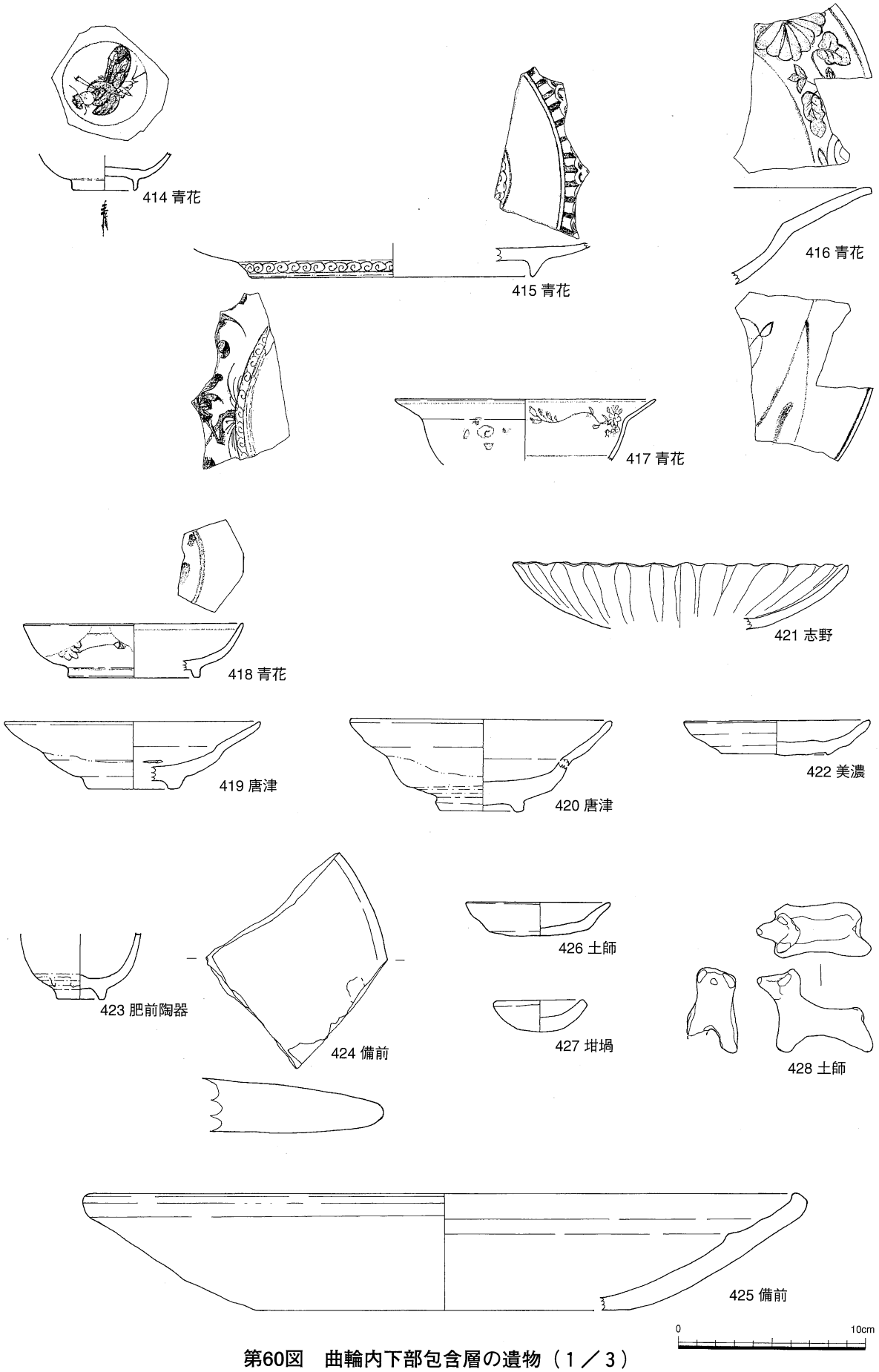
番号	種　類	器種・部位	法量（cm） 口径長さ	器高高さ	底径幅	胎土（素材）と焼成 種類・状況・含有物-器面色・断面色-焼成	釉(・漆・装飾) 釉種-色-部位	文　様 施文材-意匠	技　法　な　ど	製　作　時　期	備　　考
455	唐津	碗	(11.7)	6.7	(5.1)	1mm以下砂粒-10YR6/4・10YR7/3-良好	灰釉-5Y6/2-高台無	口縁鉄釉(5Y2/2)		17世紀前葉	大橋Ⅰ期
456	唐津	天目碗	(12.3)			0.5mm以下砂-7.5YR3/3-良好	鉄釉-7.5YR1.7/1～3/2			17世紀前葉	大橋Ⅰ期、武雄系
457	唐津	碗			4.5	1mm以下砂粒-10YR7/2・10YR7/2-良好	鉄釉-N2/-高台脇無			17世紀前半	大橋Ⅱ期
458	唐津	皿			5.0	1mm以下砂粒-2.5Y7/3・2.5Y7/3-良好	灰釉-2.5Y6/2-高台脇無	鉄絵(5Y3/2)	見込みに目痕なし	17世紀前葉	大橋Ⅰ期
459	唐津	皿	(11.2)	3.5	(4.0)	0.5mm以下砂-5Y6/2・5Y6/2-良好	灰釉-5Y5/4-高台無		見込みに砂目	17世紀前半	大橋Ⅱ期
460	唐津	皿	11.0	3.5	4.8	3mm以下鉄分粒1mm砂-7.5YR7/6・7.5YR7/6-良好	灰釉-7.5YR7/2-高台脇無		見込みに目痕なし	17世紀前葉	大橋Ⅰ期
461	唐津	皿	(10.3)	3.0	(4.8)	1mm以下砂粒-7.5YR5/4・2.5Y7/3-良好	灰釉-5Y6/3-高台脇無		見込みに目痕なし	17世紀前葉	大橋Ⅰ期
462	唐津	皿	10.5	2.4	6.0	1mm以下砂粒-2.5Y5/2・5Y6/1-良好	灰釉-10Y7/1-高台脇無		見込みに胎土目	17世紀前葉	大橋Ⅰ期
463	唐津	皿	(12.3)	3.3	(4.8)	1mm以下砂粒僅-5Y6/2・N6.5/-良好	灰釉-10Y6/1-高台脇無		見込みに砂目	17世紀前半	大橋Ⅱ期
464	唐津	皿	(12.3)	2.6	6.4	0.5mm以下砂僅-2.5Y7/4・2.5Y7/4-良好	灰釉-2.5Y6/4-高台脇無		見込みに胎土目	17世紀前葉	大橋Ⅰ期
465	唐津	皿			(4.5)	0.5mm以下砂-2.5Y7/3・2.5Y7/2-良好	灰釉-5Y6/2-高台脇無	鉄絵(7.5Y3/1)	見込みに目痕なし	17世紀前葉	大橋Ⅰ期
466	唐津	変形四方皿(小鉢)	(12.7)	4.4	(5.1)	1mm以下砂粒僅-10YR6/3・10YR7/4-良好	濁灰釉-10Y7/1-高台脇無		見込みに目痕なし	17世紀前葉	大橋Ⅰ期
467	唐津	変形四方皿(小鉢)				1mm以下砂粒僅-10YR6/3-良好	濁灰釉-10Y7/1			17世紀前葉	大橋Ⅰ期、４６６と同一個体
468	唐津	皿(小鉢)		3.1	3.5	1mm以下砂僅-10YR6/7・10YR6/7-良好	灰釉-10YR6/2-高台脇無		見込に３点胎土目、底部糸切り	17世紀前葉	大橋Ⅰ期
469	唐津	皿	13.4	3.2	4.4	0.5mm以下砂僅-10YR6/3・10YR7/1-不良(釉不全)	灰釉-7.5Y7/2-高台脇無	鉄絵(7.5YR3/2)	見込に砂目	17世紀前葉	大橋Ⅰ期
470	唐津	変形四方皿(小鉢)			4.9	0.5mm以下砂-5YR6/4・5YR6/4-良好	灰釉-5YR5/2-高台脇無	鉄絵(2.5Y2/1)	見込みに目痕なし	17世紀前葉	大橋Ⅰ期
471	唐津(～福岡系)	大皿(盤)	(24.4)	7.3	(7.8)	0.5mm以下砂-7.5YR3/3・2.5Y5/1-良好	灰釉-5Y3/1-高台脇無		見込みに目痕なし	17世紀前葉	大橋Ⅰ-2～Ⅱ期
472	唐津	瓶			(15.5)	1mm以下砂-10YR6/3・2.5Y6/1-良好	鉄(ｱﾒ)釉-2.5Y3/3-内無		ロクロ成形、底面に目状の粗砂	17世紀前葉	外底面にハケ塗り鉄漿、大橋Ⅰ～Ⅱ期
473	唐津(～福岡系)	瓶	(5.1)			0.5mm以下砂-2.5Y5/2-良好	藁灰釉+灰釉(2.5Y4/4)			17世紀前葉	藁灰は白青オパール化、大橋Ⅰ～Ⅱ期
474	唐津	火入形鉢	(11.7)			0.5mm以下砂生地砂質-10YR6/3-不良(釉化不全)	灰釉-2.5Y5/1～8/1			17世紀	内面も施釉、大橋Ⅱ～Ⅲ期
475	肥前内野山系陶器	碗			4.4	0.5mm以下砂僅-2.5Y8/3-良好	灰釉-2.5Y7/4-全釉		畳付に砂付着	17世紀後半	大橋Ⅲ期
476	美濃	天目碗	(11.7)			0.5mm以下砂-2.5Y8/2-良好	鉄釉-7.5YR3/4			16世紀後葉	大窯後半期
477	美濃	天目碗	(11.7)	6.2	4.3	0.5mm以下砂-10R4/4～2.5Y3/2・2.5Y3/1-良好	鉄釉-7.5YR2/1-高台脇無			16世紀後葉	大窯後半期
478	美濃	天目碗	(11.2)	6.0	4.0	1mm以下砂-10YR7/3・2.5Y8/3-良好	鉄釉-7.5YR3/3-高台脇無			16世紀後葉	大窯後半期
479	美濃	皿	10.3	2.1	5.6	0.5mm以下砂-5Y7/1-良好	灰釉-5Y6/4-全釉		高台内輪トチ痕	16世紀中葉	大窯中葉期
480	美濃	皿	10.2	2.1	5.9	0.5mm以下砂-2.5Y8/3・5Y8/2-良好	灰釉-5Y6/4-全釉		見込円形釉剥ぎ、高台内輪ﾄｹ痕	16世紀後葉	大窯後半期
481	美濃	折縁ソギ菊皿	(11.1)	2.2	(5.9)	0.5mm以下砂-7.5YR4/4-5Y7/1・良好	灰釉-7.5Y5/3-全釉		見込円形釉剥ぎ、見込高台輪ﾄｹ	16世紀末～17世紀初	大窯後半期
482	美濃	折縁皿	11.3	2.4	5.3	0.5mm以下砂-7.5YR4/4-2.5Y6/2・良好	灰釉-7.5Y5/3-全釉		見込円形釉剥ぎ、見込高台輪ﾄｹ	16世紀末～17世紀初	大窯後半期
483	美濃	志野向付				0.5mm以下砂-2.5Y6/2・良好	長石釉-7.5Y8/1	鉄絵(10YR3/3)	裏面にピン痕	17世紀初	裏面柚子肌、大窯５期
484	美濃	志野向付				0.5mm以下砂-2.5Y6/2・良好	長石釉-7.5Y8/1	鉄絵(10YR3/3)	裏面にピン痕	17世紀初	裏面柚子肌、大窯５期
485	肥前磁器	染付碗	(11.5)	6.3	(4.9)	陶石-N8/-良好	透明釉-7.5GY8/1-全釉	呉須(鈍青)-風景	畳付釉剥ぎ後に砂付着	17世紀前～中葉	大橋Ⅱ期、薄手精良
486	肥前磁器	染付碗			4.5	陶石-N8/-良好	透明釉-7.5GY8/1-全釉	呉須(鈍藍)-網	畳付両角釉剥ぎ後に砂付着	17世紀前～中葉	大橋Ⅱ期
487	肥前磁器	染付碗			(4.9)	陶石-N8/-良好	透明釉-7.5GY8/1-全釉	呉須(藍)-菊花	畳付両角釉剥ぎ後に砂付着	17世紀前～中葉	大橋Ⅱ期
488	肥前磁器	青磁碗			4.2	陶石-N8/-良好	外:青磁(緑青)・内:透明		内外面で釉掛分、高台無釉	17世紀中葉	透明釉は10GY8/１、大橋Ⅱ-2期
489	肥前磁器	鉄釉碗	(11.2)	6.3	4.0	陶石-N8/-良好	外:鉄釉5YR3/2・内:透明	呉須(緑褐)-菊花	内外面で釉掛分、高台無釉	17世紀中葉	透明釉は10GY7/１、大橋Ⅱ-2期
490	肥前磁器	染付碗	(10.9)	6.1	4.3	陶石-N8/-良好	透明釉-2.5GY8/1-全釉	呉須(淡鈍青)-柳	畳付釉剥ぎ後に砂付着	17世紀前～中葉	大橋Ⅱ期
491	肥前磁器	染付碗			4.6	陶石-N8/-良好	透明釉-!0GY8/1-全釉	呉須(濃青)-菊花	畳付釉剥ぎ	17世紀前～中葉	大橋Ⅱ期
492	肥前磁器	染付碗			(4.6)	陶石-N8/-良好	透明釉-7.5GY8/1-全釉	呉須(藍)		17世紀後半	大橋Ⅲ期
493	肥前磁器	染付小杯	(6.6)	4.2	(2.8)	陶石-N8/-良好	透明釉-10GY8/1-高台無	呉須(緑青)-寿	体部外面縦ソギ・単位８条	17世紀中葉	大橋Ⅱ-2期
494	肥前磁器	染付瓶	3.8			陶石-N8/-良好	透明釉-10GY8/1-内面無	呉須(鈍青)-松		17世紀中～後葉	大橋Ⅱ～Ⅲ期
495	肥前磁器	染付碗	(9.9)	5.4	3.7	陶石-N8/-良好	透明釉-5GY8/1-全釉	呉須(鈍青)-網	畳付釉剥ぎ	18世紀前葉	大橋Ⅳ期
496	肥前磁器	白磁碗	9.5	5.2	3.9	陶石-N8/-良好	透明釉-白-全釉		畳付釉剥ぎ	18世紀前半	薄手青良品、色絵素地、大橋Ⅳ期
497	肥前陶器	陶胎染付碗			5.0	1mm以下砂粒-2.5Y6/1-やや不良(釉不全)	灰釉-7.5Y6/1～白-全釉	呉須(藍)-網	畳付釉剥ぎ	18世紀	大橋Ⅳ期
498	陶器	瓶(油壺)	2.8	7.6	4.8	陶石に近い-10YR8/3・10YR8/3-不良？(釉白濁)	灰釉-2.5Y8/1-高台無	鉄赤?(2.5YR3/2)		17世紀？	ベタ底、肥前磁器の不良品？
499	肥前磁器	白磁小杯	(6.3)	3.6	2.6	陶石-N8/-良好	透明釉-N8/-全釉		畳付釉剥ぎ	17世紀？	
500	肥前磁器	白磁小杯			2.1	陶石-10YR7/2・7.5Y7/1-良好	透明釉-7.5Y7/1-高台無			17世紀中葉	大橋Ⅱ-2期
501	肥前磁器	小花瓶	(2.1)	8.7	3.6	陶石-N8/-良好	透明釉-5GY8/1-高台無	呉須(鮮藍)		19世紀	大橋Ⅴ期～
502	肥前磁器	染付皿	15.0	4.0	5.2	陶石-N8/-良好	透明釉-7.5GY8/1-全釉	呉須(藍)-折枝梅	畳付釉剥ぎ後砂付着	17世紀前～中葉	大橋Ⅱ期
503	肥前磁器	染付皿	(12.7)	3.2	(7.3)	陶石-N8/-良好	透明釉-7.5GY8/1-全釉	呉須(鈍青)+口紅	コンニャク印判、畳付釉剥ぎ	18世紀前半	銘「大明年春(製)」、大橋Ⅳ期
504	肥前磁器	染付皿			6.3	陶石-10YR4/6～5Y8/2・N8/-良好	透明釉-7.5GY8/1-全釉	呉須(淡青)	見込み蛇目釉剥、畳付釉剥ぎ	17世紀後半	大橋Ⅲ期、波佐見系

曲輪内上部包含層出土（第61図～第68図）つづき

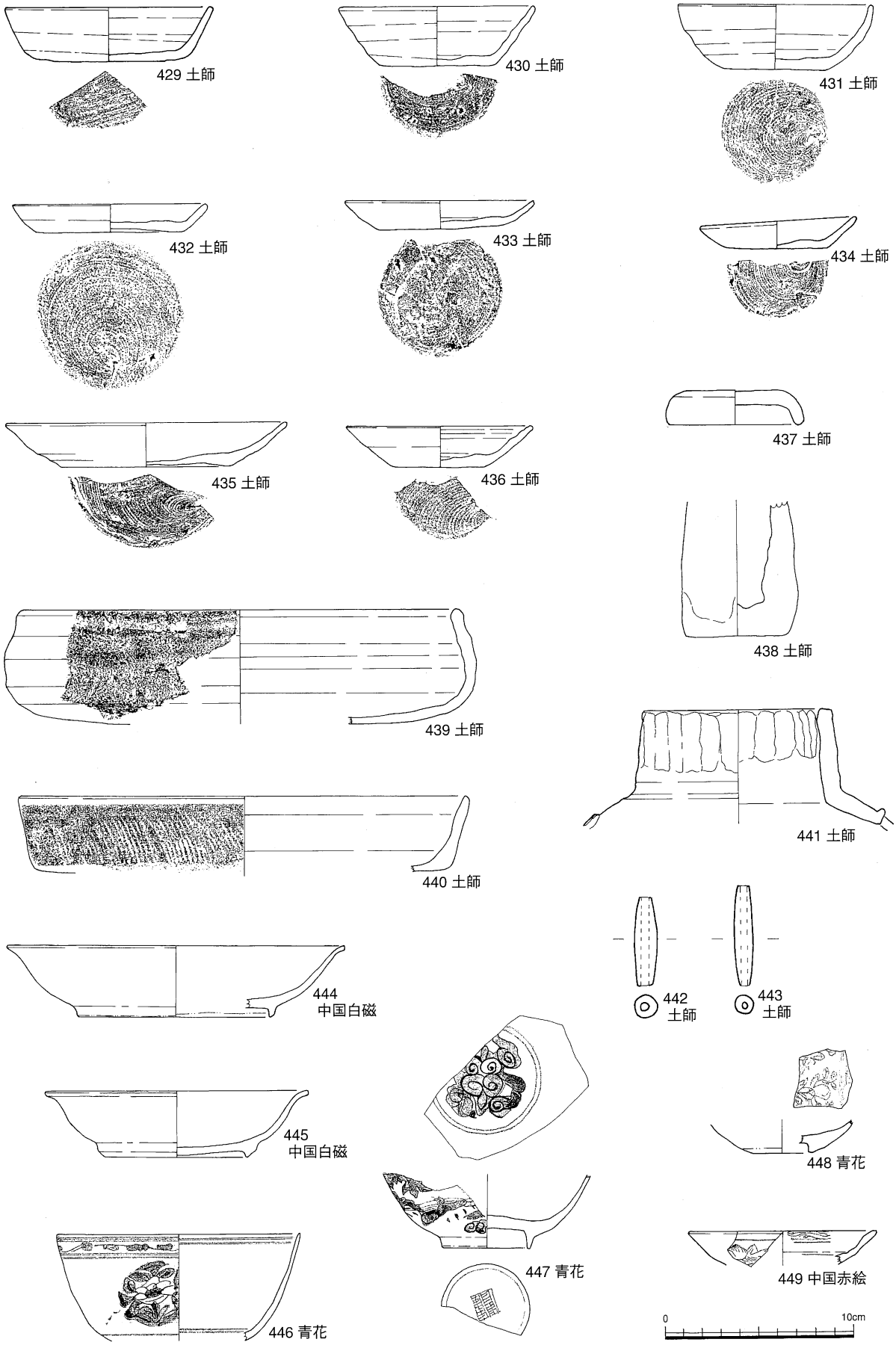
番号	種類	器種・部位	法量（cm） 口径長さ	器高高さ	底径幅	胎土（素材）と焼成 種類・状況・含有物-器面色・断面色-焼成	釉(・漆・装飾) 釉種-色-部位	文様 施文材-意匠	技法など	製作時期	備考
505	肥前磁器	染付碗			4.6	陶石-N8/-良好	透明釉-7.5GY8/1-全釉	呉須(濃青)-矢羽	畳付釉剥ぎ	18世紀末～19世紀初	大橋Ⅴ期
506	肥前磁器	染付鉢			(6.6)	陶石-N8/-良好	透明釉-7.5GY8/1-全釉	呉須(藍)-キリン	畳付釉剥ぎ	19世紀	精良品、大橋Ⅴ期
507	肥前磁器	染付端反り碗	(10.2)	6.2	3.7	陶石-N8/-良好	透明釉-7.5GY8/1-全釉	呉須(濃青)	畳付釉剥ぎ	19世紀中葉	大橋Ⅴ期、破損後に焼継
508	肥前磁器	碗蓋			(4.5)	陶石-N8/-良好	透明釉-2.5GY8/1-全釉	呉須(藍)-栗		19世紀前葉	大橋Ⅴ期
509	磁器	染付皿			7.2	鈍光沢陶石-N8/-良好	透明釉-5GY8/1-全釉	呉須(藍)	畳付釉剥ぎ	19世紀～近代	関西系
510	肥前磁器	青磁火入			(6.7)	陶石-N8/-良好	青磁釉-緑白-内面無		畳付釉剥ぎ		
511	磁器	染付段重鉢			(10.8)	鈍光沢陶石-N8/-良好	透明釉-5GY8/1-底無	呉須(鮮藍)	底面外角釉剥	19世紀～近代	
512	磁器	染付段重鉢蓋	(10.8)			鈍光沢陶石-N8/-良好	透明釉-5GY8/1	呉須(鮮藍)		19世紀～近代	５１１とセットの可能性あり
513	磁器	青磁碗				光沢陶石-N8/-良好	青磁釉-濃緑灰	押印花文		19世紀	細片、関西系
514	磁器	染付碗	(7.5)	7.2	(4.8)	光沢陶石-N8/-良好	透明釉-2.5GY8/1-全釉			19世紀～近代	銘「□明□製」
515	磁器	白磁皿	(10.5)	2.1	(6.0)	鈍光沢陶石-N8/-良好	透明釉-2.5GY8/1-全釉		畳付釉剥ぎ	19世紀～近代	
516	磁器	鉄釉碗			(4.5)	光沢陶石-N8/-良好	鉄釉-2.5YR2/1-全釉		畳付両角釉剥ぎ	19世紀～近代	
517	無釉陶器	鉢形鍋～焙烙	(17.7)	4.5	(7.2)	1mm以下砂粒僅-5YR6/6-良好			ロクロ成形	19世紀～近代	外面全体に煤付着
518	京系灰釉陶器	蓋	7.0			砂なし-2.5Y8/3・2.5Y8/3-良好	灰釉-2.5Y8/3-裏無		手づくね成形	18～19世紀	
519	陶器	碗	(9.9)	6.0	(5.1)	白土-5Y8/2・5Y8/2-良好	緑釉(濃緑)+灰釉-高台無			19世紀	灰釉は5Y8/3
520	(備前風)鉄釉陶器	鉢	(16.8)	9.3	(7.5)	微粒-7.5Y5/1-良好	鉄釉-2.5YR3/3-全釉			18～19世紀	藁重ねによる火襷状、非備前
521	京系灰釉陶器	ナベ	(21.6)	9.3	(6.6)	0.5mm以下砂粒-2.5Y6/1-良好	灰釉-5Y5/3-外底部無		見込に重焼きピン痕	18～19世紀	
522	磁器染付	非常食容器	8.2	9.4	5.5	陶石-10Y8/1・N8/-良好(甘い磁器質)	透明釉-10Y8/1-内口縁無	鈍緑灰の押印字	ゴム印使用	20世紀(戦中)	完形、陶磁器製の缶詰め
523	備前	大皿(盤)				3mm以下砂-5YR3/1～4/2・2.5YR4/2-良好			外面に重焼き痕	16世紀末	
524	備前	大皿(盤)	(31.2)	4.8	(25.2)	1mm以下砂-2.5YR4/3～4/1・2.5YR5/4-良好				16世紀末～17世紀初	見込みや外面に火襷
525	備前	大皿(盤)	(24.6)	4.2	(15.3)	2mm以下砂-10R4/3～3/1・10R4/2-良好			外面に重焼き痕	16世紀末～17世紀初	口縁の一部に黄ゴマ
526	備前	皿	(10.8)			0.5mm以下砂僅-5YR4/3～4/2・5YR5/3-良好				16世紀末～17世紀前葉	高台付きか
527	備前	小皿(灯明皿)	7.8	1.3	3.0	0.5mm以下砂僅-5YR4/2・断面不明-良好	塗土-5YR4/1-内面			17世紀中葉～18世紀	口縁に煤付着
528	備前	灯明皿	(11.7)	2.1		0.5mm以下砂僅-10R3/2・10R4/2-良好	塗土-10R2/2-全面			18～19世紀	口縁に煤付着
529	備前	灯明皿	9.6	1.5	4.8	0.5mm以下砂僅-5YR5/1～7.5Y4/1-良好	塗土-5YR3/2-全面			19世紀	
530	備前	輪花小皿	5.7	2.1	1.8	0.5mm以下砂僅-2.5YR4/1～3/6・2.5YR3/2-良好				16世紀末～17世紀前葉	
531	備前	三足鉢	23.8	9.8	19.3	0.5mm以下砂僅-2.5YR4/3～2/2・2.5YR3/3-良好				16世紀末～17世紀前葉	底面に黄ゴマ・ぼた餅・ヘラ書「叶」
532	備前	鉢	(9.9)	6.7	(11.1)	0.5mm以下砂僅-2.5YR4/2～5/6・N5/-良好				16世紀末～17世紀前葉	把手付き、底面に○文押印
533	備前	鉢	(14.7)			0.5mm砂僅・生地微-2.5YR2/1～3/2・7.5R3/1-良好				16世紀末～17世紀初	外面灰被り(黄ゴマ)
534	備前	サヤ形鉢	(9.6)	6.1	(10.8)	2mm砂・生地粗-2.5YR3/2～4/1・N5/-良好				17～19世紀	側部に「∧」に「●」押印
535	備前	朱泥茶碗	(10.8)	4.8	3.7	微粒-2.5YR6/6-良好	朱泥塗土-2.5YR4/8-全面			19世紀(明治)	高台内に「葛尾」(久本葛尾)押印
536	備前	小形甕	(11.4)	10.9	7.5	0.5mm砂-5YR4/4・7.5YR5/2-良好	塗土-10R3/1～4/2-内面無			18～19世紀	
537	備前	擂鉢	(31.2)	12.0	12.0	1mm以下砂粒-2.5YR6/6・2.5YR6/6-良好				17世紀第３四半期頃	底部平坦、スリメ単位８本、２ｂ期
538	備前	擂鉢	(34.5)	12.3	13.2	1mm以下砂粒-2.5YR4/2・2.5YR5/4-良好				17世紀第３四半期頃	底部平坦、スリメ単位11本、２ｂ期
539	備前	擂鉢	(33.0)	13.0	14.8	1mm砂粒-2.5YR5/6～7.5YR4/3・2.5YR5/4-良好			底部ヘラ削、貼付高台、口縁重焼	17世紀末～18世紀前葉	スリメ単位８本、底面印「Ｌ」３期
540	備前	擂鉢	36.0	13.6	21.3	1.5mm以下砂粒-2.5YR4/3・2.5YR5/6～4/2-良好	塗土-10R3/3-全面		貼付高台、見込み重焼痕	17世紀末～18世紀前葉	外面火襷、ｽﾘﾒ11本、底面刻印、３期
541	備前	擂鉢	(35.7)			1mm砂粒-2.5YR5/6～7.5YR4/3・2.5YR5/4-良好			口縁下重焼痕	17世紀末～18世紀前葉	ｽﾘﾒ単位８本、３期、539と同一個体?
542	備前	擂鉢				0.5mm砂粒-2.5YR5/4・2.5YR5/4-良好			高台脇ヘラ削り、見込み重焼痕	19世紀	口縁スリメナデ消し
543	備前	蓋	3.8			0.5mm砂粒僅-2.5YR4/1・N4/-良好			回転糸切り	16世紀末～17世紀	
544	備前	小形無頸壺	(5.1)			0.5mm砂粒僅-2.5YR3/3・N5/-良好				16世紀末～17世紀前葉	内面に鉄分付着(お歯黒壺？)
545	備前	小壺	(3.9)			1mm砂粒-2.5YR3/1・10YR6/1-良好				16世紀末～17世紀初	内面に鉄分付着(お歯黒壺？)
546	備前	小徳利			4.0	2mm以下砂粒-2.5YR5/6～3/2・10YR6/1-良好				16世紀後葉	外面に火襷
547	備前	徳利			7.7	2mm以下砂粒-2.5YR5/6～4/3・2.5YR4/3-良好				17世紀	底部にヘラ書記号
548	丹波	擂鉢	(30.0)			2mm以下砂粒-2.5YR4/2・2.5Y6/1-良好				16世紀末～17世紀初	スリメ１本引き
549	丹波	鉢	(26.4)	6.9	(19.2)	2mm以下砂粒-10YR4/3～2.5Y6/2・2.5Y5/1-良好				16世紀末～17世紀	
550	関西(堺～明石)	擂鉢	(27.9)			1mm以下砂粒-2.5YR6/6・2.5YR6/6-良好	鉄分塗土-2.5YR4/4-外面			18世紀末～19世紀	明石？
551	素焼き土製品	箱庭～玩具船	6.2	2.9	2.2	微粒鈍橙土-10YR7/3-良好			外型作り、剥離材キラコ	18世紀末～19世紀	完形
552	素焼き土製品	玩具馬		4.1	2.6	微粒鈍橙土-7.5YR7/4-良好			外型作り、剥離材キラコ	18世紀末～19世紀	後足部に棒状具による穴
553	銅製品	容器蓋	7.9	2.7		真鍮？-7.5Y3/2			ﾂﾏﾐは花弁状半球板の組合せ		
554	銅製品	煙管雁首	8.7			真鍮？-10Y4/1				17世紀	

曲輪内上部包含層出土（第61図～第68図）つづき

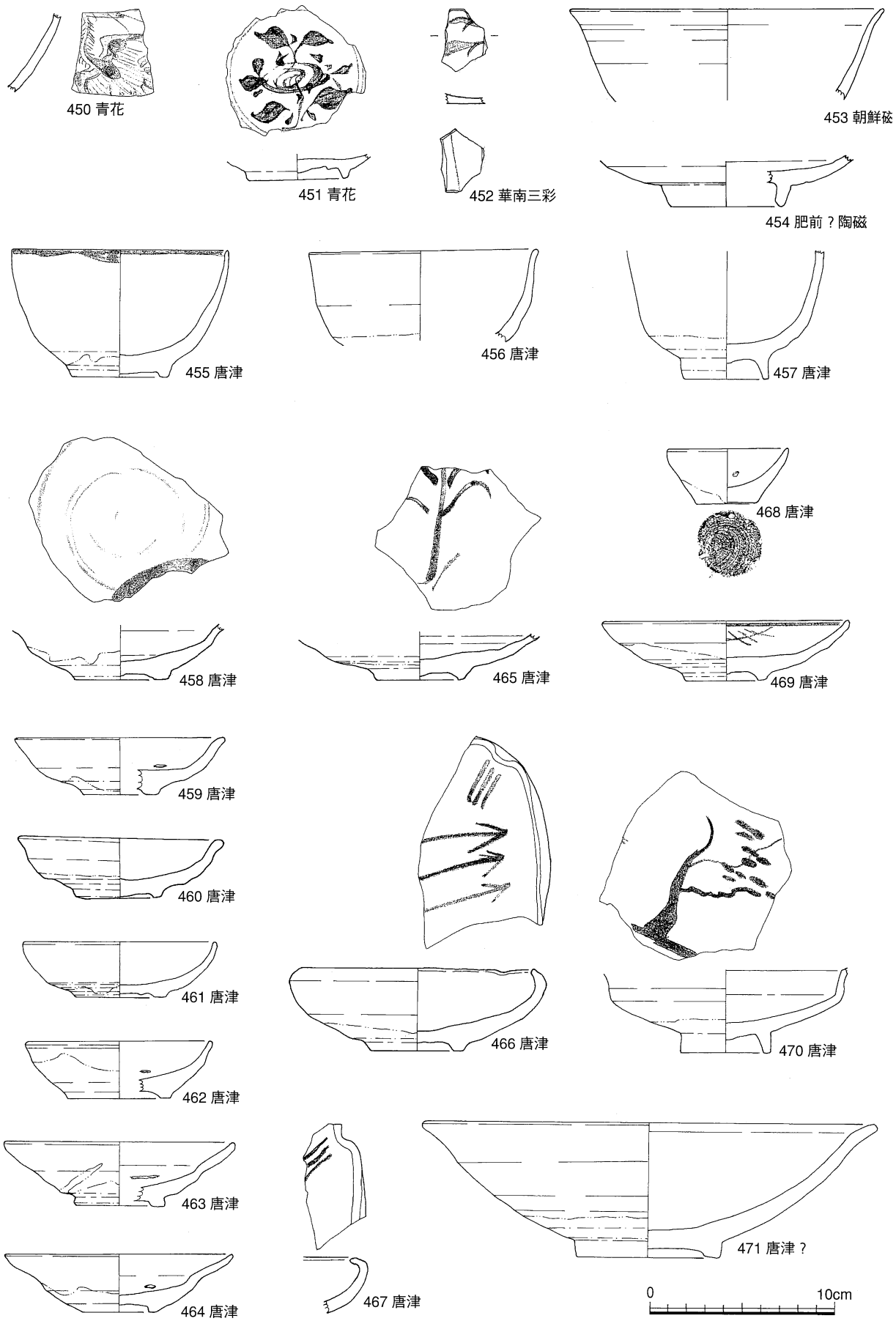
番号	種　類	器種・部位	法量（cm）			胎土（素材）と焼成 種類・状況・含有物-器面色・断面色-焼成	釉(・漆・装飾) 釉種-色-部位	文　様 施文材-意匠	技　法　な　ど	製　作　時　期	備　　考
			口径 長さ	器高 高さ	底径 幅						
555	銅製品	煙管雁首				真鍮？-10Y4/1				17世紀	
556	鉄製品	釘	7.4								
557	鉄製品	釘	7.0								
558	鉄製品	延板	[13.8]								
559	石製品	砥石	7.8		3.6	流紋岩？-5Y6/2					
560	石製品	砥石	[5.4]			頁岩？-5Y7/3					
561	瓦	軒平瓦		3.6		1mm以下砂-N3/～2.5Y5/1・外2.5Y6/1内N5/-良好	中心三葉、唐草３転			16世紀末～17世紀初	中の段10等と同笵？、岡山城２式
562	瓦	軒平瓦		3.3		0.5mm砂僅-N4/・外7.5Y7/1内N4/-良好	中心二巴、唐草２転			17世紀末～18世紀前葉	岡山城６式
563	瓦	飾瓦				1mm以下砂-N4/・外2.5Y6/1内N4/-良好	貼付文		裏面に指頭圧痕、細布目	16世紀末～17世紀初	岡山城２～４式



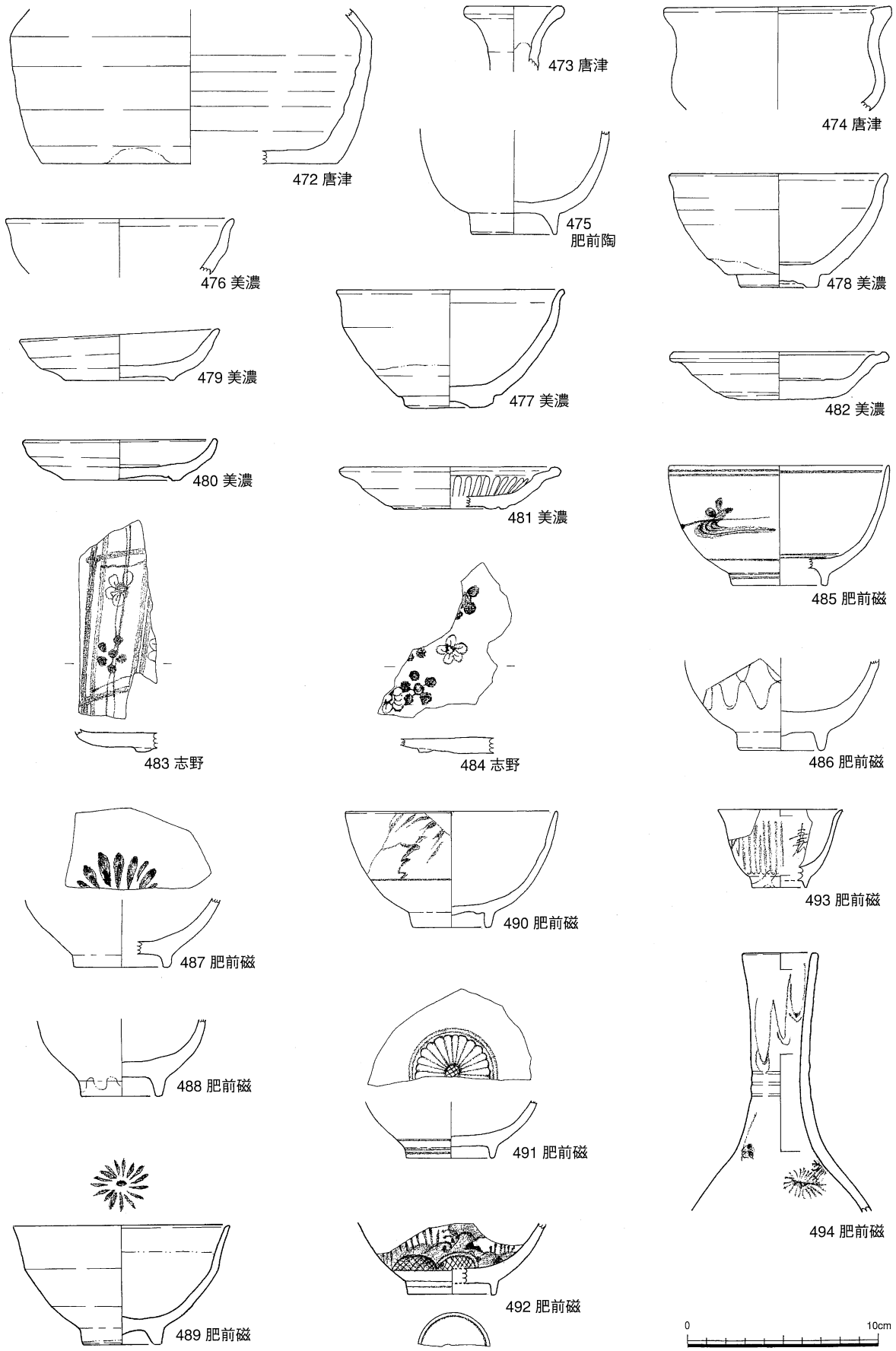
第60図　曲輪内下部包含層の遺物（１／３）



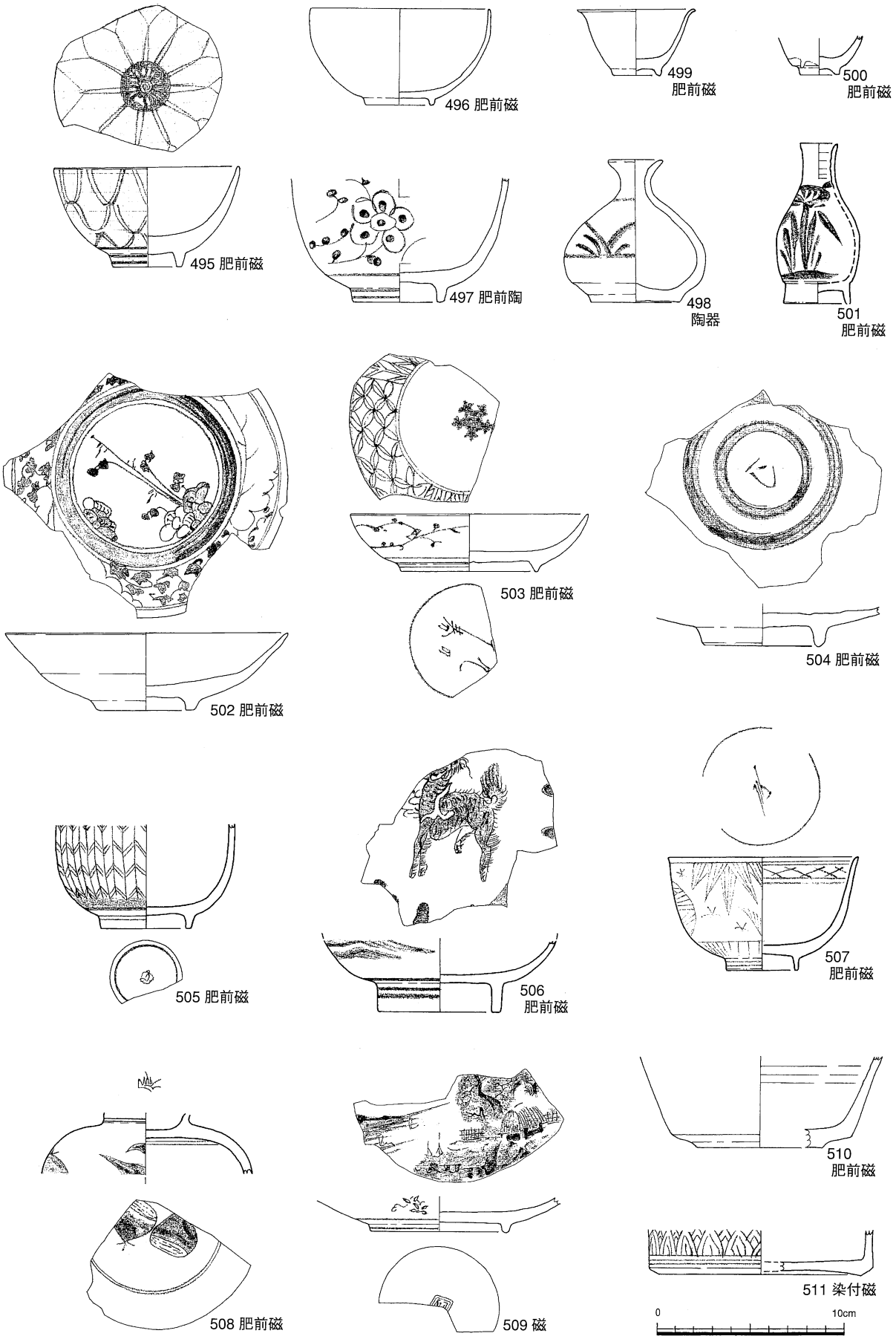
第61図　曲輪内上部包含層の遺物Ⅰ（1／3）



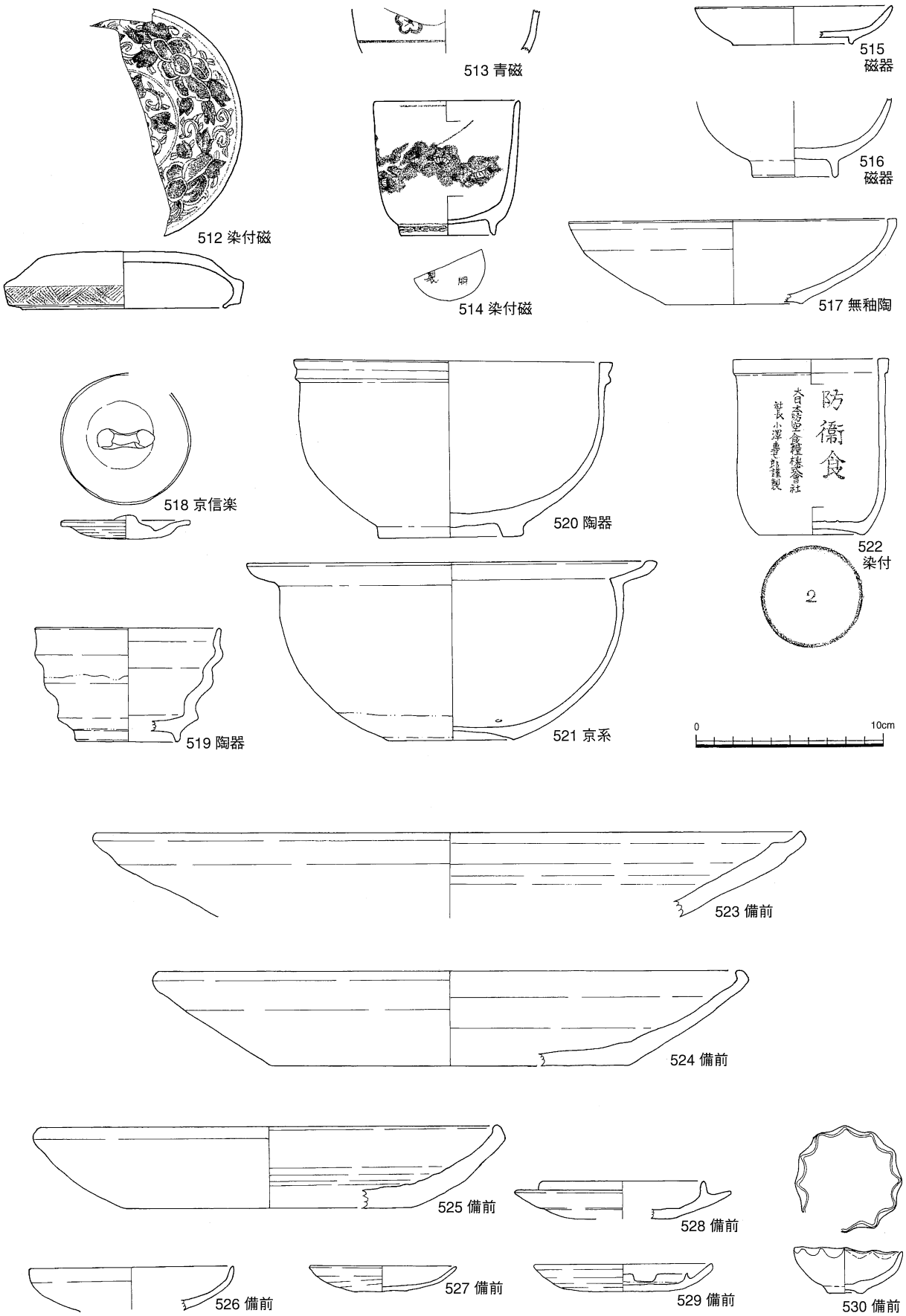
第62図　曲輪内上部包含層の遺物Ⅱ（１／３）



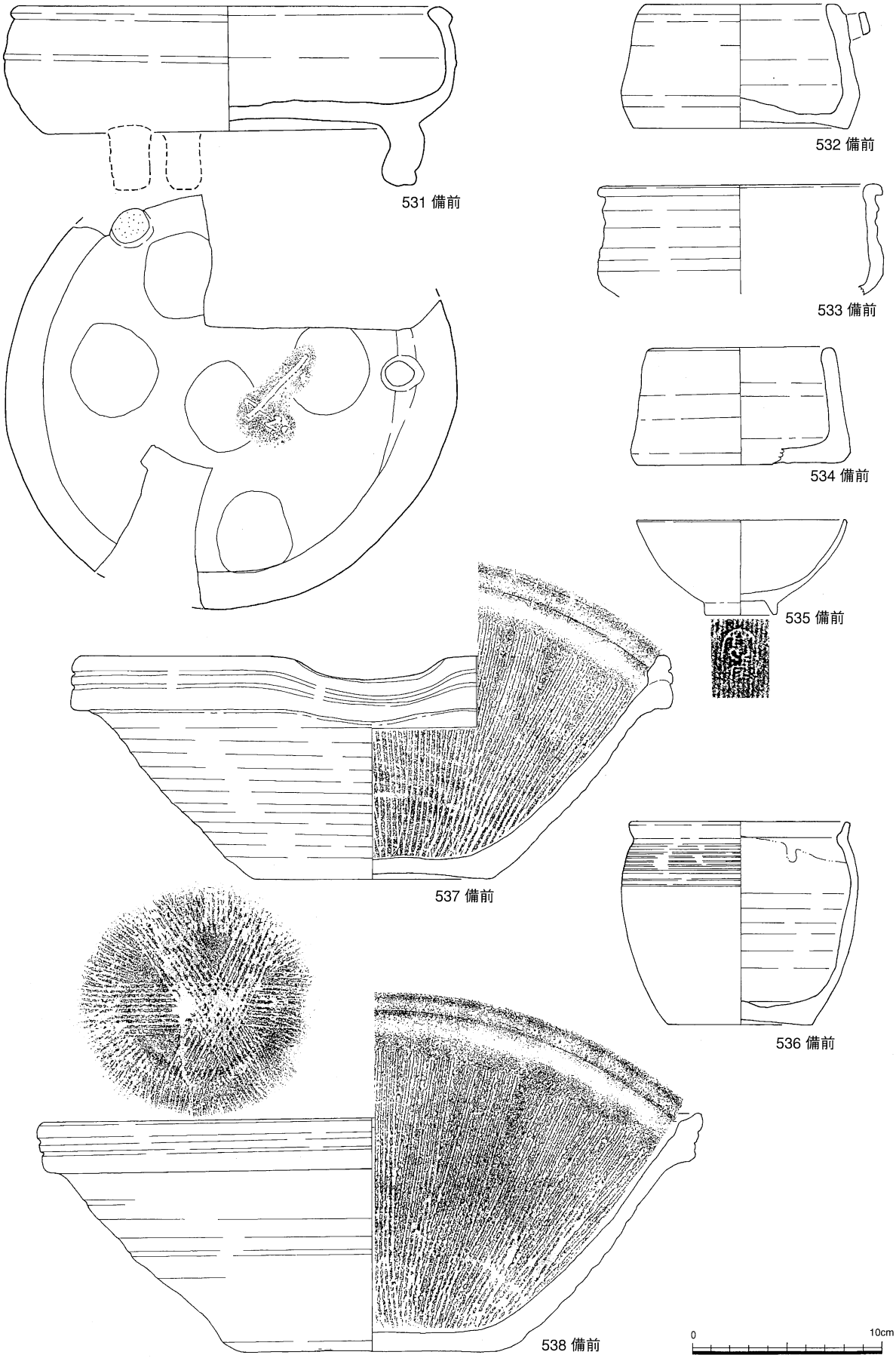
第63図　曲輪内上部包含層の遺物Ⅲ（1／3）



第64図　曲輪内上部包含層の遺物Ⅳ（１／３）

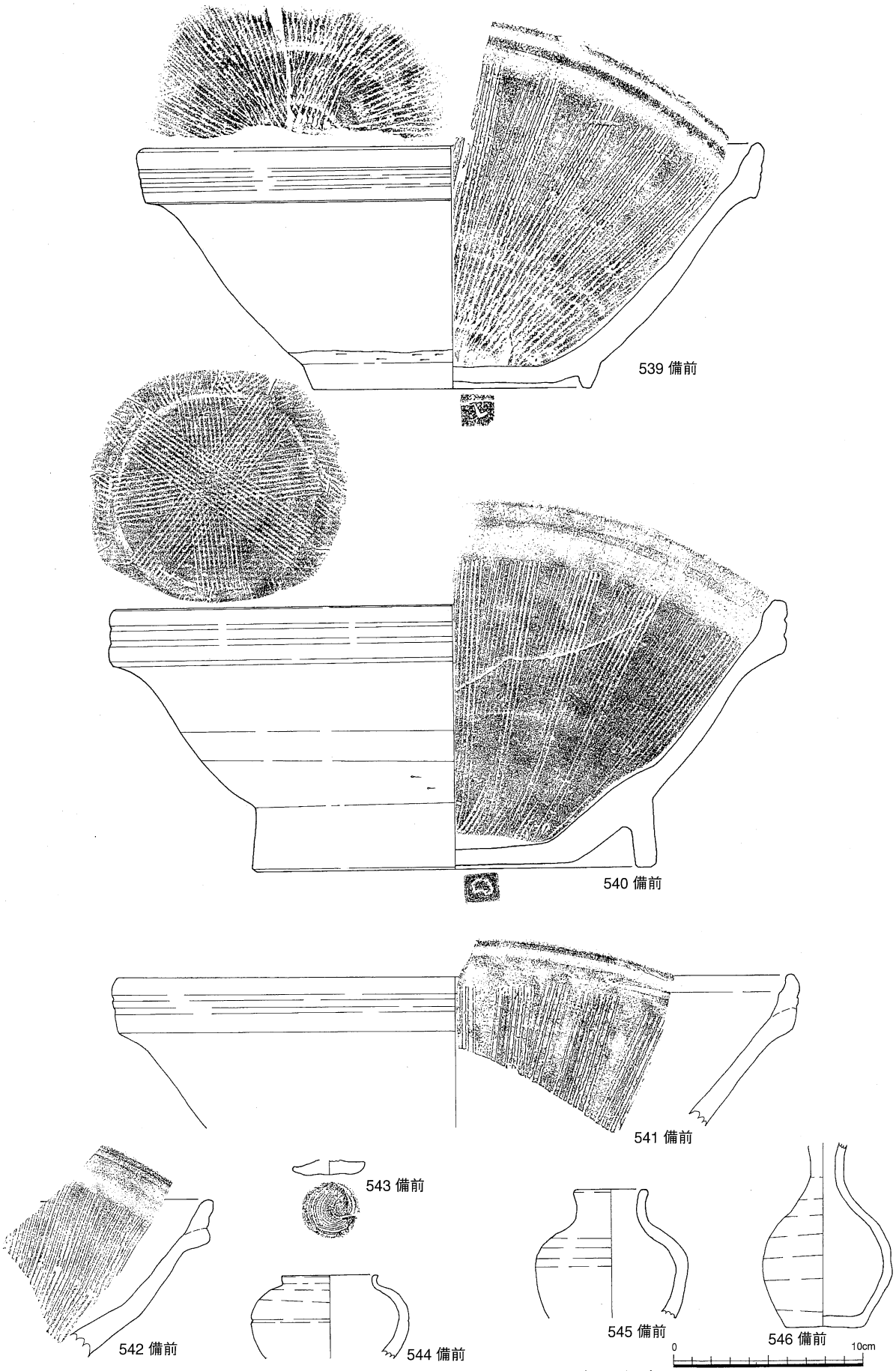


第65図　曲輪内上部包含層の遺物Ⅴ（1／3）

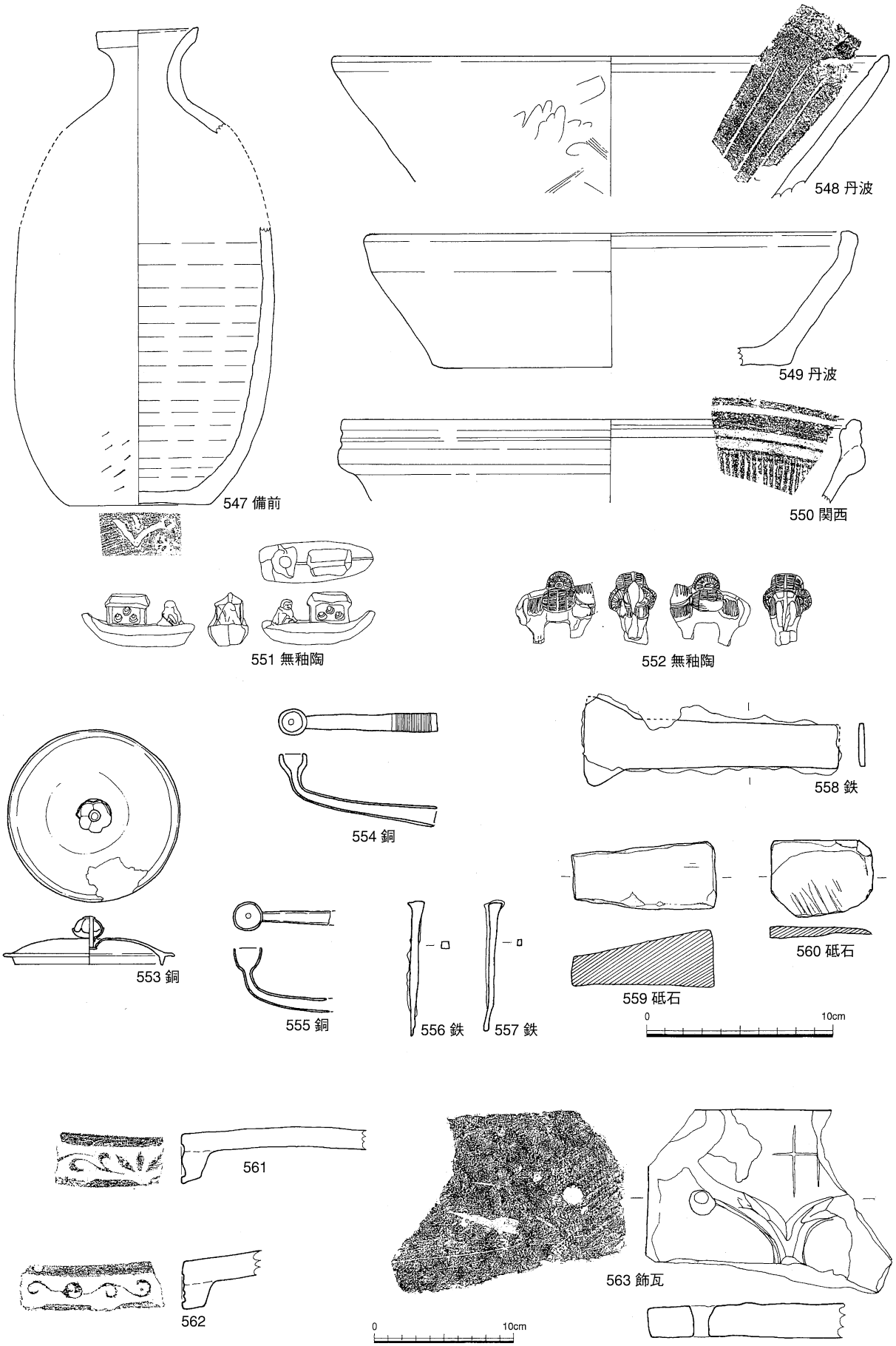


第66図　曲輪内上部包含層の遺物Ⅵ（１／３）

（535の刻印は１／１）



第67図　曲輪内上部包含層の遺物Ⅶ（1／3）



第68図　曲輪内上部包含層の遺物Ⅷ（瓦類：１／４　他：１／３）

第５節　内堀出土の遺物

上層石垣の裏込からは陶磁器類が出土し、下層石垣裏込からも木器１点が出土した。内堀埋土の最下層～中層に伴う遺物は下部埋土出土品として一括し、上層に伴う遺物を上部埋土出土品とした。

下部埋土出土品には、16世紀末から19世紀に至る製品が含まれる。また、内堀上層は明治39・40年のゴミ堆積であるので、上部埋土出土品は19世紀でも明治の製品が主体で、明治40年(1907)下限資料といえる。だだ、上層として取り上げた遺物は、内堀半ばというよりは上層石垣や上層石組周辺の掘り下げで採集したものが多く、実際には曲輪上の各生活面に伴う遺物やその二次堆積の遺物が混ざっている。そうした混入物と思われるものでも重要なものは掲載に努め、逆に明治の遺物は多くを割愛したので、ここでの記述には、古い年代の製品を多く含む結果となっている。

１．石垣裏込中の遺物

ａ．上層石垣裏込出土（第69図564～572）

564は土器皿、565は灰釉砂目の唐津、566は灰釉に鉄絵と白土イッチン描を施す土瓶か行平、567は備前焼擂鉢、568は無釉焼締の盤、569は肥前の青磁染付碗、570は朱漆塗の木匙、571は土師質土錘、572は鉄鏃、573・574は軒丸瓦、575はコビキＢ痕を残す丸瓦である。17世紀前葉のものも含むが、569は18世紀後半、566は18世紀末～19世紀の製品で、上層石垣の構築がそれ以後であることが判る。

ｂ．下層石垣裏込出土（第69図576）

576は機能や製作年代不詳の三角板である。

２．下部埋土の遺物（第70～82図577～740・第101図932･933）

577～587は17世紀前葉とみられる土師質土器皿で、585が手づくね成形のほかは、糸切り痕を残す。588～590は底部外型成形の畿内系焙烙で、588は体部下に平行タタキを残し17世紀中葉の難波Ａ類、589は17世紀後半の難波Ｅ類、590は18世紀前半の難波Ｄ類である。591は瀬戸内系の口縁外折形の焙烙で17～18世紀前半の製品とみられる。592は江戸後半期の瓦質の台輪で、コンロとみられる。

593は景徳鎮、594は漳州窯の青花碗である。

595～616は17世紀前葉～中葉の唐津である。595～602の碗のうち601が鉄釉のほかは、灰釉である。603は灰釉鉄絵の筒形小碗である。604の輪花皿は、砂質の胎土に藁灰釉を掛け、初期の唐津とされる岸岳系である。605～615の皿のうち、608が鉄釉と灰釉を掛け分け、614が鉄釉のほかは、灰釉である。605～607には鉄絵を施す。また605・607～609が胎土目、610・613～615が砂目である。616は青海波のタタキ痕を内面に残す瓶で、外面に鉄飴釉を掛け、側面下部から底面に鉄漿を塗る。

617～624は17世紀後半の肥前系陶器である。617は鉄釉の火入である。618は見込に曲線をソギ入れ、藁灰釉と透明釉を掛ける大皿(盤)で福岡産であろう。619は内面の印文に白土を埋めて灰釉を掛け、外面は鉄釉を掛けた大皿(盤)である。620～622は肥前内野山系陶器で、602・621は全面灰釉の碗、622は内面に緑青色の銅緑釉を掛けて蛇目に剥ぎ、外面は透明釉を掛けた皿である。623は京焼風灰釉陶器で、鉄絵の山水を描き、高台内に「雲」印を押す。624の碗も京焼風灰釉陶器で鉄絵を施す。

625～630も肥前陶器である。625は鉄分の多い暗色胎土に白土のハケ目文を施して灰釉を掛けた17世紀末から18世紀前半の碗である。626も白土ハケ文に灰釉を掛けるが、胎土は明色で外面には鉄絵

の直線が加わり、17世紀後半の製品とみられる。627～630も白土ハケ文に灰釉を掛ける。627・628は17世紀末～18世紀の片口鉢、高台が高く輪花の629は18世紀、630は18世紀末～19世紀の鉢である。

631・632は17世紀後半～18世紀前半の京焼とみられる。いずれも灰釉は黄灰色を呈し、631の丸碗は緑・赤の上絵付を、632は鉄絵を施す。633～635は18世紀代の京・信楽系灰釉陶器であるが、硬質で信楽の可能性が考えられる。633は鉄絵の丸碗、634は鉄絵の小杉碗、635は油受け皿である。

636は硬質の灰釉陶器で高台無釉、18世紀頃の肥前産かも知れない。637は精良な胎土に白土と透明釉を掛けたうえに呉須絵と鉄絵を施し、無釉の高台脇に刻みを入れる陶器で、産地不明である。

638～656は17世紀前～中葉の肥前染付磁器である。638は天目形の碗。639は風景、640は唐草、641は寿字、642は縦筋、643は意匠不明で、各々の畳付には砂が付く。643は高台無釉。644・645は天目形で縦筋をソギ、福寿を書く。646は唐津踏襲の皿で灰色胎土、口縁内と見込周縁に薄く圏線を染め付け、全釉で見込と畳付に砂目が残る。647は捩紐、648は菊水、649は兎、650は風景、652・653は意匠不明、654は草？を染め付ける皿で、いずれも畳付に砂が付着する。649・650は型打輪花である。651は草花文の中皿で見込を円形に削り込む。655は菊文の皿、656は松などを染め付けた瓶である。

657は精製品で山か樹木を描き、658は松ほかを意匠として、高台内に「大明年製」銘があり、ともに17世紀後半、659は網文で17世紀中～後葉の肥前磁器染付碗である。

660～670はおよそ18世紀代の肥前磁器で、661が青磁、663が呉須文様に僅かに赤絵を加えるほかは、染付である。660は松文、666は紅葉、667は蔦葉、668は桐文、669は竹？文で、各文の主体をコンニャク印判で染め付ける18世紀前半の製品である。668は見込を蛇目釉剥ぎする粗製品。

671は肥前の陶胎染付で18世紀代の製品である。

672～679もおよそ18世紀代の肥前染付磁器の鉢と碗で、673・674は手書き、672・677・678はコンニャク印判による五弁花文を見込に配す。筒形の674・675は比較的良品で、674は高台脇にも文様を配し、この種の碗としては古相である。なお676～678は外面に青磁釉を掛けた青磁染付である。また、679は見込を蛇目釉剥ぎにし、典型的な波佐見系の粗製品である。

680は18世紀末から19世紀の肥前磁器染付碗である。

681～686は17世紀末から18世紀の肥前染付皿のうち比較的良質品である。682・683は見込に手書の五弁花文を配す。また、683以外は竹文や笹文を含み、特に685は見込に松竹梅、体部に微細な花文を描く。682は口紅で「大明□化年□」銘があり、683・684は端反り、685は「筒江富　」銘がある。

687は見込に木葉を描いた型打ち皿で、高台は蛇目凹形、18世紀末から19世紀の製品である。

688～693は17世紀後半から18世紀前葉の波佐見系肥前磁器で、総て見込を蛇目釉剥ぎにしている。693は白磁、他は染付である。688は見込に手書き五弁花文、体部に半裁花文を描き、器面の白色度や呉須の鮮度も高い良品である。688・689は高台内施釉であるが、690～693は高台無釉で、重焼時のアルミナを用いず、波佐見の蛇目釉剥ぎ皿としては古い製品とみられる。689は見込・畳付に砂が付着しないが、他は砂が付き、特に691～693は粗製である。

694は型打ち輪花で口紅を施し、龍文を意匠とする肥前染付磁器の精良品で、18世紀末から19世紀前葉のものとみられる。695は18世紀前半の肥前磁器の型造り方形皿である。南川原系に特徴的な微細な花唐草文の良品である。

698は仏飯器、699・703・704は花生で、ともに18世紀代と思われる肥前染付磁器である。

696・700～702は18世紀末以降の、肥前染付磁器で、700は見込に鷺文を配した高高台碗、701・702

はそれより遅れて19世紀中葉に下る端反碗である。

697は波状口縁の染付皿、705は光沢土による端反染付碗、706は光沢土による龍文型打青磁、707は外型成形で龍文を貼付る染付瓶、708は鉄釉を掛ける磁器のたんころ、709は色絵磁器の蓋で、いずれも19世紀代の非肥前産とみられる。697・705・706・709は瀬戸美濃産の可能性が考えられる。

710～734は備前焼である。710は17世紀初頭の大皿である。711～719の擂鉢のうち、口縁が板状の711は16世紀末の製品とみられる。寸詰まりの口縁で、斜めスリメを伴う712は17世紀初、比較的まばらな放射スリメの713～716は17世紀前～中葉の製品である。スリメが詰み、体部にロクロ目を残して無高台ながら、底部ベタ底の717・718は17世紀後半で、717は塗土を施す。719は器面や断面の赤味が強いうえに塗土を行い、外面をヘラ削りして恐らく高台を伴う18世紀中～後葉の製品である。720は袋形の鉢で17世紀前半、721の鉢は17世紀後半の製品とみられる。722～723はサヤ形鉢で時期不詳である。724は建水形鉢、725は水注、726は輪把手で、16世紀末から17世紀前葉のものと思われる。727～734は徳利で、727～731は16世紀末～17世紀前葉、尻切りで糸目と茶褐色の塗土を施す732は17世紀後葉～18世紀前葉、733は17世紀代、734は16世紀末～17世紀前葉の製品とみられる。

735は無釉陶器の徳利で、胎土・焼成は土師質的である。塗土を施し、備前焼模倣品とみられる。736はいわゆる亀山系の須恵質(広義の瓦質)擂鉢で、16世紀後葉とみられる。737は18世紀後半～19世紀の鉄釉流し掛けの丹波焼の甕である。738は両面朱漆塗りで、シャープな高台をもつ漆器碗で、恐らく17世紀の製品である。739は銅煙管の吸口、740はコビキＢ痕を伴う17世紀初の軒丸瓦である。

第101図に示した追加分では、932は焼塩壺で刻印の有無・内容は不明であるが17世紀中葉の泉州産であろう。933は中国漳州窯の染付碗で、やや甘い磁器質、釉の虫食が顕著である。全釉のうえ、畳付両角を極端に削り込んで、畳付が尖る。16世紀末～17世紀前葉の製品とみられる。

3．上部埋土の遺物（第83～82図741～931）

741～755は土器皿で、754・755は手づくね、他は糸切り痕が残る。714～749は17世紀代の製品とみられるが、750～753は18～19世紀の可能性がある。756～758は土師質・瓦質の鍋釜で、757は16～17世紀とみられる。759・760はキラコを剥離材に用いた型造りの素焼きの玩具類で19世紀の製品とみられる。759は522と同型の馬、760は蝶である。この種の土製品は胎土から、759(・551・522)の様な鈍い橙色系のものと、760の様な白色系のものに大別できそうである。761～765は瀬戸内系の口縁外折型の焙烙である。およそ18世紀の761～763の体部は外面に指頭圧痕状の凹凸があって器面が粗いのに対し、764・765は器面が滑らかな外型成形で、18世紀末～19世紀の製品とみられる。766・767は畿内系の口縁直立型の焙烙で、難波Ｄ類に相当する。766は18世紀後半、767は19世紀の製品とみられる。

768は美濃焼の灰釉皿、769は同じく黄瀬戸の輪花皿で、ともに16世紀の大窯の製品である

770は16世紀末～17世紀初の唐津の瓶で、内面は青海波タタキをナデ消し、外面に鉄飴釉を掛ける。771は17世紀後半の肥前内野山系灰釉陶器、772は肥前を含む九州系の鉄釉花生である。773は鉄分の多い胎土で、見込に放射状の直線を刻み、押印花文を多数配して、灰釉を掛けた大皿(盤)で、畳付に貝殻目、見込に胎土目が残る。17世紀前～中葉の上野・高取など福岡系の製品とみられる。

774～782は肥前磁器で、777が白磁、他は染付である。「太明」銘の774は17世紀後半、畳付に砂が付く775と器形が唐津的で見込に砂目を残す777は17世紀前半の製品である。776は網文で17世紀中～後葉、778は二重枠内に渦福の款、体部に網と菊を描く良品で、微細な花唐草文の779と共に18世紀前半

の製品である。781は18世紀後半の青磁染付の良品である。780は道教文様を描き、高台は蛇目凹形で、782は見込に細線書の松竹梅を配し、共に18世紀末～19世紀前葉の製品とみられる。784は肥前染付磁器の染付多角鉢で、体部に墨弾き技法を駆使した連続微細文様、見込に麒麟を描き、器面の白色度や呉須の鮮色度が高い精良品で、18世紀末～19世紀の製品とみられる。

783は光沢陶石による染付磁器のレンゲで、19世紀の瀬戸美濃～関西系諸窯製とみられる。

785～786･823は18～19世紀の京・信楽系灰釉陶器で、785は鉄絵、786は見込にハリ痕が残る。

787～817に掲げる陶磁器は、ほぼ総てが19世紀代の製品で、主体は明治期のもとみられる。

787～794は広義の京焼系陶器で、787が白色長石釉に鉄絵を施すほかは、灰釉である。788は口紅で鉄絵と呉須で菖蒲と字を描く丸碗、789～792は鉄絵・呉須・イッチン白土で紅葉文や梅文を描く蓋付き鉢で、同類品が30個体以上も出土した。793は受火部無釉で瘤状の三足が付く行平、794は型押し文様の握部に鉄漿を塗った行平類の把手である。795はカキ釉を施した土瓶である。786～799は瀬戸美濃系の陶器で、786は灰釉に鉄絵を施した馬目皿、797は体部に多条凹線を廻らす鉄絵碗、798・799は各種の釉を掛け分け、内面に鉄漿を塗った火鉢である。800は無釉陶器の徳利で墨書がある。

801～877は磁器である。801・802は呉須のほか、金彩を含む多色を駆使した皿と蓋で、肥前産とみられる。803も金彩を含む多色であるが、蛇目凹形高台で背面の染付文様は合成コバルト使用の型紙擦りである。807～810は合成コバルトによる染付で、掲載外にも類似品が多数出土した。染付は804・806～809が型紙刷り、805・810は銅版転写である。807・808は蛇目凹形高台で、807には見込に５個のピン痕が残る。809は高台内が平坦で光沢陶石を用いる。811は淡路の珉平焼で透明の鮮黄色釉を掛け、厳密な磁器とするには甘い焼きである。812は三田青磁の型押し皿で、光沢土を用い、鮮緑 灰色釉は1mm内外もの厚さ、貼付け脚の接合面が明瞭で、脚先の露台部は茶色という、典型的な製品である。813は「竹泉」銘のある色絵杯である。外面は細い線刻で蝙蝠を描き、余白部全面に赤色釉を塗り、文様部は鉄漿で塗りつぶして、内面は透明釉を掛けた後に、見込に褐～緑色と赤色の花文を描き、口縁は金圏線、高台内は呉須で圏線と銘を入れるという、特異な製品である。814は極彩色の絵皿で、高台内に赤筆で「　谷製」の銘が残り、復興九谷焼とみられる。見込文様は鶴と花で、花は牡丹と菊かも知れない。使用色は、金、暗赤、褐緑、桃、緑白、白、灰、こげ茶、薄青で、褐緑は酸化クロムとみられる。815は染付の土瓶で、文様は崩れた鳳凰かも知れない。816は外面に青磁釉を掛け、合成コバルトで河童文を染め付ける蓋、817は網文の徳利で、共に光沢陶石を用いる。

818～822・824～883は備前焼である。818～820は返りのない灯明皿、824～827は返りをもつ灯明皿である。多くが塗土を施し、18・19世紀のものとみられるが、特に返りが退化し、赤色度が高い824～827は幕末～明治期の製品である。828は型造りの小皿で塗土を施す。829は江戸後半期、830は16世紀末～17世紀前葉の鉢である。831は意匠として格子タタキを施す扁壺か鉢で17世紀前半の製品とみられる。832は塗土が赤く発色する19世紀のミニチュア擂鉢(小鉢)である。833は火入様の筒形鉢、834～836はサヤ型の鉢で18～19世紀の製品である。837～850は擂鉢である。837は16世紀後葉の天正頃、スリメが詰まってきている838・839・841・847は17世紀中葉、底部ベタ底の840や842・843は17世紀後半、体部外面のヘラ削りや塗土を施したり、高台が付く844～846・848～850は17世紀末～18世紀前葉の製品である。851は16世紀末～17世紀初の無頸壺である。852～858は徳利である。852は退化した布袋文を貼付ける人形徳利で19世紀、同じ人形徳利の853はそれよりやや古相である。857も人形徳利の底部とみられる。854は糸目徳利で18世紀後半以降の製品である。855は薄手の瓢形徳利、856は型

造りの部品組合せによる小形の角徳利で、ともに19世紀中葉以降の天保窯製であろう。858は17～18世紀の製品とみられるが、なま焼け品である。859～866は小形の甕で、860は頸部下に耳が付き、種壺と呼ばれる器形で16世紀代の製品であるが、他は19世紀の製品で、明治期のものを含む可能性が強い。いずれも塗土を施し、859・862・865は朱泥である。867・868は回転糸切り痕を残す蓋で、ともに19世紀の製品である。869～871は型造りの獅子置物で、869は体部が中空で香炉の可能性があり、870は体部が中実である。また871の脚は869と同一個体の可能性がある。872はロクロ成形の地中埋込式の花立て、873は大形サヤの転用物で、共に19世紀の製品とみられる。

874～883は確実に明治期に下る製品で、いずれも塗土を施し、胎土は微粒、その断面は883が暗灰色を呈するが、他は赤茶(塗土も同系に発色)で、備前焼であることを一見疑うほど焼締度が低い。874・875は色備前の碗と蓋で、セットであったとみられる。色材は金、赤、緑、白、黒などで、碗の高台内に「備前陶」の陶印がある。877は「備前伊部陶」と「黄薇堂」の陶印、878はソギによる笹文を施し「伊部大饗」印がある。879～882はハート形唐草文を押印する土瓶で、同類品が多数出土した。

884は丹波焼のスリメ一本引きの擂鉢で16世紀末～17世紀初の製品である。

885～896は関西の堺～明石系擂鉢である。いずれも口縁のスリメをナデ消し、体部のヘラ削り痕が明瞭なものでは、砂粒が向って右に動き、左に動く備前焼擂鉢とは異なっている。また、底部に砂が付着するもの、見込に焼台痕が残るものがある。885は器面が暗色で比較的火が良く通り、886は見込のスリメが三角状で、ともに18世紀の堺産の可能性が考えられる。他は器面の赤味が強くて焼締の程度が甘く、胎土に粗い白砂粒を含むものが多く、887・888などは見込スリメが渦巻き放射であることから、その多くは18世紀末～19世紀の明石産とみられる。897は外面にシノギを入れた植木鉢、898も植木鉢の類とみられ、底部に砂を付着させて焼締も甘く、19世紀の明石～堺製とみられる。

899～907は不透鉄釉の徳利・油壺・甕・鉢で、明治の製品が主体である。徳利は類品が多数出土した。900・902を別に胎土は鉄分が多く暗紫色、釉は光沢が強く、阿波の大谷焼の類である。899・901・904は底部の回転削り痕に砂が付く。901はヘラ刻、903は白土による字が焼成前に書かれるが、「小橋町」は岡山城下の町名で、とすれば特注品である。902も白字を書き陶質である。

908は鉄釉の大甕で、頸部は短く直立し、口縁は内抱え気味のＴ字を呈し、内面は格子タタキの後にナデ、口縁上端面の釉を削っている。17世紀後半の肥前製の可能性が考えられる。

909は内面朱漆、外面は黒漆地に朱漆で文様を描く木製平碗で19世紀の製品とみられる。910は内外黒漆塗の木碗、911は白木のしゃもじである。914・915は銅製の薬匙、916～920は鉄釘、921は鉄の包丁、922は頁岩の砥石、923は粘板岩の硯である。924は1668～1683年鋳造の寛永通寶の文銭、925は1078年初鋳の北宋銭である元豊通寶の本邦模鋳銭とみられる。

926～928は三巴文の軒丸瓦で、926が珠文20個、他は12個である。926は16世紀末(岡山城２式)、珠文間が広い927は17世紀末～18世紀前葉(同６式)、珠文が大きいがキラコ不使用の928は18世紀中葉（同６式)、キラコ使用で内面のタタキが密な929や930は18世紀末～19世紀(同７式)の製品である。

931は平板に薄い文様を貼付た飾瓦である、五弁とみられる花を中央に配し、左右に唐草か蔓とみられる曲線が残る。花弁の一部側面に漆とみられる膜状の黒色物が付着し、ごく僅かながら確実に金箔が残る。少なくとも文様の凸部全面には金箔が施されていたとみられる。16世紀末の宇喜多秀家期の製品とみられ、断面の芯と表で色調が異なる甘い焼成や胎土なども、そう考える事と整合する。実際には明治のゴミに含まれていたというより、曲輪内に埋没していたものであろう。

内堀上層石垣裏込出土（第69図）

番号	種類	器種・部位	法量（cm） 口径長さ	器高高さ	底径幅	胎土（素材）と焼成 種類・状況・含有物-器面色・断面色-焼成	釉(・漆・装飾) 釉種-色-部位	文様 施文材-意匠	技法など	製作時期	備考
564	土師質土期	皿	(9.9)	1.6	(6.3)	0.5mm以下砂粒僅-7.5Y8/1-良好			回転糸切り	17世紀	
565	唐津	皿	(12)	3.6	(5.1)	1mm以下砂粒-2.5Y6/2・2.5Y6/1-良好	灰釉-7.5Y6/1-高台脇無		見込みに砂目	17世紀前葉	
566	京系灰釉陶器	土瓶～行平				精良-5Y7/2-良好	灰釉-5Y7/2	白土ｲｯﾁﾝ＋鉄絵		18世紀末～19世紀	鉄絵は5Y4/4
567	備前	擂鉢				0.5mm以下砂粒-5YR3/2～4/1・N6/-良好				17世紀中葉～後半	
568	無釉焼締	大皿(盤)	(26.1)	5.4	(15.9)	2mm以下砂粒-10YR5/3～4/2・5Y6/1-良好				17世紀	備前でない可能性大
569	肥前磁器	青磁染付碗	(10.8)	6.4	4.9	陶石-N8/-良好	外青磁(緑白)、内透明釉	呉須(濃青)	見込に手書き五弁花	18世紀後半	透明釉は7.5GY8/1、高台内崩れ渦福
570	漆器	さじ				スギ？	内外面とも朱漆				柄固定用の穴、両側部欠損
571	土師質土器	土錘	4.0			0.5mm以下砂粒-10YR7/4・10YR4/1-良好					完形、4.9ｇ
572	鉄製品	鉄鏃	8.7								11.2ｇ
573	瓦	軒丸瓦				1mm以下砂粒-N4/・N4/-良好		左三巴、珠文20±		16世紀末	岡山城２式
574	瓦	軒丸瓦	15			1mm以下砂粒-N4/・外N7/芯N4/-良好		左三巴、珠文15±		17世紀初	岡山城３～４式
575	瓦	丸瓦				1mm以下砂粒-N4/・外N7/芯N4/-良好			内面コビキＢ痕	17世紀初	岡山城３～４式

内堀下層石垣裏込出土（第69図）

番号	種類	器種・部位	法量（cm） 口径長さ	器高高さ	底径幅	胎土（素材）と焼成 種類・状況・含有物-器面色・断面色-焼成	釉(・漆・装飾) 釉種-色-部位	文様 施文材-意匠	技法など	製作時期	備考
576	木器	三角板	24			スギ					

内堀下部埋土出土（第70図～第82図）

番号	種類	器種・部位	法量（cm） 口径長さ	器高高さ	底径幅	胎土（素材）と焼成 種類・状況・含有物-器面色・断面色-焼成	釉(・漆・装飾) 釉種-色-部位	文様 施文材-意匠	技法など	製作時期	備考
577	土師質土器	皿	11.0	3.2	6.0	1mm以下褐色粒・砂-10YR6/2-良好			回転糸切り	17世紀前葉	完形
578	土師質土器	皿	11.4	2.1	6.3	0.5mm以下砂僅-2.5Y7/3-良好			回転糸切り	17世紀前葉	
579	土師質土器	皿	10.8	2.4	6.6	1mm以下砂粒僅-10YR7/3-良好			回転糸切り	17世紀前葉	
580	土師質土器	皿	10.5	3.1	6.0	1mm以下褐色粒・砂-10YR7/3-良好			回転糸切り	17世紀前葉	口縁に煤付着
581	土師質土器	皿	11.1	2.1	5.0	1mm以下褐色粒・砂-10YR6/3-良好			回転糸切り	17世紀前葉	
582	土師質土器	皿	10.4	2.4	6.0	1mm以下褐色粒・砂-10YR6/3-良好			回転糸切り	17世紀前葉	
583	土師質土器	皿	9.3	3.8	5.4	0.5mm以下砂粒僅-5Y6/1・5Y3/1-良好			回転糸切り	17世紀前葉	
584	土師質土器	皿	10.2	3.7	5.7	2mm以下砂粒僅-10YR7/4-良好			回転糸切り	17世紀前葉	口縁に煤付着
585	土師質土器	皿	(9.0)	1.6	(6.7)	0.5mm以下砂粒僅-2.5Y6/2-良好			手づくね成形	17世紀前葉	外面全体に煤付着、難波Ａ類
586	土師質土器	皿	10.2	3.7	5.7	1mm以下褐色粒・砂-10YR6/3-良好			回転糸切り	17世紀前葉	外面全体に煤付着、難波Ｅ類
587	土師質土器	脚付き皿	(12.0)	4.4		1mm以下褐色粒・砂-10YR6/3-良好			回転糸切り？	17世紀前葉	外面に煤付着、難波Ｄ類
588	土師質土器	焙烙	(23.4)	5.1	(18)	1mm以下砂粒-2.5Y5/2・10YR6/4-良好			底部外型成形、平行タタキ	17世紀中葉	内外面に煤付着
589	土師質土器	焙烙				1mm以下砂粒-2.5Y4/2・10YR6/4-良好			底部外型成形	17世紀中～後葉	
590	土師質土器	焙烙		4.8		1mm以下砂粒-7.5YR6/4・7.5YR6/4-良好			底部外型成形	18世紀前葉	染付碗Ｅ群
591	土師質土器	焙烙	(31.8)			1mm以下砂粒-2.5Y3/1・10YR5/2-良好				17世紀～18世紀前葉	染付碗Ｆ２群
592	瓦質土器	台輪形コンロ？	(24.9)	6.0	(18.9)	1mm以下砂粒-N3/・10YR5/3-良好(軟質)				18世紀後半～19世紀	大橋Ｉ期
593	中国(景徳鎮)青花	碗			(4.5)	陶石-N8/-良好	透明釉-7.5GY8/1-全釉	呉須(鮮濃青)	畳付外角釉削り	16世紀末～17世紀初	
594	中国(漳州)青花	碗			4.5	陶石-N8/-良好	透明釉-2.5GY7/1-全釉	呉須(淡青)		17世紀前葉	
595	唐津	碗	(11.1)	6.9	4.8	0.5mm以下砂粒-7.5YR6/4・2.5Y7/3-良好	灰釉-2.5Y6/1-高台脇無			17世紀前葉	

内堀下部埋土出土（第70図～第82図）つづき

番号	種　類	器種・部位	法量（cm） 口径長さ	器高高さ	底径幅	胎土（素材）と焼成 種類・状況・含有物-器面色・断面色-焼成	釉(・漆・装飾) 釉種-色-部位	文　様 施文材-意匠	技法など	製作時期	備　考
596	唐津	碗	(10.5)	7.2	4.8	1mm以下砂・生地砂質-10YR5/3・2.5Y7/3-良好	灰釉-2.5Y4/3-高台脇無			17世紀前葉	大橋Ⅰ期
597	唐津	碗	(9.9)	6.5	4.2	1mm以下砂粒-10YR5/3・2.5Y6/2-良好	灰釉-5Y5/3-高台脇無			17世紀前葉	大橋Ⅰ期
598	唐津	碗	(12.0)	6.8	4.8	1mm以下砂粒-7.5YR5/3・7.5YR6/4-良好	灰釉-10YR6/3-高台脇無			17世紀前葉	大橋Ⅰ期
599	唐津	碗	(11.1)	8.3	4.8	0.5mm以下砂僅-7.5YR4/3・10YR6/2-良好	灰釉-10YR6/3-高台無			17世紀前～中葉	大橋Ⅱ期
600	唐津	碗			3.3	0.5mm以下砂僅-5YR4/4・5YR5/3～4/1-良好	灰釉-2.5Y5/1-高台脇無			17世紀前葉	大橋Ⅰ期
601	唐津	碗			4.1	2mm以下砂-2.5Y5/3・2.5YR5/1-良好	鉄釉-10YR2/3-高台脇無			17世紀前葉	大橋Ⅰ期
602	唐津	碗			4.1	1mm以下砂-2.5Y5/2・2.5Y5/1-良好	灰釉-5Y6/1-高台無			17世紀前～中葉	大橋Ⅱ期
603	唐津	筒小碗	(6.6)	4.5	3.6	0.5mm以下砂-10YR5/4・7.5YR7/4-良好	灰釉-7.5YR5/3-高台脇無	鉄絵(7.5YR3/1)		17世紀前葉	大橋Ⅰ期
604	唐津	輪花皿	(11.7)	3.3	4.0	0.5mm砂・生地砂質-7.5YR4/3・2.5Y7/3-良好	藁灰釉-5Y7/1～3/2		見込みに目跡なし	16世紀末～17世紀初	高台脇無釉、岸岳系、大橋Ⅰ期
605	唐津	皿	14.1	3.8	5.4	2mm以下砂-7.5YR6/4・7.5YR6/4-良好	灰釉-7.5YR5/3-高台脇無	鉄絵(7.5YR4/1)	見込みに胎土目	17世紀前葉	大橋Ⅰ期
606	唐津	皿	12.8	3.7	4.7	1mm以下砂-2.5Y7/3・2.5Y7/3-良好	灰釉-5Y6/3-高台脇無	鉄絵(7.5YR3/3)	見込みに目跡なし	17世紀前葉	大橋Ⅰ期
607	唐津	皿			4.8	0.5mm以下砂-2.5YR5/6・5YR6/4-良好	灰釉-7.5YR6/3-高台脇無	鉄絵(7.5YR2/2)	見込みに胎土目	17世紀前葉	大橋Ⅰ期
608	唐津	皿	(12.9)	3.7	4.0	0.5mm以下砂-10YR5/3・2.5Y6/2～6/1-良好	灰釉5Y5/2+鉄釉5YR2/1	鉄絵(7.5YR2/2)	見込みに胎土目	17世紀前葉	高台脇無釉、大橋Ⅰ期
609	唐津	皿	(13.5)	3.3	(4.8)	1mm以下砂-7.5YR6/1・7.5YR6/1-良好	灰釉-5Y6/2-高台脇無		見込みに胎土目	17世紀前葉	大橋Ⅰ期
610	唐津	皿	(13.2)	3.9	4.5	0.5mm以下砂-5Y6/1・5Y6/1-良好	灰釉-5Y5/2-高台脇無		見込みに砂目４個	17世紀前～中葉	高台内の外縁に墨書輪形、大橋Ⅱ期
611	唐津	皿	10.8	2.6	3.7	1mm以下砂-5YR4/3・2.5Y6/2-良好	灰釉-5Y5/4-高台脇無		見込みに目跡なし	17世紀前葉	ほぼ完形、大橋Ⅰ期
612	唐津	皿	11.2	3.0	4.1	0.5mm以下砂-5YR3/3・2.5Y6/1-良好	灰釉-7.5Y5/3-高台脇無		見込みに目跡なし	17世紀前葉	ほぼ完形、大橋Ⅰ期
613	唐津	皿	(12.9)	3.0	4.8	1mm以下鉄分粒-10YR6/4・5Y6/1-良好	灰釉-5Y6/1-高台脇無		見込みに砂目	17世紀前葉	大橋Ⅱ期
614	唐津	皿	13.4	4.4	4.8	0.5mm以下砂粒僅-5Y6/2・5Y6/2-良好	鉄釉-7.5YR3/2-高台脇無		見込み・畳付に３点砂目.	17世紀前葉	大橋Ⅱ期
615	唐津	皿	(13.8)	3.5	(4.8)	1mm以下砂粒-7.5YR5/4・5Y6/1-良好	灰釉-5Y6/2-高台無		見込みに砂目	17世紀前葉	大橋Ⅱ期
616	唐津	瓶				1mm以下砂粒-7.5YR4/2・2.5Y6/1-良好	鉄飴釉(2.5Y5/1～4/2)		内面青海波タタキ	17世紀前葉	内面・外基底に塗鉄漿、大橋Ⅰ～Ⅱ期
617	肥前系陶器	火入類(鉢)	(15.0)	6.9	6.1	5mm以下砂粒-7.5YR4/2・10YR5/2-良好	鉄釉-10R2/1～3/1			17世紀後半	内面・高台脇無釉、大橋Ⅲ期
618	福岡系施釉陶器	大皿(盤)			9.3	1mm砂-7.5YR5/4・2.5Y6/1-良好(釉一部不全)	藁灰釉(5Y5/4)+灰釉	見込にソギ線文	見込みに胎土目	17世紀中～後半？	高台脇無釉、灰釉は5Y6/6
619	肥前陶器	大皿(盤)	(29.7)			0.5mm以下砂-2.5YR5/4-良好	内白土＋灰釉、外鉄釉	陰文に白土		17世紀後半	鉄釉2.5YR2/1灰釉7.5YR5/1、大橋Ⅲ
620	肥前内野山系陶器	碗	11.1	7.7	4.9	精良-2.5Y8/2-良好	灰釉-2.5Y8/3-全釉		畳付軽く釉剥ぎ	17世紀後半	大橋Ⅲ期
621	肥前内野山系陶器	碗	(9.9)	7.1	4.5	精良-2.5Y8/2-良好	灰釉-2.5Y8/3-全釉		畳付釉剥ぎ	17世紀後半	大橋Ⅲ期
622	肥前内野山系陶器	碗	(12.9)			精良-2.5Y7/2・2.5Y8/2-良好	銅緑釉(透緑青)＋透明釉		見込み蛇目釉剥ぎ+細砂	17世紀後半	大橋Ⅲ期
623	肥前京焼風陶器	皿	(19.2)	4.6	9.0	精良-2.5Y8/2・2.5Y8/1-良好	灰釉-5Y7/3-高台無	鉄絵(5Y5/2)山水		17世紀後半	高台内に「雲」印、大橋Ⅲ期
624	肥前京焼風陶器	碗	(11.7)	7.3	(4.8)	精良-2.5Y8/3・2.5Y8/3-良好	灰釉-2.5Y6/3-高台無	鉄絵(2.5Y4/2)		17世紀後半	大橋Ⅲ期
625	肥前陶器	碗	9.7	5.7	4.2	鉄分多・微粒-5YR4/3・7.5YR3/1-良好	白土10YR8/2+透明-全釉		畳付釉剥ぎ	17世紀末～18世紀前葉	大橋Ⅳ期
626	肥前陶器	碗			4.3	0.5mm以下砂粒僅-2.5Y6/1・2.5Y7/2-良好	白土5Y8/3+透明-高台無	鉄絵(5Y3/2)		17世紀後半	大橋Ⅲ期
627	肥前陶器	片口鉢	(22.5)	10.6	10.4	1mm以下砂粒-5Y5/1・5Y6/1-良好	白土+透明(5Y4/3)		外下半鉄漿(畳付・高台内無)	17世紀末～18世紀前半	高台無釉、鉄漿5YR3/3、大橋Ⅳ期
628	肥前陶器	片口鉢	(24.0)	10.5	9.3	鉄分多・0.5mm砂多-5YR5/3・2.5YR6/3-良好	白土+透明5YR3/1-下半無		見込に胎土目	18世紀	大橋Ⅳ期
629	肥前陶器	浅鉢	(21.0)	7.6	7.9	1mm以下砂粒-7.5YR6/6・7.5YR6/4-良好	白土+透明(5Y4/3)		見込蛇目釉剥ぎ・重焼痕	18世紀	高台無釉、大橋Ⅳ期
630	肥前陶器	鉢			7.4	1mm以下砂粒-10YR6/3・10YR7/24-良好	白土+透明(5Y4/3)		見込軽く蛇目釉剥ぎ・重焼痕	18世紀後葉～19世紀	高台無釉、大橋Ⅴ期
631	京	色絵碗	7.5	4.3	2.6	精良-5Y8/3・5Y8/2-良好	灰釉-2.5Y7/4-高台無	色絵-緑・赤ほか		17世紀後半～18世紀前半	
632	京	平碗			3.6	精良-5Y8/3・5Y8/3-良好	灰釉-2.5Y8/3-高台無	鉄絵(7.5Y4/1)		17世紀後半～18世紀前半	高台内墨書「フリフ」
633	京信楽系灰釉陶器	碗	(8.7)	5.6	2.9	精良-5Y7/2・5Y7/1-良好	灰釉-5Y7/2-高台無	鉄絵(10YR2/3)		18世紀	信楽？
634	京信楽系灰釉陶器	碗	(9.0)	5.1	4.0	精良-5Y7/2・5Y7/1-良好	灰釉-5Y7/3-高台無	鉄絵(5Y2/1)		18世紀	小杉碗、信楽？
635	京信楽系灰釉陶器	油受け皿	6.6	3.9	4.5	精良-10YR7/3・5Y7/1-良好	灰釉-2.5Y6/2-内外底無			18～19世紀	信楽？
636	灰釉陶器	碗	(11.1)	6.6	4.4	精良-5Y7/2・5Y7/2-良好	灰釉-5Y6/3-高台無			18世紀	肥前？
637	陶器	鉄絵染付碗			4.5	精良-5Y7/2・5Y7/2-良好	白土+透明釉-高台無	鉄絵5Y3/2+呉須	高台脇飛カンナ状、高台内螺旋	18～19世紀	
638	肥前磁器	染付碗	(12.3)			陶石-N8/-良好	透明釉-2.5GY7/2	呉須(淡青)		17世紀前～中葉	大橋Ⅱ期
639	肥前磁器	染付碗	11.2	6.2	4.6	陶石-N8/-良好	透明釉-7.5GY8/1-全釉	呉須(藍)-風景	畳付釉削り・僅かに砂付着	17世紀中葉	完形、大橋Ⅱ期
640	肥前磁器	染付碗	(11.4)	7.0	(4.5)	陶石-N8/-良好	透明釉-10GY8/1-全釉	呉須(藍)-唐草	畳付砂付着	17世紀前～中葉	大橋Ⅱ期
641	肥前磁器	染付碗	(10.8)	7.8	4.8	陶石-N8/-良好	透明釉-7.5GY8/1-全釉	呉須(鈍藍)-寿	畳付砂付着	17世紀前～中葉	大橋Ⅱ期
642	肥前磁器	染付碗	(9.9)	7.2	4.5	陶石-N8/-良好	透明釉-10GY8/1-全釉	呉須(鈍青)-縦筋	畳付砂付着	17世紀前～中葉	大橋Ⅱ期
643	肥前磁器	染付碗			4.3	陶石-10Y7/1-良好	透明釉-5Y7/2-高台内無	呉須5Y5/3	畳付砂付着	17世紀前～中葉	大橋Ⅱ期
644	肥前磁器	染付天目形碗	(10.8)			陶石-N8/-良好	透明釉-5GY8/1	呉須(濃青)-福字	体部外面に縦筋	17世紀前～中葉	大橋Ⅱ期
645	肥前磁器	染付天目形碗	(11.1)			陶石-N8/-良好	透明釉-10GY8/1	呉須(藍)-福字	体部外面に縦筋	17世紀前～中葉	大橋Ⅱ期

内堀下部埋土出土（第70図～第82図）つづき

番号	種類	器種・部位	法量（cm） 口径長さ	器高高さ	底径幅	胎土（素材）と焼成 種類・状況・含有物-器面色・断面色-焼成	釉(・漆・装飾) 釉種-色-部位	文様 施文材-意匠	技法など	製作時期	備考
646	肥前磁器	皿	12.6	2.7	4.9	陶石-5Y7/1-良好	透明釉-7.5Y6/1-全釉	呉須(淡緑)圏線	見込み・畳付に砂目	17世紀前葉	粗製、大橋Ⅱ-1期
647	肥前磁器	染付皿	(12.6)	3.1		陶石-N8/-良好	透明釉-5GY8/1-全釉	呉須(暗緑灰)紐	畳付砂付着	17世紀前～中葉	大橋Ⅱ期
648	肥前磁器	染付皿	13.2	2.4	6.0	陶石-N8/-良好	透明釉-10GY8/1-全釉	呉須(緑灰)-菊水	畳付砂付着	17世紀前～中葉	大橋Ⅱ期
649	肥前磁器	染付皿	14.6	3.2	5.5	陶石-N8/-良好	透明釉-5Y7/1-全釉	呉須(鈍藍)-兎	型打輪花、畳付釉剥ぎ後砂付着	17世紀前～中葉	大橋Ⅱ期
650	肥前磁器	染付皿			5.4	陶石-N8/-良好	透明釉-10GY8/1-全釉	呉須(鈍青)-風景	型打輪花、畳付釉剥ぎ後砂付着	17世紀前～中葉	大橋Ⅱ期
651	肥前磁器	染付中皿	(21.0)	4.1	8.2	陶石-N8/-やや不良(透明釉一部が桃色化)	透明釉-5Y8/1-全釉	呉須(藍)-草花？	見込円形削込み、畳付釉剥ぎ	17世紀前～中葉	大橋Ⅱ期
652	肥前磁器	染付中皿			(6.9)	陶石-N8/-良好	透明釉-2.5GY8/1-全釉	呉須(鮮藍)	畳付釉剥ぎ後砂付着	17世紀前～中葉	精良品、大橋Ⅱ期
653	肥前磁器	染付皿			(5.5)	陶石-N8/-良好	透明釉-7.5GY8/1-全釉	呉須(鈍青)	畳付釉剥ぎ後砂付着	17世紀前～中葉	大橋Ⅱ期
654	肥前磁器	染付皿			(5.1)	陶石-N8/-良好	透明釉-7.5GY8/1-全釉	呉須(鈍青)-草？	畳付釉剥ぎ後砂付着	17世紀前～中葉	大橋Ⅱ期
655	肥前磁器	染付皿	(15.9)			陶石-N8/-良好	透明釉-2.5GY7/1	呉須(鈍藍黒)		17世紀前～中葉	破損後焼継、大橋Ⅱ期
656	肥前磁器	染付瓶	5.7			陶石-N8/-良好	透明釉-7.5GY7/1-内無	呉須(濃青)-松他		17世紀前～中葉	破損後焼継、大橋Ⅱ期
657	肥前磁器	染付碗	(10.3)			陶石-N8/-良好	透明釉-7.5GY8/1	呉須(鮮藍)-山？		17世紀後半？	精製品
658	肥前磁器	染付碗	11.0	6.1	4.7	陶石-N8/-良好	透明釉-7.5GY8/1	呉須(藍)-松他	畳付釉剥ぎ	17世紀後半	高台内「大明年製」、完形大橋Ⅲ期
659	肥前磁器	染付碗	(10.0)			陶石-N8/-良好	透明釉-5GY8/2	呉須(青)-網	畳付釉剥ぎ	17世紀中葉	大橋Ⅱ～Ⅲ期
660	肥前磁器	染付碗			4.9	陶石-N8/-良好	透明釉-5GY8/1	呉須(鈍青)-松	コンニャク印判、畳付釉剥ぎ	17世紀末～18世紀前葉	大橋Ⅳ期
661	肥前磁器	青磁碗	(9.7)	5.4	4.2	陶石-N8/-良好	青磁釉(緑白)-全釉		畳付釉剥ぎ	18世紀中葉	大橋Ⅳ期
662	肥前磁器	染付碗	(9.6)	5.3	3.9	陶石-N8/-良好	透明釉-5GY8/1	呉須(鈍青)	割筆網文、畳付釉剥ぎ	18世紀前半	大橋Ⅳ期
663	肥前磁器	色絵碗	(9.3)	4.5	(2.8)	陶石-N8/-良好	透明釉-7.5GY8/1-全釉	呉須(藍)+赤絵	畳付釉削り	18世紀前半	文様は呉須主体、大橋Ⅳ期
664	肥前磁器	染付碗	(9.9)	4.6	(3.9)	陶石-N8/-良好	透明釉-7.5Y7/1-全釉	呉須(鈍青)	畳付釉削り	18世紀前半	大橋Ⅳ期
665	肥前磁器	染付碗	(8.2)	4.5	3.2	陶石-N7/-良好	透明釉-2.5GY7/1-全釉	呉須(淡青)-雨降	畳付砂付着	18世紀	波佐見系、大橋Ⅳ期
666	肥前磁器	染付碗	(10.2)	5.8	3.7	陶石-N7/-良好	透明釉-2.5GY7/1-全釉	呉須(緑灰)-紅葉	コンニャク印判、畳付砂付着	18世紀前半	波佐見系、大橋Ⅳ期
667	肥前磁器	染付碗	(10.6)	5.1	4.2	陶石-N8/-良好	透明釉-5GY7/1-全釉	呉須(緑青)-蔦葉	コンニャク印判、畳付砂付着	18世紀前半	波佐見系、大橋Ⅳ期
668	肥前磁器	染付碗	(10.5)	5.2	4.2	陶石-N8/-良好	透明釉-5GY7/1-全釉	呉須(青)-桐	コンニャク印判、畳付砂付着	18世紀前半	見込蛇目釉剥、波佐見系、大橋Ⅳ期
669	肥前磁器	染付鉢(段重？)	(10.8)	6.8	7.4	陶石-N8/-良好	透明釉-5GY8/1-口縁内無	呉須(藍)-竹？	コンニャク印判、畳付釉削砂付	18世紀前半	大橋Ⅳ期
670	肥前磁器	染付碗			4.0	陶石-N8/-低温気味(磁器化不全)	透明釉-7.5GY8/1-全釉	呉須(藍)	畳付釉削り	17世紀後半～	
671	肥前	陶胎染付碗	(12.0)			砂粒なし-7.5Y6/1-良好	灰釉-2.5GY6/1	呉須(緑灰)-唐草		18世紀	大橋Ⅳ期
672	肥前磁器	染付碗	(13.9)	7.2	5.7	陶石-N8/-良好	透明釉-7.5GY8/1-全釉	呉須(藍)	コンニャク印判、畳付釉削り	18世紀	破損後漆継、大橋Ⅳ期
673	肥前磁器	染付鉢	(18.9)	9.1	7.0	陶石-N8/-良好	透明釉-7.5GY8/1-全釉	呉須(藍)-扇	手書五弁花、畳付釉削り	18世紀	高台内「福」、大橋Ⅳ期
674	肥前磁器	染付筒形碗	(7.9)	6.7	4.2	陶石-N8/-良好	透明釉-7.5GY8/1-全釉	呉須(鮮藍)-松	手書五弁花、畳付釉削り	18世紀中葉	良品、大橋Ⅳ期
675	肥前磁器	染付筒形碗	(7.9)	6.2	3.9	陶石-N8/-良好	透明釉-5GY8/1-全釉	呉須(藍)-風景	畳付釉削り	18世紀中葉	良品、大橋Ⅳ期
676	肥前磁器	青磁染付丸碗	(10.9)	6.1	(4.9)	陶石-N8/-良好	青磁釉(緑白)+透明-全釉	呉須(藍)	畳付釉削り	18世紀中葉	大橋Ⅳ期
677	肥前磁器	青磁染付筒碗	(7.3)	6.4	4.5	陶石-N8/-良好	青磁釉(緑白)+透明-全釉	呉須(鈍藍)	畳付釉削り・砂付着、ｺﾝﾆｬｸ印判	18世紀後半	波佐見系、大橋Ⅳ期
678	肥前磁器	青磁染付丸碗	(10.8)	6.0	4.1	陶石-N8/-良好	青磁釉(緑白)+透明-全釉	呉須(褐緑)	畳付釉削り・砂付着、ｺﾝﾆｬｸ印判	18世紀後半	波佐見系、大橋Ⅳ期
679	肥前磁器	染付碗	(10.5)	4.4	3.8	陶石-N8/-良好	透明釉(2.5GY8/1)-全釉	呉須(鈍青)	畳付釉削・砂付、見込蛇目釉剥	18世紀	波佐見系、大橋Ⅳ期
680	肥前磁器	染付碗	(8.5)	4.0	2.8	陶石-N8/-良好	透明釉(2.5GY8/1)-全釉	呉須(濃青)-菊	畳付釉削	18世紀末～19世紀	大橋Ⅴ期
681	肥前磁器	染付深皿	(19.2)	5.8	10.2	陶石-N8/-良好	透明釉(2.5GY7/1)-全釉	呉須(藍)-笹他	畳付釉削	18世紀	大橋Ⅳ期
682	肥前磁器	染付深皿	(13.8)	3.9	(8.4)	陶石-N8/-良好	透明釉(5GY8/1)-全釉	呉須(藍)+口紅	畳付釉削、高台内ハリ痕	17世紀末～18世紀前半	手書五弁花、大橋Ⅲ～Ⅳ期
683	肥前磁器	染付輪花深皿	(13.8)	4.4	(7.5)	陶石-N8/-良好	透明釉(5GY8/1)-全釉	呉須(藍)-花他	畳付釉削砂付	17世紀末～18世紀前半	手書五弁花、大橋Ⅲ～Ⅳ期
684	肥前磁器	染付深皿	(14.1)	4.3	(7.2)	陶石-N8/-良好	透明釉(7.5GY8/1)-全釉	呉須(濃青)-竹他	畳付釉削砂付	17世紀末～18世紀前半	大橋Ⅲ～Ⅳ期
685	肥前磁器	染付輪花中皿	(21.7)	2.6	(14.8)	陶石-N8/-良好	透明釉(7.5GY8/1)-全釉	呉須(藍)-松竹梅	畳付釉削砂付、高台内ハリ痕	18世紀	高台内「筒江富　　」、大橋Ⅳ期
686	肥前磁器	染付深皿	(19.2)	5.8	(10.2)	陶石-N8/-良好	透明釉(2.5GY7/1)-全釉	呉須(藍)-笹他	畳付釉削	18世紀	６８１と同一個体、大橋Ⅳ期
687	肥前磁器	染付深皿	12.9	3.9	7.0	陶石-N8/-良好	透明釉(5GY8/1)-全釉	呉須(鈍藍)-木葉	型打輪花、畳付釉削、見込ﾊﾘ痕	18世紀末～19世紀前葉	蛇目凹形高台、大橋Ⅴ期
688	肥前磁器	染付中皿	(19.2)	5.3	5.4	陶石-N8/-良好	透明釉(2.5GY8/1)-全釉	呉須(藍)-半裁花	畳付釉削、見込蛇目釉剥ぎ	17世紀末～18世紀前葉	手書五弁花、良品、大橋Ⅲ～Ⅳ期
689	肥前磁器	染付皿	(12.4)	4.0	4.7	陶石-N8/-良好	透明釉(7.5Y8/1)-全釉	呉須(緑褐～鈍青)	畳付釉削、見込蛇目釉剥ぎ	17世紀末～18世紀前半	波佐見系、大橋Ⅳ期
690	肥前磁器	染付皿	11.8	3.5	4.4	陶石-N8/-良好	透明釉(7.5Y8/1)-高台無	呉須(藍)	見込蛇目釉剥、見込・畳付砂付	17世紀後半～18世紀初	波佐見系、大橋Ⅲ～Ⅳ期
691	肥前磁器	染付皿	13.6	3.4	4.4	陶石-N8/-良好	透明釉(2.5Y8/1)-高台無	呉須(緑青)	見込蛇目釉剥、見込・畳付砂付	17世紀後半～18世紀前葉	波佐見系、大橋Ⅲ～Ⅳ期
692	肥前磁器	染付皿	12.6	3.5	4.3	陶石-N8/-良好	透明釉(2.5Y8/1)-高台無	呉須(淡鈍青)	見込蛇目釉剥き、見込砂付	17世紀後半～18世紀前葉	波佐見系、大橋Ⅲ～Ⅳ期
693	肥前磁器	白磁皿	13.3	3.4	4.4	陶石-N8/-良好	透明釉(2.5Y7/1)-高台無		見込蛇目釉剥ぎ、見込砂付	17世紀後半～18世紀前葉	波佐見系、大橋Ⅲ～Ⅳ期
694	肥前磁器	染付輪花皿	(11.7)	2.5	6.5	陶石-N8/-良好	透明釉(7.5Y8/1)-全釉	呉須(鮮藍)+口紅	型打ち輪花、畳付釉削ぎ	18世紀末～19世紀前葉	「太明成化年製」銘、精良品、大橋Ⅴ期
695	肥前磁器	染付四方皿	9.8	3.2	6.0	陶石-N8/-良好	透明釉(2.5Y8/1)-全釉	呉須(濃青)	型打ち、貼付高台、畳付釉削ぎ	18世紀前半	良品、大橋Ⅳ期

内堀下部埋土出土（第70図～第82図）つづき

番号	種　類	器種・部位	法量（cm） 口径長さ	器高高さ	底径幅	胎土（素材）と焼成 種類・状況・含有物-器面色・断面色-焼成	釉(・漆・装飾) 釉種-色-部位	文　様 施文材-意匠	技　法　な　ど	製　作　時　期	備　考
696	肥前磁器	染付碗蓋	10.1	2.9	4.3	陶石-N8/-良好	透明釉(7.5Y7/1)-全釉	呉須(暗青緑)		19世紀前葉	大橋Ⅴ期
697	磁器	染付輪花皿	(9.0)	2.3	5.0	陶石-N8/-良好	透明釉(7.5Y7/1)-全釉	呉須(濃藍)		19世紀	非肥前？
698	肥前磁器	染付仏飯器	(8.4)	6.4	3.8	陶石-N8/-良好	透明釉(7.5Y7/1)-底面無	呉須(鈍青)		18世紀	波佐見系、大橋Ⅳ期
699	肥前磁器	染付花生			5.4	陶石-N8/-良好	透明釉(5GY7/1)-全釉	呉須(鈍藍)	畳付釉削ぎ	18世紀	波佐見系、大橋Ⅳ期
700	肥前磁器	染付碗	(10.8)	5.9	5.5	陶石-N8/-良好	透明釉(5GY8/1)-全釉	呉須(青)	畳付釉削ぎ	18世紀末～19世紀前葉	高高台、大橋Ⅴ期
701	肥前磁器	染付碗	(10.3)	5.9	3.9	陶石-N8/-良好	透明釉(2.5GY8/1)-全釉	呉須(鮮藍)	畳付釉削ぎ	19世紀中葉	良品、大橋Ⅴ期
702	肥前磁器	染付碗	(11.0)			陶石-N8/-良好	透明釉(2.5GY8/1)	呉須(濃青)		19世紀中葉	破損後焼継、大橋Ⅴ期
703	肥前磁器	染付花瓶				陶石-N8/-良好	透明釉(5GY8/1)-内無	呉須(青緑)		18世紀	波佐見系、大橋Ⅳ期
704	肥前磁器	染付油壺	2.1	5.2		陶石-N8/-良好	透明釉(2.5GY8/1)-内無	呉須(藍)		18～19世紀	
705	瀬戸美濃磁器	染付碗	(10.4)	5.6	(4.0)	光沢陶石-N8/-良好	透明釉(7.5GY8/1)-全釉	呉須(藍)	畳付釉削ぎ	19世紀中葉	高台内焼継「トハ」
706	磁器	青磁鉢	(18.4)	5.4	9.9	光沢陶石-N8/-良好	緑白青磁釉+高台内透明		型打ち、畳付釉削ぎ	19世紀	瀬戸美濃～関西系
707	磁器	染付花瓶			4.3	陶石-N8/-良好	透明(2.5GY8/1)内・底無	呉須(鮮藍)+型押	外型成形(非ロクロ)	19世紀	型押し龍文に呉須花文
708	磁器	たんころ	(6.3)	5.3	4.4	光沢粗性陶石-N7/-良好	鉄釉(5YR3/4)-底面無		底部糸切り	19世紀	関西～瀬戸美濃系？
709	瀬戸美濃磁器	色絵蓋	8.0	2.5	3.3	精良白土-白-良好	透明釉(2.5GY8/1)-全釉	呉須(鈍藍)+赤絵		19世紀	破損後漆継ぎ
710	備前	大皿(盤)	(38.7)			2mm以下砂粒-2.5YR4/4～4/2・2.5YR5/2-良好				16世紀最終末～17世紀初	見込み黄ゴマ、外面火襷・重焼痕
711	備前	擂鉢	(33.9)			2mm以下砂粒-2.5YR4/1～2/1・2.5YR5/2-良好			口縁下に重焼痕	16世紀最終末	１ｂ期
712	備前	擂鉢	(30.6)	12.3	13.4	1.5mm以下砂粒-10R3/2・10R4/3-良好			口縁下に重焼痕	17世紀初	スリメ放射+斜め・単位11本、１ｃ期
713	備前	擂鉢			(11.1)	1mm以下砂黒色粒-10R4/4・5Y6/1-良好			口縁下に重焼痕	17世紀前葉	スリメ放射・単位10本、２ａ期
714	備前	擂鉢	17.2	6.9	6.6	1mm以下砂黒色粒-10R4/1～10YR5/2・5Y5/1-良好			体部下半ヘラ削、口縁下重焼痕	17世紀前～中葉	スリメ放射・単位６本、火襷、２ａ期
715	備前	擂鉢	(27.7)	12.0	11.5	1mm以下砂粒-2.5YR4/2・7.5YR4/1～5/1-良好			口縁下に重焼痕	17世紀前葉	スリメ放射・単位７本、２ａ期
716	備前	擂鉢	(30.6)			2mm以下砂粒-10R4/3～3/1・N5/-良好			口縁下・体部下縁に重焼痕	17世紀中葉	スリメ放射・単位10本、２ａ期新
717	備前	擂鉢	(29.1)	12.2	(13.2)	2mm以下砂粒少-10R4/3・10R4/3-良好	体上部塗土-2.5YR3/2		口縁下に重焼痕	17世紀後葉	ベタ底、スリメ放射・単位７本、３期
718	備前	擂鉢	(29.7)	10.6	(13.5)	2mm以下砂粒少-2.5YR4/1～3/1・N5/-良好			口縁下・体部下縁に重焼痕	17世紀後半	ベタ底、スリメ放射・単位15本、２ｂ期
719	備前	擂鉢	(31.5)			2mm以下砂粒少-2.5YR4/2～5/3・10R4/6-良好	体上部塗土-7.5Y4/2		体部ヘラ削り	18世紀中～後葉	スリメ放射・単位８本、４期
720	備前	鉢	(16.8)	12.3	(18.7)	2mm以下砂黒色粒-10R3/1～4/1・10YR6/1-良好			底面に重焼痕	17世紀前半	
721	備前	鉢				1mm以下砂粒-5YR4/3～4/2・N6/-良好				17世紀後半？	外面火襷
722	備前	サヤ形鉢	(10.2)	5.7	(12.0)	2mm砂・黒色粒多-7.5YR3/1～4/3・N4/-良好				17～19世紀	体側面に「∧に●」刻印
723	備前	サヤ形鉢	(11.7)	6.8	(12.7)	2mm砂・黒色粒多-2.5YR4/2～3/2・N6/-良好				17～19世紀	体側面に刻印「∧に上」
724	備前	建水形鉢			(10.2)	1mm砂少-10R2/1～3/1・5YR5/1-良好	体上部にヘラ線			17世紀前半	外面・見込灰被り顕著
725	備前	水注	(15.8)	7.0	8.3	2mm砂・黒色粒-7.5YR3/2～4/3・10YR6/4-良好			外面に重焼痕	16世紀末～17世紀前半	
726	備前	把手				1mm砂・黒色粒-2.5YR3/2・7.5YR5/1-良好				17世紀前半？	片面に黄ゴマ
727	備前	徳利			3.9	0.5mm以下砂粒少-2.5Y4/2～4/1・N5/-良好				16世紀末～17世紀前葉	
728	備前	徳利	(4.8)			2mm以下砂粒-5YR4/1～4/2・2.5YR4/2-良好				16世紀末～17世紀前葉	
729	備前	徳利			(6.0)	2mm以下砂粒-10R3/4～4/2・2.5YR5/3-良好			蛇目高台	16世紀末～17世紀前葉	
730	備前	徳利			5.8	1mm砂・黒色粒-10YR5/2～5/1・5Y6/1-良好	外面軽い塗土(10R3/1)		蛇目高台	16世紀末～17世紀前葉	畳付に「○」刻印
731	備前	徳利			14.0	1mm砂・黒色粒-7.5YR6/3～10R4/4・7.5YR6/3-良好				16世紀末～17世紀初	外・底面火襷
732	備前	徳利			6.1	0.5mm砂粒少-7.5YR4/1・5YR6/1-良好	外面塗土(5YR3/3)			17世紀後葉～18世紀前葉	
733	備前	徳利			9.1	2mm以下砂粒-2.5YR3/1～4/3・N5/-良好				17世紀中～後葉	底面・体上部にヘラ書き記号
734	備前	徳利			7.0	1mm以下砂粒-10R3/1～4/2・2.5Y5/1-良好				16世紀末～17世紀前葉	底面にヘラ書き「大」
735	無釉陶器	徳利			11.1	0.5mm砂粒少-2.5Y7/1～7.5YR5/4・7.5R5/3-良好	外面頸部塗土(7.5YR4/1)		外面ヘラ削り	18世紀？	体部ヘラ書記号、軟陶質、備前焼模倣？
736	須恵質	擂鉢	(30.9)			3mm以下砂粒-2.5Y5/1～7/2・2.5Y6/1-良好				16世紀後葉	スリメクシ単位６本、いわゆる亀山系
737	丹波	甕				4mm以下砂粒-10YR5/1-良好	外面鉄釉+飴釉、内面灰釉			18世紀後葉～19世紀	
738	漆器	碗			6.4		内外面とも朱漆		シャープな作り		
739	銅製品	煙管吸口	6.3			真鍮？					内部に木管遺存
740	瓦	軒丸瓦				1mm砂僅-5Y4/1・外5Y6/1芯外5Y4/1-良好		右巻三巴珠文19±	内面コビキＢ痕	17世紀初	岡山城３～４式

内堀下部埋土出土追加（第101図）

932	土師質土器	焼塩壺	6.8	10.4	4.8	2mm以下砂粒-5YR6/6～7.5YR6/4・7.5YR6/4-良好			内面細布目	17世紀中葉	
933	中国(華南)青花	碗	12.7	6.0	4.1	陶石-N8/-良好(ヤヤ甘い磁器質)	透明釉-2.5GY8/1-全釉	呉須(鈍藍灰)	見込蛇目釉剥、高台両角釉削	17世紀初	釉虫食い顕著、類呉須手

内堀上部埋土出土（第83～100図）

番号	種　類	器種・部位	法量（cm） 口径長さ	器高高さ	底径幅	胎土（素材）と焼成 種類・状況・含有物-器面色・断面色-焼成	釉(・漆・装飾) 釉種-色-部位	文　様 施文材-意匠	技　法　な　ど	製　作　時　期	備　　考
741	土師質土器	皿	10.8	3.1	7.0	0.5mm以下砂粒-2.5Y8/3-良好			回転糸切り	17世紀前葉	口縁に煤付着
742	土師質土器	皿	(10.2)	2.4	5.8	0.5mm以下砂粒僅-10YR7/3-良好			回転糸切り	17世紀前半	
743	土師質土器	皿	(8.4)	2.0	5.4	0.5mm以下砂粒僅-10YR7/3-良好			回転糸切り	17世紀前半	
744	土師質土器	皿	(9.1)	1.8	5.6	0.5mm以下砂粒僅-10YR6/4-良好			回転糸切り	17世紀前半	
745	土師質土器	皿	(9.7)	2.1	(5.7)	1mm以下砂粒僅-2.5Y7/3-良好			回転糸切り	17世紀前～中葉	
746	土師質土器	皿	(9.7)	1.5	6.3	0.5mm以下砂粒僅-2.5Y7/3～7/2-良好			回転糸切り	17世紀前～中葉	
747	土師質土器	皿	(9.3)	1.6	(6.0)	0.5mm以下砂粒僅-10YR7/3～7/2-良好			回転糸切り	17世紀前～中葉	
748	土師質土器	皿	(9.6)	2.0	(5.2)	!mm以下砂粒僅-10YR7/3-良好			回転糸切り	17世紀前～中葉	
749	土師質土器	皿	(9.3)	1.8	(5.7)	!mm以下砂粒僅-10YR6/4-良好			回転糸切り	17世紀前～中葉	口縁に煤付着
750	土師質土器	小皿	(9.2)	1.2	6.9	0.5mm以下砂粒僅-2.5Y8/1-良好			回転糸切り		
751	土師質土器	小皿	(7.1)	1.1	(5.0)	!mm以下砂粒僅-10YR7/3-良好			回転糸切り	18～19世紀	
752	土師質土器	小皿	6.2	1.1	5.6	0.5mm以下砂粒僅-10YR7/4-良好			回転糸切り	18～19世紀	
753	土師質土器	小皿	(6.4)	0.9	(4.2)	0.5mm以下砂粒僅-7.5YR7/6-良好			回転糸切り	18～19世紀	
754	土師質土器	皿	(10.9)	2.1	(3.9)	0.5mm以下砂粒僅-2.5Y6/2-良好			手づくね成形	17世紀前半？	
755	土師質土器	皿	(11.4)	2.1	(4.2)	0.5mm以下砂粒僅-2.5Y8/3-良好			手づくね成形	17世紀？	口縁に煤付着
756	瓦質土器	釜				1mm以下砂粒-5Y5/1・5Y7/1-良好					
757	土師質土器	ナベ	(26.0)			1mm以下砂粒-5Y5/1～N3/・5Y4/1-良好			外面縦ハケ、内面横ハケ	16～17世紀	
758	土師質土器	羽釜				1mm以下砂粒-10YR5/2～10YR3/1・10YR5/3-良好			外下半横ハケ、外面縦ハケ	17～18世紀？	
759	素焼き	玩具馬		4.9		微粒鈍橙土-7.5YR7/4-良好			外型成形、剥離材キラコ	18～19世紀	５５２と同型
760	素焼き	玩具蝶				微粒白色土-5Y8/1-良好			外型成形、剥離材キラコ	18～19世紀	
761	土師質土器	焙烙	(36.0)			2mm砂-2.5Y6/1～4/1・外2.5Y6/1芯2.5Y4/1-良好			外面指頭圧痕後横ナデ	18世紀	外面煤付着
762	土師質土器	焙烙	(39.0)			1mm砂-2.5Y6/2～7.5Y4/1・10YR6/3-良好			外面指頭圧痕	18世紀	外面煤付着
763	土師質土器	焙烙	(29.0)			1mm砂-2.5Y6/2～5/3・10YR6/4-良好			外面指頭圧痕	18世紀	外面煤付着
764	土師質土器	焙烙				1mm砂-2.5Y6/2～5/1・外2.5Y6/2芯2.5Y3/1-良好			外型成形	19世紀	
765	土師質(瓦質)土器	焙烙				1mm砂-N3/～5Y4/1・外2.5Y6/2芯N3/-良好			外型成形、燻焼き	19世紀	
766	土師質土器	焙烙	(25.0)			2mm砂・鉄分粒・ｳﾝﾓ-7.5YR5/3～5/1・5YR6/6-良好			底部外型成形	18世紀後半	外面煤付着、難波Ｄ類
767	土師質土器	焙烙	(27.6)			1mm砂粒-7.5YR6/6～5/4・7.5YR6/6-良好			底部外型成形	19世紀	外面煤付着、難波Ｄ類
768	美濃	黄瀬戸輪花皿	(11.1)	2.5	6.7	0.5mm以下砂粒-5Y8/1・5Y8/1-良好	黄瀬戸灰釉-5Y5/6-全釉		見込み輪トチ痕	16世紀前～中葉	大窯中葉期
769	美濃	皿	10.6	2.2	6.2	0.5mm以下砂粒-2.5Y7/3・2.5Y8/3-良好	灰釉-2.5Y7/3-全釉			16世紀後葉	大窯後半期
770	唐津	瓶			(16.7)	1mm以下砂粒僅-10YR6/3-やや不良(釉化不全)	鉄鉛釉-5Y3/2		内面青海波タタキをナデ消し	16世紀末～17世紀前葉	大橋Ⅰ期
771	肥前内野山系陶器	碗	10.3	6.9	4.9	精良土-5Y8/1-良好	灰釉-5Y8/3-全釉		畳付釉削り	17世紀後半	大橋Ⅲ期
772	陶器	花生			6.3	1mm以下砂粒僅-2.5YR5/4・2.5YR5/6-良好	鉄釉-5YR2/2-底無		底部回転糸切り	18～19世紀	九州系？
773	福岡系陶器	大皿(盤)	(30.6)	6.2	11.6	1mm砂粒僅・生地鉄分多-5YR3/3・5YR5/2-良好	灰釉-5Y4/3-全釉	押印花文+線刻	畳付貝殻目、見込胎土目	17世紀前～中葉	畳付釉削り、上野・高取系
774	肥前磁器	染付碗			4.5	陶石-N8/-良好	透明釉-7.5GY8/1-全釉	呉須(鈍藍)	畳付砂付着	17世紀中葉～後半	「太明」銘、大橋Ⅲ期
775	肥前磁器	染付碗		6.6	(4.9)	陶石-N8/-良好	透明釉-2.5GY7/1-全釉	呉須(鈍藍)	畳付釉削り・砂着	17世紀前～中葉	大橋Ⅱ期
776	肥前磁器	染付瓶			(6.6)	陶石-N8/-良好	透明釉-7.5GY8/1-内無	呉須(鮮青)-網	畳付釉削り(高台内施釉)	17世紀中葉	大橋Ⅱ～Ⅲ期
777	肥前磁器	白磁皿	(14.4)	3.2	5.1	陶石-N8/-良好(陶質的)	透明釉-2.5Y8/2-全釉		畳付釉削り、見込み砂目	17世紀前～中葉	陶器的器形、大橋Ⅱ期
778	肥前磁器	染付碗	(10.8)	5.4	4.4	陶石-N8/-良好	透明釉-5GY8/1-全釉	呉須(鮮青)-網	畳付釉削り	18世紀前半	二重枠渦福、良品、大橋Ⅳ期
779	肥前磁器	染付瓶	(9.9)			陶石-N8/-良好	透明釉-7.5GY8/1	呉須(藍)-花唐草		18世紀前半	大橋Ⅳ期
780	肥前磁器	染付深皿	13.3	4.0	7.5	陶石-N8/-良好	透明釉-10GY8/1	呉須(濃青)-道教	蛇目凹形高台	18世紀末～19世紀	大橋Ⅴ期
781	肥前磁器	青磁染付碗	12.0	6.1	4.9	陶石-N8/-良好	緑灰青釉+透明釉5GY8/1	呉須(鮮藍)	畳付釉削り	18世紀後半	破損後焼継、良品、大橋Ⅳ期
782	肥前磁器	染付碗			4.1	陶石-N8/-良好	透明釉-7.5GY8/1-全釉	呉須(青)-松竹梅	畳付釉削り	18世紀末～19世紀	「冨貴長春」銘、破損後焼継、大橋Ⅴ期
783	磁器	染付レンゲ				光沢陶石-N8/-良好	透明釉-10GY8/1	呉須(藍)		19世紀	瀬戸美濃～関西系
784	肥前磁器	染付多角鉢	(21.6)	9.3	(13.2)	陶石-N8/-良好	透明釉-7.5GY8/1-全釉	呉須(鮮藍)-麒麟	墨はじき施文、畳付釉削り	18世紀末～19世紀	精良品、大橋Ⅴ期
785	京信楽系灰釉陶器	せんじ碗	10.0	5.4	4.1	白土-N8/-良好	灰釉-7.5Y7/2-高台無	鉄絵-7.5YR2/1		18世紀	
786	京信楽系灰釉陶器	碗	(7.3)	4.7	3.3	灰白土-5Y7/1-良好	灰釉-7.5Y6/2-高台無		見込み３点ハリ痕	18世紀後半～19世紀	
787	陶器	平鉢	13.1	5.6	8.1	0.5mm以下砂僅-7.5YR7/3・7.5YR7/3-良好	長石釉-2.5Y8/2-高台無	鉄絵(5YR3/1)		19世紀	
788	京系灰釉陶器	筒形碗	8.9	6.3	5.2	白土-2.5Y8/2・5Y8/1-良好	灰釉-5GY7/1-高台無	鉄絵5YR3/1+呉須	口紅	19世紀	
789	京系灰釉陶器	平鉢蓋	14.2	2.9	4.9	0.5mm以下砂僅-5Y7/1・5Y6/2-良好	灰釉-5Y6/2-受部無	鉄絵+呉須+ｲｯﾁﾝ		19世紀	
790	京系灰釉陶器	平鉢	13.8	6.1	8.5	0.5mm以下砂僅-2.5Y6/2・5Y6/2-良好	灰釉-5Y6/2-高台・口縁無	鉄絵+呉須+ｲｯﾁﾝ	見込み３点ハリ痕	19世紀	

内堀上部埋土出土（第83～100図）つづき

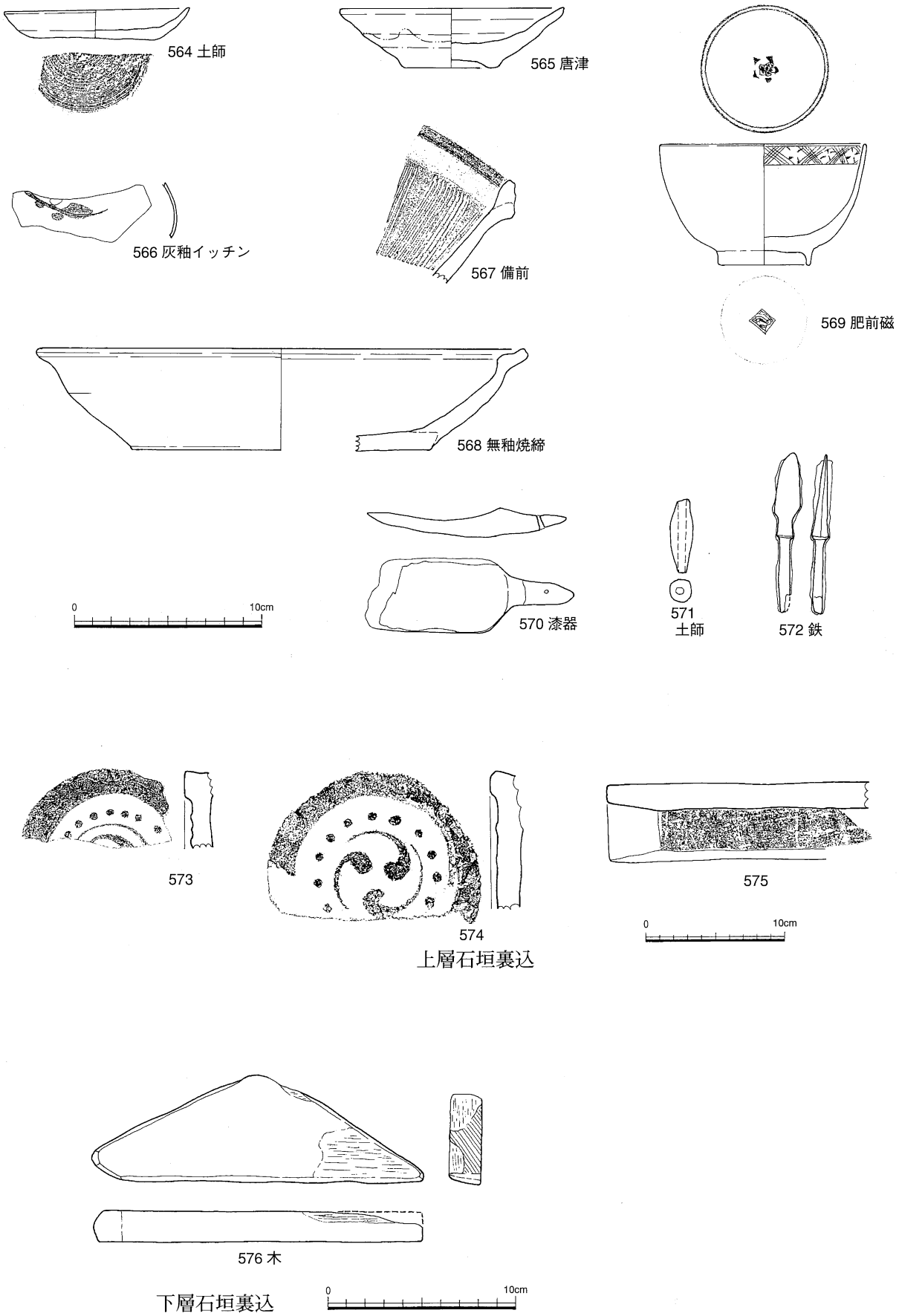
番号	種　類	器種・部位	法量（cm） 口径長さ	器高高さ	底径幅	胎土（素材）と焼成 種類・状況・含有物-器面色・断面色-焼成	釉(・漆・装飾) 釉種-色-部位	文　様 施文材-意匠	技　法　な　ど	製　作　時　期	備　考
791	京系灰釉陶器	平鉢蓋	14.4	3.1	5.0	0.5mm以下砂僅-2.5Y6/2・5Y6/2-良好	灰釉-5Y5/2-受部無	鉄絵+ｲｯﾁﾝ	見込み３点ハリ痕	19世紀	
792	京系灰釉陶器	平鉢	13.9	6.2	8.5	0.5mm以下砂僅-2.5Y6/2・5Y6/2-良好	灰釉-5Y6/2-高台・口縁無	鉄絵+呉須+ｲｯﾁﾝ	小脚貼付、見込み３点ハリ痕	19世紀	
793	京系灰釉陶器	行平	(14.5)	9.1	(6.0)	白土-5Y7/2・5Y8/2-良好	灰釉-5Y7/4-外下半無		体部は飛びカンナ削り	19世紀	
794	京系灰釉陶器	行平類把手				0.5mm以下砂僅-5Y6/2-良好	灰釉5Y6/2・外面鉄漿	型押し文		19世紀	
795	カキ釉陶器	土瓶	10.5	12.0	(6.3)	0.5mm以下砂僅-10YR6/3・5YR6/6-良好	カキ釉2.5YR4/8			19世紀	内面・外下部無釉、底部煤付着
796	瀬戸美濃陶器	中皿	19.6	3.7	10.9	1.5mm以下砂-5Y8/2・5Y8/2-良好	灰釉-5Y8/3-高台脇無	黒褐鉄絵	全釉-畳付釉削り	19世紀	馬目皿
797	瀬戸美濃陶器	碗	10.0	6.5	5.2	0.5mm以下砂僅-5Y8/2・5Y8/2-良好	灰釉-2.5Y7/2-全釉	鉄絵2.5Y3/2		19世紀	
798	瀬戸美濃陶器	火鉢	(17.7)	19.2	17.7	1mm以下砂-5Y8/2・5Y8/2-良好	灰釉+緑釉・白釉、鉄漿		見込みに目７点	19世紀	鉄漿は内面と底面
799	瀬戸美濃陶器	火鉢	(30.0)	22.5	29.7	1mm以下砂-5Y8/2・5Y8/2-良好	灰釉+白濁釉・飴釉、鉄漿			19世紀	鉄漿は高台脇と高台内面、畳付無釉
800	無釉陶器	徳利			(6.0)	0.5mm以下砂僅-10YR6/4・10YR6/4-良好(土師質)			畳付釉削り		体部に墨書
801	肥前磁器	金彩色絵皿	12.6	2.5	7.2	陶石-N8/-良好	透明釉-2.5GY8/1-全釉	呉須+赤・緑+金		19～20世紀	
802	肥前磁器	金彩色絵蓋	-5.7	2.3	13.0	陶石-N8/-良好	透明釉-5GY8/1-全釉	呉須+赤緑橙+金	外面文型紙刷、蛇目凹形高台	19世紀	
803	磁器	金彩色絵輪花皿	18.3	6.4	9.3	陶石-N8/-良好	透明釉-5GY8/1	ｺﾊﾞﾙﾄ+赤緑橙+金	畳付釉削り、型紙刷り	19世紀末～20世紀	肥前産？
804	磁器	染付碗	10.8	6.5	4.4	陶石-2.5Y8/2-良好(陶質的)	透明釉-2.5Y8/2-全釉	酸化ｺﾊﾞﾙﾄ	銅版転写	19世紀末～20世紀	
805	磁器	染付仏花瓶	1.2	11.1	3.1	陶石-N8/-良好	透明釉-5GY8/1-全釉	酸化ｺﾊﾞﾙﾄ	畳付～脇釉削り、型紙刷り	19世紀末～20世紀	完形
806	磁器	染付平小鉢(段重)	9.3	3.1	7.9	陶石-N8/-良好	透明釉-5GY8/1-全釉	酸化ｺﾊﾞﾙﾄ	見込ピン痕５点、型紙刷り	19世紀末～20世紀	肥前産？
807	磁器	染付皿	14.1	4.1	8.7	陶石-N8/-良好	透明釉-5GY8/1	酸化ｺﾊﾞﾙﾄ	蛇目凹形高台、型紙刷り	19世紀末～20世紀	蛇目凹形高台
808	磁器	染付皿	(13.8)	4.1	8.5	陶石-N8.5/-良好	透明釉-2.55GY8/1	酸化ｺﾊﾞﾙﾄ	型紙刷り	19世紀末～20世紀	
809	磁器	染付皿	(12.6)	2.8	(6.9)	光沢陶石-N8/-良好	透明釉-5GY8/1-全釉	酸化ｺﾊﾞﾙﾄ	口紅、銅版転写	19世紀末～20世紀	瀬戸美濃製？
810	磁器	染付皿	(12.9)	2.4	(6.9)	陶石-N8/-良好	透明釉-5GY8/1	酸化ｺﾊﾞﾙﾄ	高台釉削り	19世紀末～20世紀	
811	珉平	平碗	11.1	4.3	6.3	白土-5Y8/2-良好(類磁器質)	鮮黄色透明釉-全釉		脚貼付	19世紀末～20世紀	
812	三田	青磁皿				光沢陶石-5YR6/6・N8/-良好	青磁釉(暗緑灰)	型押文	畳付釉削	19世紀	釉厚1mm内外
813	磁器	金彩赤絵小杯	7.0	4.0	3.3	陶石-N8/-良好	内透明2.5GY8/1、外赤塗	細線書+鉄漿蝙蝠	畳付釉削、高台内浅く二段	19～20世紀	高台内呉須圏線ﾄ「竹泉」、口縁金
814	九谷	金彩色絵皿	15.3	3.8	(7.6)	陶石-N8/-良好	透明釉-全釉	金彩色絵-鶴・花		19世紀末～20世紀	赤・ｺｹﾞ茶・桃・灰・褐緑・青緑・金・白・青
815	磁器	染付土瓶	9.0	11.5	9.0	陶石-N8/-良好	透明釉-5GY8/1-外面底無	呉須(藍青)-鳳凰	全釉、畳付釉削	19～20世紀	完形
816	磁器	染付青磁蓋	3.9	3.2	10.3	光沢陶石-N8/-良好	外:青磁、内・高台内:透明	酸化ｺﾊﾞﾙﾄ?-河童		19世紀末～20世紀	
817	磁器	染付瓶			4.9	光沢陶石-7.5Y8/1-良好	透明釉-7.5Y8/1-内・底無	呉須(鈍藍)	底部糸切り後ヘラ削り	19～20世紀	
818	備前	小皿(灯明皿)	8.3	1.3	3.1	0.5mm以下砂粒-7.5YR5/1・7.5YR4/1-良好	塗土-10R3/1-内面		底部糸切り後ヘラ削り	18～19世紀	
819	備前	小皿(灯明皿)	(9.3)	1.6		0.5mm以下砂粒-7.5YR4/3・N5/-良好	塗土-5YR4/3-内面		底部糸切り後ヘラ削り	18～19世紀	
820	備前	小皿(灯明皿)	9.3	1.4		0.5mm以下砂粒-7.5Y4/2・7.5Y4/1-良好	塗土-10YR3/2-内面		底部糸切り後ヘラ削り	17～18世紀	
821	備前	灯明皿	8.9	1.3	3.2	0.5mm以下砂粒-2.5YR6/6-良好	塗土-2.5YR5/6-全面		底部糸切り後ヘラ削り	18世紀後半～19世紀	
822	備前	灯明皿	10.5	1.6		0.5mm以下砂粒-2.5Y5/2-良好	塗土-2.5Y4/2-内面			18世紀後半～19世紀	
823	京信楽系灰釉陶器	灯明皿	(10.2)	2.0	3.4	0.5mm以下砂粒-2.5Y8/1・2.5Y8/1-良好	灰釉-5Y7/3-外面無		底部糸切り後ヘラ削り	18世紀後半～19世紀	
824	備前	灯明皿	9.2	1.5	4.5	0.5mm以下砂粒僅-5YR5/4・5YR5/4-良好			底部糸切り後ヘラ削り	19世紀	内面火襷、完形
825	備前	灯明皿	(9.0)	1.4		0.5mm以下砂粒-2.5YR4/3・5YR5/4-良好	塗土-10R4/2-全面		底部糸切り後ヘラ削り	19世紀	
826	備前	灯明皿	(8.1)	0.8		0.5mm以下砂粒-2.5YR5/4・2.5YR5/4-良好			底部糸切り後ヘラ削り	19世紀	
827	備前	灯明皿	7.0	1.0	3.0	0.5mm以下砂粒-2.5YR4/1-良好	塗土-2.5YR4/1-内面			19世紀	
828	備前	型打ち輪花小皿	(9.9)			0.5mm以下砂粒僅-5YR5/3～4/2・2.5YR6/3-良好	塗土-2.5YR4/2～5/3-内面	型打ち文様		18～19世紀	
829	備前	鉢	(18.9)	7.8	(10.2)	0.5mm以下砂粒-10R4/4・10R4/2-良好				18世紀後半～19世紀	外面火襷、底刻印、内面灰白色物付着
830	備前	鉢	(24.6)	4.7	(20.7)	0.5mm以下砂粒-10YR5/3～5YR4/3・5Y6/1-良好				16世紀末～17世紀前半	見込み黄ゴマ
831	備前	鉢～扁壺				0.5mm以下砂粒-7.5YR3/2～4/2・N4/-良好		格子タタキ	回転糸切り	17世紀前半	
832	備前	極小擂鉢(小鉢)	(10.9)	3.5	(3.0)	0.5mm以下砂粒-2.5YR5/4～4/4・2.5YR5/4-良好	塗土(!10R4/4)-全面			19世紀	スリメ単位11本
833	備前	筒形鉢	12.0	10.7	11.4	2mm以下砂粒-2.5YR4/4～7.5YR5/2・5YR5/2-良好				16世紀末～17世紀前葉	外面火襷
834	備前	サヤ形鉢	12.0	7.7	12.6	2mm以下砂粒-2.5YR4/2～5/6・2.5YR5/4-良好			底面重焼痕、体部下角面取り	19世紀	外面刻印
835	備前	サヤ形鉢	10.2	6.2	10.5	2mm以下砂粒-10R3/2～5/4・10R5/4-良好			体部下角面取り	18世紀	
836	備前	サヤ形鉢	10.7	4.7	11.1	2mm以下砂粒多-2.5YR5/6～5/4・2.5YR5/6-良好			口縁下重焼痕	19世紀	体部外面墨書「カ」
837	備前	擂鉢	(33.6)			1mm以下砂粒-10R4/2～2.5YR3/3・2.5YR4/4-良好			口縁下重焼痕	16世紀後葉(天正頃)	スリメ放射＋斜め、１ｂ期
838	備前	擂鉢	(30.0)			2mm砂・黒色粒-2.5YR4/1～3/2・7.5YR5/1-良好			口縁下重焼痕	17世紀中葉	スリメ単位13本、２ａ期新
839	備前	擂鉢	29.4	11.9	12.4	2mm以下砂粒-2.5YR4/3～3/1・2.5YR5/6-良好				17世紀中葉	スリメ単位９本、２ｂ期
840	備前	擂鉢	29.4	11.6	(12.0)	2mm砂粒-2.5YR4/1～3/1・2.5YR4/1ｶ10YR5/3-良好				17世紀後半	ベタ底、スリメ単位11本、２ｂ期

内堀上部埋土出土（第83～100図）つづき

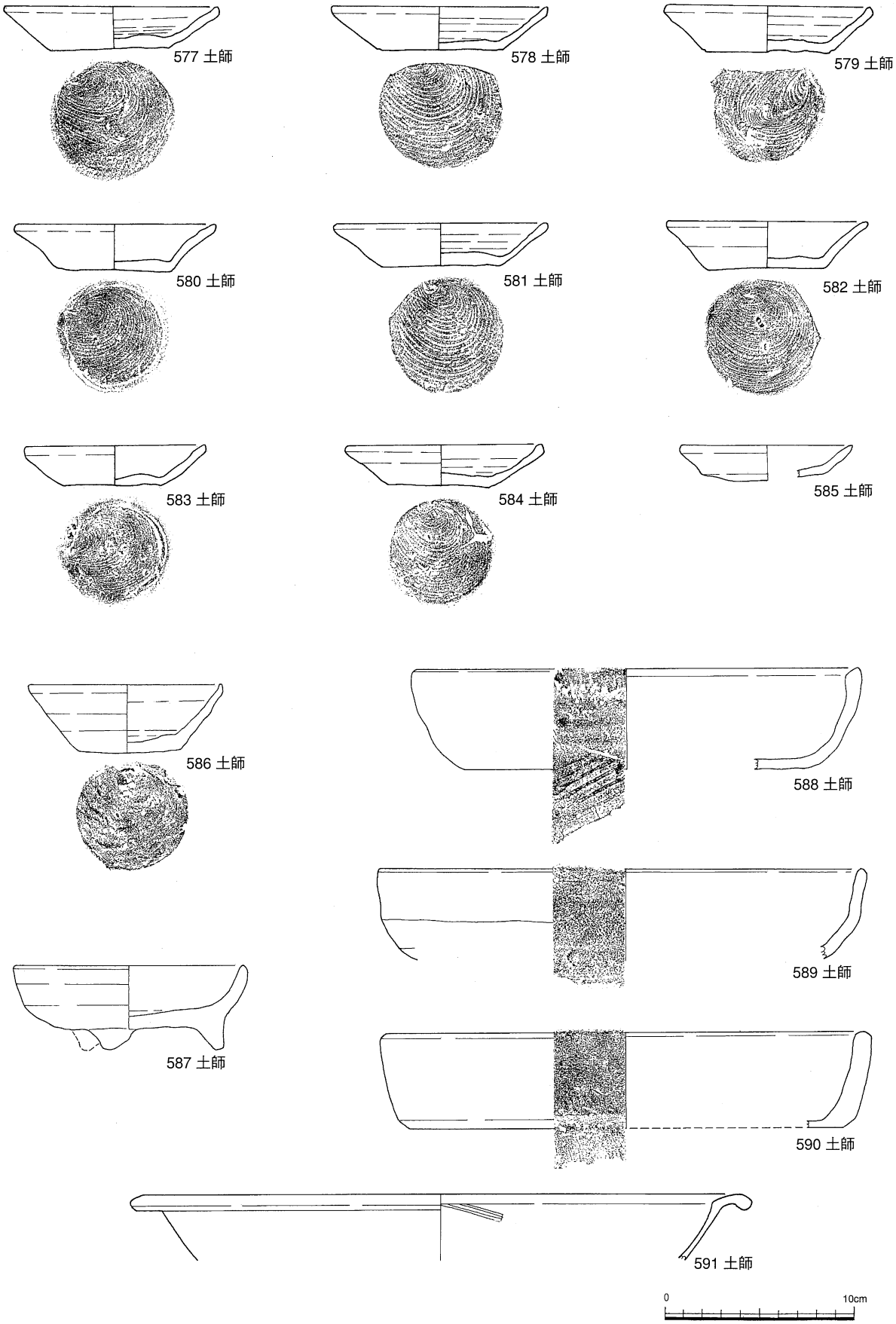
番号	種類	器種・部位	法量（cm） 口径長さ	器高高さ	底径幅	胎土（素材）と焼成 種類・状況・含有物-器面色・断面色-焼成	釉(・漆・装飾) 釉種-色-部位	文様 施文材-意匠	技法など	製作時期	備考
841	備前	擂鉢			-12.9	2mm以下砂粒-10R4/2・2.5YR4/2-良好				17世紀中葉	スリメ単位９本、２ａ期
842	備前	擂鉢	-29			1mm以下砂粒-2.5YR4/3～4/1・2.5YR5/4-良好			口縁下重焼痕	17世紀後半	スリメ単位９本、２ｂ期
843	備前	擂鉢	-24.4			1mm以下砂粒-7.5YR4/1～5/3・7.5YR4/1-良好				17世紀後半	スリメ単位９本、２ｂ期
844	備前	擂鉢				0.5mm以下砂粒-2.5YR5/3・2.5YR5/4-良好	塗土10R5/4～3/2-口～内面		口縁下重焼痕	17世紀末～18世紀前葉	スリメ単位８本、３期
845	備前	擂鉢	-31.8	12.5	-14.4	1mm以下砂粒-2.5YR5/4～10YR5/2・2.5YR6/6-良好			口縁下重焼痕、外面ヘラ削り	17世紀末～18世紀前葉	ベタ底、スリメ単位８本、３期
846	備前	擂鉢			-16.5	1mm以下砂粒-2.5YR4/2～4/4・2.5YR5/2-良好				17世紀末～18世紀前葉	３期
847	備前	擂鉢	-32.5			1mm以下砂粒-10R4/1・N6/-良好			口縁下重焼痕	17世紀後半	スリメ単位12本、２ｂ期
848	備前	擂鉢				2mm以下砂粒-5YR5/4・5YR6/3-良好	塗土5YR4/2～3/2-口～内面			17世紀末～18世紀前半	４ａ期
849	備前	擂鉢				1mm以下砂粒-10R5/3・2.5YR5/4-良好	塗土10R4/2～3/2-内面		外面ヘラ削り	17世紀末～18世紀前半	４ａ期、外面火襷
850	備前	擂鉢	-29.5			3mm以下砂粒-10R5/3・2.5YR5/4-良好	塗土10R5/4～3/2-口～内面		外面ヘラ削り、口縁下重焼痕	17世紀末～18世紀前葉	３期、外面火襷、口縁刻印「八上」
851	備前	無頸壺	-27			5mm以下砂粒-10R3/1・10R4/1-良好				16世紀末～17世紀初	肩部に黄ゴマ
852	備前	人形徳利	2.6	19	7.5	0.5mm以下砂粒僅-10R3/2～4/4・N6/-良好		型打貼付-布袋		19世紀	外面火襷、底部ニ角枠「定」印、ﾎﾞﾛ完形
853	備前	人形徳利				0.5mm以下砂粒僅-10YR4/2～4/1・2.5YR4/2-良好		型打貼付-布袋		18世紀末～19世紀	
854	備前	徳利	3.3	22.9	11.7	0.5mm以下砂粒-5YR4/3～10R3/3・N6/-良好		糸目		18世紀後半～19世紀	
855	備前	瓢形徳利	1.3	16.2	6.3	0.5mm以下砂僅-2.5YR3/2～3/1・10R4/2-良好				19世紀	外面灰被り黄ゴマ、ほぼ完形、底刻印
856	備前	小形角徳利			3.9	微粒-10R4/2～4/3・N5/-良好			口縁・体部(二側面分)各型造	19世紀	
857	備前	徳利			-7.6	0.5mm砂僅-2.5YR3/4～2.5Y6/3・10YR6/2-良好				18世紀末～19世紀	底刻印「日」、人形徳利底部？
858	備前	徳利			8.4	2mm砂僅-2.5Y8/3・2.5Y8/3-不良(なま焼)				17～18世紀	
859	備前	朱泥甕			9.4	0.5mm砂僅-7.5YR7/4～5YR6/6・7.5YR7/4-ﾔﾔ不良	塗土2.5YR5/6-口縁～外面			19世紀	内面火襷
860	備前	壺(種壺形)			9.4	1mm砂-2.5YR5/3～4/1・2.5YR6/4-良好				16世紀	底面にクシ目
861	備前	小形甕	-11.7	11.2	-8.1	0.5mm以下砂粒-2.5YR4/4・2.5YR5/6-良好	塗土-5YR4/4-口縁～外面			19世紀	
862	備前	朱泥小形甕	-12.4			0.5mm以下砂粒-2.5YR6/4・2.5YR6/4-良好	塗土-10R4/4-口縁～外面			19世紀	
863	備前	小形甕	-11.4			0.5mm以下砂僅-5YR3/3～10R4/1・5YR5/1-良好	塗土-7.5YR4/2-内外面			19世紀	
864	備前	小形甕	9.5	8	5.5	0.5mm以下砂僅-7.5YR3/3・10R4/1-良好	塗土-10R3/2-口縁～外面			19世紀	
865	備前	朱泥小形甕	8.2	7.9	4.9	0.5mm以下砂僅-2.5YR5/4・2.5YR5/4-良好	塗土-10R5/4-口縁～外面			19世紀	完形
866	備前	小形甕	8.2	7.7	4.7	0.5mm以下砂僅-2.5YR6/6・2.5YR5/6-良好	塗土-10R4/6-口縁～外面			19世紀	完形
867	備前	蓋	18.8	2.4		0.5mm以下砂-10R4/4・2.5YR5/4-良好			回転糸切り	19世紀	裏面に火襷
868	備前	蓋	7.8	1.2	7.5	0.5mm以下砂-2.5YR5/4・2.5YR6/6-良好			回転糸切り	19世紀	
869	備前	獅子置物・前体部				微粒-外10R3/2内10YR3/2・10R3/1-良好			外型造りの部品組立て	18～19世紀	871と同一個体？
870	備前	獅子置物・尾部				微粒-2.5YR3/!・5YR4/1-良好			外型造りの部品組立て	18～19世紀	
871	備前	獅子置物・足部				微粒-外10R3/2内10YR3/2・10R3/1-良好			外型造りの部品組立て	18～19世紀	869と同一個体？
872	備前	花立て	5.5	28		1mm以下砂-5YR5/4・2.5YR5/6-良好			ロクロ成形	19世紀	
873	備前	サヤ転用甕			-24.3	3mm以下砂多-2.5YR3/3～3/4・10R5/6～N4/-良好			底部重焼痕	18～19世紀	内面に白黄色皮膜付着
874	備前	色備前碗蓋	2.9	2.5	8.9	微粒-2.5YR4/4・7.5YR4/3-良好		赤・緑・白・黒・金	裏面に同形品の重焼痕	19世紀～20世紀初	745とセット？
875	備前	色備前碗			2.8	微粒-5YR4/3・5YR5/3-良好		青緑・白・茶・金	見込に同形品の重焼痕	19世紀～20世紀初	高台内に角枠内「備前陶」
876	備前	筒形碗蓋	3.8	2.5	10	微粒-2.5YR4/2～5/3・2.5YR6/6-良好				19世紀～20世紀初	
877	備前	朱泥筒形碗	-9.6	7.4	5.6	微粒-5YR5/3-良好	塗土-10R3/4-全面			19世紀～20世紀初	高台内「備前伊部陶」「黄薇堂」印
878	備前	湯飲碗	-6.9	8.2	4	微粒-2.5YR4/6・2.5YR5/4-良好	器面全体塗土的	ソギ線-竹		19世紀～20世紀初	高台内「伊部大饗」印
879	備前	朱泥土瓶蓋	8.8	2.7	9	微粒-2.5YR5/6・2.5YR5/4-良好	塗土-2.5YR5/6-全面	押印-ハート形文		19世紀～20世紀初	
880	備前	朱泥土瓶	-9.6			微粒-2.5YR5/6・2.5YR5/4-良好	塗土-2.5YR5/6-全面	押印-ハート形文		19世紀～20世紀初	
881	備前	朱泥土瓶蓋	7.5	2.2	7.3	微粒-2.5YR5/6・2.5YR5/4-良好	塗土-2.5YR5/6-全面	押印-ハート形文		19世紀～20世紀初	完形
882	備前	朱泥土瓶	-8.1			微粒-2.5YR5/6・2.5YR5/6-良好	塗土-2.5YR5/6-全面	押印-ハート形文		19世紀～20世紀初	内外面とも煤～炭化物付着
883	備前	土瓶～急須				微粒-2.5YR4/3・N6/-良好	器面全体塗土的			19世紀～20世紀初	外下半部煤付着
884	丹波	擂鉢				3mm以下砂粒-2.5YR5/6～6/6・2.5YR5/6-良好			スリメ一本引き	16世紀末～17世紀初	スリメ摩耗
885	関西(堺・明石)	擂鉢・口縁	-29			3mm以下砂粒-2.5YR4/1～5/1・N4/-良好			口縁ｽﾘﾒナデ消	18世紀	堺産？
886	関西(堺・明石)	擂鉢・底部				2mm以下砂粒-2.5YR4/1～5/3・2.5YR5/4-良好	底～外下半に鉄漿塗		見込ｽﾘﾒ三角状、口縁ｽﾘﾒナデ消	18～19世紀	堺産？
887	関西(堺・明石)	擂鉢	-29.4	10.2	-14.4	5mm以下砂粒-2.5YR5/6～10R4/2・2.5YR5/6-良好			見込ｽﾘﾒ渦巻状、口縁ｽﾘﾒナデ消	19世紀	外面ヘラ削、底面に砂付着、明石産
888	関西(堺・明石)	擂鉢			-12.9	3mm以下砂粒-2.5YR5/6～10R4/2・10R5/6-良好			見込ｽﾘﾒ渦巻状、口縁ｽﾘﾒナデ消	19世紀	底面砂、底面・見込焼台輪痕、明石産
889	関西(堺・明石)	擂鉢	-31.5			5mm以下砂粒-10R5/4・10R5/4-良好			口縁ｽﾘﾒナデ消、外面ヘラ削り	19世紀	明石産？
890	関西(堺・明石)	擂鉢	-30.4			6mm以下砂粒-2.5YR5/3～4/2・5YR5/4-良好			口縁ｽﾘﾒナデ消	19世紀	明石産？

内堀上部埋土出土（第83～100図）つづき

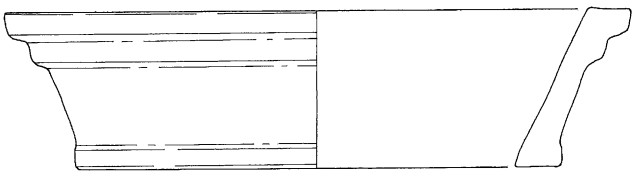
番号	種　類	器種・部位	法量（cm）			胎土（素材）と焼成 種類・状況・含有物-器面色・断面色-焼成	釉(・漆・装飾) 釉種-色-部位	文　様 施文材-意匠	技　法　な　ど	製　作　時　期	備　　考
			口径 長さ	器高 高さ	底径 幅						
891	関西(堺・明石)	擂鉢				3mm以下砂粒-5YR5/3～4/2・2.5YR5/6-良好			口縁ｽﾘﾒﾅﾃﾞ消、外面ヘラ削り	19世紀	明石産？
892	関西(堺・明石)	擂鉢				2mm以下砂粒-2.5YR5/4～4/2・2.5YR5/6-良好			口縁ｽﾘﾒﾅﾃﾞ消、外面ヘラ削り	19世紀	明石産？
893	関西(堺・明石)	擂鉢				1mm以下砂粒-7.5YR4/3～4/2・2.5YR5/6-良好			口縁ｽﾘﾒﾅﾃﾞ消、外面ヘラ削り	19世紀	明石産？
894	関西(堺・明石)	擂鉢	(19.8)			5mm以下砂粒-7.5YR5/4～10R4/3・2.5YR5/6-良好			口縁ｽﾘﾒﾅﾃﾞ消、外面ヘラ削り	19世紀	明石産？
895	関西(堺・明石)	擂鉢	(16.8)	6	(8.2)	2mm以下砂粒-10R4/6～3/1・10R4/6-良好			口縁ｽﾘﾒﾅﾃﾞ消、底面に砂付着	19世紀	明石産？
896	関西(堺・明石)	擂鉢	(17.1)			2mm以下砂粒-10R4/6～3/1・10R4/6-良好			口縁ｽﾘﾒﾅﾃﾞ消	19世紀	明石産？
897	関西(堺・明石)	植木鉢			(22.9)	2mm以下砂粒-10R5/3～5/4・10R5/4-良好		連続縦筋	底面に砂付着	19世紀	
898	関西(堺・明石)	鉢～植木鉢			(19.9)	1mm以下砂粒-10R5/5～5/6・10R5/4-良好			底面に砂付着	19世紀	
899	大谷焼？	徳利			8.3	0.5mm以下砂粒-2.5YR3/3・2.5YR4/2-良好	光沢鉄釉-10R2/2-底無		底面に回転削り・砂付着	19世紀後葉	
900	鉄釉陶器	徳利	3.8			0.5mm以下砂粒僅-2.5YR5/6・2.5YR5/6-良好	鉄釉-2.5YR3/2-内無			19世紀	
901	大谷焼？	徳利			(2.8)	1.5mm以下砂粒-2.5YR4/2・2.5YR4/2-良好	鉄釉-5YR3/2-内無	ヘラ刻み文字	底面に回転削り・砂付着	19世紀	
902	鉄釉陶	徳利	3.0			1mm以下砂粒-2.5YR6/6-良好	鉄釉-10YR3/2～4/1	白線文字		19世紀	
903	大谷焼？	徳利				0.5mm以下砂粒-10R4/2・2.5YR4/2-良好	光沢鉄釉-10R2/1-底無	白線字「小橋町」		19世紀後葉	
904	大谷焼？	油壺	1.9	11.7	5.3	0.5mm以下砂粒-2.5YR4/2・2.5YR4/2-良好	光沢鉄釉-10R2/1-底無		底面に回転削り・砂付着	19世紀	
905	大谷焼	甕	(21.0)			1mm以下砂粒-10R4/4-良好	光沢鉄釉-5YR3/2-底無			19世紀	
906	大谷焼	鉢(「碗」)	(30.0)			1mm以下砂粒-10R4/4-良好	光沢鉄釉-5YR3/2-底無			19世紀後葉	
907	大谷焼	鉢(「碗」)	(30.0)			1mm以下砂粒-10R4/4-良好	光沢鉄釉-5YR3/2-底無			19世紀後葉	９０６と同一個体
908	肥前系？	大甕	(30.6)			0.5mm以下砂粒-2.5YR4/2～4/4・10R3/2-良好	鉄釉-10R3/1-口縁～外面		口縁上釉剥ぎ、内面格子ﾀﾀｷ+ﾅﾃﾞ	17世紀後半？	
909	漆器	碗	13.3	5.7	6.6		内:朱漆、外:黒漆	黒地に朱漆施文		19世紀？	
910	漆器	碗			6.2		内外とも黒漆				
911	木製品	しゃもじ	20.2								白木
912	銅製品	煙管雁首	5.5			真鍮？				18世紀末～19世紀	
913	銅製品	煙管吸口	8.8			真鍮？				18世紀末～19世紀？	
914	銅製品	薬さじ	13.3			真鍮？				19世紀？	
915	銅製品	薬さじ	12.2			真鍮？				19世紀？	
916	鉄製品	釘	9.7							19世紀？	
917	鉄製品	釘	11.6							19世紀？	
918	鉄製品	釘	5.4							19世紀？	
919	鉄製品	釘	6.3							19世紀？	
920	鉄製品	釘	3.5							19世紀？	
921	鉄製品	包丁	13.3							19世紀？	
922	石製品	砥石	[9.9]		5.3	頁岩				19世紀？	定形的製品
923	石製品	硯石	12.7		7.6	粘板岩				19世紀？	使用による摩耗で中央が窪む
924	銅製品	寛永通寶「文銭」	2.6							1668～1683年鋳造	新寛永、2.8g
925	銅製品	元豊通寶	2.4							16世紀後葉～17世紀初	北宋1078年初鋳銭の模鋳銭?、1.9g
926	瓦	軒丸瓦	13.4			2mm以下砂粒-10YR5/1～6/2・-10YR4/1-良好		左三巴珠文20		16世紀末	岡山城２式
927	瓦	軒丸瓦	12.8			0.5mm以下砂粒僅-N4/～5Y6/1・5Y6/1-良好		左三巴珠文12		17世紀末～18世紀前葉	岡山城６式
928	瓦	軒丸瓦	12.8			1mm以下砂粒僅-N3/～N4/・5Y7/1-良好		左三巴珠文12	瓦当面にキラコ使用	18世紀後葉～19世紀	岡山城７式
929	瓦	軒丸瓦	12.9			0.5mm以下砂粒僅-N3/～N4/・5Y7/1-良好		左三巴珠文12	瓦当キラコ、内ｺﾋﾞｷB+細板ﾀﾀｷ	18世紀後葉～19世紀	岡山城７式
930	瓦	軒丸瓦	12.4			1mm以下砂粒-2.5Y6/2～6/1・2.5Y7/1-良好		左三巴珠文12		18世紀中葉	岡山城６式
931	瓦	金箔おし飾瓦				2mm以下砂-N4/～5Y5/1・外5Y8/1内2.5Y5/1-良好		五弁ノ花文+唐草?	黒漆塗布後に金箔おし	16世紀末	金箔花文側にごく僅に遺存、岡山城２式

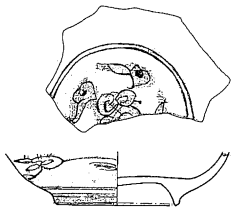


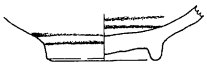
第69図　内堀石垣裏込中の遺物（瓦類：１／４　他：１／３）

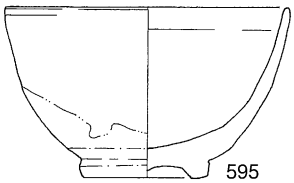


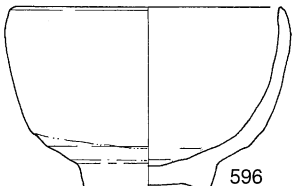
第70図　内堀下部埋土の遺物Ⅰ（1／3）

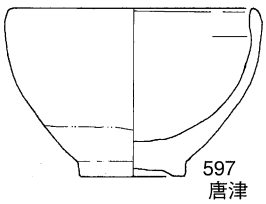

592 瓦質

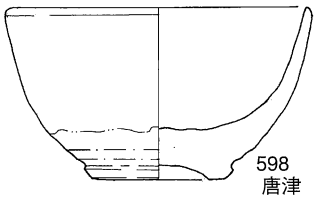

593 青花

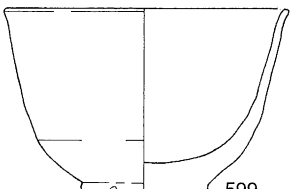

594 青花

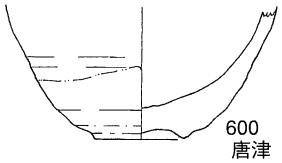

595
唐津

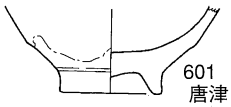

596
唐津

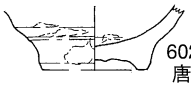

597
唐津

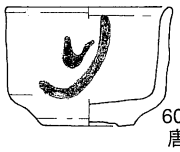

598
唐津

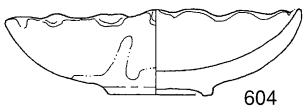

599
唐津

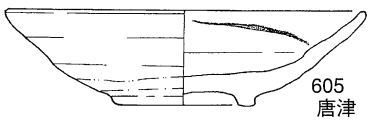

600
唐津

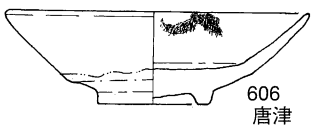

601
唐津

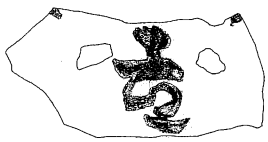

602
唐津

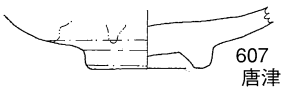

603
唐津

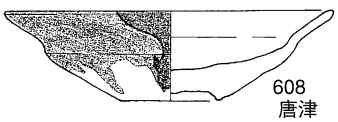

604
唐津

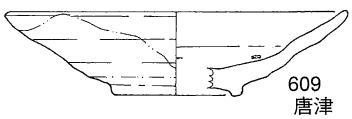

605
唐津

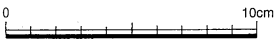

606
唐津



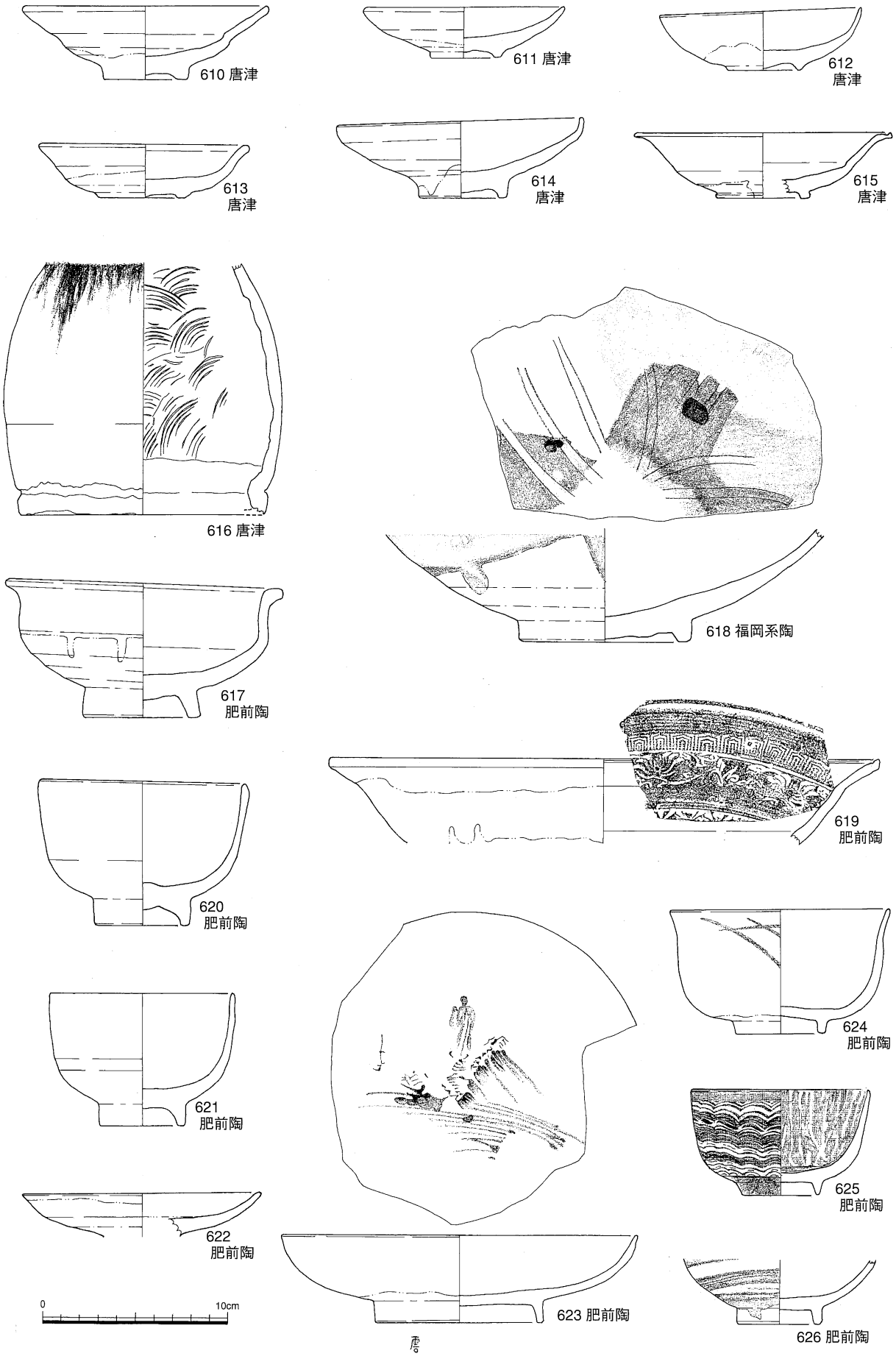

607
唐津


608
唐津

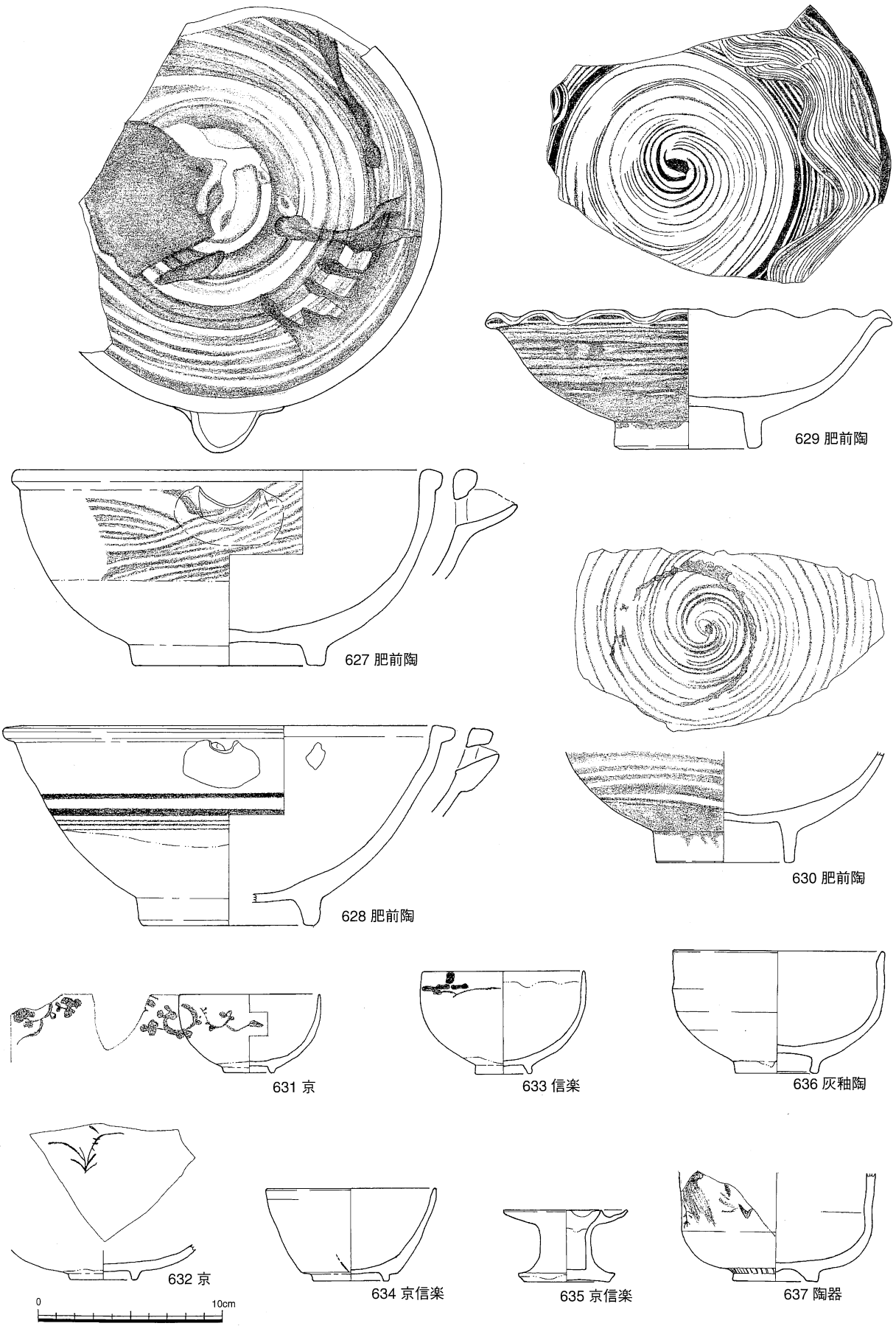

609
唐津



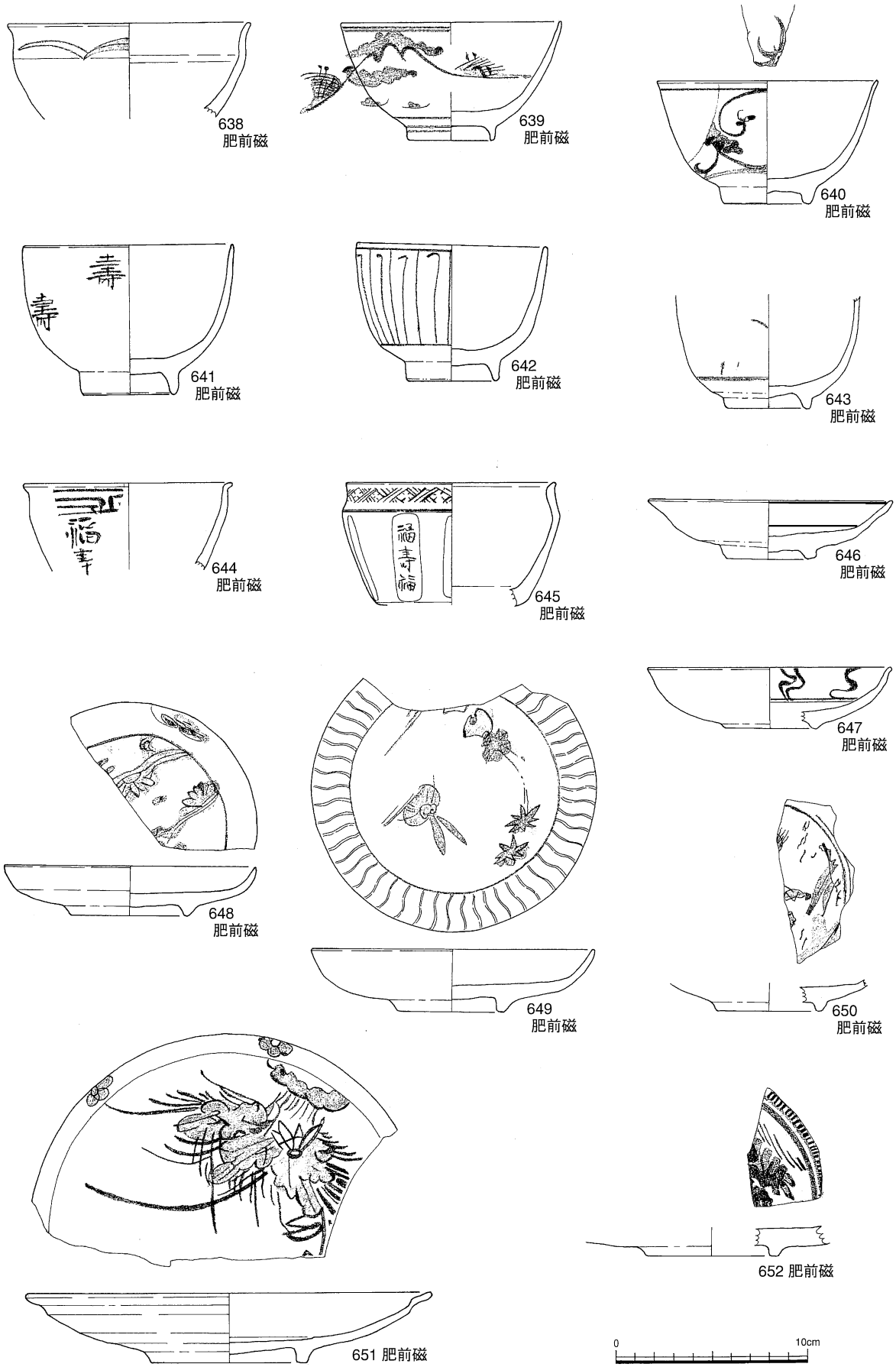
第71図　内堀下部埋土の遺物Ⅱ（１／３）



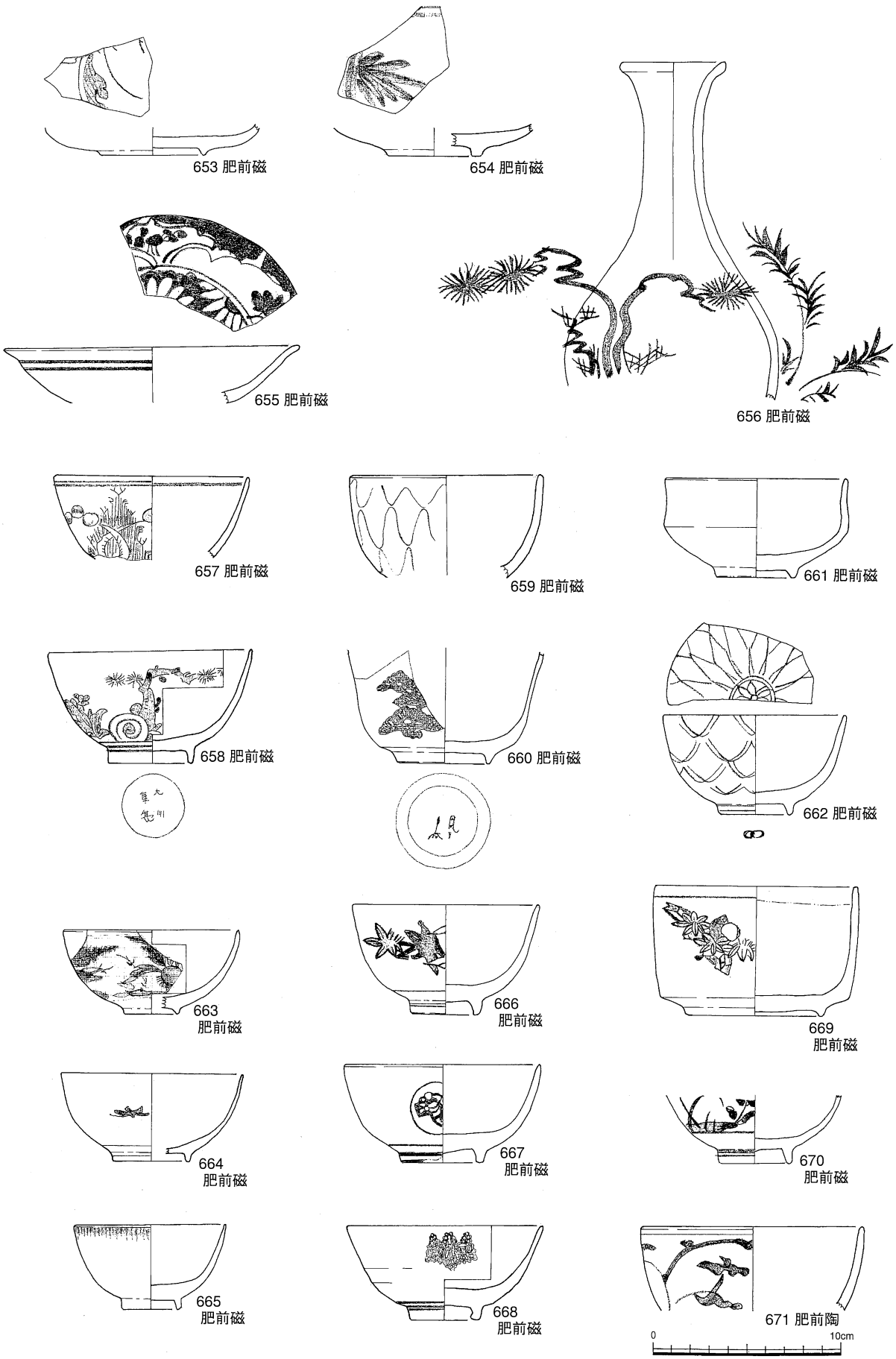
第72図　内堀下部埋土の遺物Ⅲ（1／3）



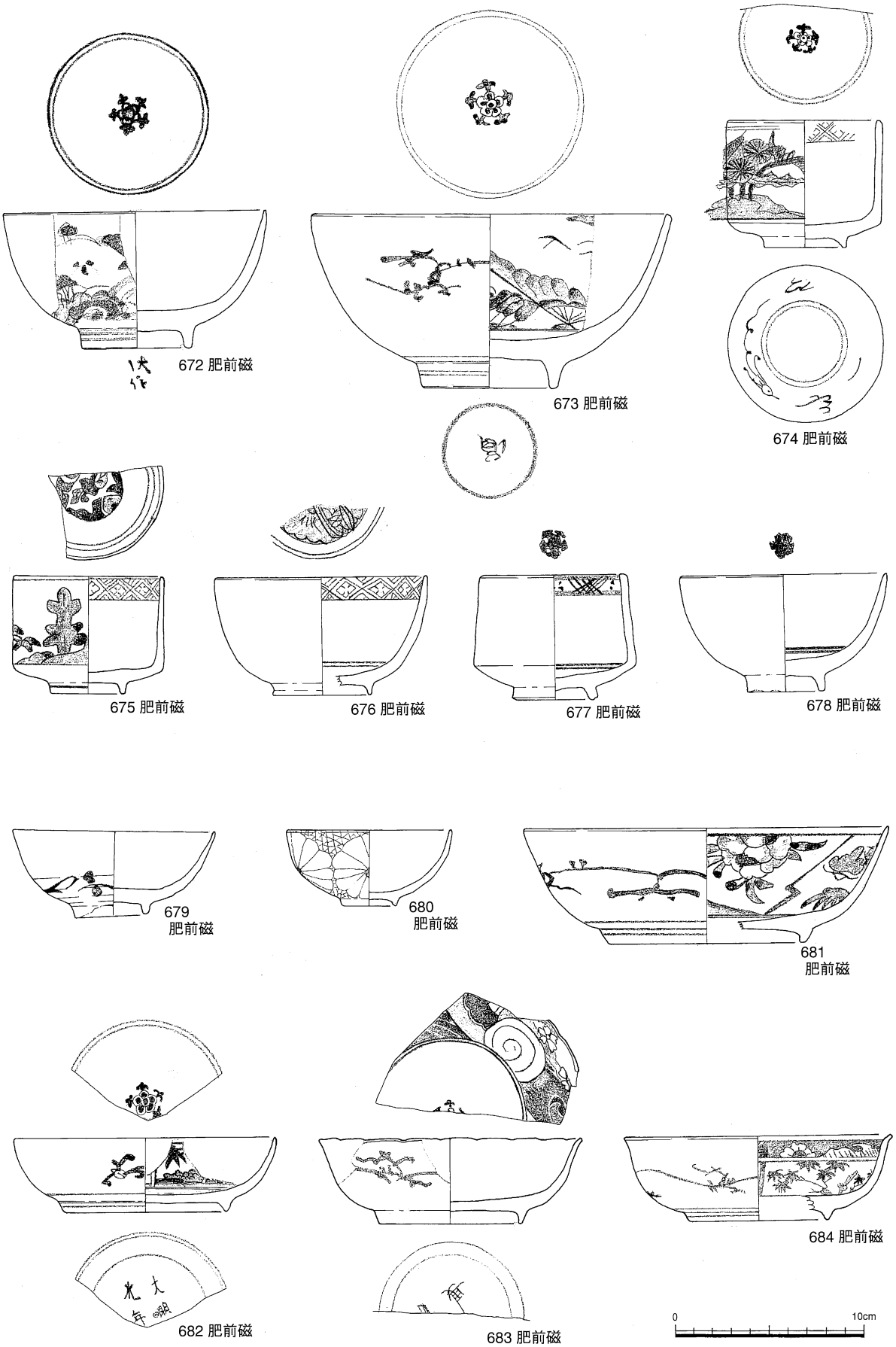
第73図　内堀下部埋土の遺物Ⅳ（１／３）



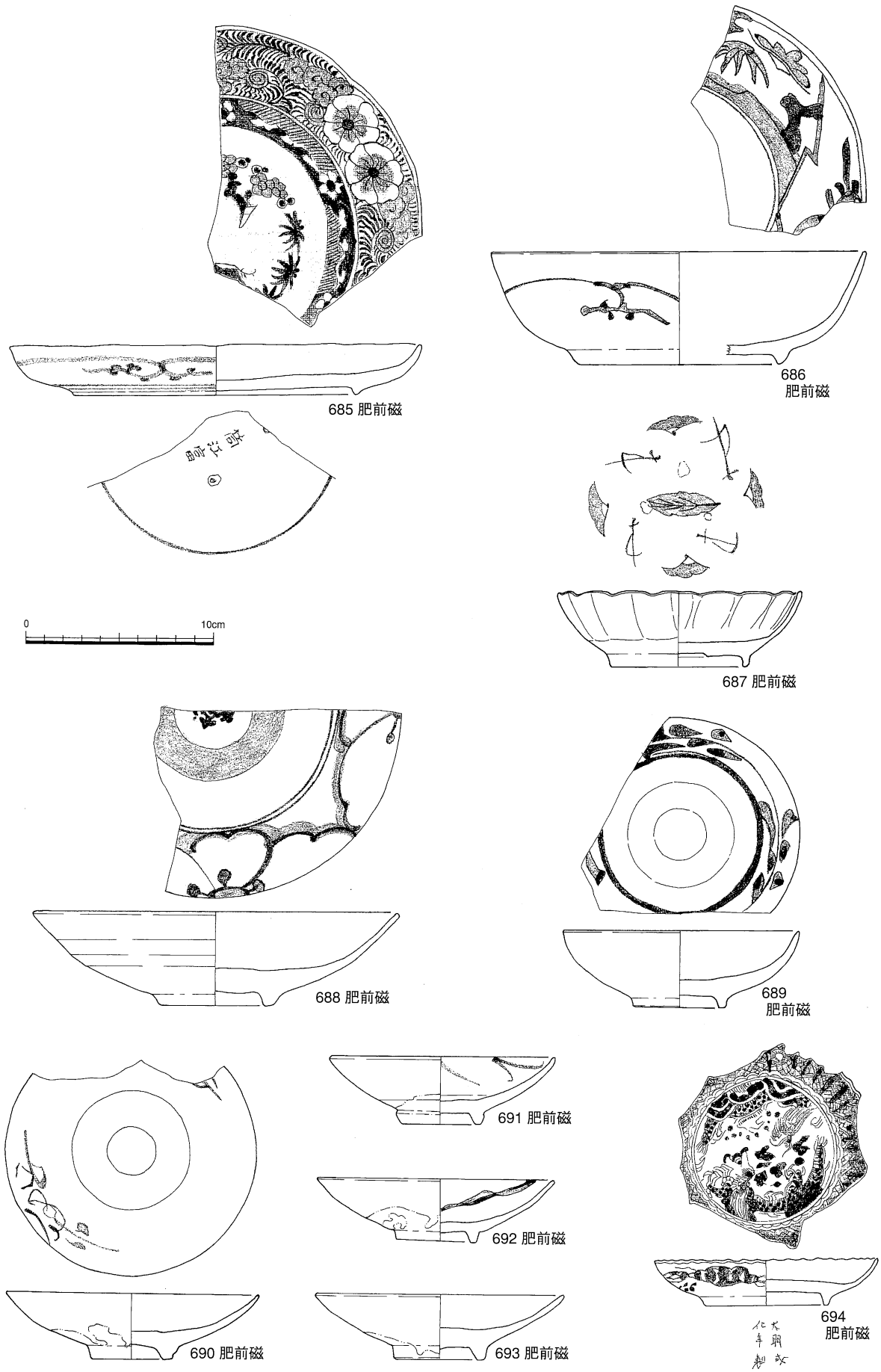
第74図　内堀下部埋土の遺物Ⅴ（1／3）



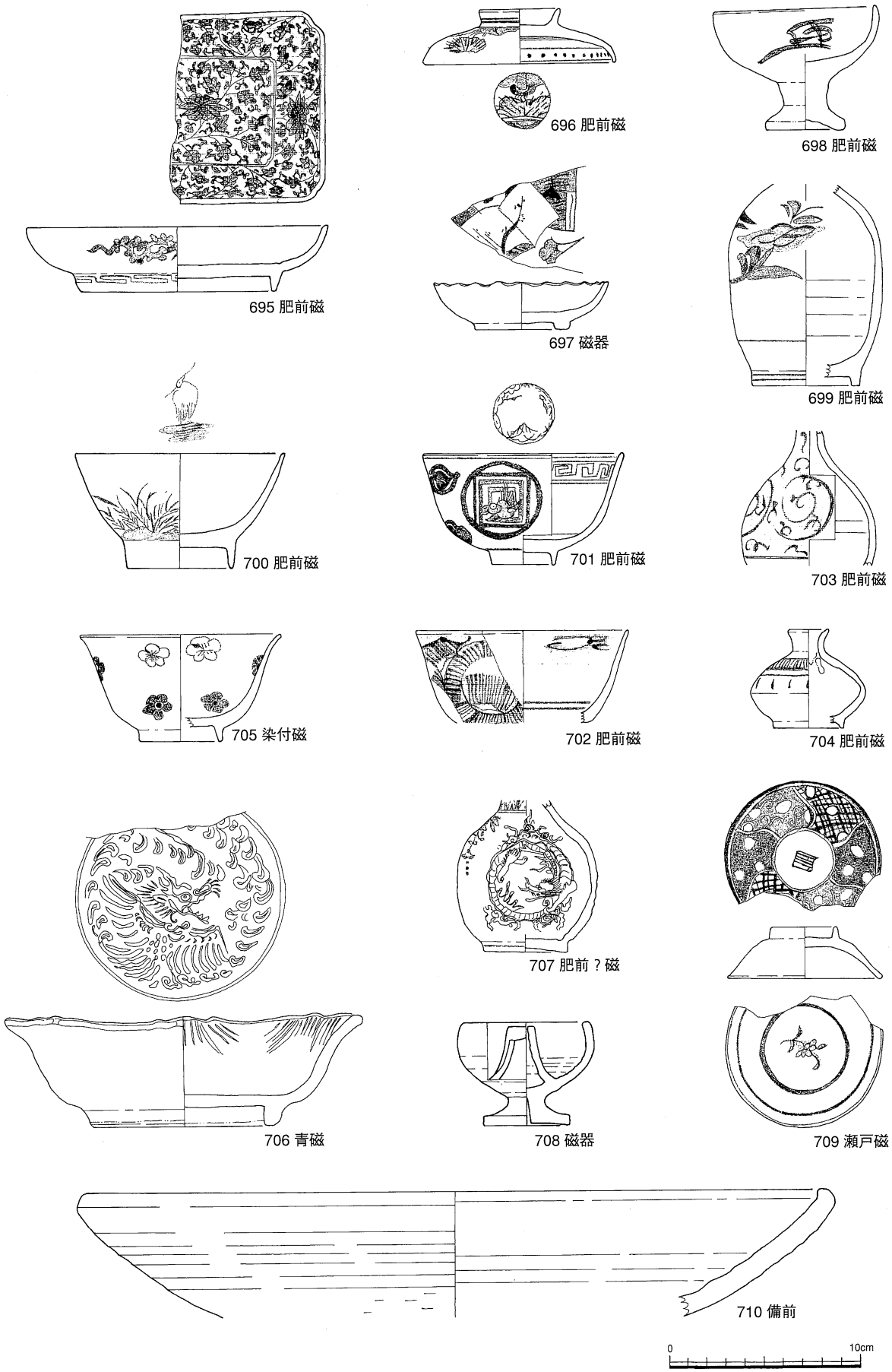
第75図　内堀下部埋土の遺物Ⅵ（１／３）



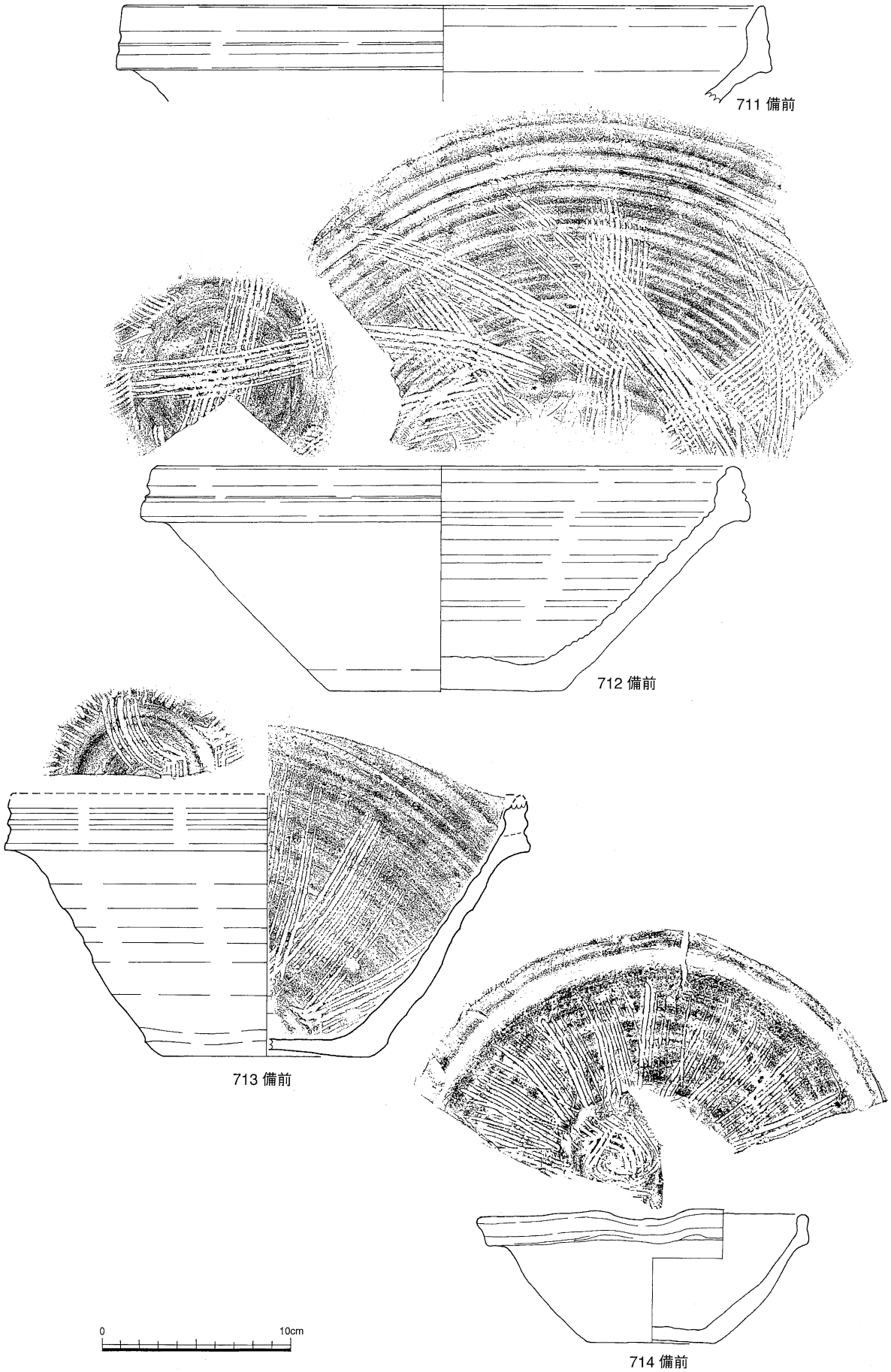
第76図　内堀下部埋土の遺物Ⅶ（１／３）



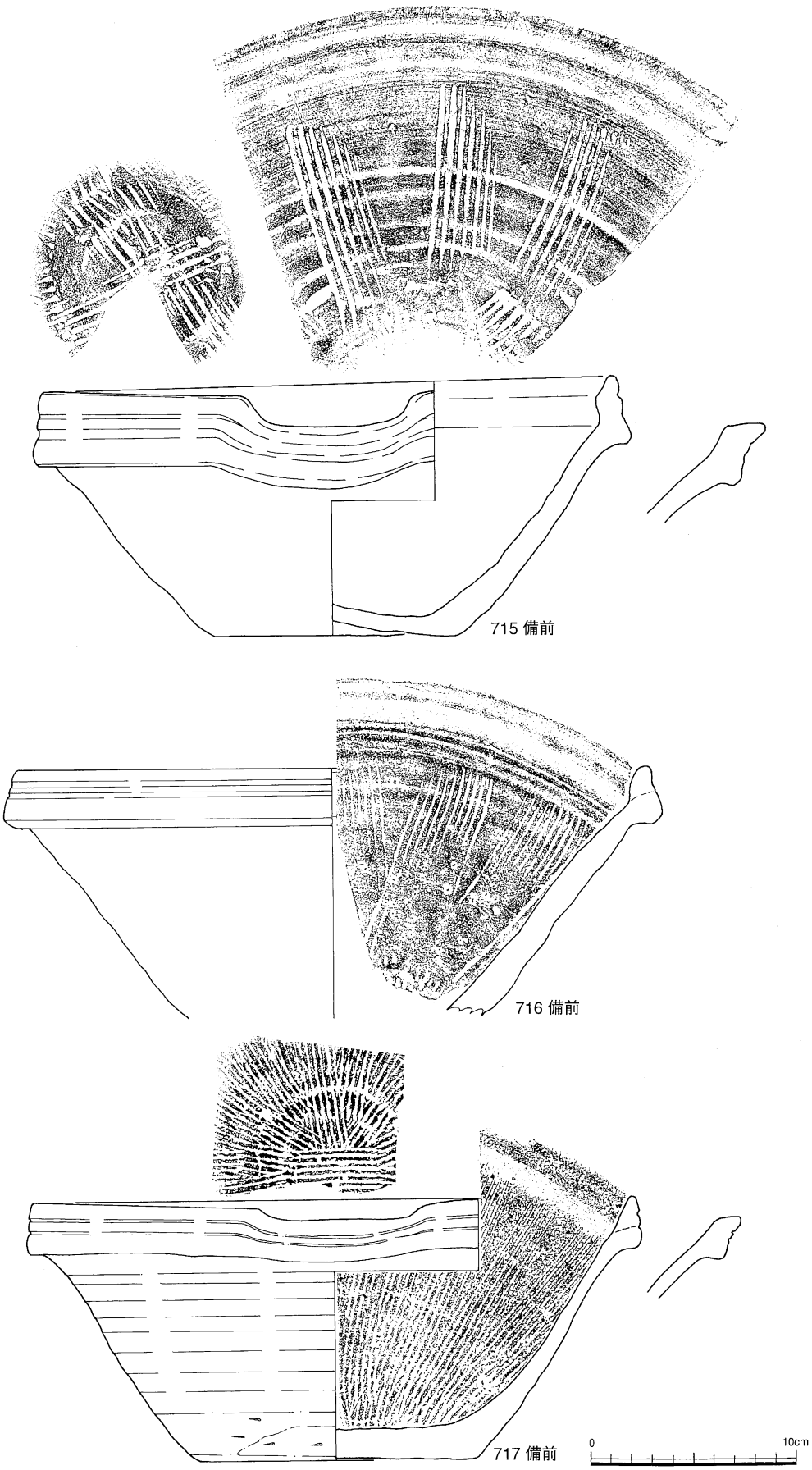
第77図　内堀下部埋土の遺物Ⅷ（１／３）



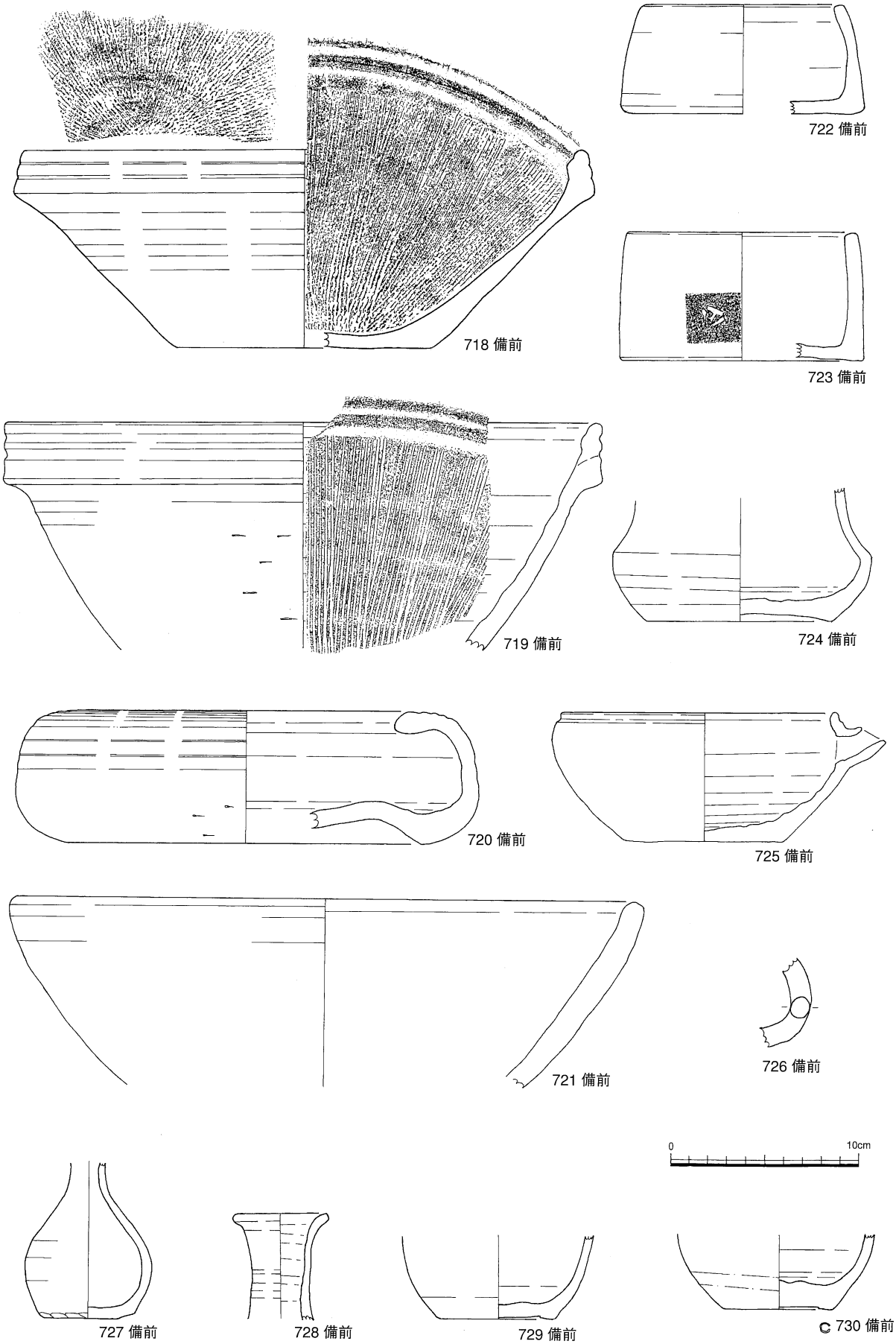
第78図　内堀下部埋土の遺物Ⅸ（1／3）



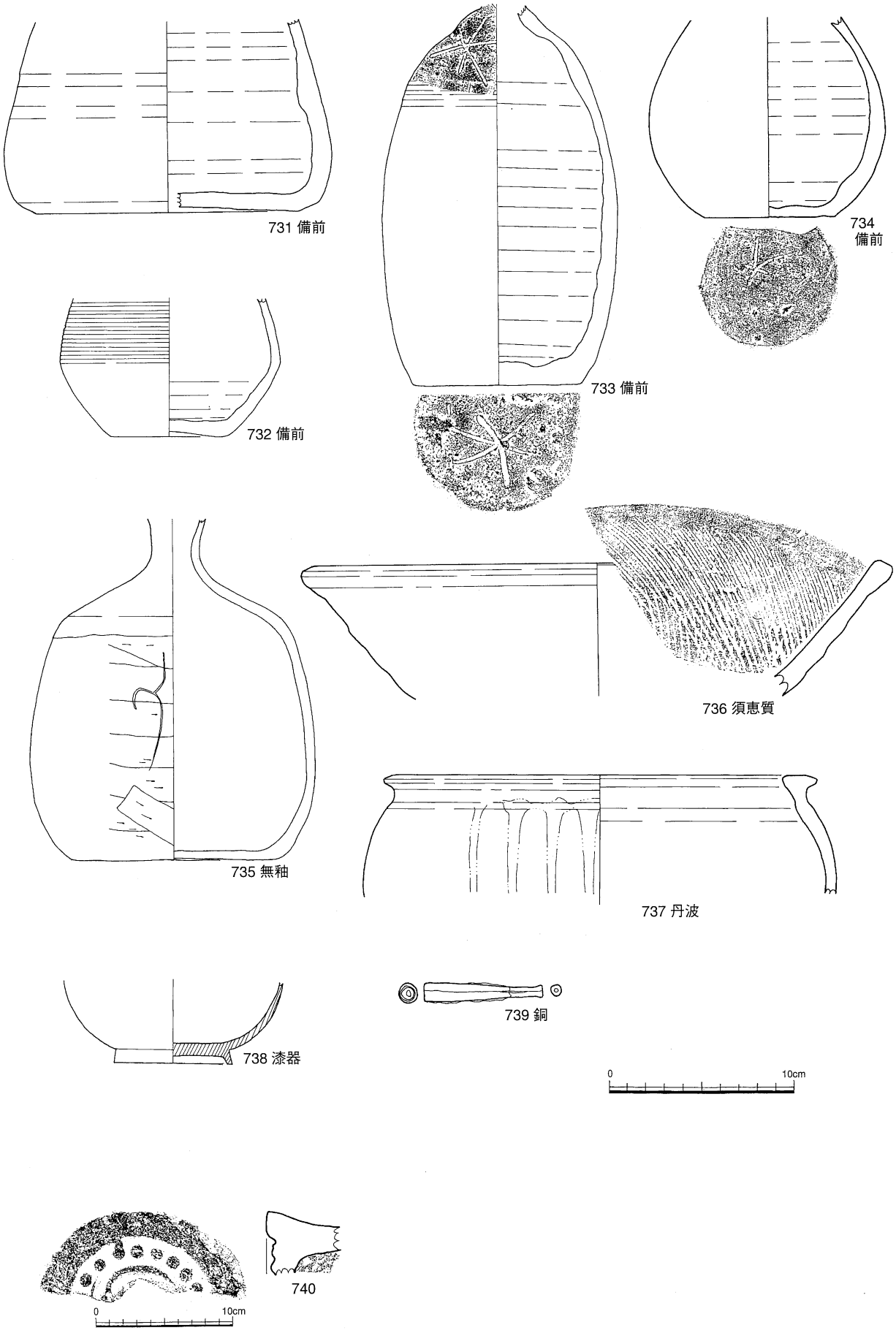
第79図　内堀下部埋土の遺物Ｘ（１／３）



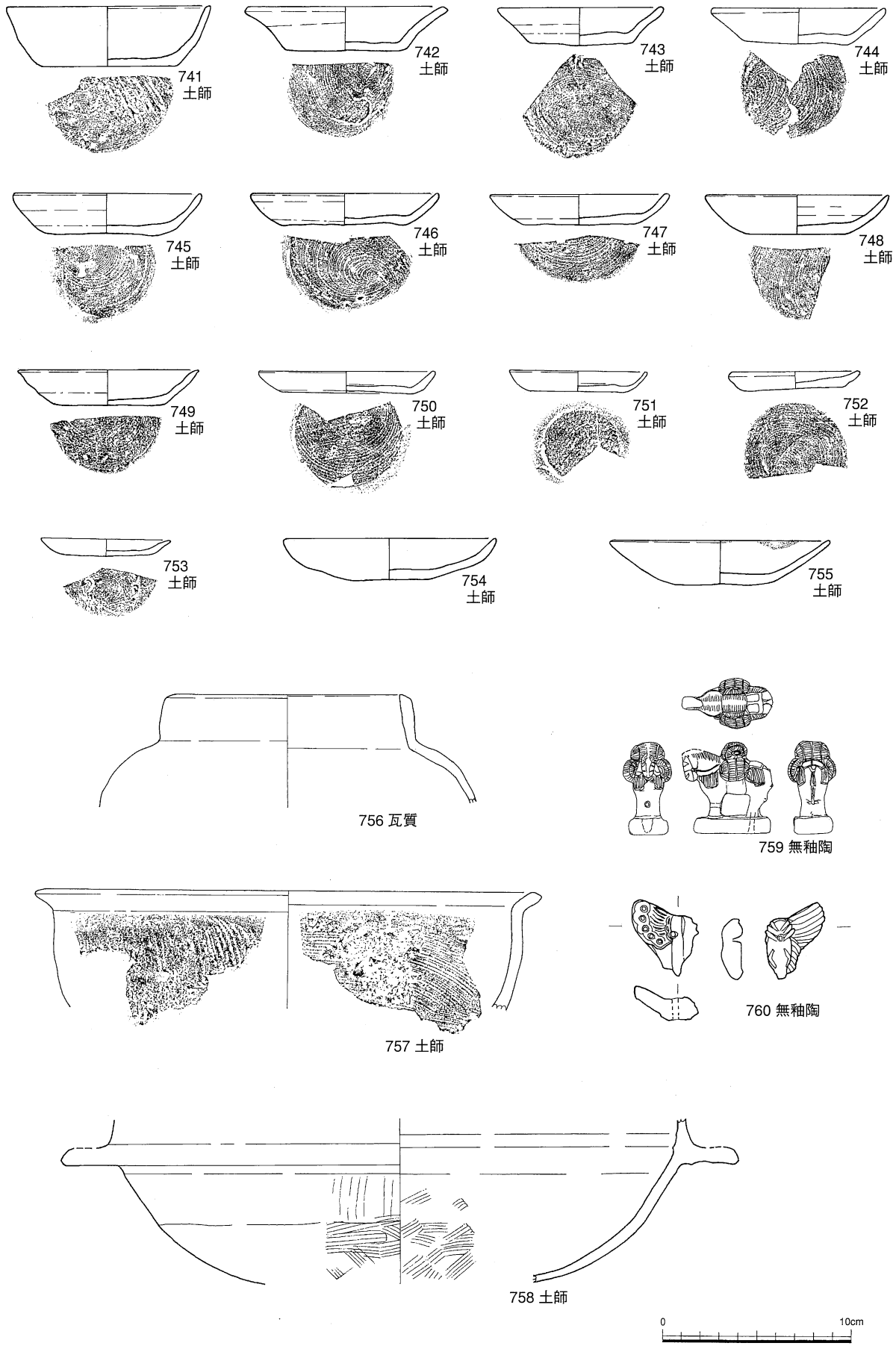
第80図　内堀下部埋土の遺物Ⅺ（1／3）



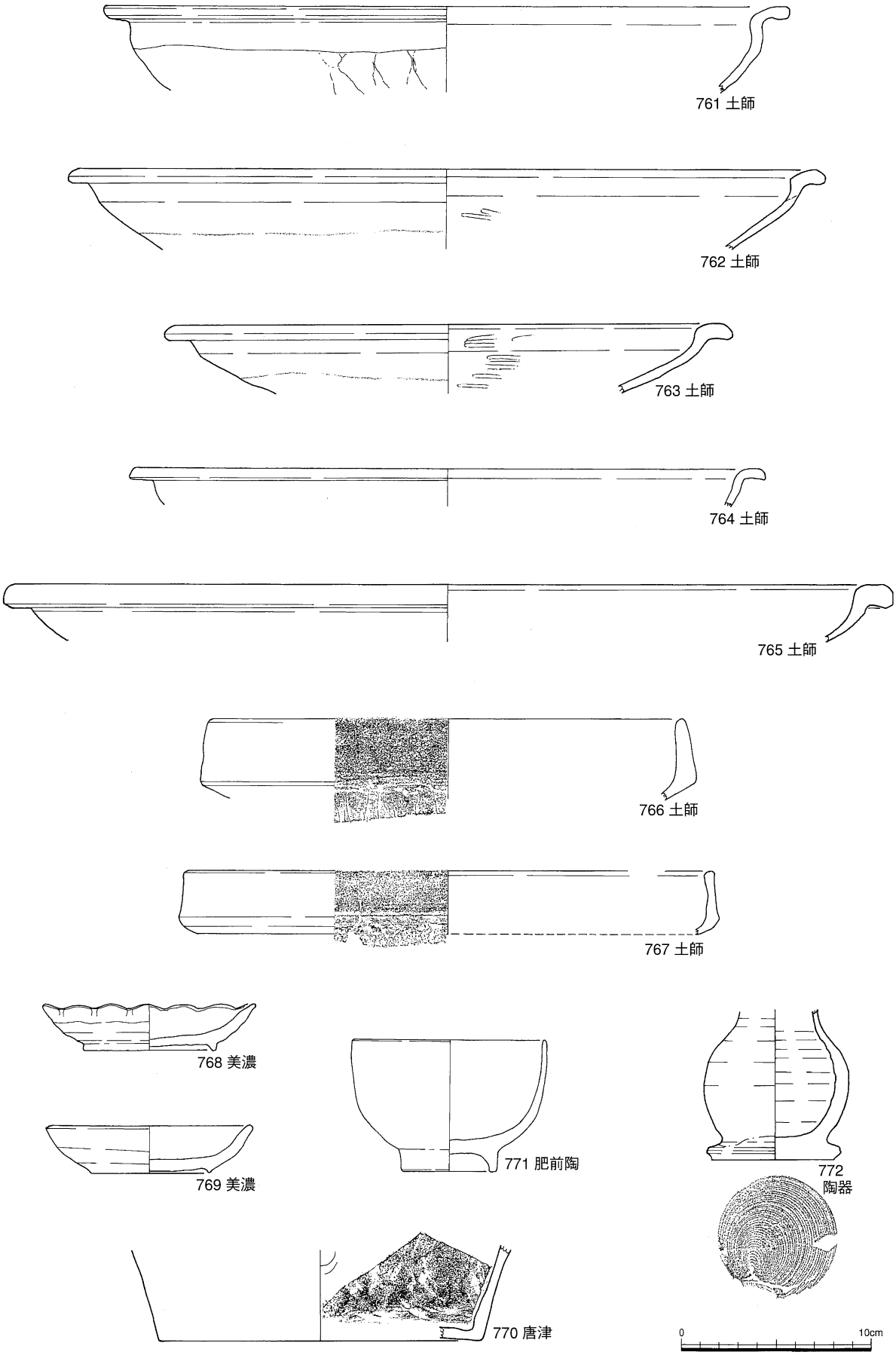
第81図　内堀下部埋土の遺物Ⅻ（１／３）



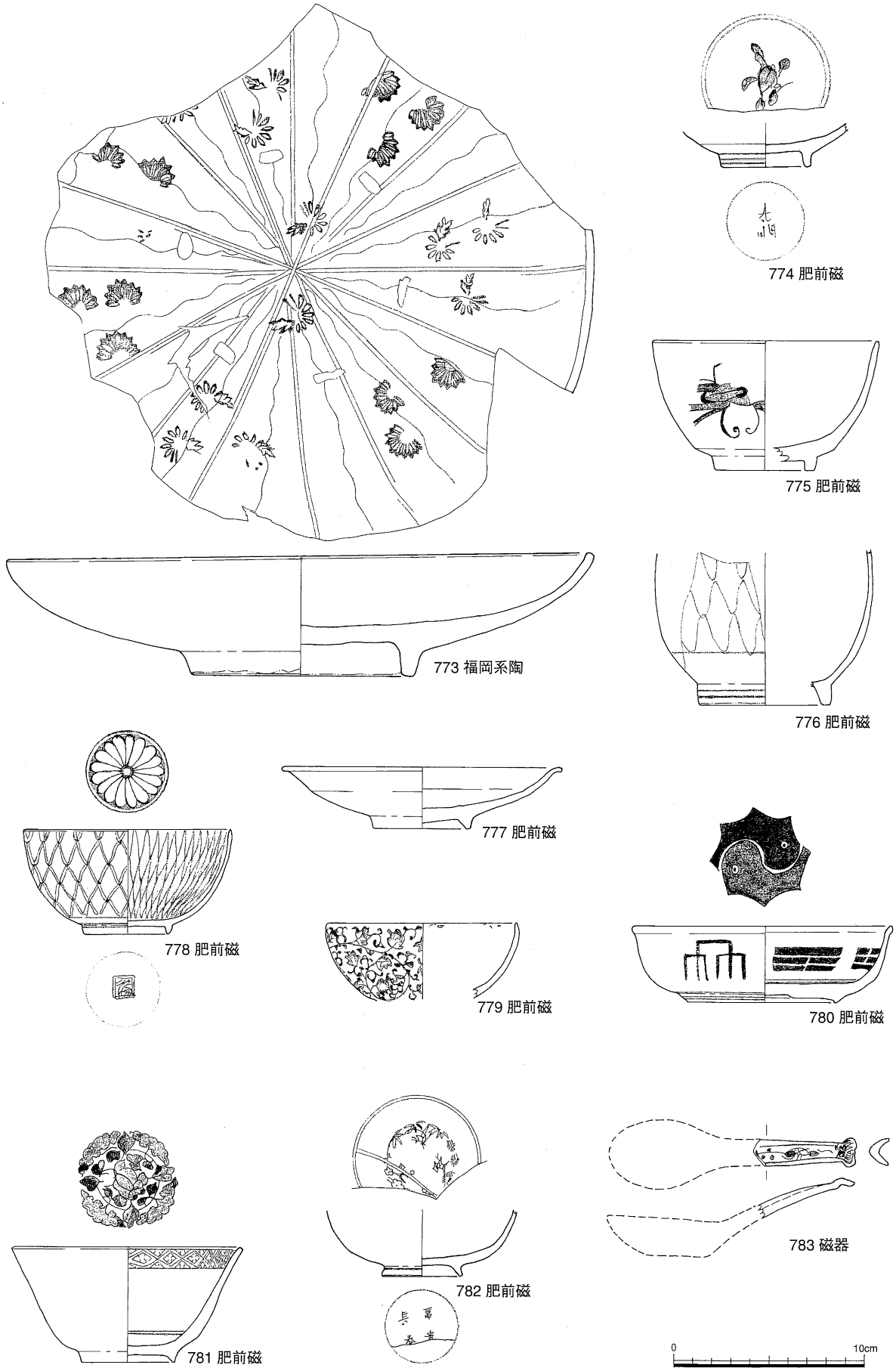
第82図　内堀下部埋土の遺物Ⅻ（1／3）



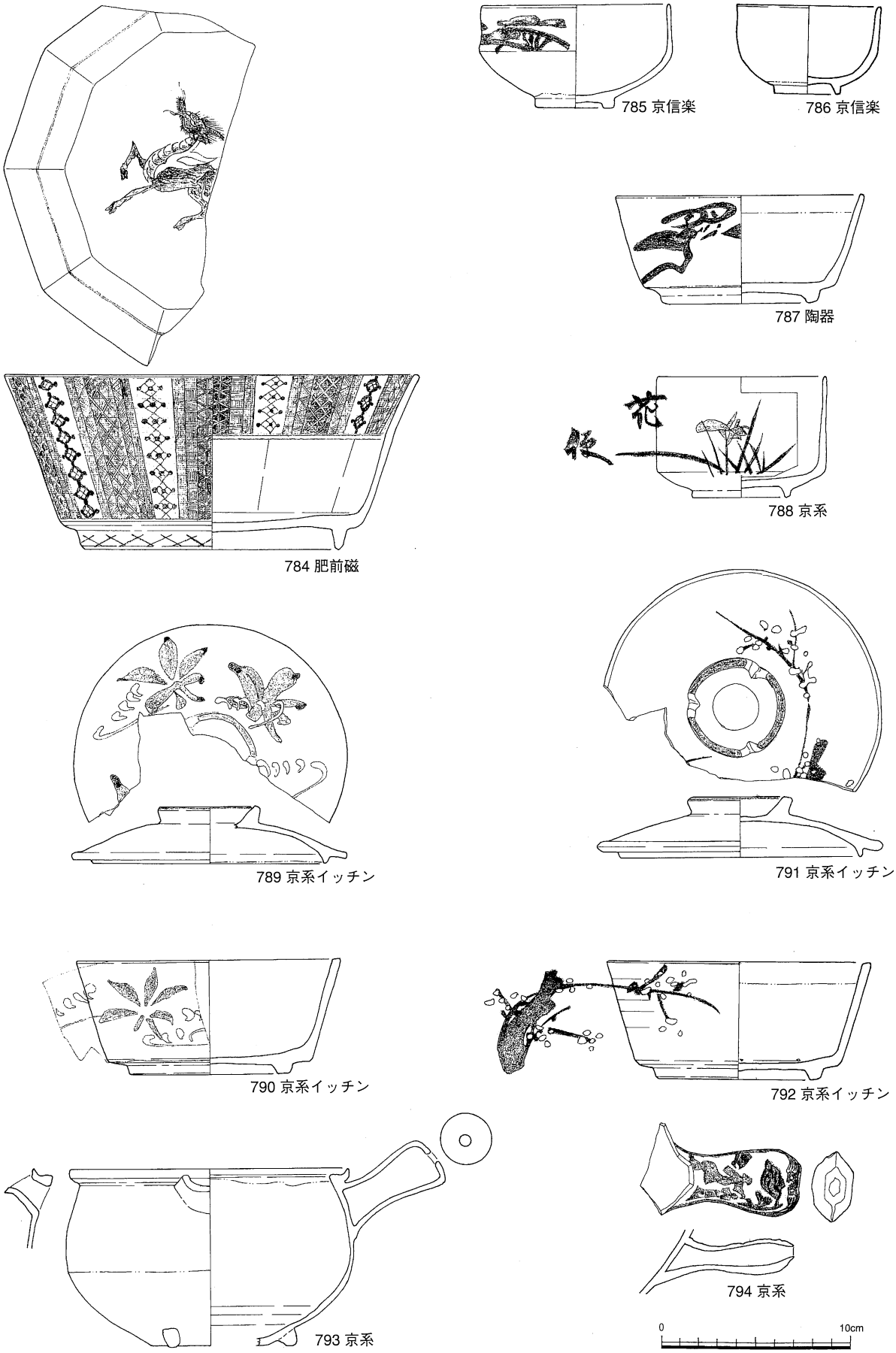
第83図　内堀上部埋土の遺物Ⅰ（１／３）



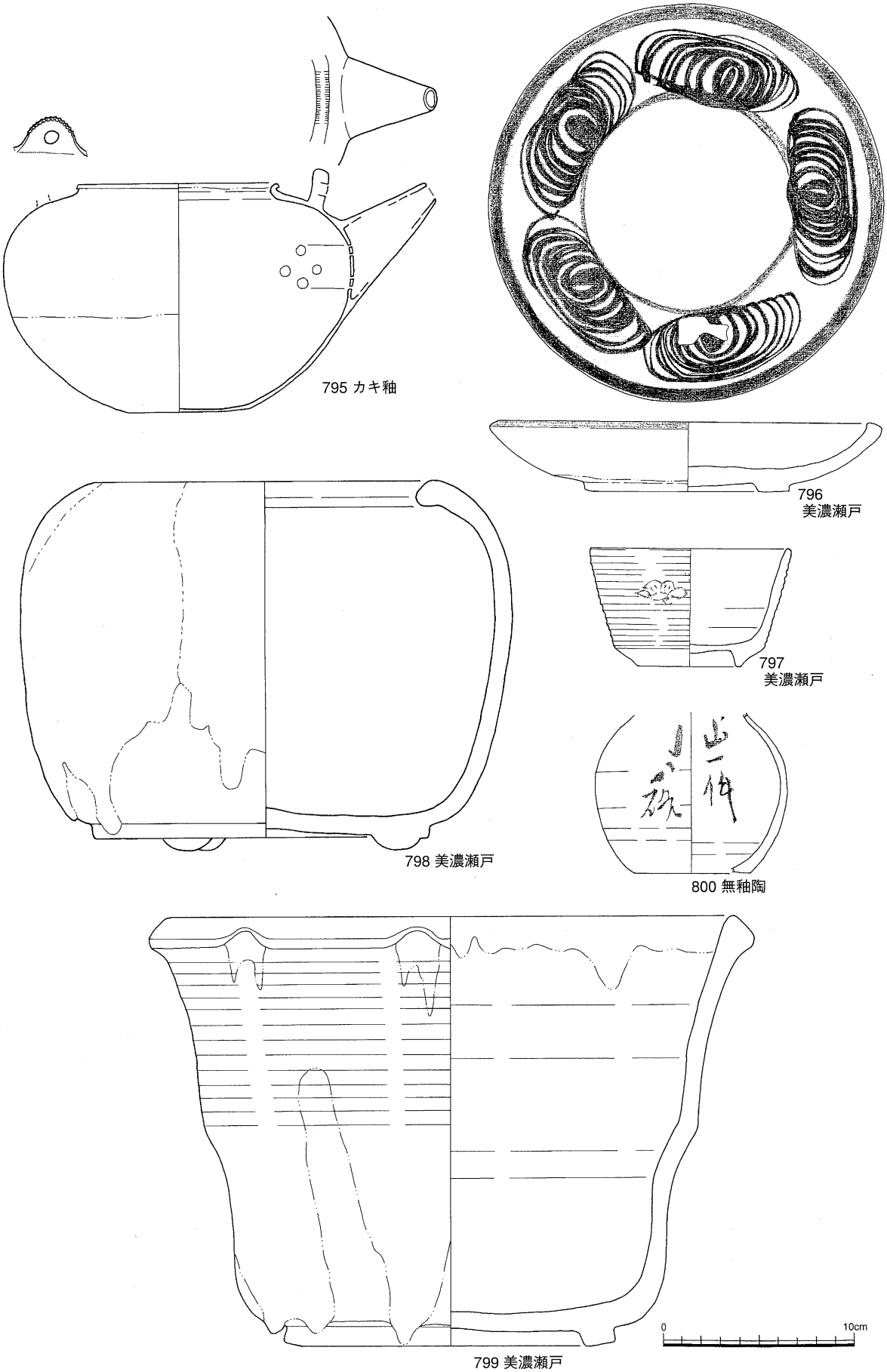
第84図　内堀上部埋土の遺物Ⅱ（1／3）



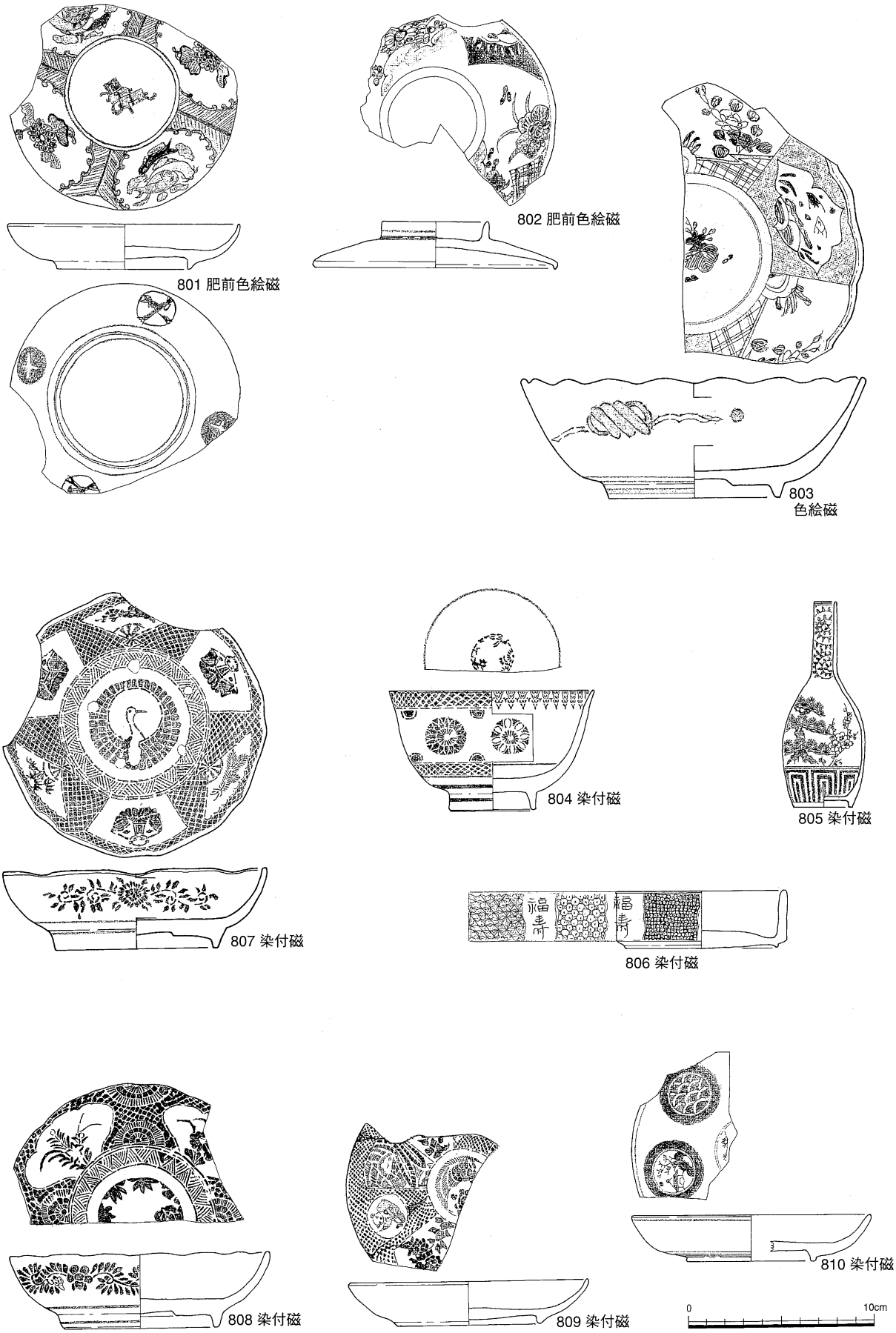
第85図　内堀上部埋土の遺物Ⅲ（１／３）



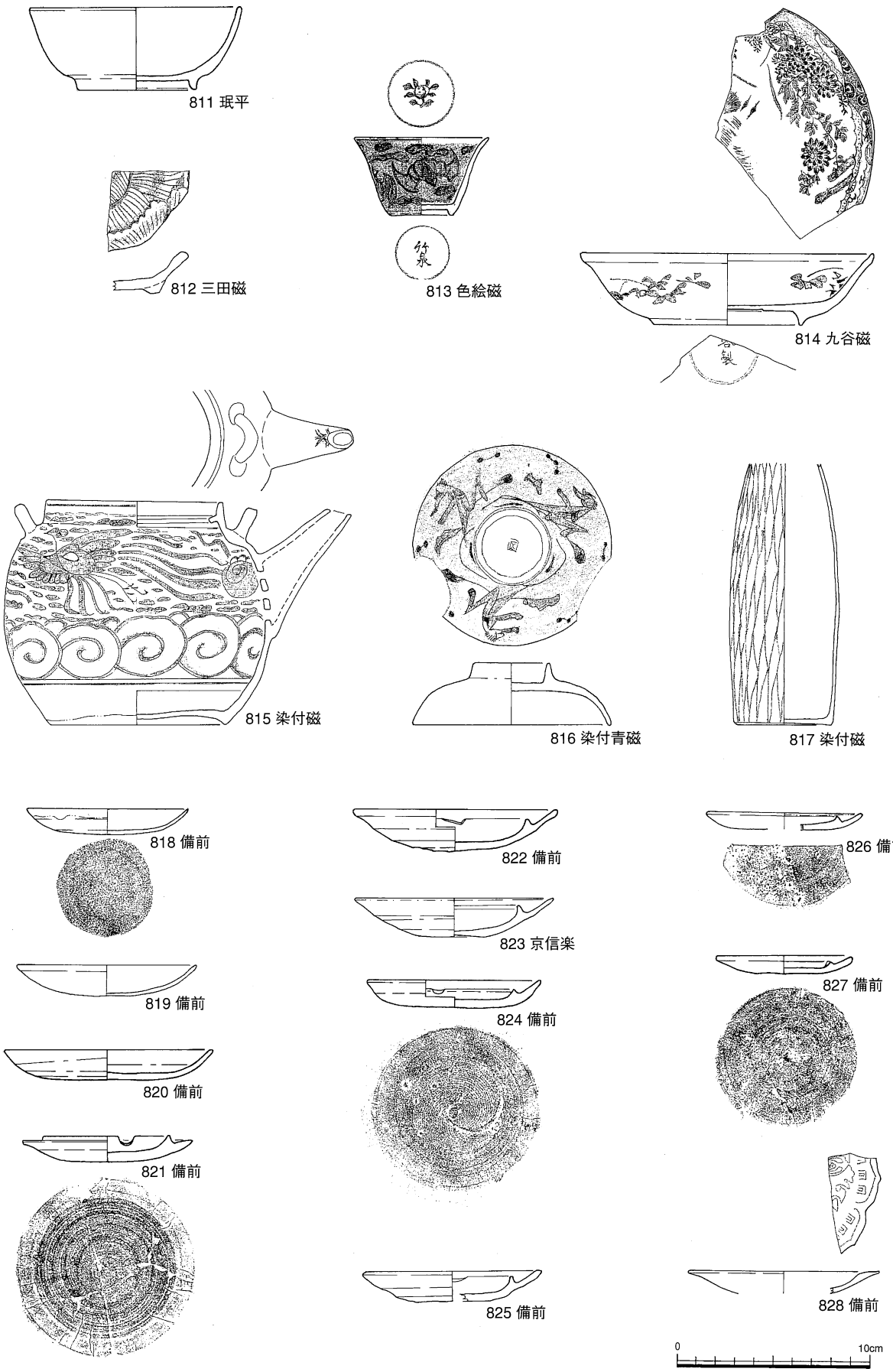
第86図　内堀上部埋土の遺物Ⅳ（1／3）



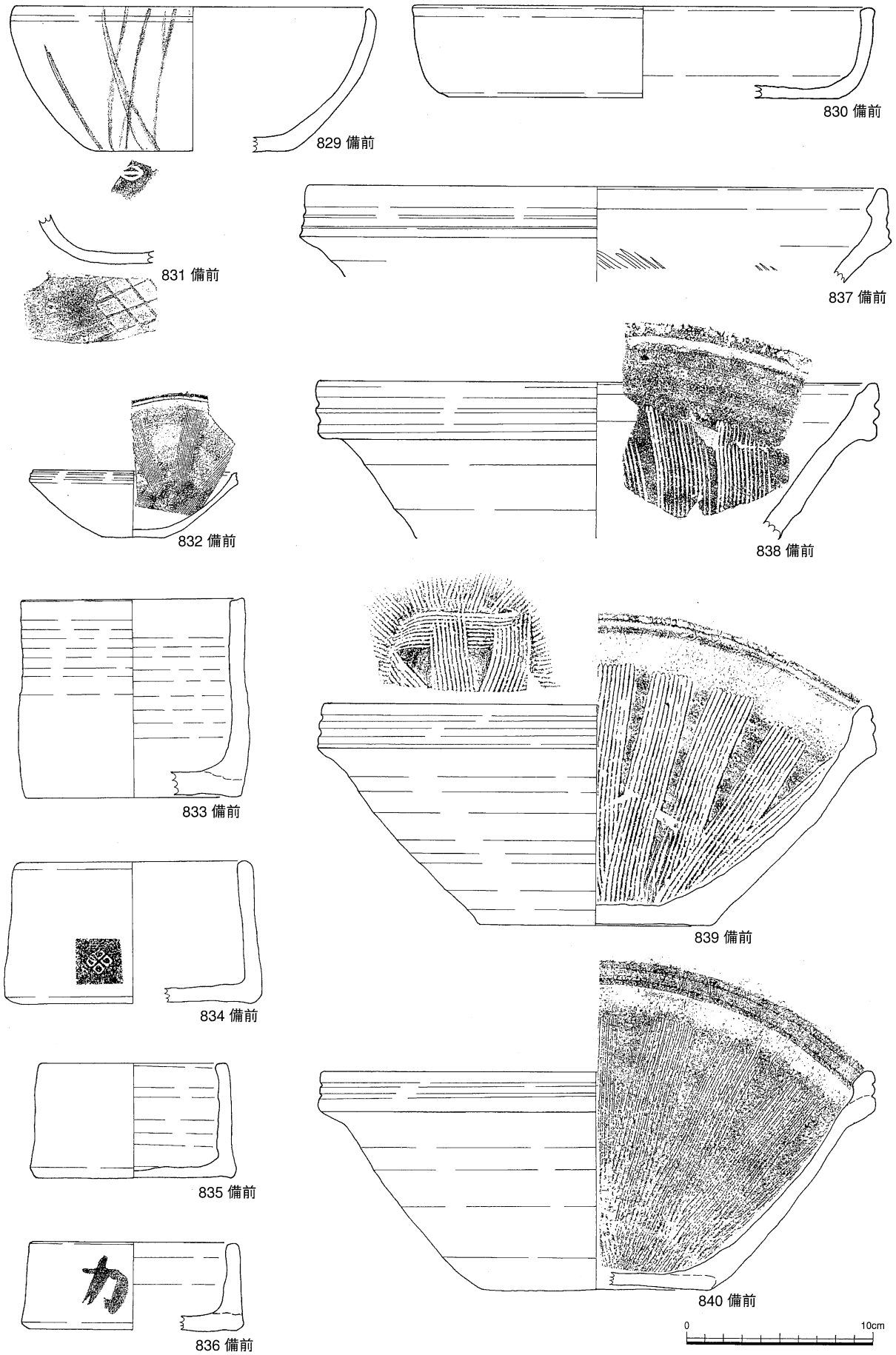
第87図　内堀上部埋土の遺物Ⅴ（１／３）



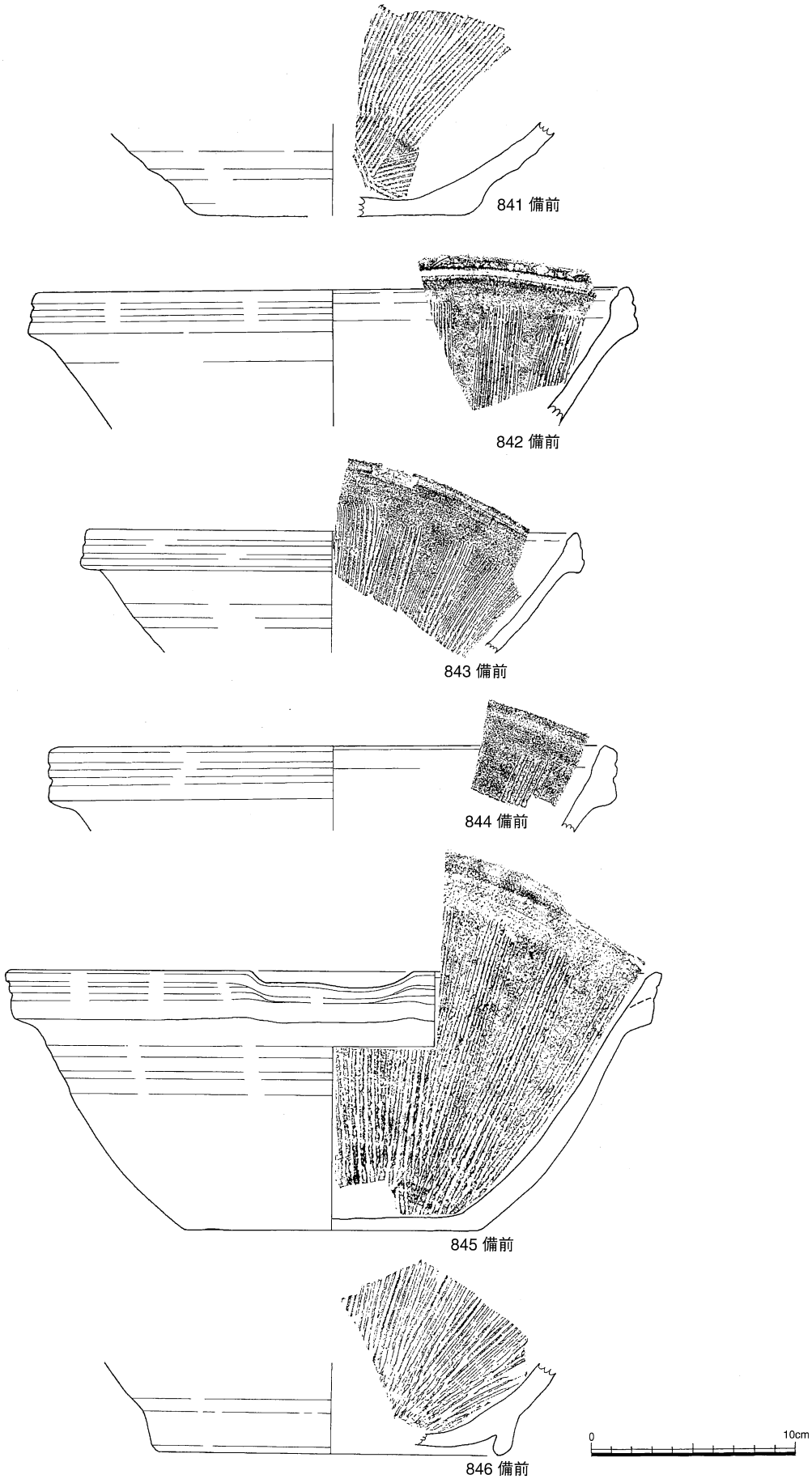
第88図　内堀上部埋土の遺物Ⅵ（1／3）



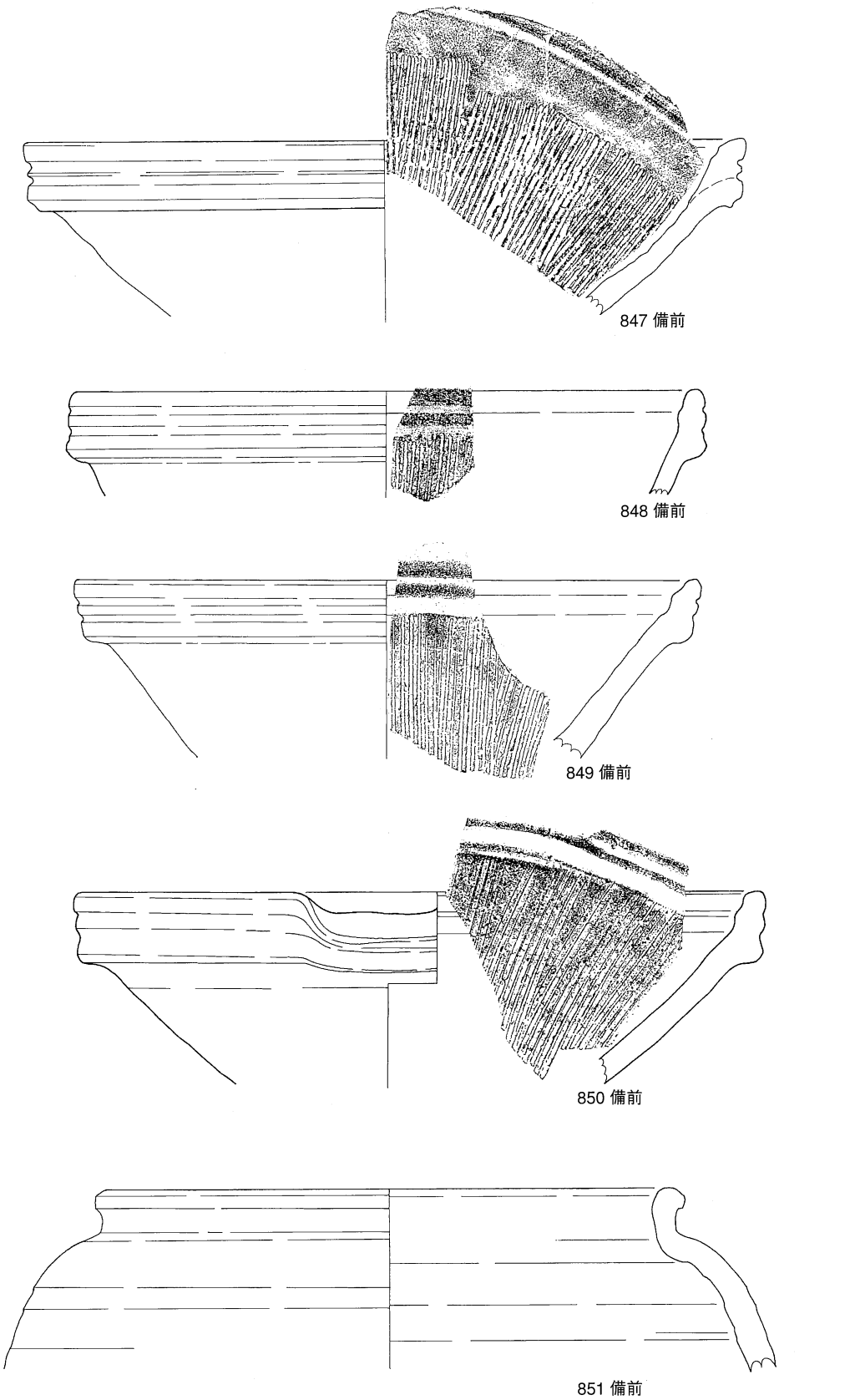
第89図　内堀上部埋土の遺物Ⅶ（１／３）



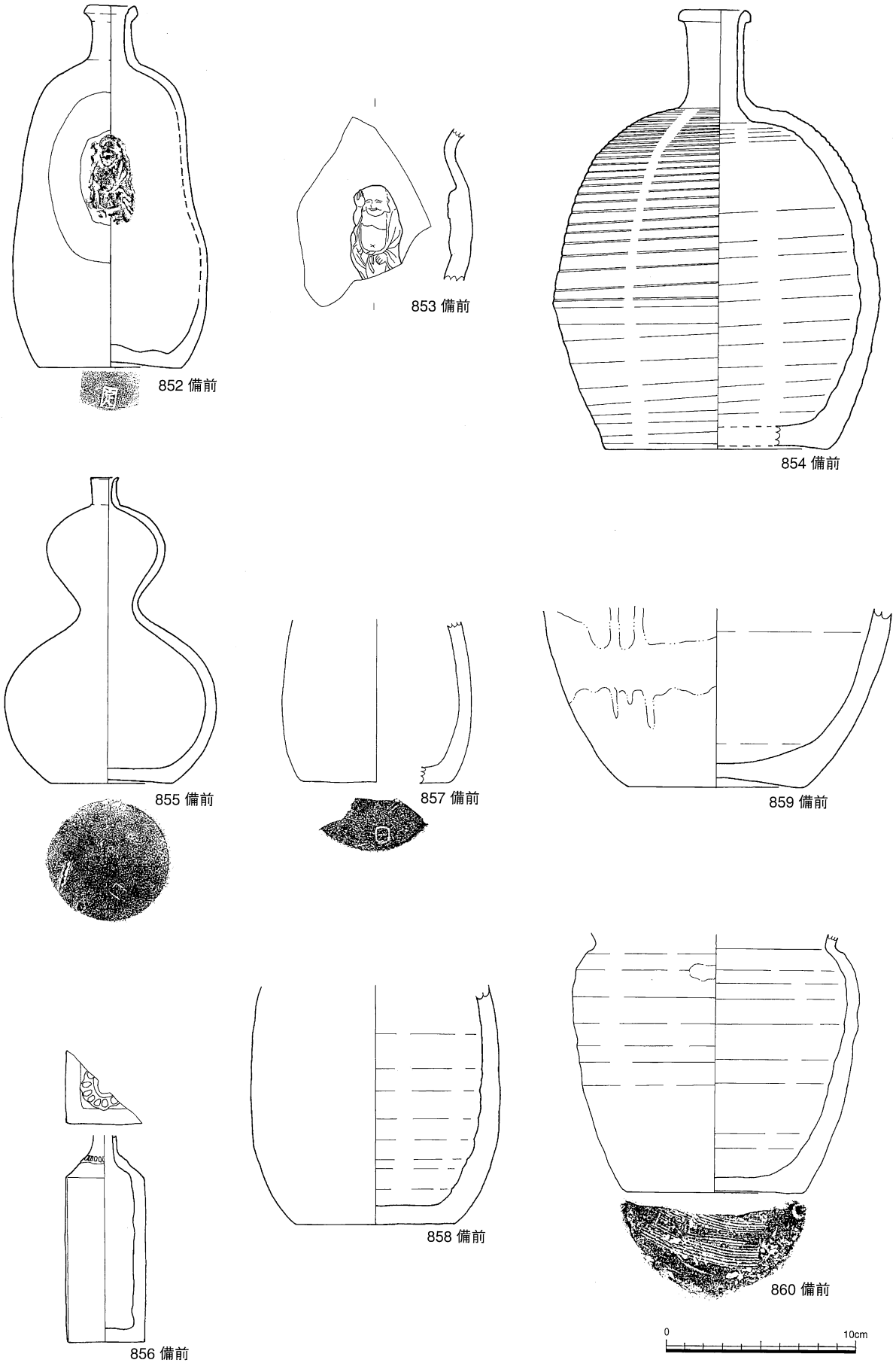
第90図　内堀上部埋土の遺物Ⅷ（1／3）



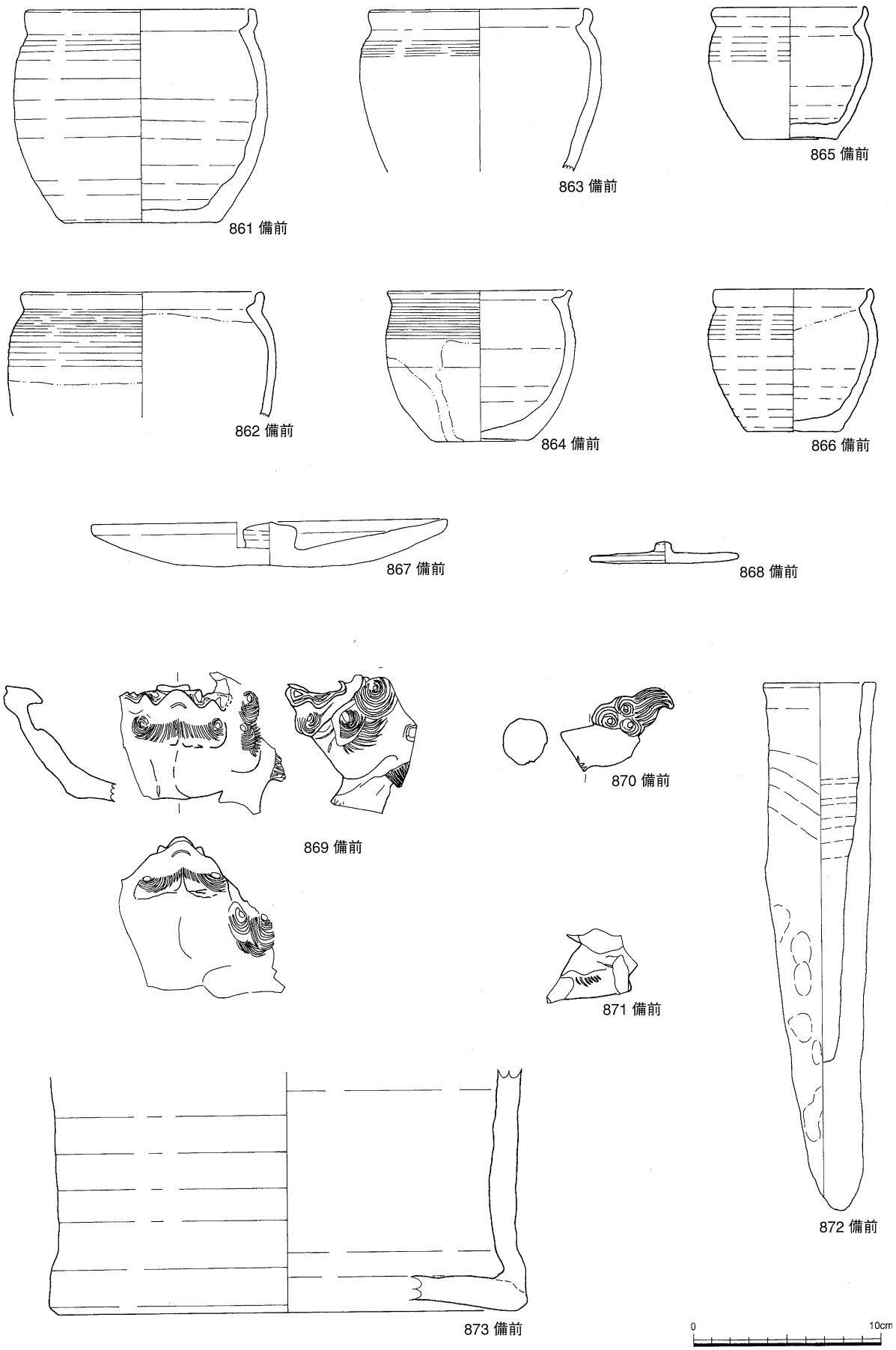
第91図　内堀上部埋土の遺物Ⅸ（１／３）



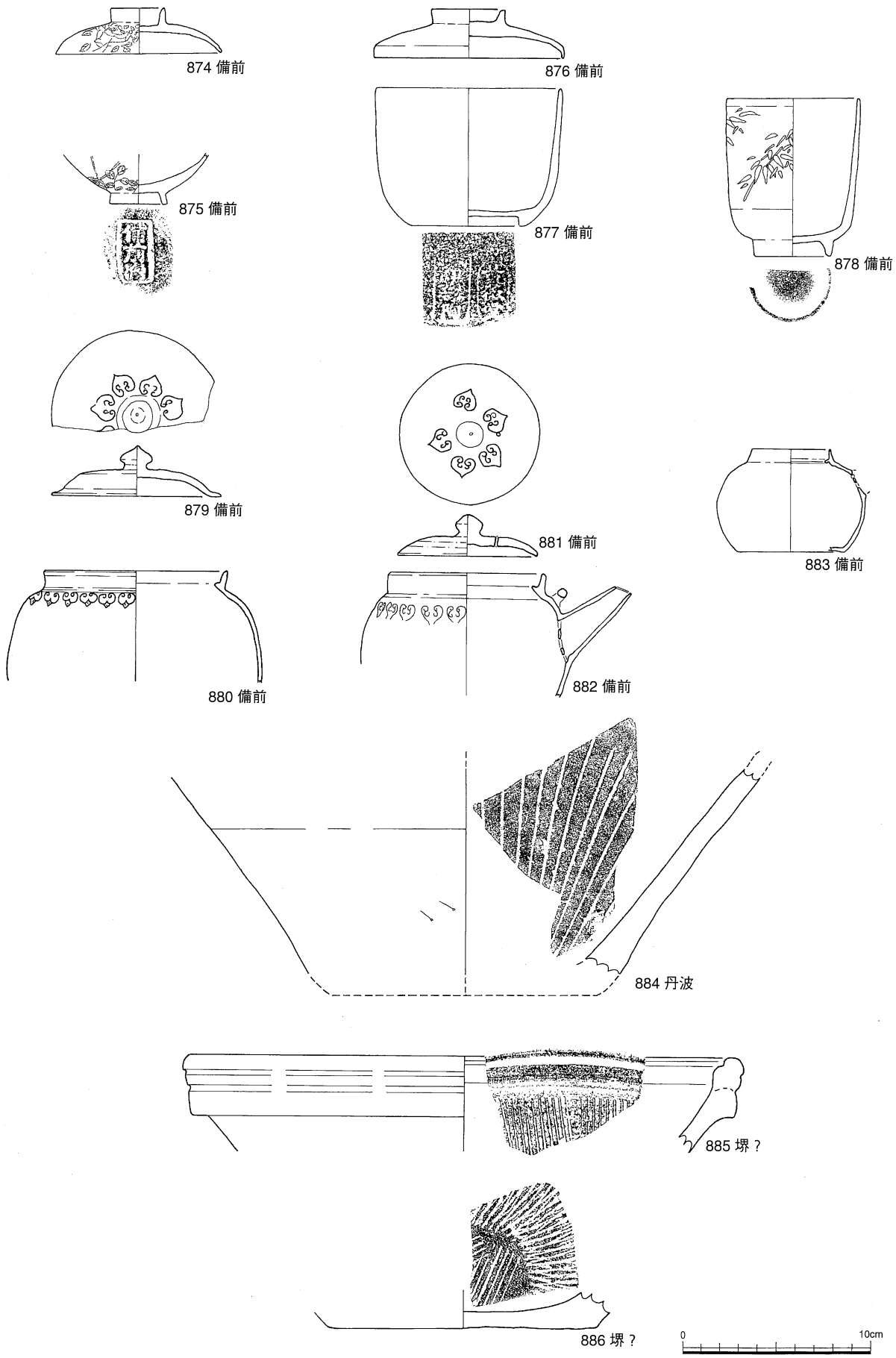
第92図　内堀上部埋土の遺物Ⅹ（1／3）



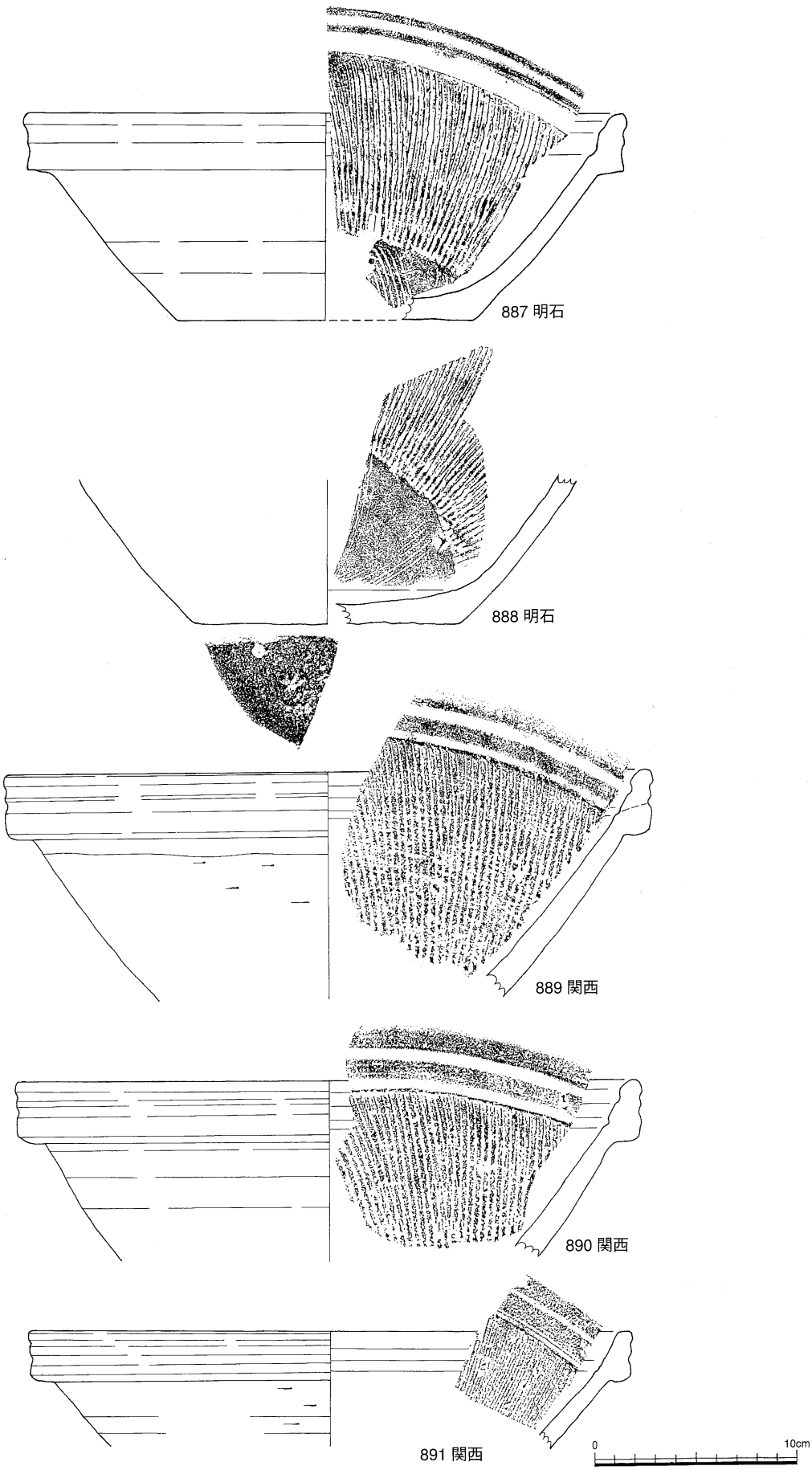
第93図　内堀上部埋土の遺物Ⅺ（１／３）



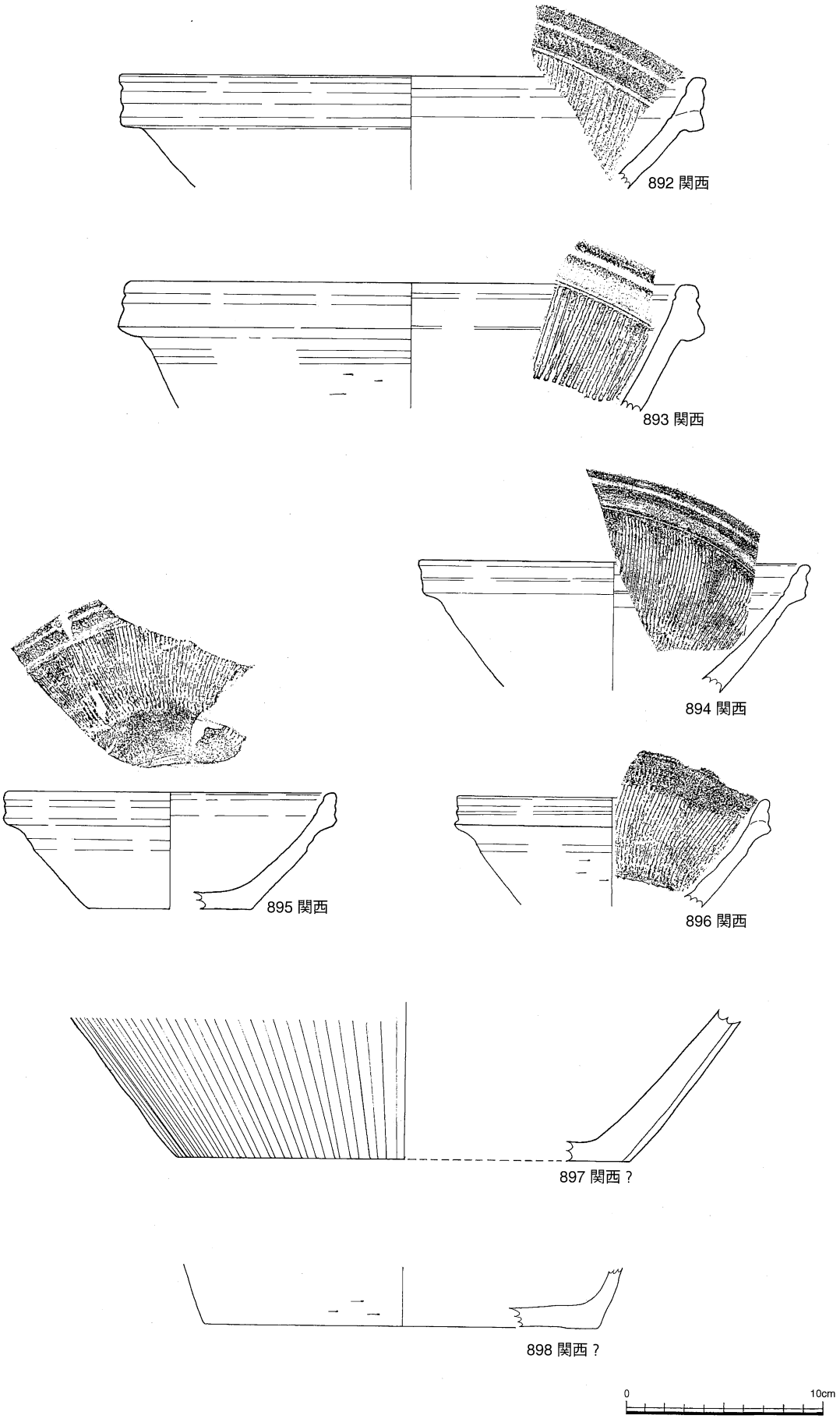
第94図　内堀上部埋土の遺物Ⅻ（1／3）



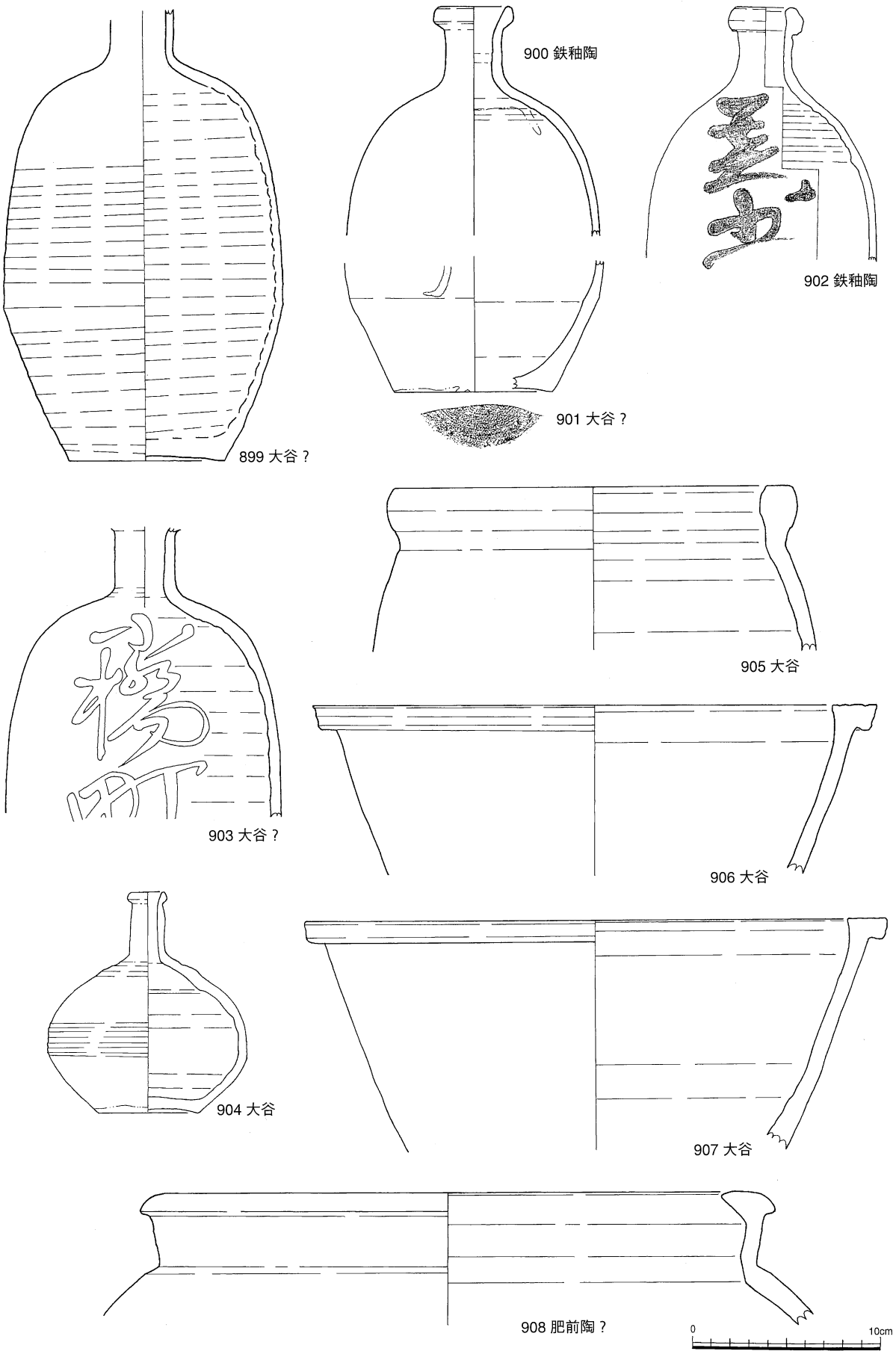
第95図　内堀上部埋土の遺物Ⅻ（１／３）



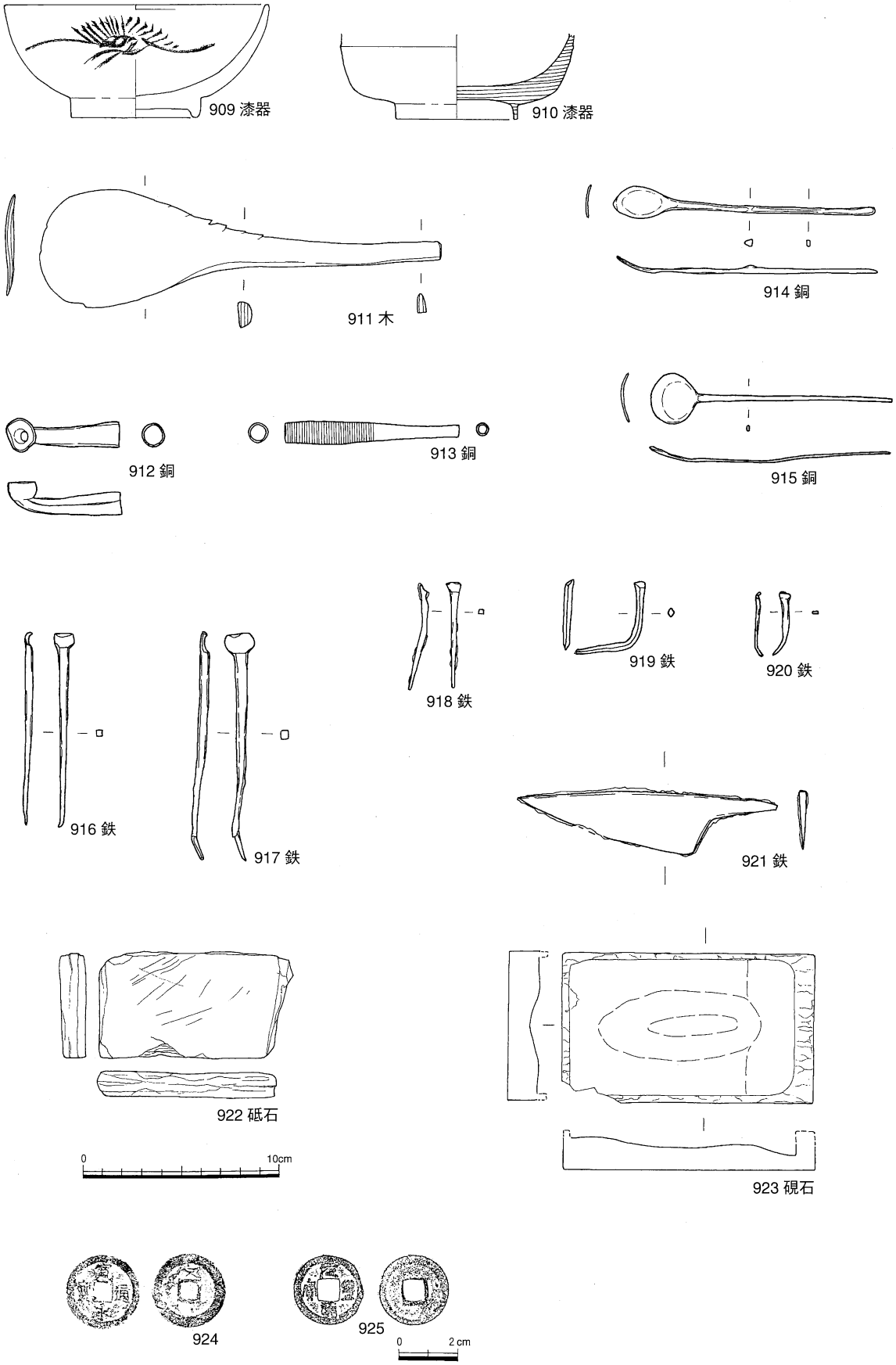
第96図　内堀上部埋土の遺物XV（1／3）



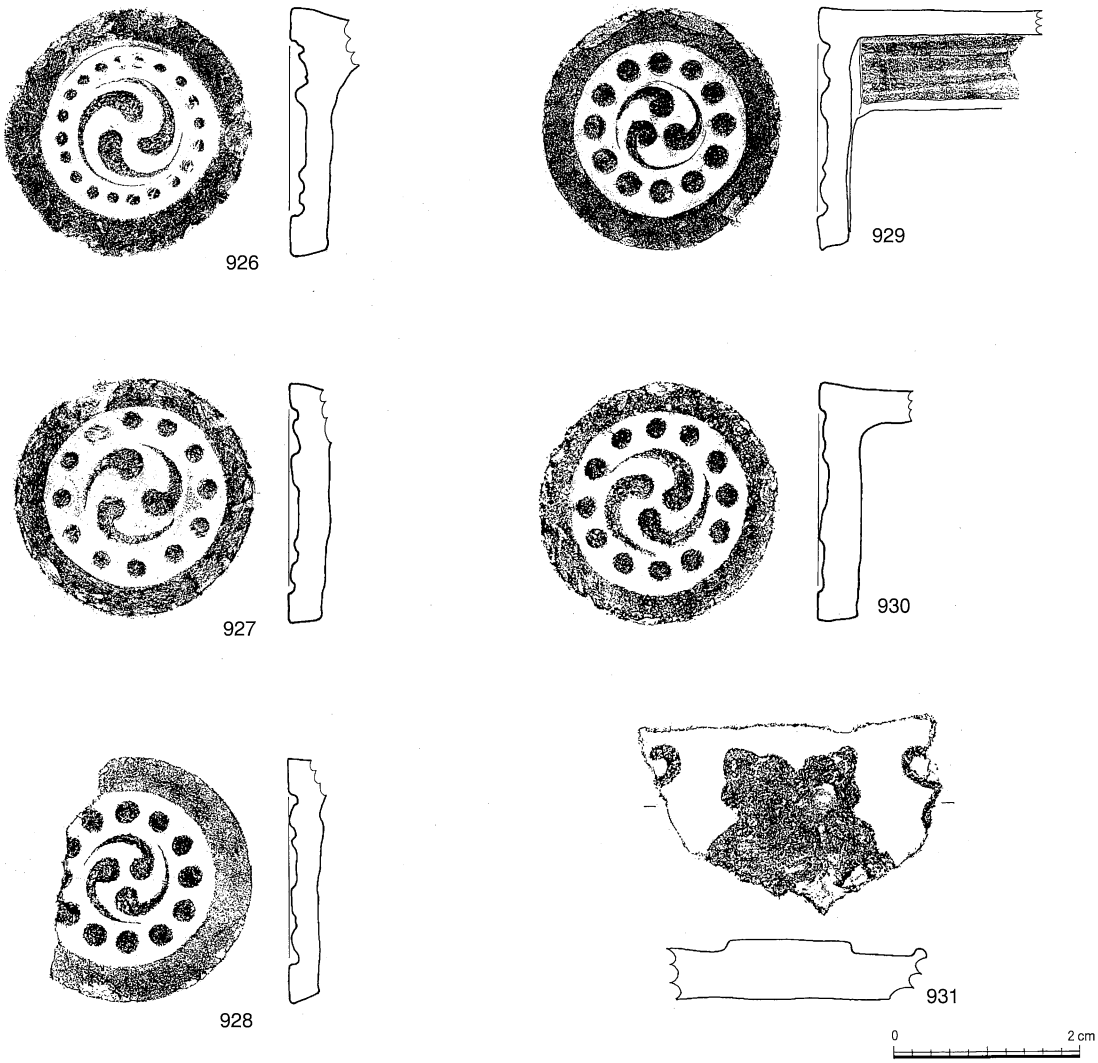
第97図　内堀上部埋土の遺物Ⅻ（１／３）



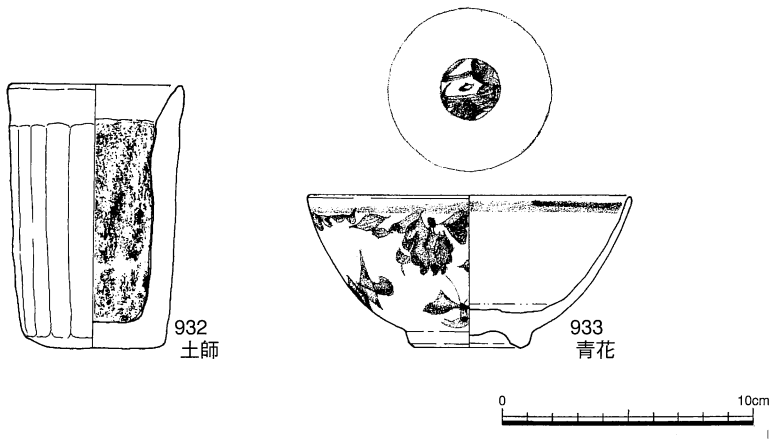
第98図　内堀上部埋土の遺物XVI（1／3）



第99図　内堀上部埋土の遺物Ⅻ（銭：１／２　他：１／３）



第100図　内堀上部埋土の遺物Ⅻ（1／4）



第101図　内堀下部埋土の遺物　追加（1／3）

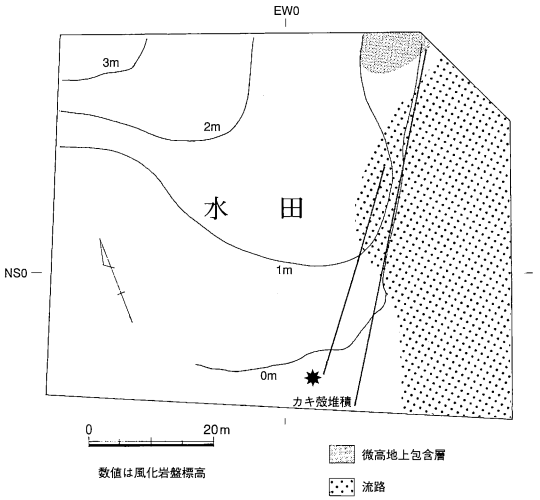
第Ⅴ章　調査成果の整理と展望

第１節　遺構の変遷

１．城郭以前（第102図）

最下で検出された地山は、花崗岩質の風化岩盤で、未風化の丸い岩を含む個所もある。最深部は標高-0.4m(現地表下５m)で、南と西側が低く、北西が最も高い。この地形は、第104図に示されるように調査地北方の天神山から南に延びる尾根筋の東斜面に当っている。

調査区の南寄りの風化岩盤上では、カキ殻の堆積が検出された。その斜面は、C14年代や堆積土の電導度の測定結果などから、縄文海進期の海食棚(波蝕台)と判断された。想定される海面水位は標高0.0m内外である。



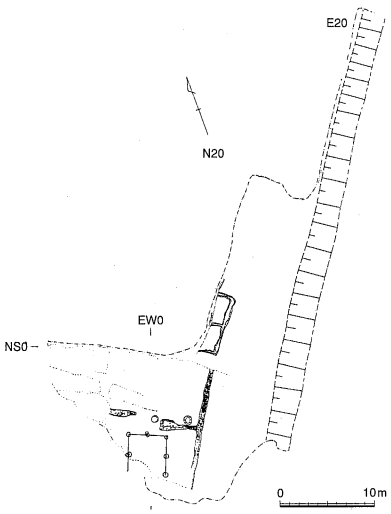
第102図　城郭以前の状況（1/1200）

こうした海成層や風化岩盤の上には、厚いところで２mあまりの沖積層が堆積する。関連して出土した最古の遺物は弥生時代中期中葉～後葉、次にまとまるのは古墳時代前期～中期である。当時の状況が面的に検出できた訳ではないが、土層観察の結果からすれば、天神山の丘へと続く北に集落があり、南に水田が広がり、東は低湿地や流路となっていたとみられる。特に調査区の北東端では微高地基盤土上に包含層の形成があり、古墳時代前期の完形の坩を含む土壙が確認された。また、平安の河道堆積からであるが、古墳時代前期末と古墳時代後期初の埴輪片が出土した。前者は調査区北方2.1kmにあって墳長150mの前方後円墳の神宮寺山古墳の埴輪と酷似している。埴輪を生産した集落があった可能性もあるが、むしろ天神山の丘に古墳があった可能性が窺える。特に埴輪が普及する後期初の古墳の存在はより可能性が高い。次に、平安時代およそ９世紀頃の遺物を含む流路堆積が、発掘区の東寄りに広がっている。東に低い弥生時代からの地形を踏襲した結果であろうが、旭川西岸域では９～10世紀頃の遺物を大量に含む流路跡が各遺跡で検出されており、本例も当時の環境変化に応じた洪水頻発現象の一端を示すものかも知れない。

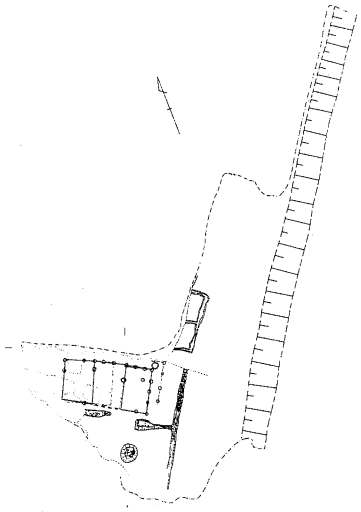
２．岡山城内堀と三之曲輪（第103図）

ａ．遺構群の年代

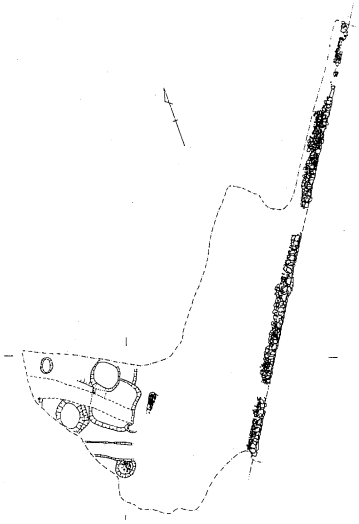
曲輪内最下層下部のⅨ層上面をつくる造成土中の遺物(第35図)は15世紀代に遡るものもあるが、16世紀後半のものが含まれ、天正年間より新しいと言えるものはない。上のⅧ層中のものを含む遺物群(第35図)も16世紀後葉までのものだけである。その上の下層遺構面を造りだすⅦ層(第36･37図)には16世紀後葉の中国や美濃産の陶磁器のほか１点だけ唐津焼が含まれる。Ⅶ層は唐津焼を含むとはいえ、Ⅶ層上面以上の遺構に比べれば遥かに少量で、その１点は唐津焼のなかでは相対的に古いとされる胎土目[1]である。唐津焼は、大坂城では1597年を下限とする豊臣前期にはごく少量しか含まれず、1615年を下限とする豊臣後期には急速に普及する[2]とされる。また、岡山城本丸中の段[3]では、出土陶磁器



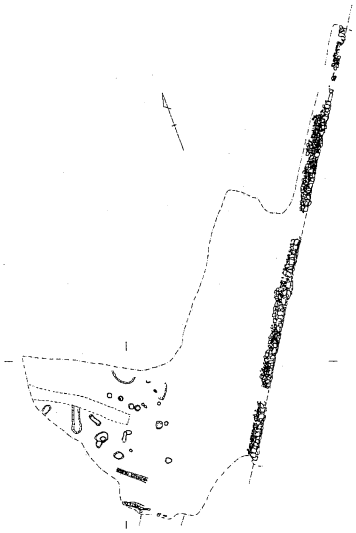
最下層下部[Ⅸ層上面]期　16世紀後葉



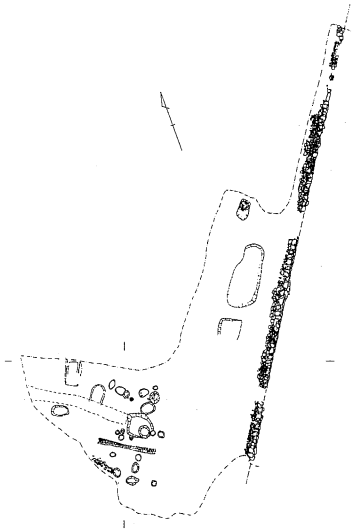
最下層上部[Ⅷ層上面]期　16世紀末



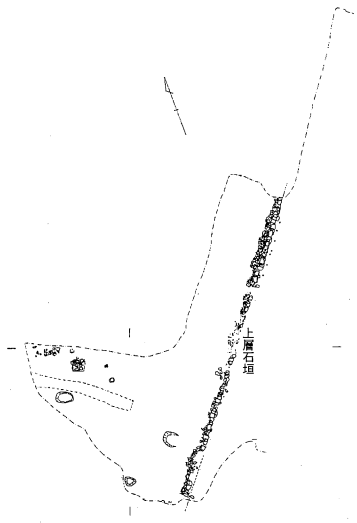
下層[Ⅶ層上面]期　17世紀前葉



中層[Ⅵ層上面]期　17世紀中葉



上層[Ⅴ層上面]期　17世紀中葉



上層[Ⅴ層上面]以上期　17世紀後半～19世紀

明治期（～1907年）

第103図　遺構の変遷（1／800）

の絶対量が少ないうちでの議論であるが、1600年を下限とする宇喜多秀家期の層位(金箔おし瓦などを共伴・第114図)では唐津焼は未確認である。そのほか、Ⅶ層中には中国福建の漳州窯系青花皿が２点含まれるが、見込を蛇目釉剥ぎして圏線を描く陶質的なもので、これも大坂城の豊臣前期の組成の内にある。こうした状況からすれば、最下層は16世紀後葉に遡ることは疑いなく、宇喜多期に遡るものと判断できる。その上部は宇喜多秀家期を主体とし、下部のⅧ層上面は1582年を下限とする宇喜多直家期まで遡る可能性が考えられる。また、Ⅶ層によって下層遺構面が造成されたのは、1600年直前の宇喜多秀家の最末期か、直後の小早川秀秋期と判断できる。

Ⅶ層上面に形成された大形の土壙からは、たいてい唐津焼が多く出土し、内には溝縁を含む砂目の唐津皿や少量の肥前磁器(伊万里)を出土するものもあった。大坂城では砂目縁溝皿や肥前磁器の出現は徳川初期２以降、すなわち1620年代中頃以降とされている[4]。また、岡山城本丸中の段では1620年代を下限の目安とするⅣ期の層位中には肥前磁器は含まれず、城下の南はずれに位置する二日市遺跡[5]の1637～1640年に操業した銭座に伴う遺物群中には、大量の砂目縁溝皿と一定量の肥前磁器が含まれていた。こうした状況からすれば、Ⅶ層上面の下層遺構は、1600年前後から1630年代にかけて順次形成されていったものとみられる。小早川秀秋期から1632年を下限とする前池田期(利隆監国期・忠継・忠雄)が主体であったことになる。

Ⅵ層上面の中層遺構やⅤ層上面の上層遺構の本来的部分は、17世紀中葉までの遺物を伴い、1632年に入封した池田光政期が主体となるとみられる。共伴遺物として取り上げたものには16世紀末～17世紀初に遡るものも多いが、これは伝世品であった可能性のほか、実際には下層に含まれるものでありながら、中層・下層の遺構埋土に混入した可能性が残る。中層・上層遺構は遺構としての掘り方が浅くて小規模なものが多く、むしろ厳密な意味での共伴遺物は少ないと展望できる。

Ⅴ層上面より上方から掘られた上層遺構は、出土遺物から17世紀後半から近代のものがある。

下層石垣の構築年代は、遺物からは特定できない。しかし、より本来的とみられる部分にも割石が含まれ、割石の使用は池田期からといった事がらを含む岡山城本丸での石垣の年代観[6]と対照すれば、積極的に宇喜多秀家期まで遡るとは主張できず、むしろ池田期まで下る可能性が窺える。

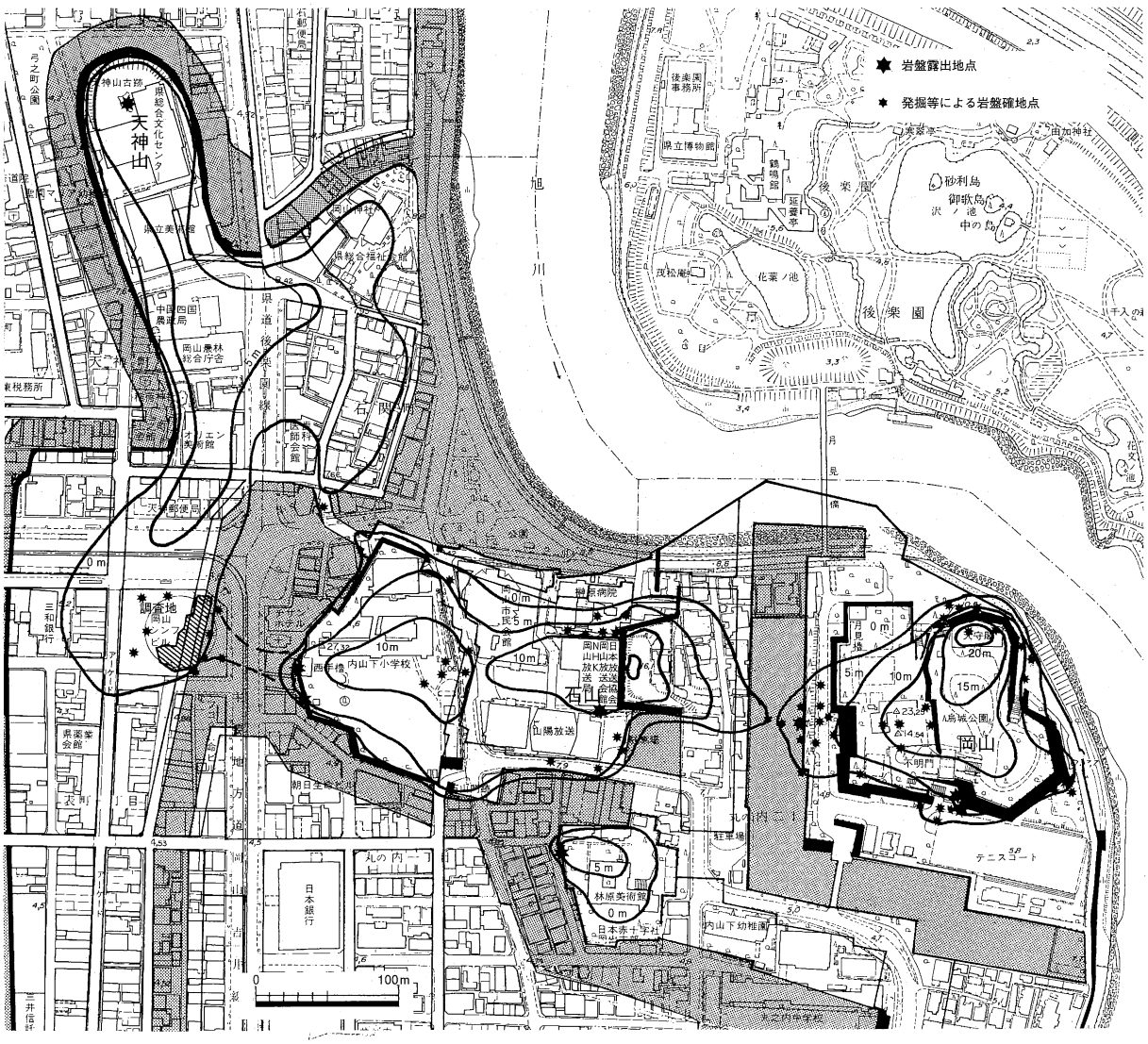
上層石垣の構築年代は裏込中の遺物から18世紀末以降である。また、上層石組の構築は、上層石垣より遅れ、内堀が埋め立てられた1907年を下限とする明治の遺構である。

ｂ．最下層下部［Ⅸ層上面］の遺構（16世紀後葉＝宇喜多直家～秀家期）

掘り方を伴う地盤改良のうえ、円礫を敷きつめて屋敷地が造成されていた。この状況は発掘区の北・西・南側にも広がり、同時多発的な造成工事が広範囲にわたって行われたことを窺わせる。街を形成していたことは疑いなく、岡山城の初期城下町として位置づけられる。これは、本書５頁で述べた史料に伝わる宇喜多直家期での一帯の町家形成と整合性をもってくる。屋敷地が実際に形成されたのは沖積層の上で、それゆえに軟弱地盤を克服するため地盤改良を実行したのであろうが、大局とすれば上之町～下之町域は第104図に示したように天神山から南に細長く延びる尾根の延長部を占め、地盤の安定性が高かったとみられ、これが初期の城下町形成の要因となったのであろう。

検出できた屋敷地内の遺構は、南寄りの掘立柱建物１棟とその北隣の素掘り井戸２基である。井戸などから少量の瓦片が出土し、区域全体とすれば瓦葺建物があった可能性が強いが、検出建物が掘立柱である様に、瓦葺建物が林立する状況には程遠かったとみられる。

屋敷地の軸線は、大局として内堀と平行する。層位のうえでは検証できないが、この段階で既に堀



第104図　岡山城主要部の風化岩盤想定図（1／5000）

があり、これらの屋敷は岡山城中枢部から堀を隔てた西側に広がるものであった可能性が窺える。屋敷の東側は遺構の空白部があり道路とみられるが、堀に沿うものであったことになる。ただ、この段階から下層石垣が構築されていた可能性は低い。先述のように石垣の構造が新相であるし、本丸では本格的な石垣の構築は宇喜多秀家期を待たなければならず、またその秀家期では、下の段の周囲に内堀が既に成立しているものの、後とは位置や構造が異なり、石垣が未達成の事実(7)がある。最下層期に堀があったとしても、発掘区の東に元からあった低湿地や流路を掘り直した程度で素掘りに近かったに相違ない。その西岸線は下層石垣と同位置か東寄りに想定できる。岡山城主要部の曲輪や堀の配置(第104図)は元の地形を巧みに活用したものであり、ここでの堀の存在は必然とも言える。

c．最下層上部［Ⅷ層上面］の遺構（16世紀末＝宇喜多秀家期）

Ⅸ層上面から生活面の重あげを経た最下層上部のⅧ層上面では、西区の北寄りで掘立柱建物１～２棟、南寄りで素掘井戸１基を検出した。建物の建替を経て具体構造は変遷しているが、敷地やその状況は最下層下部を踏襲している。

ｄ．下層［Ⅶ層上面］の遺構（17世紀前葉＝小早川秀秋～前池田期）

曲輪内のⅦ層上面では、大形のゴミ穴が多数検出された。建物に直結した遺構は未確認で、屋敷の庭先に当ると思われる。東は遺構が空白で、堀に沿う道路の存在を示している。

瓦が出土したが、総ての建物が瓦葺きであったとは考えにくい。ゴミ穴に捨てられた陶磁器や漆器は大量かつ多彩で、屋敷の主の高い経済力が窺える。子供に漆塗の下駄を履かせたり、羽子板を用いた遊びもしくは祭礼を行えるだけの階層の家である。

ところで、下層では大形のゴミ穴が多数あるのに、中層・上層では顕著でない。岡山城では二の丸武家屋敷跡のどの発掘地でも、17世紀前葉のゴミ穴は特に大形で数多く、状況が同じである。この期間は城主やその系統の交代(別の家を構えた兄弟間を含む)が頻繁にあったり、生活面の重上げが度々行われ、家臣・商人の屋敷替えや建物の解体・建築の機会が多かったこと、都市ゴミの処理体系が未整備で家のゴミは庭に穴を掘って処理する機会が多かったことなどが、要因として考えられる。

岡山城下の状況を詳細に伝える最古の絵図は『岡山古図』(第105図１)である。1632年までに作製されたもので、下層期の後半に相当する。この絵図を含む各城下町絵図とも、三之曲輪内は一貫して町家が広がり、堀の西岸には街路が描かれている。これは、検出遺構の状況と一致する。ただ、『岡山古図』では内堀西側に石垣の表現がないのに対し、『岡山城郭之図』では表現がある。『岡山城郭之図』は承応３年(1654)の作製であるが、原図は幕府が正保年間(1644～1647)に諸大名に作らせた『正保城絵図』で、正保年間には石垣が既に構築されていたことが判る。『岡山古図』には表現が無いことから、寛永年間には石垣が未構築であった可能性も窺えるが、既に構築されていたのに表現が省略されたとも考えられる。なぜなら、正保より新しい慶安年間(1648～1651)の『岡山城下之図』やそれ以後の各城下町絵図では石垣表現のないものが多く、ここの石垣は絵図では表現が省略されることが多かったからである。下層石垣は堀の本丸側ではなく外側のものであり、その高さや石材の大きさは城郭石垣としてそう目立つものではなく、構造的にも戦闘時の防御機能や軍事建物の下部構造を期待したというよりは、水を湛える堀の護岸としての側面が強いもであったことによるのであろう。

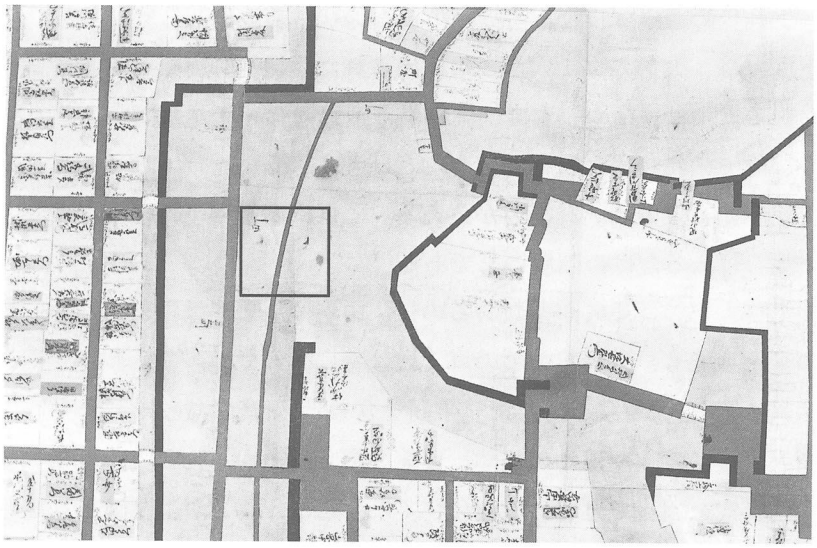
いずれにせよ、下層石垣は下層期のうちに成立していたと考えられる。岡山城の一般論として、曲輪や堀、またそれを画す石垣が後に続く構造で完成するのは池田忠雄期(1615～1632年)であり、石垣構造から展望できる年代観もそう考えるのに相応しいものである。

堀に沿う下層期の道路は幅９ｍ以内、遺構面の高度との関係で想定できる下層石垣の推定高は3.1ｍ前後となる。なお、下層石垣の工程(工人)の単位を示すとみられる縦メジが、９～10ｍ(５間)間隔(但し１区間のみ5.2ｍ)に確認できたことは注目される。

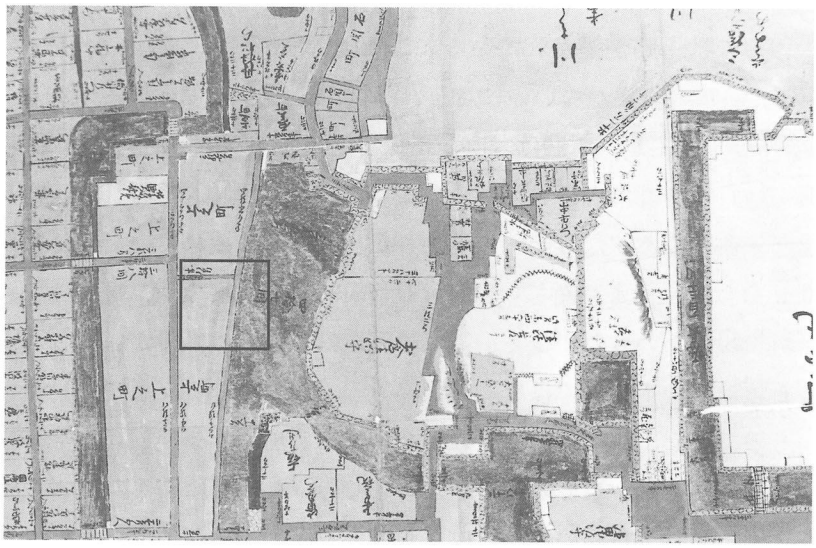
ｅ．中層［Ⅵ層上面］・上層［Ⅴ層上面］の遺構（17世紀中葉＝後池田期）

曲輪内で検出した遺構は意味不明の土壙が主体であるが、暗渠が３本検出された。これらは、曲輪内の町屋から内堀への排水を果たすもので、暗渠であるのは屋敷と堀との間に道路があったからとみられる。中層の暗渠３は丸瓦を、中層の暗渠１と上層の暗渠２は瓦と同質の専用材を繋いだものであるが、暗渠２と３の構成材の遺物としての年代観は中層・上層の年代観より古く、他所からの転用であったとみられる。中層・上層は下層期から生活面の重上げを経ているが、東に内堀護岸として下層石垣が機能し、道を隔てて屋敷地が広がる基本構造に変化ない。

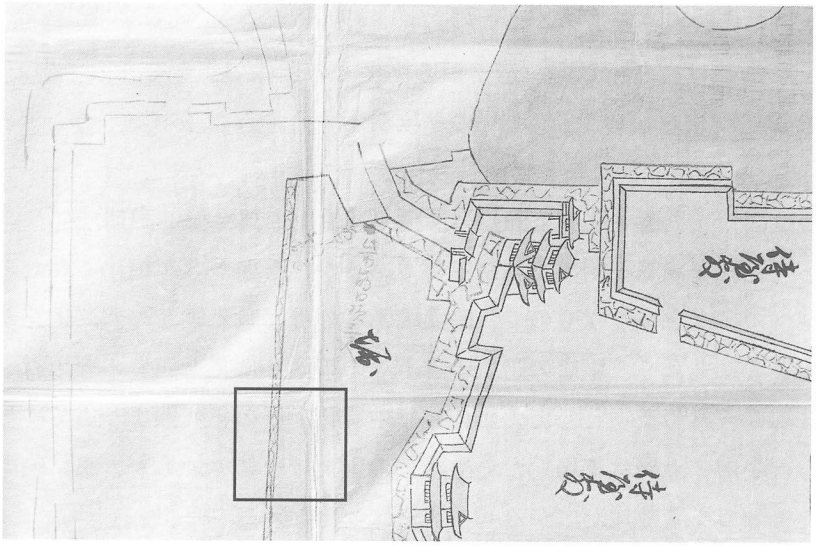
中層と上層期に分離できること自体、この時期に入っても最下層期から続いて頻繁な生活面の重上げがあったことを示している。これは、大幅な地割り変更を伴うものでなく、一般論としては高燥で



岡山古図（寛永年間前半）



岡山城下之図（慶安頃）



岡山城郭之図（承応３年）

枠が調査地

第105図　調査地周辺の絵図（岡山大学池田家文庫蔵）

安定した地盤の確保のための普請と言えよう。ところで、南東対岸の二の丸域では総ての発掘地で、承応３年(1654)の大洪水によるとみられる洪水砂が厚さ数十cmないしはそれ以上に堆積し、自然災害を契機とする生活面の重上げがあったことが判っている。当発掘では、この洪水砂層そのものは確認できなかったが、承応の二の丸生活面上昇との兼ね合いで、三之曲輪でも生活面の重上げがあり、当地の造成土の内にそうしたものを含んでいる可能性もある。ちなみに、当地の南東250mの中国銀行本店建設に伴う二の丸跡の発掘[8]で確認された、承応洪水前の生活面は標高3.2～3.6m、洪水砂上面は標高3.8～4.0mであり、それぞれ当発掘地のⅦ層上面～Ⅵ層、Ⅴ層上面付近の高度に相当する。

ｆ．上層以上の遺構と上層石垣（17世紀後半～19世紀）

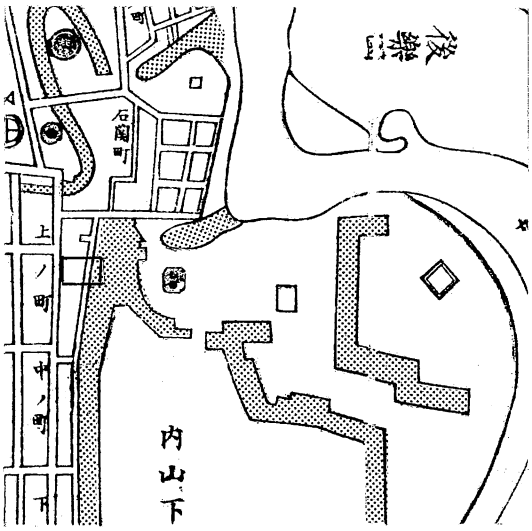
曲輪内ではⅤ層上面に届く深さをもった遺構しか検出できていないが、多数の遺構があったことは疑いない。

一帯は西側の山陽道(現上之町商店街)に狭い間口を向けた町家が軒を連ね、各敷地は東西に細長とみられるが、発掘部がその裏庭付近に当るのか、堀沿いの道に向く町家の本体部に当るのかは、中層・下層期を含め遺構の上では特定できない(下層期は裏庭か)。その点では、幕末の状況を伝える『岡山名所圖絵』(第107図)では堀に表を向けた町家が南北長屋風に描かれている。また、幕末の敷地割(占有関係)を反映するとみられる昭和10年代の都市計画図(第108図)では旧山陽道から旧内堀の岸道に抜ける東西に細長い敷地がひしめき、それが東と西に二分されたものを一部に含んでいる。

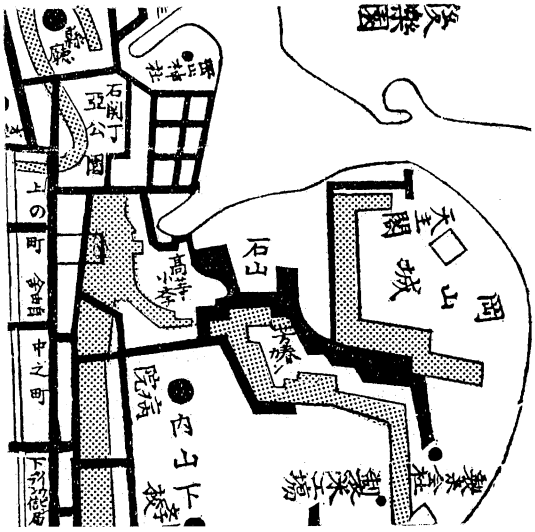
下層石垣は、何度も崩落と修築が繰り返された痕跡をもつが、崩落の最大要因は洪水に違いない。第３図などに示されるように当地は旭川からの取水部を含む内堀の北縁に近く、洪水の被害を最も受け易い場所である。岡山藩の古文書には、幕府に提出された石垣修理や堀浚渫の申請・許可に関する文書や絵図が多数残されている。石垣破損や堀埋積の記録[9]のうち関係しそうなものを大まかに拾っただけでも、承応３年(1654)４月、同年７月[承応洪水]、明暦２年(1656)、寛文12年(1672)、貞享３年(1686)、元禄14年(1701)、宝永３年（1706)、享保９年(1724)、元文１年(1736)、天明７年(1787)、文化14年(1817)などが浮かび上がる。むろんこの総てで、当発掘地の下層石垣の修理や堀の浚渫があったわけではないが、逆に漏れているものも予想され、江戸時代を通じて周辺石垣の修理契機がいかに多かったかが判る。ちなみに、承応３年(1654)４月の石垣破損個所を示したのが第105図３の『岡山城郭之図』である。また、貞享３年は隣接する内堀北縁の石関町で町家跡地を堤に改造して石垣を新築する普請が行わている。

崩壊した下層石垣を修築することなく放棄し、水面を受ける護岸構造として上層石垣が構築されたのは、裏込中の遺物から18世紀末以降であることが判る。この事によって、堀沿いの道は最大で幅５mほど狭められたことになる。文化14年の絵図に示された石垣破損箇所は、本調査地路と位置がずれている。幕政・藩政の緩みからか、あるいは構造の小規模性からか、あるいは法の運用面の変更で、石垣の「修築」「新築」ではなく、堀の「現状維持」行為として、上層石垣の構築が記録にとどめ難い形で処理されたのかも知れない。しかし、上層石垣は明治に入ってから築造された可能性も多分にある。その場合、下層石垣崩壊をもたらした洪水の最大候補は明治25年(1892)７月と翌明治26年(1893)10月の洪水である。共に当地北東の石関町で堤防が決壊し、市中に甚大な被害をもたらした[10]。その事後処理として上層石垣が応急に築造されたと考えても不思議はない。上層石垣の石材は下層石垣からの流用品が主体であったとみられ、明治期に流行した間知石積でなくても整合性をもつ。

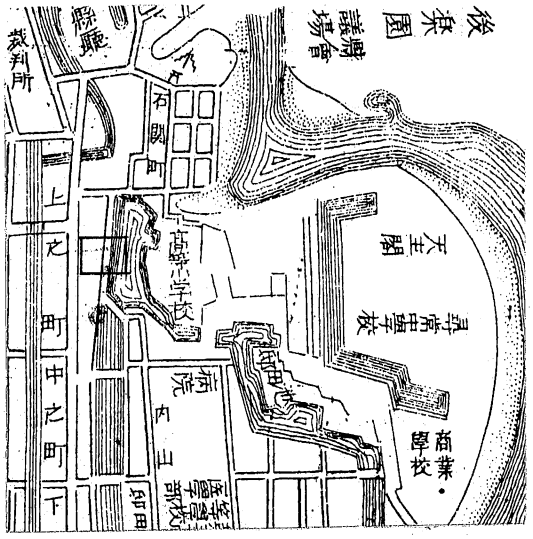
いずれにせよ、上層石垣は幕末～明治の現状維持の体制が緩んだ段階のものと評価できる。



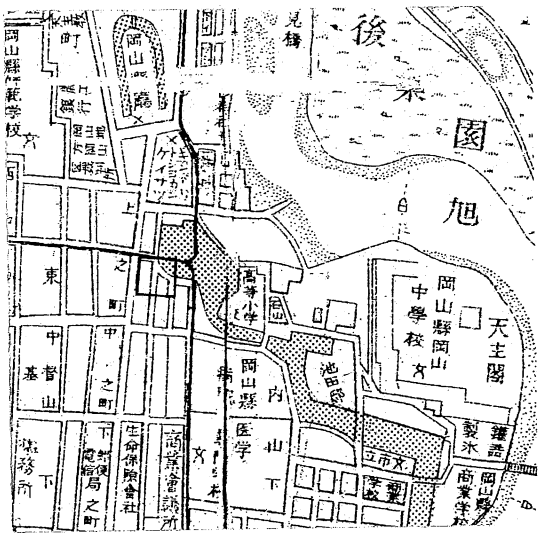
明治22年(1889)



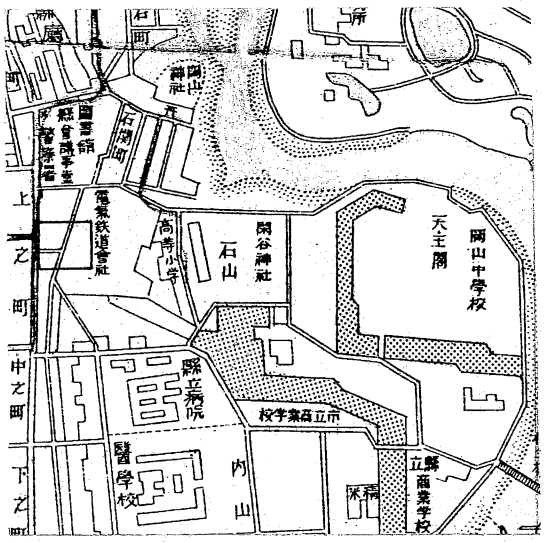
明治28年(1895)



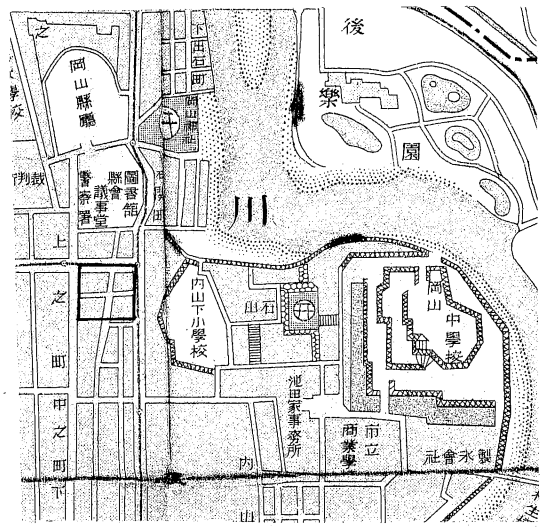
明治33年(1900)



明治39年(1906)

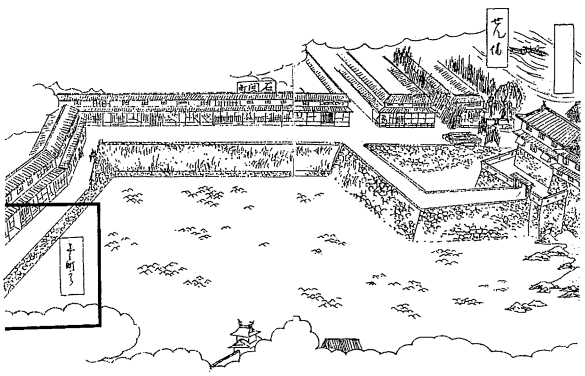


明治44年(1911)



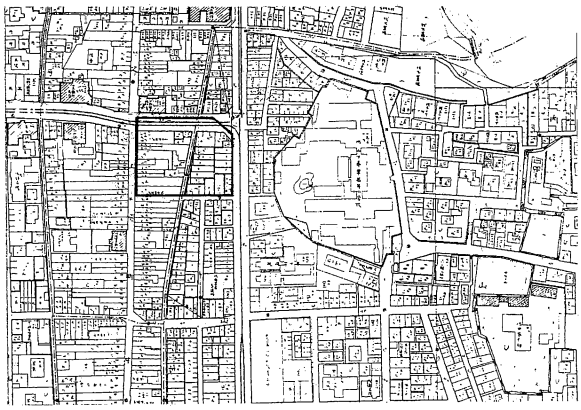
大正10年(1921)

第106図　市街地図にみる内堀の埋立過程　枠が調査地



枠が調査地

第107図　岡山名所圖絵（幕末）に示された調査地付近



枠が調査地

第108図　昭和10年代の調査地周辺

ｇ．上層石組と堀の埋立（19世紀）

上層石組は構造的に考えて、満々と水を湛えた内堀の護岸として単独で機能したとは考えにくい。上層石垣と組み合って機能したか、むしろ内堀が埋まっていく過程の構築物であろう。

堀の埋立過程は第106図の各市街地図に示される。明治28年(1895)の地図には旧三之曲輪側から旧二の丸北西端まで新たに橋が架けられているのが判る。石組の中部の状況は橋脚構造にも思えて気掛りであるが、地図上の位置比定からすると発掘地よりもやや南となり、この位置から旧二の丸北西端まで橋を架けるとすると、広い内堀を跨ぐには相当に無理がある。しかし上層石組はその一連の工作によるものかも知れないし、埋立過程での仮橋があり、それに関連するものかも知れない。

二の丸と三之曲輪を隔てた内堀の埋立は南から進み、明治39年(1906)の地図では、ちょうど発掘地の半ばまでが埋まっている。翌明治40年(1907)には埋立が完了し、明治42年(1909)には発掘地を含む内堀跡地で上之町納涼園が開催された。その後も内堀沿いの道は街路として踏襲され(第108図)、その東縁には内堀の名残の水道として溝が併設され、やがて暗渠(第12図)となったのである。

注

(1)　大橋康二1983　「伊万里磁器創成期における唐津焼との関連について」『佐久間重男教授退休記念中国史・陶磁史論集』
(2)　ａ鈴木秀典1991　「大坂城跡の豊臣前期と後期」『関西近世考古学研究』Ⅰ
　　ｂ森毅1995　「一六・一七世紀における陶磁器の様相とその流通」『ヒストリア』第149号　など
(3)　岡山市教育委員会　1997『史跡岡山城本丸中の段発掘調査報告』
(4)　注２ｂと同じ。
(5)　出宮徳尚1985　「岡山県二日市遺跡」『日本考古学年報』35　1982年版　ほか本章第２節参照
(6)　岡山市教育委員会　2001『史跡岡山城本丸下の段発掘調査報告』
(7)　注３および注６と同じ。
(8)　1990年に岡山市教育委員会が主宰する調査委員会が発掘調査を実施。
(9)　永山卯三郎1932　「第二章岡山城　七岡山城修理年表」『岡山縣史蹟名勝天然記念物調査報告』第九冊
　　（原典『池田家史類纂』）および岡山大学池田家文庫所蔵絵図(http://www.lib.okayama-u.ac.jp/www/ikeda/index.html で公開ぶん)
(10)　岡山縣廳1901　『岡山縣風水害史』上・下

第２節　出土遺物について

出土遺物の個別内容は第Ⅳ章で報告した通りであるが、ここでは近世遺物を中心に、岡山城や周辺地域の動向も踏まえて整理しておきたい。

１．土器・陶磁器類

ａ．中国産

龍泉窯系の青磁碗(35・321ほか)３点と青磁皿１点が最下層などから出土した。本遺跡の場合は前代遺物の混入品の可能性も残るが、岡山城本丸下の段では16世紀後葉の宇喜多氏の層位から、二の丸(中電)では16世紀末から17世紀前半の遺構面を抉る1654年の洪水砂から、少量が出土している。また、岡山城近郊の中世山城では、1600年廃城とされる富山城(岡山市矢坂)や1579年廃城とされる周匝茶臼山城(吉井町)から、景徳鎮系の白磁や青花に混ざって少量が出土している。

岡山地域全体とすれば龍泉窯系青磁の隆盛は15世紀代までであるが、伝世品を含みつつ16世紀後葉から17世紀初頭までの岡山城内で用いられた陶磁器の組成のなかに細々と命脈を保っており、それが17世紀前葉の内に費えると展望できる。こうした龍泉窯系青磁はほとんどが碗で、蓮弁のシノギが線状に退化するか、高台内を釉剥した外面無文のものである。

景徳鎮窯系とみられる青花は破片も含めて61点が出土した。16世紀末から17世紀前葉の製品である。碗はＥ群[1]のほかＨ群・Ｇ群などが加わる。古いタイプとされる蓮子碗(Ｃ群)的な高台を持つもの(34)が最下層のⅨ層に含まれ、Ⅶ層中には高台が饅頭心形のＥ群(61・62)が含まれ、その上に形成された下層遺構では見込が平坦であったり凹むＨ・Ｇ群(120・240など)が目立つという変化は、大坂城[2]など他遺跡での時期変化と一致している。皿は、端反のＥ群(66)が同形の中国産白磁皿(63・64)と共にⅦ層から出土しているが、その上に形成される下層遺構では、口縁が内湾するＥ群が卓越し、主体となる器形の変遷が窺える。この他、包含層からは古いタイプとされる碁笥底のＣ群(448)が１点出土した。包含層出土の大皿(415)も景徳鎮産とみられる。

岡山城本丸や二の丸各地の発掘でも、16世紀末から17世紀前葉の景徳鎮系青花は多数出土している。富山城や周匝茶臼山城でも景徳鎮窯系青花が多数出土しているが、碗は連子形(Ｃ群)が目立ち、皿は白磁(主体的)を含めて端反形(Ｅ群)が圧倒的に卓越し、岡山城下で一般的な遺物群より先行する遺物群として認識できる。

漳州窯系の青花は、34点が出土した。やはり16世紀末から17世紀前葉の製品である。景徳鎮青花を100とした場合、漳州窯青花は56の割合である。34点中の６点は陶質である。碗は畳付に砂を付着させ、体部に特徴的な花唐草を描くＦ群[F1・F2](124・125・187・241・270・271など)が主体である。碗Ｆ群は下層遺構を中心に出土した。また陶質で高台無釉のＪ１群(450・451)が包含層から出土した。皿は少ないが、高台無釉で見込を蛇目釉剥ぎにするＥ群粗製２点(67・68)がⅦ層から、釉が厚く口縁外折のＦ群粗製の大皿(盤)(416)が下部包含層から出土している。大坂城ではＪ群は豊臣前期からあり、Ｆ群は豊臣後期に入ってから盛行する[3]が、当遺跡でもⅦ層とその上の下層遺構との間の時期差に対応しているといえよう。漳州窯系の赤絵として上部包含層から皿(449)が１点だけ出土した。

16世紀末から17世紀前葉の漳州窯系は、岡山城二の丸の各発掘でもよく出土する。やはり碗Ｆ群が目立ち、Ｆ群粗製の大皿(盤)が散見できるが、たいていが唐津焼と共伴している。また青花Ｊ群や赤

絵も少量であるが含まれる。

二の丸(中電)では、報告書記載分で、景徳鎮系が35点に対して福建(漳州窯)系は23点である。この数字は、本調査地より漳州窯の比率がやや高いが、景徳鎮が６割～６割５部を占めて優位と概括でき、二の丸内の他の発掘地も大差ない。

いっぽう、岡山城下の南はずれの二日市遺跡で1637～1640年に操業した銭座に伴う陶磁器の内では、景徳鎮４点に対して漳州窯13点で、中国陶磁のうちでは漳州窯系が圧倒する。碗が主体で、Ｆ群１点のほかは陶質・高台無釉で、岡山に入った漳州窯系陶磁の最終状況を示す。

中世山城では漳州窯系はほとんど見かけないが、1600年下限の富山城出土品には陶質で高台無釉でありながら景徳鎮の蓮子碗を模倣したとみられるＣ群粗製が１点含まれ、Ｊ群より古い漳州窯系陶磁の存在が確認できる。

以上のほか、包含層から華南産三彩の細片(452)が出土した。

ｂ．朝鮮王朝

本発掘では大量の唐津焼胎土目皿を伴う下層のＳＫ72から５点(126～128)の朝鮮陶磁が出土した。白磁の皿・碗、白土を埋込んだ陶質の大皿である。包含層からも白磁碗１点(453)が出土した。

二の丸(中銀)でも灰釉を掛けた陶質皿が、唐津を伴うゴミ穴から出土している。17世紀初頭の岡山城下では少量ながらも朝鮮陶磁が入っていると考えてよい。

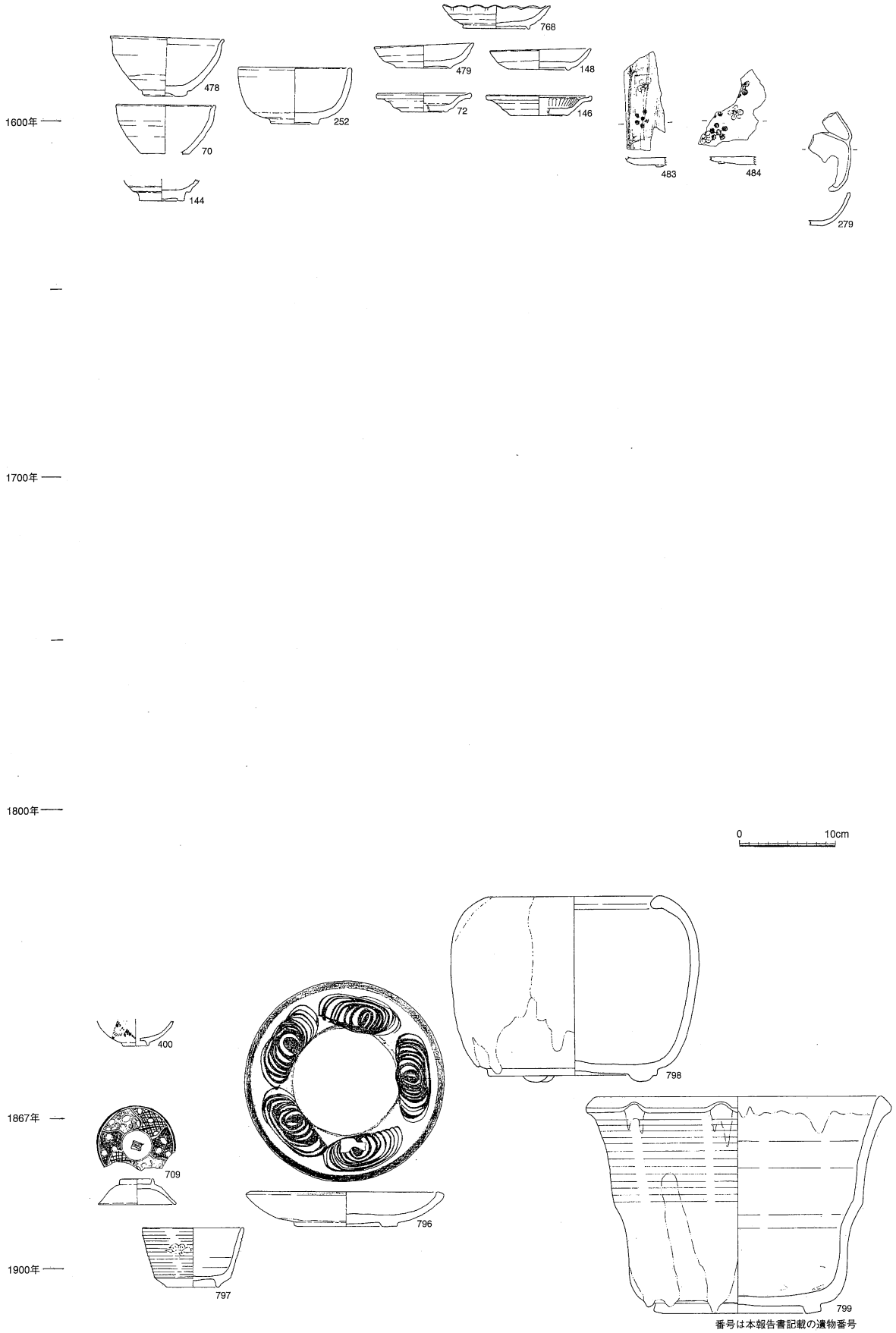
他の貿易陶磁として、岡山城下の下級武家地である新道遺跡から16世紀後葉から17世紀前葉のタイのノイ川窯系の壺が２～３個体出土している。ただし、江戸後半期への伝世品である。

ｃ．瀬戸・美濃系(第109図)

瀬戸美濃系の陶磁器は近世初頭と幕末・明治のものに大別して考えることができる。

前者では、最下層から出土があり、下層遺構のほか各所で出土した。これらは16世紀後葉に遡る大窯後半期(第３段階後半～第４段階)[4]の製品が主体である。碗は鉄釉を掛けた天目形(70・189・477・478など)主体であるが、灰釉を掛けた丸碗(49・252など)もある。また、皿は碗より多く、灰釉の丸皿(148・208など)・折縁皿(71など)・折縁ソギ菊皿(145・146・207・315など)を中心とし、鉄釉を掛けたもの(72・147など)もある。黄瀬戸釉を掛けた輪花皿(768)が１点あり、これは大窯第３段階でも前半に遡る可能性がある。また、包含層から大窯４段階後半の志野向付(483・484)が２点出土した。続く連房登窯初期の製品としてＳＫ72出土の天目碗(144)やＳＫ68出土の織部向付(279)がある。下層遺構期のある段階から登窯期に入っているのに、実際に供された瀬戸美濃陶磁は古い大窯期の製品の量が勝っていたといえよう。つまり大窯期の製品は17世紀前葉のうちではまだ現役で、唐津と共存する。

岡山城の本丸でも、瀬戸美濃陶磁は少量であるが出土している。中の段の1600年下限の宇喜多秀家期の層位では灰釉の丸碗片１点、1600年直後も含みうる層位では大窯第４段階の天目碗２点、1620年代を下限とする池田忠継～池田忠雄前半期の層位からからは、大窯第４段階後半の志野向付類２点と登窯期の黄瀬戸に織部釉を掛けた折縁大皿１点が出土し、生産地での変化と層位が整合する。また、本丸下の段や二の丸各地でも、各種の瀬戸美濃陶磁が出土するが、多数を占める碗皿類は大抵が大窯後半期のもので、登窯期のものはあるが少ない。それより少量であるが目立つのは、大窯第４段階後半の志野向付類と登窯期の織部向付類で、優品も散見できる。1640年下限の二日市遺跡銭座跡でも、瀬戸美濃陶磁は出土陶磁器で微かな割合に過ぎないが、登窯期の天目碗２点、志野織部皿１点、織部向付１点が出土している。16世紀後葉ないしはそれ以前の中世山城でも瀬戸美濃陶磁はよく確認され



第109図　出土した瀬戸・美濃系陶磁器の流れ（1／6）

る。例えば富山城では大窯前半期の天目碗や灰釉皿が出土し、中国製青磁を模倣して体部に細かい縦線を入れた、その古い段階の灰釉丸碗なども含んでいる。

幕末から明治にかけての瀬戸美濃系陶磁は多くないが、内堀上部埋土ほかから、染付磁器(400・705)、色絵磁器蓋(709)、灰釉鉄絵の碗皿(796・797)、灰釉ほか複数の釉を掛け分けた火鉢(798・799)などが出土した。産地が特定できない染付磁器(697・783など)や酸化コバルトを型紙刷りもしくは銅版転写した磁器(893～810)の一部も、瀬戸美濃製の可能性がある。岡山城やその周辺の発掘でも、幕末・明治の瀬戸美濃系陶磁は少ないが一定量が出土する。陶器で目立つのは、当発掘地と同じく馬目皿を含めた灰釉の大皿と火鉢類で、小形の碗・皿はあまり見かけない。ただし火鉢類は一見同様の製品でありながら、胎土などから瀬戸美濃産とは考えにくい一群が別にある。また、磁器は碗皿が主体で確実に流通しているが、光沢陶石を用いる製品のなかで、関西系との区別が難しい場合もある。

ｄ．肥前系陶器（第110図）・福岡系陶器

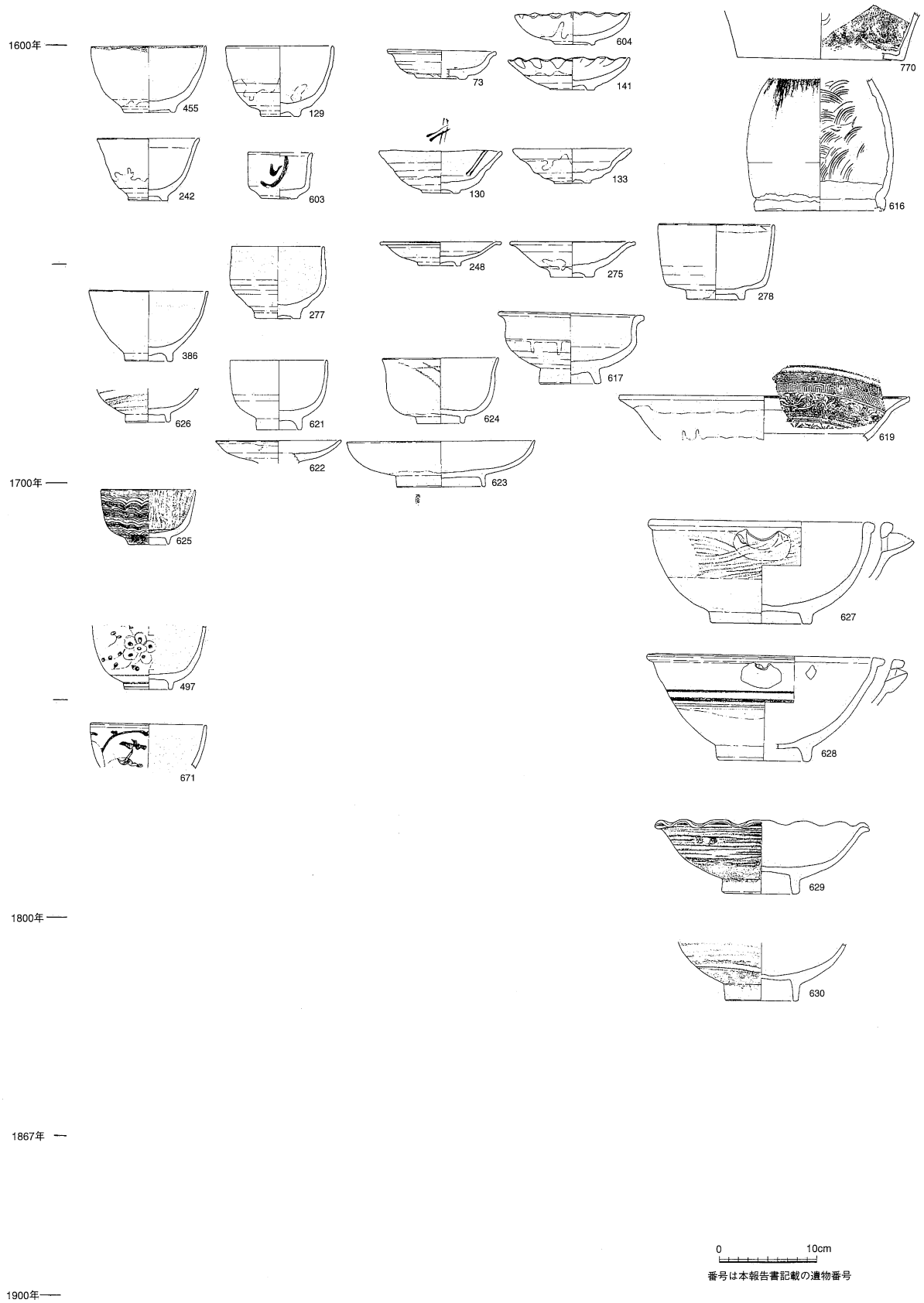
肥前系陶器は、17世紀の製品を中心に大量に出土し、特にその前半の唐津焼は良好な一括資料を含んでいる。

Ⅶ層中の１点のほかは、下層遺構面以上の層位から出土した。初期の唐津焼とされる、砂粒を顕著に含む胎土で藁灰釉を掛けた岸岳系の皿(604ほか)２点や内面の青海波をナデ消して外面に鉄釉を掛けた瓶(770)１点が含まれるが、内堀からの出土である。皿に注目すれば、Ⅶ層の小皿は古い特徴である胎土目[5]を見込に残し、上に形成される下層遺構の間で、胎土主体期から砂目盛行期への過程がみてとれる。すなわち、ＳＫ72では胎土目20：砂目１、ＳＫ69では胎土目２：砂目２、ＳＫ68では胎土目３：砂目９である。またこの変化は、溝縁皿の盛行や鉄絵の減少とも対応している。碗では器形変化のほかに、ＳＫ68の遺物に現れた新相として全釉品(277)や緑釉品(278)の存在がある。

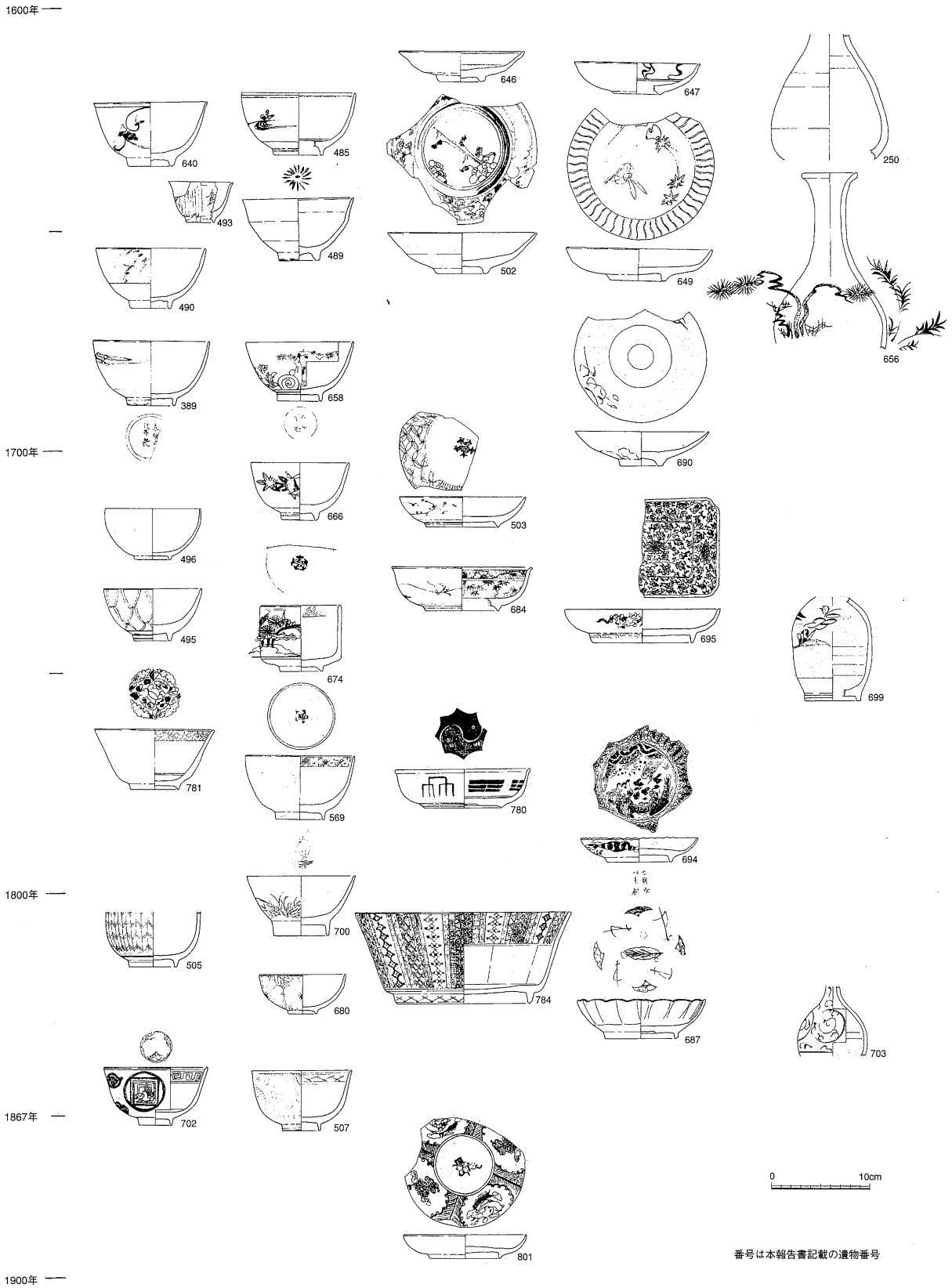
唐津は岡山城本丸でも17世紀前葉の前池田期の層位を中心に一定量が出土したほか、二の丸では1654年の承応洪水砂より下の各遺構面に膨大量が含まれている。これらは、胎土目から砂目に至る各段階のものがあり、器種も碗・皿をはじめとして盤・鉢・向付・瓶など小物を中心に実に多彩である。また1637～1640年に操業された二日市銭座の資料にも唐津が主体的に含まれ、碗・小皿は言うまでもなく擂鉢や甕までがあった。その小皿は118点あり、目跡が残る個体のほぼ総ては砂目で、圧倒的に溝縁皿が卓越し、碗を含めて殆どが鉄絵のない無文であった。17世紀前半の唐津は岡山城下を離れた県内各地でもよく見かけ、一気に山間部にまで浸透したといえる。

岡山近郊での唐津の出現時期は、本章第１節の163頁にも記したように1600年の直後で、仮に1600年を下限とする宇喜多秀家期に入っていたとしてもごく少量と展望でき、1600年代の直後に急激に普及すると言える。第１節に加えて言えば、二の丸では本調査地のように唐津を含まない城下町の遺構や層位が確認できるほか、岡山城の支城で1600年廃城の富山城や1603年廃城の常山城(灘崎町・玉野市)で小規模なトレンチ調査が行われた限りでは、唐津焼が出土していないといった状況もある。

17世紀後半の肥前系陶器として、白土による刷毛目を施した碗(625)、内野山系陶器(386・621・622)、京焼風陶器(624・623)、鉄釉火入(617)、印花文に白土を埋めた大皿(619)などが出土した。刷毛目碗は18世紀代に下る個体(625)もある。内野山系の碗は胎土が白土の灰釉を全面に掛けた丸碗、皿は内面に銅緑釉釉を掛けて蛇目釉剥ぎにした典型的な製品である。京焼風の皿は鉄絵の山水を描き、高台内に「雲」印がある。また内堀出土の大甕(908)は17世紀後半の肥前陶器の可能性がある。18～19世紀代の肥前系陶器では、暗灰色の胎土に白土を施して質の悪い呉須で染付した陶胎染付(497・671)や、白土によ



第110図　出土した肥前陶器の流れ（1／6）



第111図　出土した肥前磁器の流れ（１／６）

る刷毛目文の片口鉢(627・628)や輪花浅鉢(629)が出土した。

こうした、17世紀後半以降の肥前系陶器は、以前の唐津焼や併行期の肥前磁器にはとうてい及ばないが、二の丸ほか岡山城下や近郊の遺跡でもよく見かける。特に、内野山系の灰釉碗、陶胎染付、刷毛目文片口鉢は出土の頻度が高い。

福岡(上野・高取)系とみられる陶器として、大皿(618・773)2点ほかが出土した。藁灰釉を用いたり、鉄分の多い胎土に灰釉を掛け、畳付に貝殻目を残すなどの特徴を持ち、17世紀中葉から後葉の製品とみられる。藁灰釉と飴釉を交えた大皿は1640年下限の二日市銭座にも少量含まれる。

e．肥前磁器（第111図）

曲輪内の遺構に伴うものは少ないが、包含層や内堀から大量に出土し、陶磁器の主体を占める。

1650年代までの初期伊万里が多数出土したことが、本調査地の最大の特徴である。見込に砂目を残し、胎土や焼成がやや陶質的で唐津焼と共通する要素が多い、圏線染付皿(646)や端反白磁皿(777)は、磁器最初期であるⅡ－1期[6]の特徴をもつ。同じくⅡ－1期が主体とされる畳付に砂を付着させる碗・皿も数多い(485～487・490・502・639～643・647～650・652～654)。続くⅡ－2期に数多い高台内を無釉の碗(251・488・489)もある。また特徴的なものとして、天目形で縦筋をソギ入れて福寿を染付た碗(493・644・645)、型打皿(649・650)、見込に円凹に削り込んだ皿(651)などがある。大半が染付であるが、外面に青磁釉(488)や鉄釉(489)を掛けてⅡ－2期の特徴をもつ碗もある。

こうした初期伊万里は、1640年下限の二日市銭座の一括資料中にもまとまって存在するほか、岡山城本丸・二の丸、それに県内各地で散見できる。岡山近郊での肥前磁器は、1640年までに出現したことは確実であるが、その暦年代を細かく特定する資料には恵まれていない。ただ、本丸中の段の1620年代を下限の目安とする造成土中では未確認で、二の丸では1600年直後に出現する唐津を大量に含みながら肥前磁器を含まないゴミ穴が、複数切りあったり別の層位に属すことから、唐津出現後に相当の期間を置いてから肥前磁器が出現するとの感触を得ており、肥前磁器の出現を1631年前後とする大坂城下の状況[7]と大差ないものと展望できる。

17世紀後半の肥前磁器は、高台内に「大明成化年製」や「大明年製」の款銘をもつ碗(389・658)がある。18世紀前葉にかけての皿では、見込を蛇目釉剥する一群が注目される。見込に手書の五弁花文を配した精良品(688)や高台無釉(690～693)のもので、波佐見系が独自色を強める比較的早い段階の製品とみられ、1711年に焼けた枚方宿の出土品[8]などに類例がある。17世紀末～18世紀中葉の製品では、他にも手書の五弁花文を描くもの(673・674・682・683)や口縁内に精緻な四方襷を描くもの(674～676)があり、その多くが良品である。微細で特徴的な花唐草を描く南川原系の型打四方皿(695)も注目できる。五弁花文以外の主文にコンニャク印判を用いた、コンニャク印判の早い段階の製品(660・666～669)もまとまっている。18世紀後半では外面に青磁釉を掛けた青磁染付碗(569・676～677)、18世紀末～19世紀前葉では高高台碗(700)、19世紀中葉では端反碗(507・702)と典型的な製品が出土した。また18世紀後葉～19世紀前葉とみられる口紅龍文の型打皿、それに墨弾技法を駆使して微細な文様を染付けた鉢は高級品として注目される。出土した17世紀後半～19世紀の肥前磁器を通じてみれば、他遺跡で多見できる粗悪品をほとんど含まないのが特徴である。この期の肥前磁器は岡山城やその周辺で膨大量が出土しているが、細かな解析作業はこれからである。

f．京焼・京焼系陶器

彩色を施した碗(631)は18世紀前葉の製品とみられ、見込に鉄絵を施した平碗(631)とともに、京焼と